

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(32)

東九州自動車道建設(志布志IC～鹿屋串良JCT間)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

かす が ぼり い せき 春日堀遺跡 1

縄文時代中期～近世編

(志布志市有明町)



鹿児島県

公益財団法人埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(32)

春日堀遺跡 1

二〇二〇年三月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

2020年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



航空写真（春日掘遺跡上空から志布志湾を望む）



上：南九州最大の花卉型住居跡（古墳時代前期前半） 下：中世の堀跡



弥生時代終末期から古墳時代前期前半の出土遺物



古墳時代終末期の出土遺物

序 文

この報告書は、東九州自動車道（志布志 I C～鹿屋串良 J C T間）の建設に伴って、平成 26 年度から 30 年度に実施した志布志市有明町に所在する春日堀遺跡の発掘調査の記録です。

春日堀遺跡は志布志市有明町に所在し、縄文時代早期から近世にかけての複合遺跡です。本報告書は、縄文時代中期から近世の調査成果をまとめたものになります。

発掘調査では、縄文時代後期の落とし穴や弥生時代終末期から古墳時代前期の集落跡、古墳時代終末期の集落跡、中世後半期の堀跡が発見されました。

弥生時代終末期から古墳時代前期の集落跡では、県内最多の焼失住居跡が発見され、焼却行為を伴う廃屋儀礼の様子が明らかとなりました。古墳時代終末期の集落跡は、溝によって建物群が区画されており、これまで不明であった 7 世紀代の集落跡の様子を知ることができます。

中世後半期の堀跡は、遺跡の近くに所在する天守城跡の一部と考えられ、南北朝の争乱期から島津氏の三州統一の時代に造られたと考えられます。

本報告書が県民の皆様や研究者をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財保護の普及啓発の一助となれば幸いです。

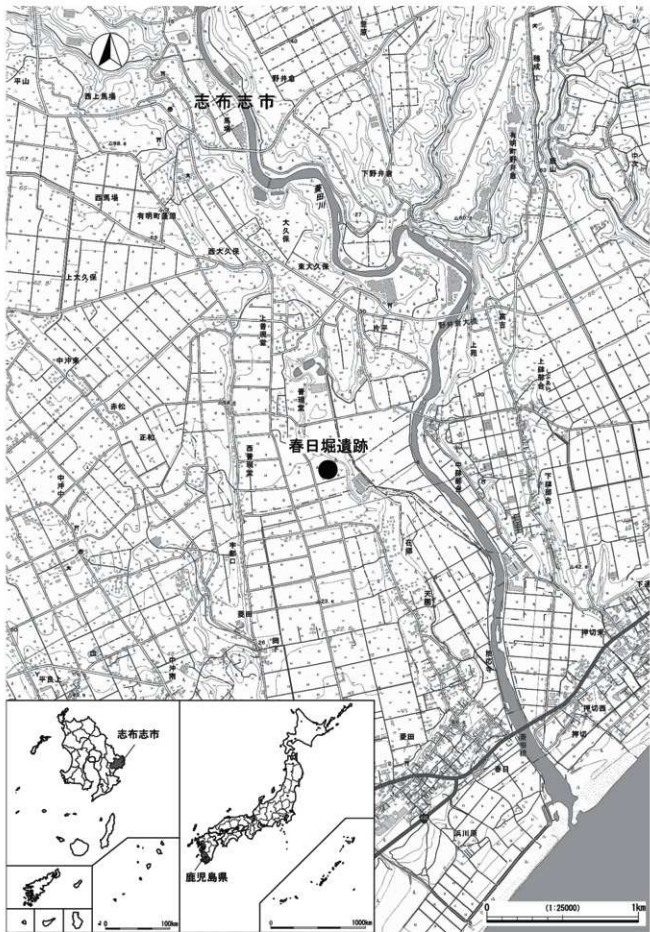
最後に、発掘調査から報告書刊行までご協力いただきました国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、志布志市教育委員会、大崎町教育委員会等の関係各機関並びに発掘調査や報告書作成においてご指導いただきました方々に対しまして厚く御礼申し上げます。

令和 2 年 3 月

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター長 中原 一成

報告書抄録

ふりがな	かすがぼりいせき							
書名	春日堀遺跡1 縄文時代中期～近世編							
副書名	東九州自動車道建設(志布志IC～鹿屋串良JCT間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第32集							
編集者名	川口雅之 木之下悦朗 福永修一 馬籠亮道							
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576							
発行年月	西暦 2020年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	調査面積 (㎡)	発掘原因
鹿児島県 志布志市 有明町 蓬原 148番地	46221	221-423	31° 46' 28"	131° 03' 78"	確認調査 2014.11.04～ 2014.11.27 本調査 ① 2015.05.11～ 2016.01.28 ② 2016.05.09～ 2017.01.27 ③ 2017.11.01～ 2018.03.09 ④ 2018.05.07～ 2018.12.14	20,600㎡ (表面積)	東九州自動車道建設(志布志IC～鹿屋串良JCT間)に伴う発掘調査	
種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項	
春日堀遺跡	縄文中期				春日式			
	縄文後期	落とし穴3基, 土坑2基			丸尾式, 石器			
	縄文晩期 ～弥生中期	掘立柱建物跡1軒			山ノ口1式			
	弥生終末期 ～古墳前期	竪穴建物跡10軒 土坑2基, 遺物集中区1基			弥生時代終末期～古墳時代前期の土器, 鉄鍬, 磨石, 砥石, 台石, 磨製石剣		焼失住居跡を多数検出	
	古墳終末期 (7世紀)	竪穴建物跡9基, 掘立柱建物跡7軒, 溝跡3条, 遺物溜り13基, 地下式横穴墓1基, 遺物集中区1基			笠貫式新段階, 甕, 須恵器, 鉄鍬, 青銅製品(耳環)		溝に区画された集落跡	
	古代	掘立柱建物跡7軒, ビット列1基, 焼土跡1か所			土師器, 須恵器, 軽石製品, 軽石製品, 土製品			
	中世	堀跡1条, 道跡1条, ビット列1基, 竪穴建物跡1軒, 土坑墓1基			土師器, 常滑焼, 磁器(白磁, 青磁)		天守城跡の一部と考えられる堀跡を検出	
近世	溝跡11条, 道跡5条, 貝溜り1か所							
遺跡の概要	<p>発掘調査では、縄文時代中期から近世の遺構・遺物が確認された。縄文時代後期は落とし穴が3基検出され、遺跡周辺は畑場として利用されている。弥生時代中期には、竪穴建物跡が1軒確認されており、小規模な集落が営まれている。弥生時代終末期から古墳時代前期は、10軒の竪穴住居跡が確認された。7軒は焼失住居跡で、検出数は県内最多である。焼失住居跡では、建物移転に伴う廃屋儀礼が行われている。古墳時代終末期は、溝に区画された集落跡が検出されている。竪穴住居跡と掘立柱建物跡が溝によって区画され、地下式横穴墓も検出された。古墳時代終末期の集落構造が分かる重要な調査成果である。中世は薬師塚とそれに付随する道跡が検出された。堀跡は14世紀後半以降に構築され、調査区の南にある天守城跡の一部と考えられる。近世は、耕地開発に関連すると推測される区画溝が検出された。</p>							



春日堀遺跡位置図

例 言

- 1 本書は、東九州自動車道建設（志布志IC～鹿屋串良JCT間）に伴う春日埴遺跡発掘調査報告書の縄文時代中期から近世編である。
- 2 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という。）が受託し、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」という）へ調査委託し、埋文調査センターが平成26年度から30年度まで5年間にわたり、実施した。
- 3 発掘調査を行うに当たっては、埋文調査センター担当者の監理のもと、以下の民間調査組織に発掘調査支援業務を委託した。
国際文化財株式会社（平成27・28・30年度）
大福コンサルタント株式会社（平成29年度）
- 4 平成27～30年度の整理作業は、支援業務として発掘調査現場で行った。報告書作成作業は、平成30年度から埋文調査センター第一整理作業所で実施した。
- 5 掲載遺物番号は通し番号であり、本文・挿図・表・図版の遺物番号は一致する。
実測の縮尺は、土器・須恵器は1/4、土師器・陶磁器・石器は1/3、鉄器は1/2を基本とする。例外については、実測図ごとに縮尺を示した。
- 6 遺物注記等で用いた遺跡番号は「KSG」である。
- 7 本書で用いたレベル数値は、海抜絶対高である。
- 8 本書で用いた方位はすべて磁北である。
- 9 本書に係る遺構実測図の作成及びトレース、遺物出土状況図の作成は、埋文調査センター調査担当者が、整理作業員とともに行った。
- 10 本書に係る出土遺物の実測・トレースは、埋文調査センター調査担当者が、整理作業員とともに行った。
- 11 遺物実測については、石器の一部を国際文化財株式会社、古墳時代の土器の一部を九州文化財研究所に委託した。
- 12 出土遺物の写真撮影は、埋文センターの写場にて、埋文調査センターの福永修一、鶴田静彦、西園勝彦が行った。
- 13 火山灰の同定については、成尾英仁（始良市文化財保護審議委員）と下司信夫（産総研地質調査総合センター）に依頼し、同定結果を掲載した。
- 14 自然科学分析については、バリノサーヴェイ株式会社、株式会社パレオ・ラボに委託し、本報告において、編集を行った上で掲載した。
- 15 使用した土色については、『新版標準土色帖』（1970、農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。
- 16 本編の執筆は次のように分担し、編集は川口、木之下、福永が行った。
第I章 木之下、福永
第II章 木之下、福永
第III章 川口、馬籠
第IV章 第1～4、6、8節 川口、第5節 木之下
第7節 馬籠
第V章 第1節 川口、第2節 成尾、下司
第VI章 川口、木之下
- 17 本報告書に係る出土遺物及び実測図、写真等の記録は埋文センターで保管し、展示・活用を図る予定である。

本文目次

巻頭図版	2 遺構（竪穴建物跡）	43
序文	3 遺物（土器）	44
報告書抄録	第3節 弥生時代終末期～	
春日屋遺跡位置図	古墳時代前期の調査	47
例言	1 調査の概要	47
本文目次	2 遺構（竪穴建物跡、遺物集中区、土坑）	47
第1章 発掘調査の経過	第4節 古墳時代終末期（7世紀）の調査	103
第1節 調査に至るまでの経緯	1 調査の概要	103
第2節 事前調査	2 竪穴建物跡	103
1 分布調査	3 掘立柱建物跡	125
2 調査体制（分布調査）	4 溝跡	130
3 確認調査	5 地下式横穴墓	146
第3節 本調査	6 遺物集中区2	146
1 調査概要	第5節 古代の調査	154
2 現地説明会等	1 調査の概要	154
3 調査体制	2 遺構（掘立柱建物跡、ピット列、埴土）	154
第4節 調査の経過	3 出土遺物（土師器、須臾器、軽石製品）	162
第5節 整理・報告書作成作業	第6節 中世の調査	167
1 整理作業	1 調査の概要	167
2 作成体制	2 遺構（堀跡、ピット列、竪穴建物跡、土坑墓）	167
第II章 遺跡の位置と環境	3 中世の出土遺物（土師器、陶磁器）	171
第1節 地理的環境	第7節 近世の調査	174
第2節 歴史的環境	1 調査の概要	174
第3節 志布志IC～鹿屋車良JCT間の遺跡	2 遺構	174
第III章 調査の方法と順序	第8節 包含層の出土遺物	179
第1節 発掘調査の方法	1 古墳時代前期の土器	179
第2節 遺跡の順序	2 古墳時代終末期の土器	179
第3節 遺構新旧対応表	3 石器	179
第IV章 発掘調査の結果	4 鉄製品	179
第1節 縄文時代中期・後期の調査	第V章 分析	187
1 調査の概要	第1節 春日屋遺跡における弥生時代終末期	
2 遺構（落とし穴、土坑）	～古墳時代前期の土器編年	187
3 遺物	第2節 春日屋遺跡の地質	194
第2節 縄文時代晩期末	第3節 自然科学分析（年代測定、種実同定、樹種同定）	202
～弥生時代中期の調査	第VI章 総括	253
1 調査の概要	写真図版	261

挿図目次

第1図	平成26年度調査確認トレンチ配置図……………	3	第39図	竪穴建物跡4号出土遺物3……………	61
第2図	Ⅱ層年度別調査範囲……………	3	第40図	竪穴建物跡4号出土遺物4……………	62
第3図	周辺道跡位置図……………	11	第41図	竪穴建物跡4号出土遺物5……………	63
第4図	東九州自動車道(志布志IC～鹿屋車井JCT)建設 に伴って調査された道跡……………	19	第42図	竪穴建物跡5号遺物出土状況……………	67
第5図	周辺地形及びグリッド配置図……………	20	第43図	竪穴建物跡5号完掘状況……………	68
第6図	基本土層図……………	21	第44図	竪穴建物跡5号土器溜り出土遺物1……………	69
第7図	土層断面図 調査区北壁(1)……………	22	第45図	竪穴建物跡5号土器溜り出土遺物2……………	70
第8図	土層断面図 調査区北壁(2)……………	23	第46図	竪穴建物跡5号土器溜り出土遺物3……………	71
第9図	土層断面図 調査区北壁(3)……………	24	第47図	竪穴建物跡5号出土遺物4……………	72
第10図	土層断面図 E区ライン(1)……………	25	第48図	竪穴建物跡5号出土遺物5……………	73
第11図	土層断面図 E区ライン(2)……………	26	第49図	竪穴建物跡6号遺物出土状況及び完掘状況……………	75
第12図	土層断面図 E区ライン(3)……………	27	第50図	竪穴建物跡6号出土遺物1……………	76
第13図	土層断面図 調査区南壁(1)……………	28	第51図	竪穴建物跡6号出土遺物2……………	77
第14図	土層断面図 調査区南壁(2)……………	29	第52図	竪穴建物跡6号出土遺物3……………	78
第15図	土層断面図 調査区南壁(3)……………	30	第53図	竪穴建物跡6号出土遺物4……………	79
第16図	土層断面図 調査区南壁(4)……………	31	第54図	竪穴建物跡6号出土遺物5……………	80
第17図	土層断面図 38区ライン……………	32	第55図	竪穴建物跡6号出土遺物6……………	81
第18図	土層断面図 34区ライン……………	33	第56図	竪穴建物跡7号遺物出土状況及び完掘状況……………	83
第19図	土層断面図 30区ライン……………	34	第57図	竪穴建物跡7号出土遺物1……………	84
第20図	土層断面図 26区ライン……………	35	第58図	竪穴建物跡7号出土遺物2……………	85
第21図	縄文時代後期遺構配置図(1/500)……………	38	第59図	竪穴建物跡8号遺物出土状況及び完掘状況……………	88
第22図	縄文時代後期の遺構……………	39	第60図	竪穴建物跡8号出土遺物……………	89
第23図	縄文時代中期・後期の出土遺物……………	41	第61図	竪穴建物跡9号遺物出土状況及び完掘状況……………	91
第24図	弥生時代中期遺構配置図(1/500)……………	43	第62図	竪穴建物跡9号出土遺物……………	92
第25図	竪穴建物跡1号及び出土遺物……………	44	第63図	竪穴建物跡10号遺物出土状況及び完掘状況……………	93
第26図	縄文時代晩期末～弥生中期の出土遺物……………	45	第64図	竪穴建物跡10号出土遺物1……………	94
第27図	埴形土器法量図……………	47	第65図	竪穴建物跡10号出土遺物2……………	95
第28図	弥生時代末～古墳時代前期遺構配置図(1/1000)……………	48	第66図	竪穴建物跡11号完掘状況……………	96
第29図	竪穴建物跡2号貼床上面遺物出土状況……………	49	第67図	遺物集中区、土坑……………	97
第30図	竪穴建物跡2号完掘状況……………	50	第68図	遺物集中区1、土坑4出土遺物……………	97
第31図	竪穴建物跡2号出土遺物1……………	51	第69図	古墳時代終末遺構配置図(1/1000)……………	103
第32図	竪穴建物跡2号出土遺物2……………	52	第70図	飛鳥時代遺構配置図(1/700)……………	104
第33図	竪穴建物跡3号遺物出土状況及び完掘状況……………	53	第71図	竪穴建物跡12号遺物出土状況及び完掘状況……………	105
第34図	竪穴建物跡3号出土遺物……………	55	第72図	竪穴建物跡12号出土遺物……………	107
第35図	竪穴建物跡4号遺物出土状況……………	56	第73図	竪穴建物跡13号遺物出土状況及び完掘状況……………	109
第36図	竪穴建物跡4号完掘状況……………	57	第74図	竪穴建物跡13号出土遺物……………	110
第37図	竪穴建物跡4号出土遺物1……………	59	第75図	竪穴建物跡14号遺物出土状況及び完掘状況……………	111
第38図	竪穴建物跡4号出土遺物2……………	60	第76図	竪穴建物跡14号出土遺物……………	112
			第77図	竪穴建物跡15号遺物出土状況及び完掘状況……………	113

第78回	竪穴建物跡15号出土遺物	114	第117回	掘立柱建物跡9号	156
第79回	竪穴建物跡16号遺物出土状況及び完掘状況	116	第118回	掘立柱建物跡10号	157
第80回	竪穴建物跡16号出土遺物	117	第119回	掘立柱建物跡11号	158
第81回	竪穴建物跡17号遺物出土状況及び完掘状況	118	第120回	掘立柱建物跡12号	159
第82回	竪穴建物跡17号出土遺物1	119	第121回	掘立柱建物跡13号	159
第83回	竪穴建物跡17号出土遺物2	120	第122回	掘立柱建物跡14号	160
第84回	竪穴建物跡18号遺物出土状況及び完掘状況	121	第123回	ピット列1号	160
第85回	竪穴建物跡18号出土遺物	122	第124回	焼土1号	161
第86回	竪穴建物跡19号遺物出土状況及び完掘状況	123	第125回	焼土1号出土遺物	163
第87回	竪穴建物跡19号出土遺物	123	第126回	包含層出土遺物1	164
第88回	竪穴建物跡20号完掘状況	124	第127回	包含層出土遺物2	165
第89回	掘立柱建物跡1号	125	第128回	中世遺構配置図(1/500)	167
第90回	掘立柱建物跡2号	126	第129回	堀跡、道路(1/300)	168
第91回	掘立柱建物跡3号	127	第130回	堀跡及び道路1号	169
第92回	掘立柱建物跡4号	128	第131回	堀跡、掘削放棄測図	170
第93回	掘立柱建物跡5号	128	第132回	ピット列2号	172
第94回	掘立柱建物跡6号	129	第133回	土坑墓	172
第95回	掘立柱建物跡7号	129	第134回	竪穴建物跡21号	172
第96回	古墳時代終末期遺構配置図(1/1000)	130	第135回	土坑墓出土遺物	173
第97回	溝跡1号～3号平面図(1/250)	132	第136回	中世の出土遺物	173
第98回	溝跡1号～3号土層断面図	133	第137回	近世溝跡及び道路位置図	174
第99回	遺物溜り1号～4号(溝跡1号)	134	第138回	近世溝跡及び道路実測図(1)	175
第100回	遺物溜り5号～9号(溝跡1号)	135	第139回	近世溝跡及び道路実測図(2)	176
第101回	遺物溜り10号～13号(溝跡1号)	136	第140回	近世溝跡及び道路実測図(3)	177
第102回	遺物溜り1号～3号出土遺物	138	第141回	近世溝跡及び道路実測図(4)	178
第103回	遺物溜り4号、5号出土遺物	139	第142回	包含層出土遺物(古墳時代前期)	180
第104回	遺物溜り6号～13号出土遺物	140	第143回	包含層出土遺物(古墳時代終末期)	180
第105回	溝跡1号出土遺物1	141	第144回	包含層出土石器1	181
第106回	溝跡1号出土遺物2	142	第145回	包含層出土石器2	182
第107回	溝跡1号出土遺物3	143	第146回	包含層出土石器3	183
第108回	溝跡1号出土遺物4	144	第147回	包含層出土石器、鉄器	184
第109回	溝跡1号出土遺物5	145	第148回	成川式編年表	188
第110回	溝跡2号出土遺物	146	第149回	土器分類図	189
第111回	遺物集中区2	146	第150回	春日堀遺跡 土器編年図	191～192
第112回	地下式横穴墓	147	第151回	竪穴住居跡変遷図	254
第113回	遺物集中区2出土遺物	148	第152回	焼失住居跡模式図	255
第114回	古代遺構配置図(1/500)	154	第153回	古墳時代終末期の集落跡(7世紀中頃～後半)	256
第115回	掘立柱建物跡8号	155	第154回	志布志湾沿岸域における甎の使用想定図	257
第116回	掘立柱建物跡8号出土遺物	156	第155回	明治35年の古地図と春日堀遺跡(1:50,000)	260

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表(1).....	12	第20表	土器観察表(4).....	101
第2表	周辺遺跡一覧表(2).....	13	第21表	鉄製品観察表.....	101
第3表	周辺遺跡一覧表(3).....	14	第22表	石器観察表.....	102
第4表	志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡(1).....	15	第23表	古墳時代終末期の土器観察表(1).....	149
第5表	志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡(2).....	16	第24表	古墳時代終末期の土器観察表(2).....	150
第6表	志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡(3).....	17	第25表	古墳時代終末期の土器観察表(3).....	151
第7表	志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡(4).....	18	第26表	石器観察表(1).....	152
第8表	春日堀遺跡遺構対応表.....	36	第27表	石器観察表(2).....	153
第9表	縄文時代後期の遺構埋土注記.....	40	第28表	鉄製品観察表.....	153
第10表	縄文土器観察表.....	42	第29表	遺構内出土遺物観察表.....	165
第11表	弥生土器観察表.....	46	第30表	包含層出土遺物観察表.....	166
第12表	甕形土器の分類基準.....	47	第31表	石器観察表.....	166
第13表	堅穴建物跡5号出土炭化材一覧.....	66	第32表	中世の出土遺物観察表.....	173
第14表	堅穴建物跡6号出土炭化材一覧.....	75	第33表	包含層出土土器観察表.....	185
第15表	堅穴建物跡8号出土炭化材一覧.....	87	第34表	包含層出土石器観察表.....	186
第16表	堅穴建物跡9号出土炭化材一覧.....	91	第35表	包含層出土鉄製品観察表.....	186
第17表	土器観察表(1).....	98	第36表	遺構内出土土器一覧表(形式別).....	188
第18表	土器観察表(2).....	99	第37表	堅穴建物跡の廃絶時期一覧表.....	253
第19表	土器観察表(3).....	100	第38表	中世における春日堀遺跡周辺の争乱.....	260

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は、東九州自動車道の建設を計画し、志布志IC～末吉IC区間の、事業区内における埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育委員会に照会した。

この計画に伴い鹿児島県教育庁文化財課（以下、文化財課）は平成11年1月に鹿屋串良JCT～末吉財部IC間を、平成12年2月には志布志IC～鹿屋串良JCT間の埋蔵文化財の分布調査を実施し、50か所の遺跡が存在することが明らかとなった。

この結果をもとに、事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所、鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室、文化財課、県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の4者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後、日本道路公団民営化の政府方針が提起され、事業の見直しと建設コストの削減を検討することとなった。このような社会情勢の変化に伴い、より緻密な遺跡の把握が要求されることとなり、埋蔵文化財の詳細分布調査、試掘調査、確認調査が実施されることとなった。

平成14年4月には、志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡について再度分布調査を実施した結果、遺跡の調査対象範囲が678,700㎡となった。

その後、日本道路公団民営化の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設が確定、平成15年11月に暫定2車線施行に伴う議事確認書締結、同年12月に大隈IC（平成21年4月28日「曾於弥五郎IC」へ名称変更）から末吉財部IC間の発掘調査協定書締結、平成16年3月に国土交通省九州地方整備局長、日本道路公団九州支社長、鹿児島県知事の間で新直轄方式施工に伴う確認書が締結された。工事は、日本道路公団が国土交通省から受託し、発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に委託することとなり、これまでの確認書、協定書はそのまま継続されることになった。また、日本道路公団からの委託は曾於弥五郎ICまでで終了し、曾於弥五郎ICからの先線部分は国土交通省からの受託事業となった。

その後、平成23年度からは試掘・確認調査に文化庁の国庫補助事業を導入し、県内遺跡事前調査事業として埋文センターが実施することとなった。

県内遺跡事前調査事業の確認調査は、平成23年度は荒園遺跡の他2遺跡、平成24年度は町田堀遺跡の他3遺跡、平成25年度は小牧遺跡他2遺跡、平成26年度は春日堀遺跡を実施した。

東九州自動車建設等の事業促進に伴い、埋蔵文化財調査の事業量の増大が見込まれ、従前の調査体制では対応が困難な状況となりつつあったため、平成25年4月に、公益財団法人鹿児島県文化振興財団に埋蔵文化財調査センター（以下、「調査センター」という。）を設立し、国関係の事業に係る発掘調査等をより円滑かつ効率的に実施することにした。

春日堀遺跡の調査経過は、以下のとおりである。

1 発掘調査

- 1 分布調査：平成12年2月、平成14年4月
- 2 確認調査：平成26年11月
- 3 本調査：平成27年2月～平成30年12月

2 整理・報告書作成作業

整理・報告書作成作業は、平成30年度から実施しており、今年度は、縄文時代後期～近世編を刊行する運びとなった。縄文時代早期の報告書については、次年度以降刊行する予定である。

なお、各調査の調査期間、調査体制等詳細については、次節以降で報告することとする。

第2節 事前調査

1 分布調査

春日堀遺跡に関する分布調査は、日本道路公団から志布志IC～鹿屋串良JCT間の分布調査依頼を受け、平成12年2月と平成14年4月に実施した。調査体制は次のとおりである。

2 調査体制（分布調査）

事業主体：日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所
調査主体：鹿児島県教育委員会

3 確認調査

春日堀遺跡の確認調査は、分布調査の結果を受けて、用地取得・立木伐採等の条件整備が整った範囲について、平成26年に実施した。調査は、6×2mのトレンチを設定し、重機により表土を削いだ後、人力で包含層を掘り下げた。

平成26年度

調査は、東側約20,200㎡を対象に11月4日から11月27日に実施した。トレンチを29か所設定し、重機

および人力で掘り下げを行った。6T、22T、25T以外、いずれのトレンチからも遺構・遺物が発見され、縄文時代早期と弥生時代の包含層が確認された。調査地の東側で遺物量が多くなる状況であった。

調査の体制

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査統括	県立埋蔵文化財センター		
	所 長	井ノ上秀文	
調査企画	県立埋蔵文化財センター		
	次長兼総務課長	中島 治	
	調査課長兼南の縄文調査室長	前迫 亮一	
	調査第二調査係長	今村 敏照	
調査担当	県立埋蔵文化財センター		
	文化財主事	光永 誠	
	文化財主事	本高 謙治	
事務担当	県立埋蔵文化財センター		
	総務課主事	池之上健太	

第3節 本調査

1 調査概要

平成26年度の確認調査の結果、縄文時代早期から近世の遺物包含層が確認された。調査対象表面積20,200㎡、調査対象延面積33,000㎡である。

確認調査の結果を踏まえ、改めて遺跡の取り扱いについて県文化財課、国土交通省、埋文センターの3者で協議し、遺跡の現地保存は困難であることから、調査センターが本調査を実施することとなった。

本調査は平成26年～30年度に実施した。平成27、28～30年度は、「公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」に基づき国際文化財株式会社と大福コンサルタント株式会社へ発掘調査の支援業務委託を

行った。

なお、平成29年度については、調査センター主体の発掘調査と民間の支援業務を受けた発掘調査の2班体制で発掘調査を実施した。

2 現地説明会等

発掘調査では重要な遺構、遺物が発見されたため、以下の現地公開等を実施した。

① 現地説明会

平成27年12月5日 参加者350名

平成30年8月25日 参加者220名

② 遺跡見学等

平成30年7月10～12日 志布志市宇都中学校 職場体験学習3名

平成30年8月2日 霧島市文化財少年団50名

平成30年8月29日 大崎町文化財少年団11名

3 調査体制

平成26年度

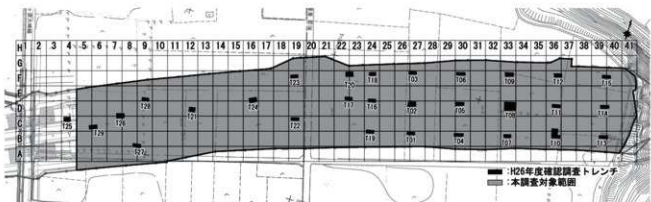
事業主体	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査統括	(公財)鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター		
	センター長	堂込 秀人	
調査企画	総務課長兼総務係長	山方 直幸	
	調査課長	八木澤一郎	
	調査第二係長	寺原 徹	
調査担当	調査員 文化財専門員	藤島伸一郎	
	調査員 文化財専門員	上村 俊洋	
		(H27.7～H27.9)	
事務担当	主査	岡村 信吾	
作業期間	平成27年2月2日～平成27年2月25日		



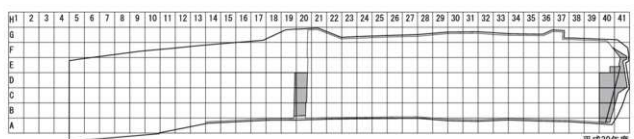
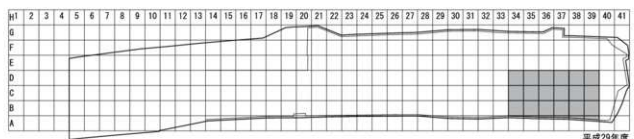
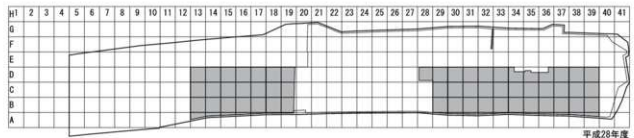
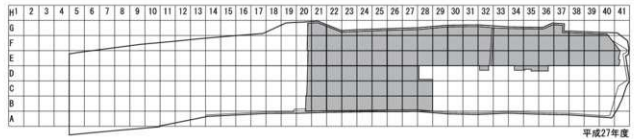
現地説明会



宇都中学校職場体験



第1図 平成26年度調査確認トレンチ配置図



第2図 II層年度別調査範囲

Kagoshima local network

みなみネット



発掘された「南研橋」。崖がV字型になっている（埋蔵文化財調査センター提供）



埋蔵文化財調査センターの調査も進められており、今後の発掘も期待される。調査は、崖がV字型の「南研橋」が、車道時代の遺跡と見られる。調査は、崖がV字型の「南研橋」が、車道時代の遺跡と見られる。調査は、崖がV字型の「南研橋」が、車道時代の遺跡と見られる。

埋蔵文化財調査センターの調査も進められており、今後の発掘も期待される。調査は、崖がV字型の「南研橋」が、車道時代の遺跡と見られる。調査は、崖がV字型の「南研橋」が、車道時代の遺跡と見られる。調査は、崖がV字型の「南研橋」が、車道時代の遺跡と見られる。

室町時代の堀跡出土
春日堀遺跡あす説明会

有明

発掘調査は、2014年度に始まり、本年度で終了。これまでに、文庫時代の堀跡（約100m）の遺跡が確認され、堀跡の長さ約100m、幅約10mと見られる。調査は、崖がV字型の「南研橋」が、車道時代の遺跡と見られる。

新聞記事

平成27年度

事業主体 国土交通省九州地方整備局
大隅河川国道事務所
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査統括 (公財)鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長 堂込 秀人
調査企画 総務課長兼係長 有村 貴
調査課長 八木澤一郎
調査第一係長 中村 和美
調査担当 統括調査員 文化財専門員 馬籠 亮道
副統括調査員 文化財専門員 徳永 智明
事務担当 主査 荒瀬 勝己
現地指導 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
センター長 中村 直子
國學院大学文学部・大学院 教授 谷口 康浩
委託先 国際文化財株式会社
委託期間 平成27年4月13日～平成28年3月11日
作業期間 平成27年5月11日～平成28年1月27日
委託内容 発掘調査支援業務 1式
測量業務 1式
土工業務 1式
担当者 主任技術者 平林 淳雄
主任調査支援員 鳥越 道臣
調査員支援員 池内 啓

山崎 良二
西野 順二
加世田悠仁
新平 直彦

検査 中間検査 平成27年11月12日
完成検査 平成28年3月2日(成果物検査)
平成28年3月8日(実地検査)

平成28年度

事業主体 国土交通省九州地方整備局
大隅河川国道事務所
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査統括 (公財)鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長 堂込 秀人
調査企画 総務課長兼総務係長 有村 貴
調査課長 八木澤一郎
調査第一係長 中村 和美
調査担当 統括調査員 文化財専門員 馬籠 亮道
副統括調査員 文化財専門員 徳永 智明
事務担当 主査 荒瀬 勝己
現地指導 佐賀大学芸術地域デザイン学部教授 重藤 輝行
鹿児島大学法文学部人文学部准教授 吉田 明弘

委託先	国際文化財株式会社	
委託期間	平成28年4月11日～平成29年3月10日	
作業期間	平成28年5月9日～平成29年1月27日	
委託内容	発掘調査支援業務	1式
	測量業務	1式
	土工業務	1式
担当者	主任技術者	平林 淳雄
	主任調査支援員	鳥越 道臣
	調査員支援員	東園千輝男 池内 啓 新平 直彦 加世田悠仁 北森 友梨
検査	中間検査	平成28年10月21日
	完成検査	平成29年3月3日(成果物検査) 平成29年3月7日(実地検査)

平成29年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	(公財)鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター センター長	
調査企画	総務課長兼係長	前迫 亮一
	調査課長	中村伸一郎
調査企画	調査第一係長(直営)	中原 一成
	調査第二係長(民活)	今村 敏照 岩澤 和徳

直営

調査担当	文化財専門員	吉岡 康弘
	文化財専門員	楸田 岳志
事務担当	主査	荒瀬 勝己

民間支援業務

調査担当	統括調査員	文化財専門員	上床 真
	副統括調査員	文化財専門員	倉元 良文
事務担当	主査	荒瀬 勝己	
委託先	大福コンサルタント株式会社		
委託期間	平成29年4月11日～平成30年3月9日 ※ 安良遺跡との2遺跡一括委託のため。		
作業期間	平成29年11月1日～平成30年1月29日		
委託内容	発掘調査支援業務	1式	
	測量業務	1式	
	土工業務	1式	
担当者	主任技術者	黒木 淳雄	
	主任調査支援員	和田 和史	
	調査員支援員	岩下 直樹 長濱 武史	

検査	完成検査	平成30年2月26日(成果物検査) 平成30年3月6日(実地検査)
	※ 安良遺跡との2遺跡一括委託のため、完成検査のみ実施。	

平成30年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	(公財)鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター センター長	
調査企画	総務課長兼総務係長	前迫 亮一
	調査課長	中村伸一郎
	調査第一係長	中原 一成 今村 敏照

民間支援業務

調査担当	統括調査員	文化財専門員	川口 雅之
	副統括調査員	文化財専門員	木之下悦朗
事務担当	主査	小牧 智子	
現地指導	鹿児島国際大学短期大学部名誉教授		三木 靖
	同志社大学教授	水ノ江和同	

委託先	国際文化財株式会社		
委託期間	平成30年4月8日～平成31年1月31日		
作業期間	平成30年5月7日～平成30年12月25日		
委託内容	発掘調査支援業務	1式	
	測量業務	1式	
	土工業務	1式	

担当者	主任技術者	平林 淳雄
	主任調査支援員	鳥越 道臣
	調査員支援員	大塚 正樹 川田 秀治 関 美男

調査担当	萩原 滉
	富田 慧
	加世田悠仁
	新平 直彦
	松本 健
	安村 健司 土岐 耕司

検査	中間検査	平成28年10月1日
	一部完成検査	平成30年11月7日
	完成検査	平成31年1月22日(成果物検査) 平成31年1月29日(実地検査)

第4節 調査の経過

以下、調査時代中期から近世の調査に関連する内容を記述する。

平成26年度

調査センター直営

【発掘作業】

2月（A～F-84～90区）表土の重機掘削、Ⅱ～Ⅶ層掘り下げ、Ⅷ～Ⅸ層掘り下げ、測量、遺物取り上げ

平成27年度

民間支援発掘業務

【発掘作業】

5月（E～G-34～41区）表土重機掘削、Ⅱ層掘り下げ、Ⅱ層上面遣構検出・調査・測量、遺物取り上げ、Ⅲ層上面遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ・コンタ図作成

（B～G-20～32区）Ⅱ層掘り下げ、Ⅱ層上面遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ、Ⅲ層上面遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ・コンタ図作成

（E～G-20・21区）Ⅲ・Ⅳ層の重機掘削

6月（E～G-34～41区、E～G-20～32区）Ⅱ層掘り下げ、Ⅱ層上面遣構検出・調査・測量、遺物取り上げ、Ⅲ層上面遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ・コンタ図作成

7月（E～G-34～41区、E～G-26～32区）Ⅱ層掘り下げ、Ⅱ層上面遣構検出・調査・測量、遺物取り上げ、Ⅲ層上面遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ・コンタ図作成

（E～G-20・25区）V層上面コンタ図作成

8月（E～G-34～41区）Ⅲ層上面遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ、Ⅲ層包含層掘り下げ、Ⅲ層上面完掘状況空中写真撮影、未掘削範囲の表土の重機掘削、Ⅱ層の掘り下げ、Ⅲ層上面遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ・コンタ図作成

（E～G-26～32区）Ⅲ層上面遣構検出・調査・測量、遺物取り上げ、Ⅲ層上面完掘状況空中写真撮影、Ⅲ層上面遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ、Ⅲ層上面完掘状況空中写真撮影、Ⅲ層上面コンタ図作成、Ⅲ～Ⅳ層の重機掘削、V層上面コンタ図作成

9月（E～G-34～41区）Ⅲ層上面遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ・コンタ図作成

（E～G-38～41区）Ⅲ・Ⅳ層重機掘削、V層上面コンタ図作成、V層上面遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ・掘り下げ・コンタ図作成

（F・G-34～37区、E～G-32～33区）Ⅱ層掘り下げ、Ⅲ層上面遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ・コンタ図作成

（E～G-32～33区）Ⅲ・Ⅳ層重機掘削、V層上面遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ・コンタ図作成

10月（F・G-32～37区）Ⅲ層上面遣構検出・調査・測量、遺物取り上げ・コンタ図作成、Ⅲ・Ⅳ層重機掘削、V層上面遣構検出・調査・測量、遺物取り上げ、V層上面コンタ図作成

（B～D-20～21区）表土重機掘削、Ⅱ層掘り下げ、Ⅲ層上面遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ・掘り下げ・コンタ図作成、Ⅲ・Ⅳ層の重機掘削、V層上面遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ・掘り下げ・コンタ図作成

（B～D-22区）表土重機掘削、Ⅱ層掘り下げ、Ⅲ層上面遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ・掘り下げ・コンタ図作成、Ⅲ層上面遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ・掘り下げ、Ⅲ層上面遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ・掘り下げ・コンタ図作成

11月（F・G-32～37区）Ⅲ層上面遣構検出・調査・測量、遺物取り上げ、コンタ図作成

（B～D-22～25区）表土重機掘削、Ⅱ層掘り下げ、Ⅲ層上面遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ・掘り下げ・コンタ図作成、Ⅲ・Ⅳ層の重機掘削、V層上面遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ・掘り下げ・コンタ図作成

12月（B～D-26～28区）表土重機掘削、Ⅱ層上面遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ・掘り下げ、Ⅲ層上面遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ・掘り下げ

Ⅲ～Ⅳ層の重機掘削、V層上面遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ・掘り下げ・コンタ図作成、現地説明会
1月（B～D-26～28区）V層上面遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ・コンタ図作成

平成28年度

民間支援発掘業務

【発掘調査】

8月（A～D-11～13区）表土重機掘削、Ⅱb・Ⅱc層包含層掘り下げ、弥生～古代遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ、Ⅷ層包含層掘り下げ、遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ

（A～D-14～19区）Ⅱb・Ⅱc層包含層掘り下げ、弥生～古代遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ

9月（A～D-11～14区）Ⅱb・Ⅱc層包含層掘り下げ、弥生～古代遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ、Ⅷ層包含層掘り下げ、遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ

（A～D-14～17区）Ⅱb・Ⅱc層包含層掘り下げ、弥生～古代遣構検出・調査・測量・遺物取り上げ

(A～D-18～20区)表土重機掘削
(F・G-33～37区、G-32区北側)一部完成検査
10月(A～D-14～17区)Ⅱb・Ⅱc層層包含層掘り下げ、弥生～古代遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ

中間検査

11月(B～D-26～29区)表土重機掘削、Ⅱb・Ⅱc層包含層掘り下げ、弥生～古代遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ、Ⅷ層包含層掘り下げ、遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ

(B～D-38・39区)表土重機掘削、Ⅱb・Ⅱc層包含層掘り下げ、弥生～古代遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ

(A～D-34～37区)表土重機掘削、Ⅱb・Ⅱc層包含層掘り下げ、弥生～古代遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ

12月(B～D-26～29区)表土重機掘削、Ⅱb・Ⅱc層包含層掘り下げ、弥生～古代遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ、Ⅷ層包含層掘り下げ、遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ

(B～D-38・39区)Ⅱb・Ⅱc層層包含層掘り下げ、弥生～古代遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ、Ⅷ層包含層掘り下げ、遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ

(A～D-34～37区)Ⅱb・Ⅱc層層包含層掘り下げ、弥生～古代遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ、Ⅷ層包含層掘り下げ、遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ

(A～D-30～33区)表土重機掘削、Ⅱb・Ⅱc層包含層掘り下げ、弥生～古代遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ

(B～D-26～29区)表土重機掘削、Ⅱb・Ⅱc層包含層掘り下げ、縄文後期～古代遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ、Ⅷ層包含層掘り下げ、遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ、Ⅷ層包含層掘り下げ、遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ

(B～D-38・39区)Ⅱb・Ⅱc層包含層掘り下げ、弥生～古代遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ

(遺跡内東側)空中写真撮影

【整理作業】

遺物洗浄・遺物ラベル整理、確重量計測、遺物分類、土壌サンプル浮遊・水洗・磁力選別

平成29年度

調査センター直営

12月(A～D-38・39区)表土重機掘削、Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ、遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ・地形測量・コンタ図作成

1月(A～D-34～37区)表土重機掘削、Ⅱ層包含層掘り下げ、遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ(A～D-33区)Ⅷ層包含層掘り下げ

2月(A～D-38・39区)Ⅴ層検出写真撮影(A～D-34～37区)Ⅱ層溝跡1号の調査、遺物溜り8～13号の実測、堅穴住居跡5、6、8、15号の調査、Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ、遺跡全景写真撮影、(A～D-33区)Ⅷ層包含層掘り下げ

3月(A～D-34～37区)Ⅱ層溝状遺構遺物溜り8～13号実測、堅穴住居跡5、6、8、15号の調査

平成30年度

民間支援発掘業務

【発掘調査】

5月(A～F-40・41区)表土、無遺物層重機掘削、Ⅱc層遺構調査、Ⅱc層包含層掘り下げ、Ⅲ層上面遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ・コンタ図作成

6月(E-33、E・F-35・36区、E-37区)調査完了(A～D-33～39区)Ⅱc層上面遺構調査、Ⅱc層包含層掘り下げ、Ⅲ層上面遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ・コンタ図作成

(A～F-40・41区)Ⅱc層上面遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ、Ⅱc層包含層掘り下げ、Ⅲ層上面遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ・コンタ図作成

7月(E-32、B～D-30～32区)調査終了(E-33、E・F-35、36区、E-37区)調査完了(A～D-33～39区)Ⅱ層上面遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ、Ⅱc層包含層掘り下げ

(A～F-40・41区)Ⅱc層上面遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ、Ⅱc層包含層掘り下げ、Ⅲ～Ⅴ層上面遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ・コンタ図作成(E～G-38～41区)表土機械掘削

8月 現地説明会、溝跡1号・堀跡1号およびⅧb層上面遺構完相状況空中写真撮影

9月(B～E-19区、B～G-20区)表土機械掘り下げ、Ⅱ層包含層掘り下げ、Ⅲ層・Ⅴ層上面遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ・コンタ図作成、無遺物層(Ⅲ～Ⅳ層)機械掘り下げ

【整理作業】

出土遺物の洗浄・注記・接合

炭化物・微細遺物の土壌水洗識別(8・9月)

遺物コンテナ収納(11、12月)

遺物点検および台帳照合

第5節 整理・報告書作成作業

1 整理作業

県から受託した調査センターが、平成30年度から行った。本報告書では、縄文時代中期から近世の調査成果を記載している。

平成30～令和元年度の整理・報告書作成作業に係る作業内容は、以下のとおりである。

- ① 遺構実測図と図面台帳の照合、遺構別に実測図の仕分け、注記、下図面作成およびトレース
- ② 遺構内出土遺物と包含層出土遺物の仕分け、遺物と遺物台帳、遺構実測図との照合、分類
- ③ 土器及び石器の注記、接合、実測、分類、掲載する土器の選別、実測、復元
- ④ 石器実測、科学分析委託業務
- ⑤ 遺構、遺物トレース、レイアウト、原稿作成

2 作成体制

平成30年度（平成30年4月～平成31年3月）

事業主体	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所	
作成主体	鹿児島県教育委員会	
作成総括	（公財）鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター長	
作成企画	総務課長兼係長	前迫 亮一
	調査課長	中村伸一郎
	調査第一係長	中原 一成
作成担当	文化財専門員	今村 敏照
	文化財専門員	馬籠 亮道
	文化財専門員	川口 雅之
	文化財専門員	木之下悦朗
事務担当	主査	小牧 智子
遺物指導	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター長	
		中村 直子

平成31（令和元）年度（平成31年4月～令和2年3月）

事業主体	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所	
作成主体	鹿児島県教育委員会	
作成総括	（公財）鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター長	
作成企画	総務課長兼係長	中原 一成
	調査課長	中島 治
	調査第一係長	寺原 徹
作成担当	文化財専門員	福永 修一
	文化財専門員	川口 雅之
	文化財専門員	木之下悦朗
事務担当	主査	有川 剛弘
遺物指導	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター長	
		中村 直子

宮崎県埋蔵文化財センター主査 今塩屋毅行
大分市教育委員会主査 長 直信

報告書作成指導委員会

11月26日

調査課長ほか9名

報告書作成検討委員会

11月27日

センター長ほか5名



整理作業風景

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

志布志市は鹿児島県の大隅半島北部に位置し、宮崎県都城及び串間市と県境をなす。北は曾於市南西は大崎町と接し、南は太平洋に湾口を開く志布志湾に面する。海岸部一帯は日南海岸国定公園に指定され、亜熱帯植物の植物が繁茂する気候で、沖合の枇榔島亜熱帯性植物群落は国の特別天然記念物に指定されている。総面積は290.28㎓あり、大崎町内に1.02㎓の飛び地を有する。平成18年1月1日に旧志布志町・有明町・松山町の三町が合併して誕生した市である。

この地域の地質は古いほうから、日南層群一阿多島浜火砕流一夏井層一阿多(夏井)火砕流一旧期ローム層一入戸火砕流一新期火山灰層となる。日南層群は主に頁岩・砂岩の細互層から成り、年代は漸新世とされている。阿多島浜火砕流は夏井海岸の一部に認められるもので、23～25万年前とされる。

夏井層は下部の貝や植物の化石を含むシルト層と上部の礫層からなる。阿多(夏井)火砕流は黒色を呈する溶結度の低い均質な凝灰岩で、年代は8.5～10.5万年前とされる。入戸火砕流は海岸に沿った地域では海拔40m程度のシラス台地を形成する。

志布志市の地形は、大きく南部の台地と北部から東部にかけての山岳・丘陵地帯に分けられ、全体として志布志湾に向かって緩やかな勾配になっている。海岸近くは急崖となり、わずかな沖積平野を形成する海岸線となっている。この海岸線は南部に旧期砂丘、新期砂丘に二分される砂丘海岸が続くのに対して北部は日南層群が構成する急峻な岩礁海岸となる。

菱田川は、高隈山地に源を發し、大隅半島を南東方向に流下して、大崎町菱田で志布志港に入る。延長約5～6kmで、肝属川に次ぐ大隅半島第二の河川と称される。菱田川下流は火山灰噴出物による河岸段丘の発達が明瞭で、第一・第二・第三段丘が形成されている。第一段丘面では水田化した沖積層が展開している。第二段丘面の末端からの自然湧水を利用し、江戸時代以降の灌漑によって水田地帯となっている。第二段丘面右岸は標高約30mのシラス台地で、大久保馬場・普現堂・菱田原と続き、大久保井手からの灌漑によって畑作地域が広がる。

第三段丘面は、宇都山麓の宇都ノ鼻集落を頂点として南に展開する台地面で、標高30～60mである。

春日堀遺跡は、田原川と菱田川に挟まれた野冲蓬原台地南東部に形成された菱田川右岸の第二段丘面に位置している。標高は約30mで、南方3kmで志布志湾に至る。

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺では、遺跡北方約1kmの仕明遺跡で後期旧石器時代の遺物が出土しているが、旧石器時代の遺跡数は少ない。

縄文時代早期になると春日堀遺跡や対岸の木森遺跡で、前平式土器から押型文土器の集落跡が形成される。春日堀遺跡では、堅穴建物跡32軒、連穴土坑130基、集石468基、土坑300基以上が検出された。押型文土器の堅穴建物跡が県内で初めて検出されている。木森遺跡でも、堅穴建物跡、連穴土坑、集石が確認されており、東九州自動車建設に伴う発掘調査によって菱田川下流域に規模の大きい集落遺跡が存在することが分かっていた。

縄文時代前期から晩期は、集落遺跡は確認されていない。縄文時代後期は落とし穴が春日堀遺跡で見えされており、遺跡周辺は氣場としての利用が主であったと推測される。

弥生時代終末期以降は、菱田川流域で遺跡数が増加する。集落遺跡については、春日堀遺跡で弥生時代終末期～古墳時代前期前半の堅穴建物跡が10軒確認されている。7軒は焼土堅穴建物跡で、検出数は県内最多である。この他に、仕明遺跡、長田遺跡では、古墳時代中後期の集落跡が確認されている。

古墳時代終末期には、春日堀遺跡、仕明遺跡、上苑遺跡で集落遺跡が確認されている。県内でも菱田川流域には、春日堀遺跡や上苑遺跡など7世紀代の集落遺跡が集中している。各遺跡では、宮崎平野及び都城盆地から搬入された甕や精製瓦、八女産及び瀬戸内産の須恵器が出土しており、活発な交易があったことを知ることができる。

この地域の古墳は地下式横穴墓と共存する事例が多い。最も注目される遺跡は、工事中発見によって平成29年度に調査が行われた原田古墳群3号地下式横穴墓である。発掘調査では、人骨、軽石製の箱式石棺、短甲、鉄鏃、鉄斧、鉄剣が発見がされ、有力首長の墓であることが明らかとなった。5世紀の地下式横穴墓である。

また、飯隈古墳群では、20基の地下式横穴墓が確認され、調査の結果、1, 9, 11, 20～24号墳から、5世紀代の人骨や副葬品(刀子、埴、高坏、鉢、貝鏡、鉄劍、鉄刀、鉄鏃)が発見された。

本遺跡南方約2kmの大崎町菱田は、「大隅国風土記逸文」に見える「必志里」の遺跡地と考えられており、本遺跡周辺は古墳時代から古代の大隅半島における要所の一つであった可能性がある。

律令国制では当初、大隅国大隅郡大隅郷の存在が想定され、その後日向国諸県郡に移管されたため、「大隅郷」の名残として「教仁郷」の地名が成立した。平安後期の郡郷制改編後は菱田川左岸が島津荘寄郡「教仁院」、右岸が島津荘一円荘「教仁郷」として開発が進められた。

志布志津を中心とする志布志湾岸は、平安後期に立荘された島津荘の外港機能をもつ地域として重視され、開発領主である平季基の同族と考えられる薩摩平氏系統の教仁院平八成直・安楽平九郎為直兄弟が源平騒乱期の教仁院の領主として見え、平季基の娘あるいは孫娘の婿に迎えられた伴兼貞の子孫肝付氏一族が教仁郷領主として文献史上に現れる。

本遺跡北東約1kmの菱田川右岸の片平城跡は、教仁院成直が居城した蓬原古城と伝えられているが、その後、その北方約2kmの菱田川右岸の蓬原城を拠点に肝付氏系の教仁郷氏が教仁郷地域を支配している。

蓬原城は1359年に島津氏久に攻略され、教仁郷氏は島津支配下に置かれたが、豊州島津家・新納家・北

郷家・肝付家の抗争の末、1546年に教仁郷氏は退城した。

菱田川右岸には、天守城跡、片平城跡、蓬原城跡、金丸城跡が築造され、周辺では楡井、島津氏、肝原氏など有力武家による抗争が繰り返されている。これらの山城は、志布志城の敵対勢力に対して構築されたといわれ、春日堀遺跡では、天守城の一部と考えられる堀跡が検出されている。菱田川流域は、山城を含む中世の遺跡が集中しており、地域の防衛、経済の重要地であったことが窺われる。

独立して一郷をなしていた蓬原は、近世に入ると、松山郷が志布志郷から分離独立する際に、蓬原・野神・原田が志布志郷に編入され、今日の行政区分に継承されていく。また、菱田川河口に位置する菱田集落は、都城島津家の外港として同家の直轄地となる。

春日堀遺跡は中世の教仁郷に属しており、歴史的に見て、本遺跡周辺は、教仁郷を含む志布志湾岸における中世以前の重要地域であった。



遺跡周辺の地形



第3図 周辺遺跡位置図

第1表 周辺遺跡一覧表(1)

番号	遺跡番号	遺跡名	種別	所在地	地形	時代	遺物	遺構等	備考
1	221-423	春日組	散布地	志布志市有明町蓬原字春日組	台地	縄文時代、古墳時代	土器(縄文~弥生時代)、土師器、須恵器、埴輪、書置、土口石	弥生穴居、連穴土坑、土坑、集石	本報告書 H12 農政分布(町) H26 確認調査 H26~30 発掘調査 H31 (R1)~R2 遺跡年報、報告書(32) 刊行(縄文後編~)
2	221-363	井手上A	散布地	志布志市有明町野井倉字井手上、土ノ水尻	台地	縄文時代早期、弥生時代、古墳時代	土器(縄文、成川式)、石器、人骨、土師器	集石、弥生穴居、方形周溝、溝状遺構、土器埋設遺構、土坑	H11 農政分布(町) H19 分布調査(市) H20 確認調査(1次)(市) H21 発掘調査(1次)、確認調査(2次)(市) H22 発掘調査(2次)(市) H23 報告書(6) 刊行(市)
3	221-495	上ノ段D	-	志布志市有明町野井倉字上ノ段	台地	古代	土師器	-	H11 農政分布(町)
4	221-494	上ノ段C	-	志布志市有明町野井倉字上ノ段	台地	古代	土師器	-	H11 農政分布(町)
5	221-487	西原D	-	志布志市有明町野井倉字西原、中原	台地	弥生時代、古墳時代	土器(弥生~古墳時代)、土師器	-	H11 農政分布(町)
6	221-484	中原	-	志布志市有明町野井倉字中原、前原	台地	弥生時代、古墳時代	土師器	-	H11 農政分布(町)
7	221-403	前原	散布地	志布志市有明町野井倉字前原	台地	弥生時代	土師器	-	H11 農政分布(町)
8	221-298	金ノ道B	-	志布志市志布志町安家字金ノ道	台地	弥生時代、古墳時代、古代	-	-	-
9	221-254	金ノ道A	散布地	志布志市志布志町安家字金ノ道・高牧	丘陵	弥生時代	-	-	-
10	221-401	中次A	散布地	志布志市有明町野井倉字中次	台地	弥生時代	土器(弥生時代)	-	H11 農政分布(町)
11	221-402	中次B	散布地	志布志市有明町野井倉字中次	台地	弥生時代	土器(弥生時代)	-	H11 農政分布(町)
12	221-485	東原	-	志布志市有明町野井倉字東原	台地	弥生時代、古墳時代	土師器	-	H11 農政分布(町)
13	221-486	西原A	-	志布志市有明町野井倉字西原、東原	台地	弥生時代	-	-	H11 農政分布(町)
14	221-488	上原	-	志布志市有明町野井倉字上原、東原、西原	台地	弥生時代、古墳時代	土器(弥生~古墳時代)、土師器	-	H11 農政分布(町)
15	221-365	上原A	散布地	志布志市有明町野井倉字上原、西原	台地	弥生時代、古墳時代	土器(弥生~古墳時代)	-	-
16	221-498	福付	-	志布志市有明町野井倉字福付、下段	台地	弥生時代	土器(弥生時代)	-	-
17	221-489	中屋	-	志布志市有明町野井倉字中屋、西原道	台地	弥生時代	土器(弥生時代)	-	H11 農政分布(町)
18	221-499	下段	-	志布志市有明町野井倉字下段	台地	弥生時代、古墳時代	土器(古墳時代)	土坑	H11 農政分布(町) H19 分布調査(市) H20 確認調査(市) H21 整理作業、報告書作成、刊行(5)(市)
19	221-500	和田上	-	志布志市有明町野井倉字和田上、下段	台地	旧石器時代、縄文時代早期、弥生時代、古墳時代	細石刃、細石核、土器(縄文時代)	-	H11 農政分布(町) H19 分布調査(市) H20 確認調査(市) H21 整理作業、報告書(5) 刊行 H23 試掘調査(市) H24 発掘調査(市) 整理作業、報告書(9) 刊行(市)
20	221-302	蓬原城跡	城跡跡	志布志市有明町蓬原字出水、神原	台地	古代	-	堀、空堀、土塁	S44.4.1 旧有明町指定
21	221-303	真言宗總持院跡	社寺跡	志布志市有明町蓬原字出水、神原	平地	中世、近世	-	五輪塔、板碑、墓碑	S44.4.1 旧有明町指定
22	221-380	金丸城跡	城跡跡	志布志市有明町蓬原字神原	丘陵	中世	-	複層・空堀 150m×200m	S44.4.1 旧有明町指定
23	221-394	禰宗好壽寺跡	社寺跡	志布志市有明町蓬原字神原	台地	中世、近世	-	相輪、五輪塔、無銘塔	S44.4.1 旧有明町指定
24	221-387	馬場地下式横穴墓	地下式横穴墓	志布志市有明町蓬原字小松、内城	台地	古墳時代	埴、甕身、埴、人骨	地下式横穴墓	S22.4.21 旧有明町指定
25	221-445	日鎌	散布地	志布志市有明町蓬原字日鎌、捨り、内城、小松	台地	弥生時代、古墳時代	-	-	H10 農政分布(町)
26	221-349	捨り	散布地	志布志市有明町蓬原字捨り、日鎌、山ノ前	台地	弥生時代中期	弥生土器、石器	-	-
27	221-350	大園A	散布地	志布志市有明町蓬原字大園、上大園、小松	台地	縄文時代後期、弥生時代中期、古墳時代	土器(縄文~古墳時代)、石器	-	H11 農政分布(町)
28	221-501	大園B	-	志布志市有明町蓬原字大園、井手ノ上	台地	古墳時代	-	-	H11 農政分布(町)
29	221-507	牧ノ上A	-	志布志市有明町蓬原字牧ノ上	台地	縄文時代早期、古墳時代	土器(縄文、古墳時代)、石器	-	-
30	221-406	牧	散布地	志布志市有明町蓬原字牧、外堀	台地	旧石器時代、縄文時代早期、縄文時代中期、弥生時代中期、古墳時代、近世	刮削、石器、土器(縄文~古墳時代)、土師器、火打石、磨石、陶磁器	弥生穴居、古溝、溝(道路準拠)、土坑、柱穴、柱列、孤立柱建	H11 農政分布(町) H15 確認、発掘調査 H16 発掘調査 H17 報告書(9) 刊行(有明町)

第2表 周辺遺跡一覧表(2)

番号	遺跡番号	遺跡名	種別	所在地	地形	時代	遺物	遺構等	備考
31	221-509	牧ノ上B	-	志布志市有明町藤原字牧ノ上	台地	古墳時代	-	-	-
32	468-71	清水ノ上	散布地	曾於郡大崎町妻田清水ノ上	台地	古墳時代	-	-	散布地
33	468-132	竹安	-	曾於郡大崎町妻田竹安	平地	古墳時代, 中世	-	-	-
34	221-465	田尾下	散布地	志布志市有明町野井倉字田尾下	台地	古代	土師器	-	-
35	221-464	中牟田	散布地	志布志市有明町藤原字中牟田, 春日畠	平地	古墳時代, 古代	土器(古墳時代), 土師器, 須惠器	竈穴住居	H11 農政分布(町)
36	221-367	仕明	集落跡	志布志市有明町藤原字仕明, 宮ノ前, 大園, 牧	台地	旧石器時代, 縄文時代早期, 縄文時代前期, 弥生時代中期, 古墳時代, 古代, 中世, 近世	旧石器時代, 縄文時代早期, 縄文時代前期, 弥生時代中期, 古墳時代, 古代, 中世, 近世	竈穴住居, 土坑, 竈立柱建物跡, 土壌墓, 道路状遺構, 溝, 柱列	H8 分布調査(町) H10 確認調査 H12 ~ 13 発掘調査 H13 ~ 16 整理作業 H16 報告書(7) 刊行(有明町)
37	221-370	片平古墳	古墳	志布志市有明町藤原字仕明, 逆水	平地	古墳時代	-	-	円墳
38	221-381	片平城跡	城跡	志布志市有明町藤原字下水流, 仕明	丘陵	古代, 古代平安	-	-	-
39	221-354	下水流	散布地	志布志市有明町藤原字下水流, 宮ノ前	台地	弥生時代後期~終末, 古墳時代	-	-	-
40	221-405	上苑	集落跡	志布志市有明町野井倉字上苑, 高宮	台地	縄文時代早期, 縄文時代晚期, 弥生時代初期~前期, 古墳時代	土器(縄文~古墳時代)	集石, 柱穴, 土坑, 竈穴住居, 竈立柱建物跡	H8 分布調査(町) H12 確認調査 H13 発掘調査 H16 整理作業・報告書(5) 刊行(有明町)
41	221-313	高宮	散布地	志布志市有明町野井倉字高宮, 前田, 下段	台地	縄文時代中期, 縄文時代晚期, 弥生時代	石皿	-	-
42	221-391	下段B	散布地	志布志市有明町野井倉字下段, 東	台地	弥生時代	土器(弥生時代)	-	H11 農政分布(町)
43	221-390	下段C	散布地	志布志市有明町野井倉字下段, 東	台地	縄文時代中期, 縄文時代晚期, 弥生時代	土器(縄文~弥生時代), 打製石斧, 石鏃	-	H11 農政分布(町)
44	221-388	東	散布地	志布志市有明町野井倉字東, 下段	台地	弥生時代	土器(弥生時代)	-	H11 農政分布(町)
45	221-389	横壠	散布地	志布志市有明町野井倉字横壠, 下段	台地	縄文時代早期, 弥生時代, 古墳時代, 古代	土器(縄文時代), 土師器, 石鏃, 耳輪, 土製円盤	運土土坑, 集石	H8 農政分布(町) H11 確認調査 H12 発掘調査 H13 ~ 15 整理作業 H16 報告書(8) 刊行(有明町)
46	221-461	甚藪	散布地	志布志市有明町野井倉字甚藪, 上苑上	台地	弥生時代	土器, 石器	落とし穴, 集石	H11 農政分布(町)
47	221-463	下段A	散布地	志布志市有明町野井倉字下段, 上苑下	台地	古代	土師器	-	H11 農政分布(町)
48	221-462	上苑B	散布地	志布志市有明町野井倉字上苑, 下段, 上苑下	台地	古代	土師器	-	H11 農政分布(町)
49	221-460	上苑上	散布地	志布志市有明町野井倉字上苑上	台地	古代	土師器	-	H11 農政分布(町)
50	221-466	上苑A	散布地	志布志市有明町野井倉字上苑, 上苑下, 田尾	台地	縄文時代前期, 縄文時代晚期, 弥生時代中期, 古墳時代, 古代, 中世	土器(縄文~古墳時代), 土師器, 須惠器, 青磁, 染付, 鐵摩能	竈穴住居, 土坑, 遺構	H8 農政分布(有明町) H11 確認調査(町) H16 発掘調査(町, 出) H17 ~ H19 整理作業(町, 出) H19 報告書(11) 刊行(出)
51	221-438	木森	散布地	志布志市有明町野井倉字木森, 田尾	台地	縄文時代, 古代	土器(縄文~古墳時代), 土師器, 須惠器	集石, 柱穴, 土坑, 竈穴住居, 竈立柱建物跡, 柱列	H11 農政分布 H25 確認調査 H26, 30 発掘調査
52	221-384	平B	散布地	志布志市有明町野井倉字平, 古川	台地	古代, 中世	土師器, 青磁	-	H11 農政分布(町)
53	221-383	大代	散布地	志布志市有明町野井倉字大代, 鎌池, 大森, 平	台地	縄文時代, 古代	土器, 土師器	-	H11 農政分布(町)
54	221-459	鎌池	散布地	志布志市有明町野井倉字鎌池, 上苑上	台地	弥生時代	土器	-	H11 農政分布(町)
55	221-457	阪上	散布地	志布志市有明町野井倉字阪上, 大代	台地	古代	土師器	-	H11 農政分布(町)
56	221-427	平A	散布地	志布志市有明町野井倉字平, 下戸	台地	古墳時代	-	-	H8 分布調査(町)
57	221-395	神弘弘心院跡	社寺跡	志布志市有明町野井倉字油山	平地	近世	-	無縫塔, 一字一石塔, 遺碑	S44.4.1 旧有明町指定
58	221-456	堀入	散布地	志布志市有明町野井倉字堀入, 押山, 山形, 川原	台地	弥生時代, 古墳時代	土師器	-	H11 農政分布(町)
59	468-74	妻田和田	散布地	曾於郡大崎町妻田和田	台地	古墳時代	-	-	-
60	468-40	地忌寺	地下式横穴墓	曾於郡大崎町妻田地忌寺	台地	古墳時代, 古代	-	-	-

第3表 周辺遺跡一覧表(3)

番号	遺跡番号	遺跡名	種別	所在地	地形	時代	遺物	遺構等	備考
61	468-131	諏訪上 B	-	曾於郡大崎町菱田諏訪上・胡摩園・天神園	台地	-	-	-	-
62	468-73	諏訪上 A	散布地	曾於郡大崎町菱田諏訪上	台地	古墳時代	-	-	-
63	468-12	高尾 A	散布地	曾於郡大崎町神領高尾・養田馬見園	南岸	縄文時代後期	-	-	-
64	468-60	高尾 B	散布地	曾於郡大崎町神領高尾	台地	古墳時代	-	-	-
65	468-59	大園・護牧・藝池	散布地	曾於郡大崎町益丸大園・神領護牧・藝池	台地	弥生時代、古墳時代、古代、古代平安	-	-	-
66	468-133	王子脇	-	曾於郡大崎町益丸王子脇・川路	台地	古墳時代	-	-	-
67	468-16	稲荷塚(飯隈遺跡群)	散布地	曾於郡大崎町神領稲荷塚	台地	弥生時代、古墳時代	-	-	-
68	468-125	別府下	-	曾於郡大崎町益丸別府下・神領楠渡	平地	古墳時代	土師器片	-	H17 農政分布(町) H18 確認調査(町)
69	468-124	平良宇都 B	-	曾於郡大崎町井俣平良宇都	平地	弥生時代初期～前期、弥生時代中期、古墳時代	-	-	-
70	468-82	牛ヶ道	散布地	曾於郡大崎町神領牛ヶ道・家戸原	台地	弥生時代、古墳時代	石礎	-	H11 農政分布(町)
71	468-70	平良上 C	散布地	曾於郡大崎町井俣平良上	台地	弥生時代、古墳時代	土器、石器	聚穴住居、浦穴土坑、土坑、竪石	H11 農政分布(町) H14 分布調査 H24・25 試掘調査 H26～27 本調査 H27 整理作業 H28 整理作業・報告書(11) 刊行
72	468-85	稲荷塚 B	散布地	曾於郡大崎町菱田稲荷塚・家戸原・実古塚	台地	古代	-	土師器	H11 農政分布(町)
73	468-83	稲荷塚 A	散布地	曾於郡大崎町菱田稲荷塚	台地	弥生時代、古墳時代	-	-	H11 農政分布(町) H25 確認調査(町)
74	468-93	久木野塚	散布地	曾於郡大崎町菱田久木野塚	台地	弥生時代、古墳時代	-	土器	H11 農政分布(町)

第3節 志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡

東九州自動車道の志布志IC～鹿屋串良JCT間には、第4表～第7表に示すとおり23の遺跡が存在する。表には令和元年12月時点の概要を記載する。詳細については各報告書等を参照していただきたい。

第4表 志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡 (1)

遺跡番号	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺跡の概要		
				時代・時期	主な遺構	主な遺物
1	志布志市 志布志町 志布志 台地上 標高約70m	H28年度 終了	H30年度 発行 H31年度 調査地目録予定	旧石器	—	ナイフ形石器、磨石刃、使用痕跡片、磨石、叩石、ハンマーストーン
				縄文早期	土坑	石版式、押型文、下割式、石鏝、磨石、石皿
2	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約45m	H28年度 終了	H30年度 発行 H31年度 作業中	縄文中期	落し穴、土坑	—
				縄文後・晩期	—	磨治縄文、丸尾式、西平式、中呂B式、磨石、磁石
縄文時代を中心とした遺跡である。旧石器時代はナイフ形石器文化期及び細石刃文化期に比定される。縄文時代早期は、土器に比して石器の出土が極めて少ない。前～中期の落し穴が2基検出されている。遺構遺構1号は時期不詳であるが縄文時代後期の可能性がある。						
3	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約30m	H28年度 終了	H30年度 発行 H31年度 作業中	縄文後・晩期	土坑、集石	小牧3A、西平式、丸尾式
				弥生中期	竈穴住居跡	山ノロ式
4	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約60m	H27年度 H28年度 終了	H30年度 発行 H31年度 作業中	古墳時代	竈穴住居跡、地下式横穴墓、溝状遺構	板瓦式土器、鉄鍬、鉄鏝、須恵器
				古代～中世	溝状住居跡、竈穴住居跡、土坑、土灰、土瓦	土師器、須恵器、青磁、白磁、滑石製石鏝、炭化米塊
				近世	土坑、柱穴	—
				古墳時代後期～中世を中心とした遺跡である。調査区内における同時期の集落構造把握等に向け整理作業を進めている。		
5	志布志市 有明町 野井倉 台地縁部 標高約50m	H26年度 H27年度 終了	H29年度 発行 志布志市教育委員会 発行	旧石器	—	特殊型細石刃鏝、細石刃、割片
				縄文早期	落し穴、溝状土坑、土坑、集石、磨石集積	前平式、加葉山式、古田式、丸ノ尾燗、石版式、中層V式、下割式、委ノ丸式、押型文、手向山式、葦ノ神B式、打製・磨製石鏝、石鏝、局部磨製石斧
				縄文中期	集石	古田式、妙見・天満ヶ尾式、葦ノ神A式、葦ノ神B式、苦浜式、耳杖、石鏝、磨石、異形石器
				弥生	—	弥生土器、石包丁
起伏のある地形に立地し、縄文時代早期を中心に旧石器時代、縄文時代早期も出土した複合遺跡である。縄文時代早期の集石は検出層によって構成の大きき差が認められる。また、葦ノ神式土器の遺跡土器や、鉄鍬、磨石も出土している。古墳群として遺跡登録されているが、これまでの調査では痕跡を含め古墳は確認されていない。幸田君GISの変更に伴い、遺跡名を「小牧古墳群」から「安楽小牧B」に変更。						
6	志布志市 有明町 野井倉 台地縁部 標高約40m	H26年度 H30年度 終了	H29年度 発行 志布志市教育委員会 発行	旧石器	—	特殊型細石刃鏝、細石刃、割片
				縄文早期	落し穴、溝状土坑、土坑、集石、磨石集積	前平式、加葉山式、古田式、石版式、下割式、押型文、石鏝、石匙、磨石、磁石
7	志布志市 有明町 野井倉 河原段丘 標高約30m	H26年度 H27年度 終了	H29年度 発行 志布志市教育委員会 発行	縄文後・晩期	—	春日式、回廊式土器
				古墳～古代	—	巻石器
				中世	竈穴住居跡、杭列状遺構	須恵器、土師器、青磁、白磁、滑石製石鏝片、鉄製品、鉄片
				縄文時代早期と中世を中心とする遺跡である。遺構では縄文時代早期の竈穴住居遺構、溝状土坑、集石、中世の竈穴住居跡等が見られ、遺物では縄文時代早期の土器、石鏝、石匙、磨石・磁石の他、中・後期の土器、古墳～古代の須恵器、土師器、中世の青磁、白磁、滑石製石鏝片、鉄製品等が出土している。鬼斧カワラ燗火による炭状現象(噴砂跡)が確認されている。		
8	志布志市 有明町 野井倉 河原段丘 標高約30m	H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 終了	H30年度 発行 H31年度 作業中	縄文早期	竈穴住居跡、溝状土坑、集石、土器集中、炭化物集中、落し穴	前平式、加葉山式、石版式、下割式、委ノ丸式、押型文、手向山式、葦ノ神式、打製石鏝、打製・磨製石斧、トトロ石鏝、磨石、叩石、石皿、砥石、穿孔貝類
				弥生	竈穴住居跡	山ノロ式
				古墳～飛鳥	竈穴住居跡、竈穴住居跡跡、溝状遺構	甕(東原式、板瓦式)、委、埴、高坪、須恵器高坪、棒状磨製石鏝片
				古代～中世	竈穴住居跡、竈穴住居跡跡、土坑、杭列跡、埴土器	土師器
近世	土坑、溝状遺構、古溝、遺物集中	陶器、磁器				
縄文早期から中世を中心とする遺跡である。遺構は縄文時代早期の竈穴住居跡、溝状土坑、集石、落し穴、弥生時代の竈穴住居跡、古墳～飛鳥時代の竈穴住居跡(焼土層層付)、竈穴住居跡跡、溝状遺構、中世の竈穴住居跡跡、堀跡が検出された。遺物は縄文時代早期の土器、打製石斧、磨製石斧、トトロ石鏝等をはじめ、弥生時代から中世の遺物が出土している。また鬼斧カワラ燗火に伴う炭状現象(噴砂跡)の痕跡も確認されている。						

第6表 志布志IC～鹿屋車庫JCT間の遺跡(3)

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺跡の概要							
					時代	主な遺構	主な遺物					
15	鹿山段	曾於郡 大崎町 西内面 台地上 標高約95m	H25年度 H26年度 H27年度 H30年度 終了	H26年度 H28年度 H31年度 (1) 同行 作業中	縄文早期	集石、埋設土器	吉田式、石版式、下割形式、委ノ丸式、中形式、押型文、早稲式、壺ノ神式、宮浜式、石京西式、打製石器、石匙、磨石、敷石、石杖、フレーク、チップ					
					縄文前期～ 中期初葉	土坑、土器集中	骨鏃式、深溝式、大森山式、鹿島式、船元式、打製石器、石匙、石鏃、スタンハイバー、二次加工剥片、磨石、敷石、石皿、石杖、フレーク、チップ					
					縄文後期	土坑	傘川式、丸尾式、西平式、中岳目式、打製石器、石匙、石鏃、スタンハイバー、磨石、敷石、打製石斧、磨製石斧、石皿、フレーク、チップ					
					縄文晩期	—	入佐式、黒川式					
					弥生前期	—	高橋式					
					古墳	—	成川式					
					近世以降	溝状遺構・古溝	—					
					縄文時代前期から中期初葉を中心に、縄文時代早期から近世までを含む遺跡である。縄文中期では170基を超える土坑が検出されたほか、在地系土器の深溝式土器、宮浜地方の大森山式土器や鹿島式土器、瀬戸内地方の船元式土器などが出土し、当時の遠隔地交流の一端が明らかとなった。幸田遺跡GISの変更に伴い、遺跡名を「左の壁」から「鹿山段」に変更。							
					16	小牧	鹿児島市 串良町 鹿山田 台地上 標高約60m	H27年度 H28年度 H29年度 終了	H30年度 H31年度 (1) 同行 作業中	旧石器	—	細石丸、フレーク、チップ
										縄文早期	竪穴住居跡、溝穴土坑、土坑、集石	前平式、吉田式、石版式、下割形式、早稲式、象眼文、石匙、磨石、石皿
縄文前期	—	骨鏃式、深溝式、磨石										
縄文後期	竪穴住居跡、石皿立石遺構、伏罽、石斧集積遺構、集石、土坑	阿高式系、岩崎上層式、指留式、市楽式、石鏃、横刀型石器、打製石斧、磨石、石皿、大塚										
縄文晩期	—	入佐式、黒川式、羽目突帯文										
弥生中期	—	入来式、山ノ口式、砥石										
古墳	竪穴住居跡、雑草積、土器部、土坑	東原式、辻堂原式、布留系土器、須恵器、鉄鏃、鉄製品、敷石、勾玉、管玉										
古代	竪穴住居跡跡、焼土跡、溝状遺構、土坑	土師器、須恵器、壺書土器、鉄器、土埴、焼土器、土製紡錘車										
中世以降	竪穴住居跡跡、土坑、石組遺構、溝状遺構、杭列	土師器、東線系須恵器、白磁、青磁、壺書土器、石鏃、合子、輪切石、刀子、鉄製紡錘車、漆器、古銭、銭貨後										
旧石器時代から近世までの遺跡である。縄文時代早期前半から中葉の集落、後期の石皿遺構を伴う埋設構造の集落とこれらに伴う遺物が特徴される。この他、古墳時代の存在形住居跡を伴う集落や古代・中世の竪穴住居跡群も発見されている。両辺の縄文時代前期における人間活動の変遷を追うことができる遺跡である。												
17	川尻保	鹿児島市 串良町 鹿山田 河津段丘 標高30～50m	H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 H30年度 H31年度 (C地点) 同行 終了	H27年度 H29年度 H30年度 (C地点) 作業中	旧石器	磯跡	剥片尖頭部、ナイフ形石器、線原型細石核					
					縄文早期	竪穴住居跡、集石、土坑	岩本式、前平式、志麻原式、加須山式、吉田式、倉園山式、石京式、下割形式、押型文、壺ノ神式、宮浜式、轟入式、石杖、打製石斧、石皿					
					縄文前期	集石	骨鏃式、磨製石斧					
					縄文後期	—	中岳式					
					縄文晩期	集石	入佐式、黒川式、羽目突帯文					
					弥生前期	—	高橋式					
					弥生中期	竪穴住居跡	下城式、山ノ口式					
					古墳	竪穴住居跡跡、瀬川園遺構跡跡、竪穴遺構、溝状遺構、漆器	成川式土器、輪切石、高坪輪切石、鉄鏃、鉄斧、勾玉、管玉					
					古代	竪穴住居跡跡	須恵器、土師器					
					中世	竪穴住居跡跡、溝状遺構、漆器	青磁、白磁、瓦器碗					
旧石器時代から中世までの遺跡である。特に古墳時代では、集落を構成する多数の竪穴住居跡や瀬川園遺構を伴う遺構が発見されているほか、専用の輪の輪も出土している。古墳時代の鉄製品の生産過程も明らかにする良好な資料である。												
18	町田堀	鹿児島市 串良町 鹿山田 台地縁辺部 標高約90m	H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 終了	H27年度 (1) 同行 作業中	縄文早期	集石	下割形式、早稲式					
					縄文後期	竪穴住居跡、埋設土器、塚と土穴、土坑、石斧集積遺構	中岳目式、石刀、石鏃、打製・磨製石斧、ヒスイ製歯車、小玉、勾玉、管玉					
					縄文晩期	—	黒川式土器、羽目突帯文					
					弥生中期	竪穴住居跡	入佐式、山ノ口式土器、土製勾玉					
					古墳	竪穴住居跡跡、地下式横穴墓、円形周溝墓、溝状遺構	成川式土器、入来器、鉄鏃、鉄鏃、刀子、ヤリ鉋、異形石器					
					古代	焼土跡、漆器	土師器、須恵器					
					縄文時代早期から古代までの遺跡である。古墳時代の地下式横穴墓が92基発見され、円形周溝を伴う例も初めて確認されている。立小野遺構や下城遺構等と類似性が想定され、高塚墳と共存する志布志湾沿岸部の地下式横穴墓との比較が可能になり、大隅半島の古墳時代像解明に必須の遺跡である。このほか、縄文時代後期の竪穴住居跡跡から、横板文を施す完全な石刀が出土している。							

第7表 志布志IC～鹿屋車良JCT間の遺跡(4)

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺跡の概要							
					時代	主な遺構	主な遺物					
19	登山	鹿屋市 車良町 鍋山田 台地縁辺部 標高約110m	H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 終了	H28年度 (A地点1) H29年度 H30年度 H31年度 (A地点2, B, C, D地点) 作業中	旧石器	—	刮片					
					縄文早期	壱穴住居跡, 溝穴土坑, 土坑, 集石構, 石器製作跡	吉田式, 石版式, 下割式, 辻タイプ, 委ノ丸式, 押型文, 石鏝, 石匙, スタイルバー, 磨石, 剥片, 石槌, 台石, 石匙					
					縄文前期	埋設土器(縄文)	縄文, 糸板文					
					縄文後期	土坑, 溝とし穴状遺構, 埋設土器, 石器集中部	市来式, 丸尾式, 西平式, 太郎治式, 三方田式, 中岳皿式, 打製・磨製石斧, 磨石, 剥片, 石槌, 台石, 石匙					
					縄文晩期	土坑	入式式, 眉目突形文					
					弥生中期	壱穴住居跡, 竪立柱建物跡, 土坑	山ノロ式, 打製・磨製石斧, 磨製・打製石鏝, 磨石, 敲石, 石皿, 青銅製					
					中・近世	古道跡	青磁, 白磁, 薩摩産					
					旧石器時代から中世にかけての遺跡である。特に、縄文時代後期の建物跡を構成していた可能性のある柱穴群が顕在しており注目される。また、同時期のものと考えられる複数の埋設土器と石冠が1点出土している。							
					20	田原岳の上	鹿屋市 車良町 鍋山田 台地縁辺部 標高約120m	H22年度 H23年度 H24年度 H25年度 H26年度 H28年度 H30年度 終了 ※H22～24は 埋文センター調査	H24年度 (1) 同行 H27年度 (2) 同行 H28年度 (3) 作業中 ※H23～24は埋 文センター作業	縄文早期	壱穴住居跡, 溝穴土坑, 集石, 溝とし穴, 土坑, 石器製作跡	前平式, 吉田式, 倉隈日式, 石版式, 下割式, 辻タイプ, 委ノ丸式, 中照式, 押型文, 手向山式, 早船式, 墓ノ神式, 石鏝, 石匙, 石匙, 磨石, 敲石, 石皿, 打製石斧
										縄文後期	溝とし穴, 雑草積	指宿式, 市来式, 石鏝, 磨石
縄文晩期	—	黒川式										
弥生中期	壱穴住居跡, 大型建物跡, 竪立柱建物跡, 円形・方形周溝	山ノロ式・中溝式, 縄田織文系土, 土製瓦・土, 鉄器, 磨製石鏝, 石匙, 敲石, 敲石, 石皿, 打製石斧										
古墳時代以降	溝状遺構, 竪穴遺構	土器破片, 薩摩産										
縄文時代早期から弥生時代中期を中心とした遺跡である。弥生時代中期では、ベツト状遺構を伴う方形・円形の大型壱穴住居跡, 棟持柱をもつ竪立柱建物跡2棟を含む建物群, 柱穴列や円形・方形の周溝などが検出されており、大隅半島中央部における当該期の集落の集積を知る上で貴重な遺跡である。このほか、縄文時代早期の壱穴住居跡, 溝穴土坑などの遺構が多数発見されていることも注目される。												
21	立小野塚	鹿屋市 車良町 鍋山田 台地縁辺部 標高約125m	H22年度 H23年度 H24年度 H26年度 H28年度 終了 ※H22～24は埋 文センター調査	H24年度 H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 H29年度以降 (1) 同行 (2) 作業 ※H24は埋文センター作業						縄文前期・中期	—	深溝式
										縄文後期	—	指宿式, 市来式, 西平式
										弥生中期	—	山ノロ式
										古墳	地下式横穴墓, 土坑墓, 溝状遺構	成川式, 須恵器, 鉄器(刀・鉏・槍・箭・刀子・鏃等), 青銅製, 土器
					時期不詳	溝状遺構	—					
					縄文時代前期から古墳時代までの遺跡である。特筆すべきは、古墳時代の地下式横穴墓が約200基発見されたことである。玄室内には鉄鍬や鉄剣等の鉄器, 青銅製鈴等の副葬品と土器が多数残っていたほか、墓頂部から多量の土器や須恵器が出土した。青銅製鈴をはじめ、多種多様な副葬品を伴った地下式横穴墓群の発見は、南九州の古墳時代墓群の様相全体を解明していく上で貴重な資料である。							
					22	十三塚	鹿屋市 車良町 鍋山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了 ※埋文センター調査	H22年度 同行 ※埋文センター作業	縄文早期	—	石版式
										縄文後期	—	岡崎式, 市来式, 三方田式
										縄文晩期	—	黒川式
										弥生中期	壱穴住居跡, 竪立柱建物跡, 土坑	山ノロ式, 土製瓦片, 打製・磨製石鏝, 棟持風具, 鉄鏝
古墳	—	成川式										
中世～近世	遊路状遺構	洗式通寶(加治木様)										
弥生時代中期を中心とする遺跡である。花弁形・方形・円形を呈する壱穴住居跡が顕在された。出土遺物等から、王土跡や前線遺跡等と同時期の集落跡と考えられる。また、集石が壱穴住居跡内から発見されている。7号住居跡の埋土内から、松木園遺跡や永古天神段遺跡から出土した鉄鏝と類似する無蓋の鉄鏝が出土した。												
23	石籠	鹿屋市 車良町 鍋山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了 ※埋文センター調査	H22年度 同行 ※埋文センター作業						縄文早期	集石, 土坑	岩土式, 前平式, 辻田織式, 石版式, 早船式, 貝紋糸板文, 鎌石構式, 縄文式, 打製石鏝, 磨石, 敲石
										弥生中期	—	山ノロ式, 須穴式土器
										縄文時代早期前半から早期末を中心とする遺跡である。鎌石構式土器1個体と縄文式土器が2個体出土し、両形式が同時期に存在した可能性を示唆する遺跡である。		

第三章 調査の方法と層序

第1節 発掘調査の方法

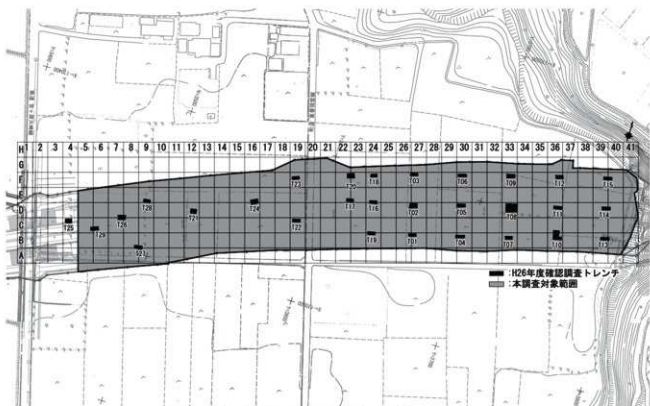
本調査は、原則的にグリッドに沿って約40m間隔で土層観察用のベルトを設定し、土層観察用ベルトによって区画される調査区画ごとに進めた。大部分の範囲では圃場整備事業等で包含層が削平され表土直下で遺構が検出される状況であったため、表土を重機により除去した後人力で遺構の精査と調査を行った。

Ⅱ層とその下に位置するⅢ層は黒色腐植土でいわゆるクロボクに相当する。中でも包含層とされたⅡ層は色調や火山灰等の夾雑物の有無により細分されるが、その差異は微妙で掘削時の識別は非常に難しく、遺構の精査や調査には工夫が必要であった。そこで、本調査に際しては調査区の壁面や土層観察用ベルト、また必要に応じ15m～20m間隔でグリッドに沿って約70cm幅の先行トレンチを設定し、下層の包含層密度や遺構の早期把握に努めた。

遺構検出は、表土直下のほか、各層の境界（Ⅱc上面、Ⅲ層上面）で繰り返し実施した。また最終的にはⅢ層を重機掘削後、コンタ図の作成を兼ねてⅤ層上面で最終的な確認を行った。その結果、竪穴住居跡や溝跡など多くの遺構はⅡ層中で検出されたが、一部のピットや土坑の一部はⅤ層正面で把握されたものもある。



先行トレンチ及び遺構検出作業風景



第5図 周辺地形及びグリッド配置図

第2節 遺跡の層序

層序については大隅半島中部の笠之原台地～野井倉台地にみられる層序と基本的には同様である。

第6図に、基本土層と各層の特徴を示す。調査区内の大部分は、過去の構造改善事業等によりII層中位まで削平を受けており、II a層についてはほぼ全て削平され、II b層についてはごく一部の範囲で残存するのみである。

1947年頃の米軍撮影の航空写真をみると、この時期までに周辺ではすでに大規模な耕地整理が行われており、包含層はある程度削平されている様子が窺える。その後の航空写真と比較してもその後も数回の圃場整備が行われており、遺跡内でもこれに対応する造成痕や擾乱が観察される。結果として本報告書の対象となるII層はほとんどの範囲で包含層が何らかの削平を受けており、表土直下で遺構が検出される状況であった。

V層以下については、今後刊行予定のVII層以下の調査成果に関連するが、本遺跡の特徴としてはアカホヤ

火山灰噴出前後に発生したと考えられる大規模な噴砂痕が多数発見されたことが挙げられる。VII層上面では多数の噴砂痕が観察され、遺跡のほぼ全域が噴砂起源の砂質土(VII層)に覆われている(第V章第2節参照)。その層厚は平均約30cm、最大では約70cmに及び調査区内ではアカホヤ火山灰に伴う降下軽石のプライマリーな堆積層はみられず、全て噴砂中に浮遊した状態で観察される。

VII a層の上には噴砂の堆積時に一部流失もしくは擾乱された状態が観察され、場所によってはVII層がVII層を不整合に被覆する状況が明瞭に観察される。反面、分厚い噴砂層の堆積により後世の樹痕等による擾乱の影響は小さく、VII a層下部～VII b層の堆積は、段丘縁辺部を除き、極めて良好であった。

X層は薩摩火山灰に相当する。遺跡内の大部分では良好に残存しているが、段丘縁辺部では堆積が薄く、場所によってはVII b層から直接X I層に遷移する。噴砂形成以前に流失していた可能性が高い。



1947(S27)年9月30日撮影 USA-M525-34



1981(S56)年6月7日撮影 KUB12X-C4-20



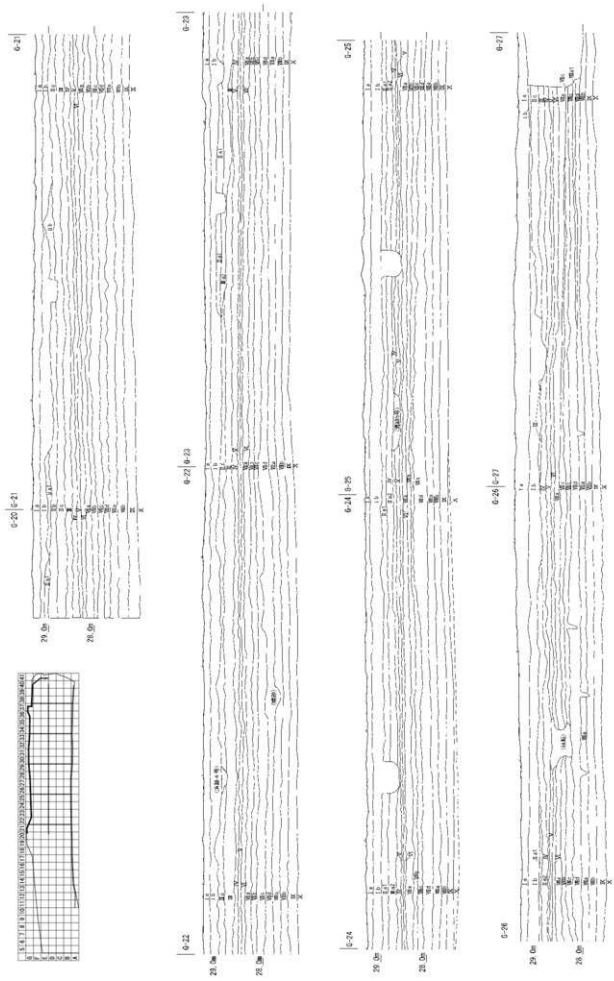
2004(H16)年1月8日撮影 MKU20034X-2-17

中国土地建設航空写真(記号は[整理番号][コース番号][写真番号])を比較のため一部改変

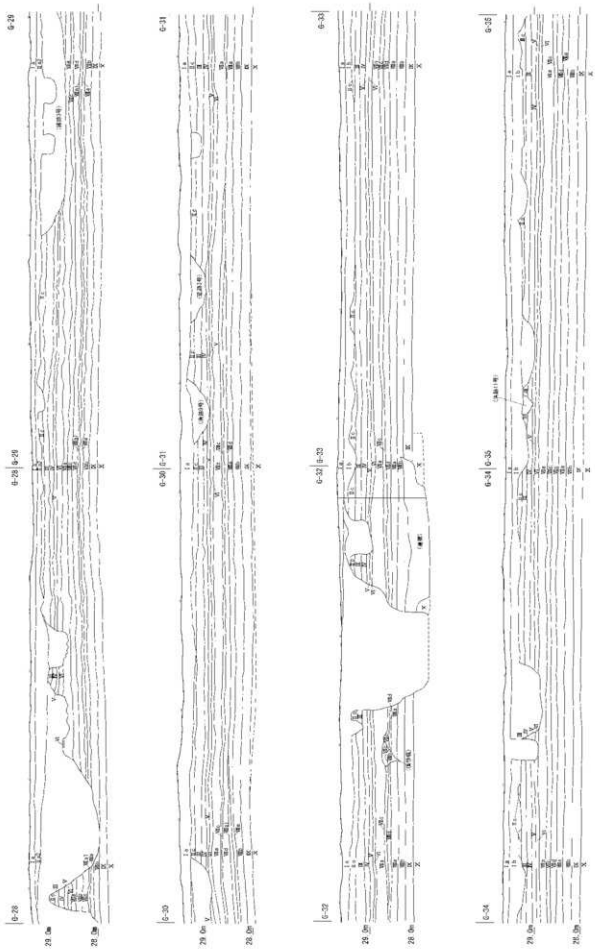
春日郷遺跡周辺の航空写真

層位	色調	特徴	時期
I層	灰褐色土層、3.5mm程度の自然軽石を含む。しきりあり無い。旧耕作土。調査以前の圃場整備等により、複数箇所に造成がなされている。造成部分が分かる部分についてはI層をIa/Ibに区分した。		
II a層 (仰)	黒色腐植土層、調査区の大部分で削平され、一部は造成土として再堆積している(II a1層)。その中に軽石混入の黒色腐植土層として残存のみである。パミス層を示す。		中世～近世
II b層 (仰)	黒褐色腐植土層、0.5mm程度の噴砂粒子(パミス)が多く含む。上層と比べわずかに明るく、乾くとやや中乾きボツボツした質感を呈する。		古墳時代終末～中世
II c層 (仰)	黒褐色腐植土層、上下層と比べわずかに暗い。パミス層は少なく、上下層と比べるとやや暗い。パミス少		縄文後期～古墳時代前期
III層 (仰)	黄褐色腐植土層、上下層と比べ明るい。堆積が良好な部分は、径0.5～1mmの黄褐色(赤褐色)パミスを含み、ややブロック状を呈する。		
IV層 (仰)	黒色腐植土層、上層の黒色土と比較して更に黒色に近く(暗色)で保水性に富む。		
V層	黄褐色～黒褐色を呈する硬質土。畑田跡下層からアカホヤ火山灰起源腐植土(VII層)までの最終層。基本的にはVIIa層由来の腐植土であるが、畑田跡下層の噴砂のため、混じり合っている。		
VII a層	アカホヤ火山灰起源の腐植土層。褐色で均質だが軽石が多く含む。腐植土というよりは砂質土に近い。		
VII b層	淡黄色砂質土層(噴砂/扇状)。噴砂起源の堆積物。		
VII c層	淡黄色砂質土層(噴砂/中粒)。噴砂起源の堆積物。		
VII d層	淡黄色砂質土層(噴砂/粗粒)。噴砂起源の堆積物。		
VII e層	黒色腐植土。しきりあり。硬い砂質土層が腐植土に近い。下層と比較するとパミスはあまり含まず。土壌化した堆積を示す。VII層下部とは一部不整合で局部的にブロック状の堆積を示す。上層はVIIa層堆積時に一部削平または再堆積している部分がある。(VII a層)		縄文時代早期
VII f層	黒褐色土。VII a層と比べパミスが多く含む。特に径1mm程度の黄褐色パミスを多く含む。色調もVII a層と比較するとやや明るい。		縄文時代早期
IX層	黒褐色土。VII b層と比べてやや色が濃く、径1mm程度の黄褐色パミスを多く含む。		縄文時代早期
X層	浅黄色火山灰土。薩摩火山灰起源層。調査区の大部分では安定した堆積を示すが、特に段丘縁辺部では流失しており、ブロック状に不安定な堆積を示すが、全く堆積していない部分もある。		
X I層 (仰)	暗褐色粘質土。粘性ややあるが、比較的弱い。		(稲石文化期) BB1層相当
X II層 (仰)	暗褐色粘質土。粘性ややあるが、比較的弱い。		BB1層相当
X III層 (仰)	暗褐色粘質土。粘性ややあるが、比較的弱い。		BB1層相当
X IV層 (仰)	黄褐色土。X I～X III層と比較すると粘性は弱い。暗褐色粘質土～黄褐色土系移行層。中から上部にかけては下部の暗褐色粘質土がブロック化している。下部に微小な褐色パミスをごくわずかに含む。		Y1-0B2土層相当
X V層	くすんだ褐色砂質土層。小礫を含む。下層よりやや暗い。		Y12層相当
X VI層	明黄褐色砂質土		(二次ソラス)

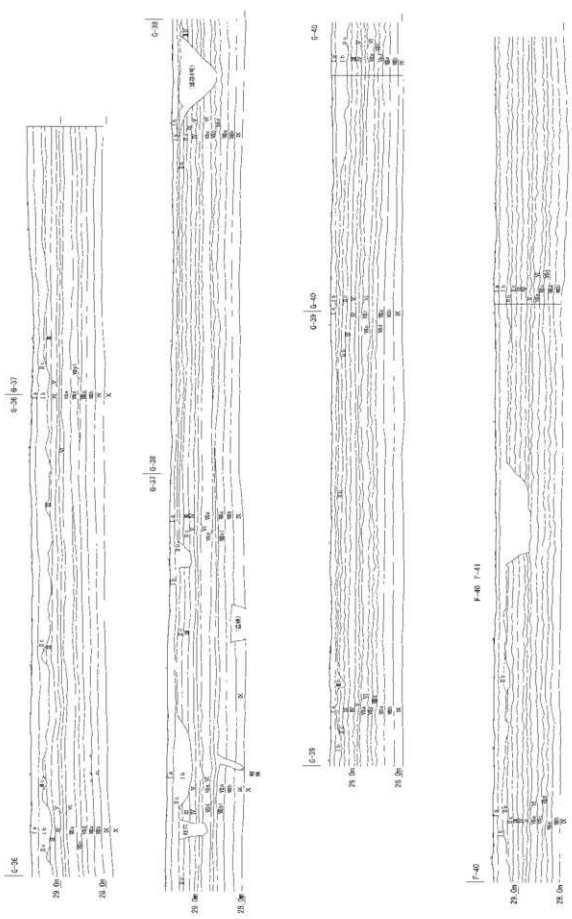
第6図 基本土層図



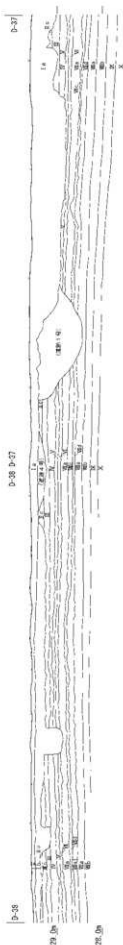
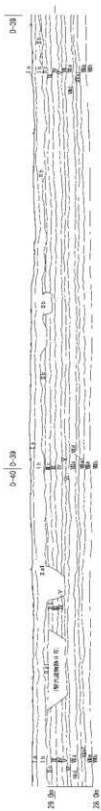
第7图 土層断面図 調査区北壁 (1)



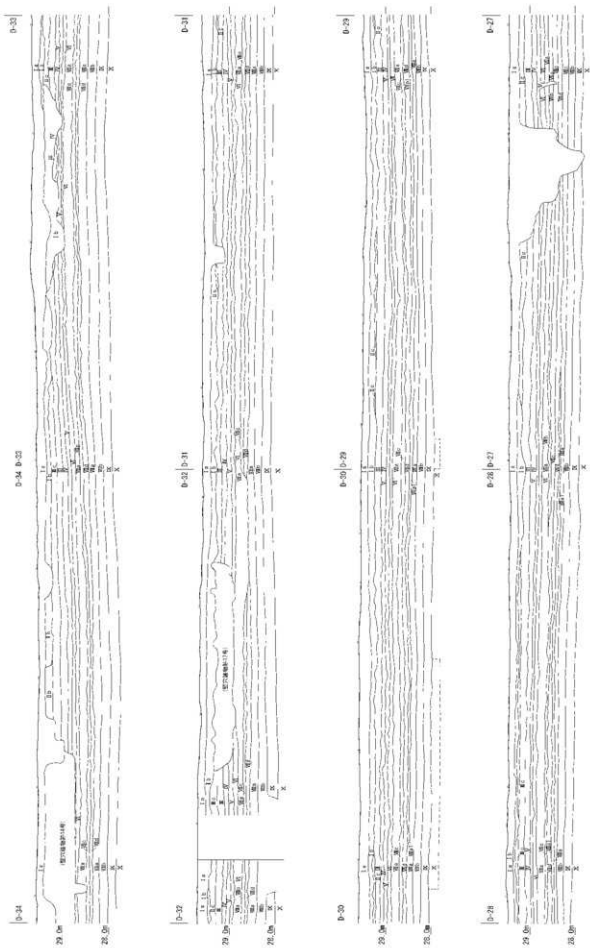
第8図 土層断面図 調査区北壁 (2)



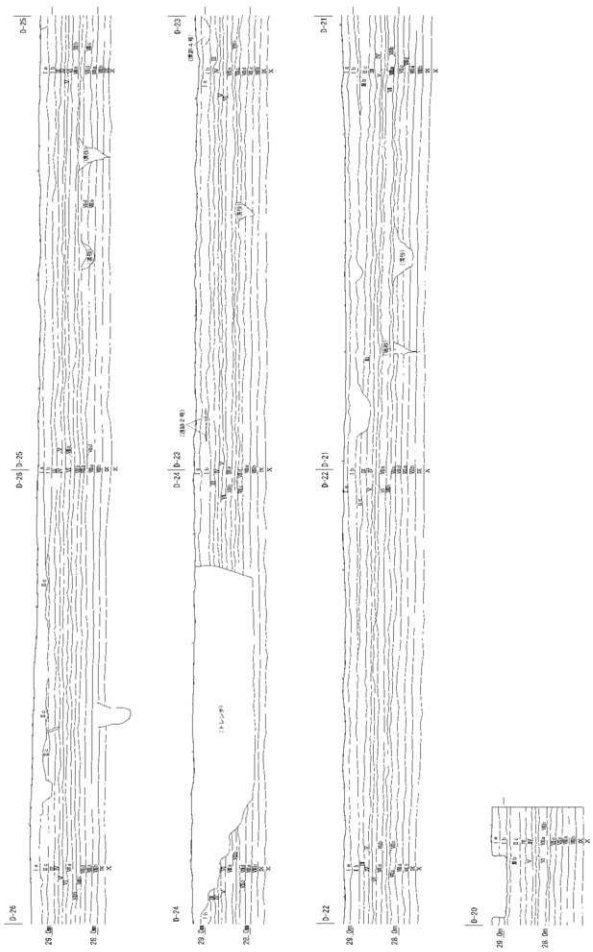
第9図 土層断面図 調査区北壁 (3)



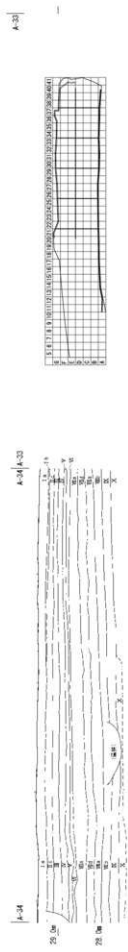
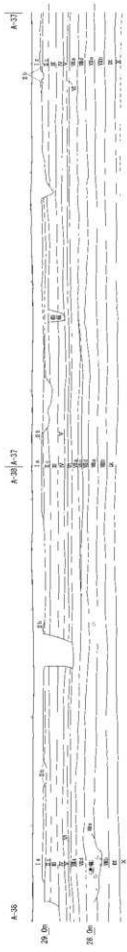
第10図 土層断面図 E区ライン (1)



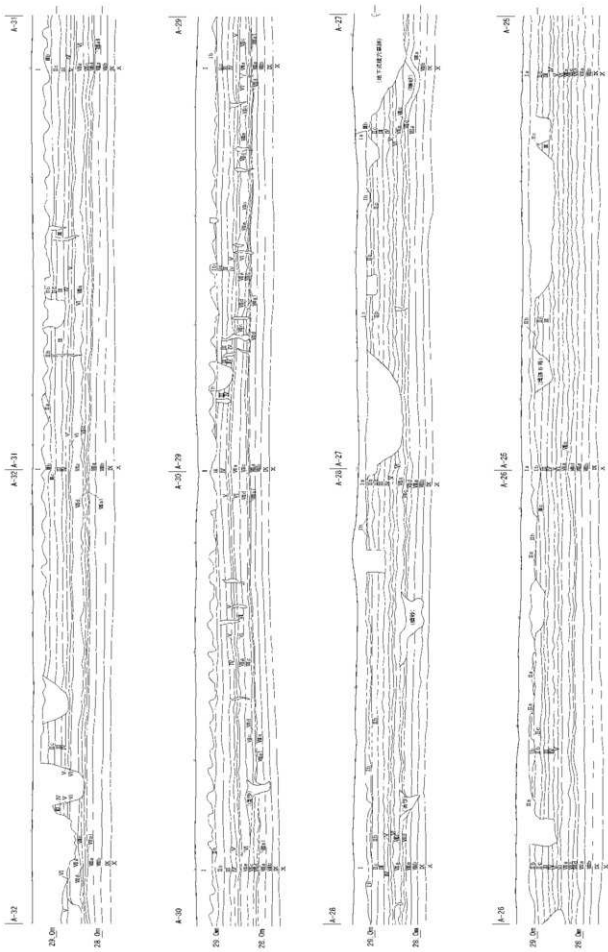
第11図 土層断面図 E区ライン (2)



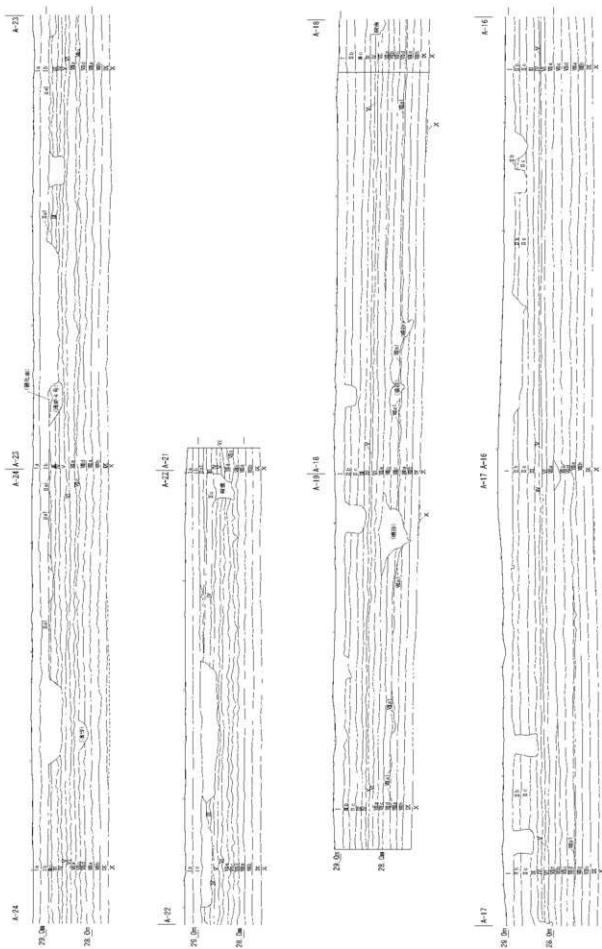
第 12 図 土層断面図 E区ライン (3)



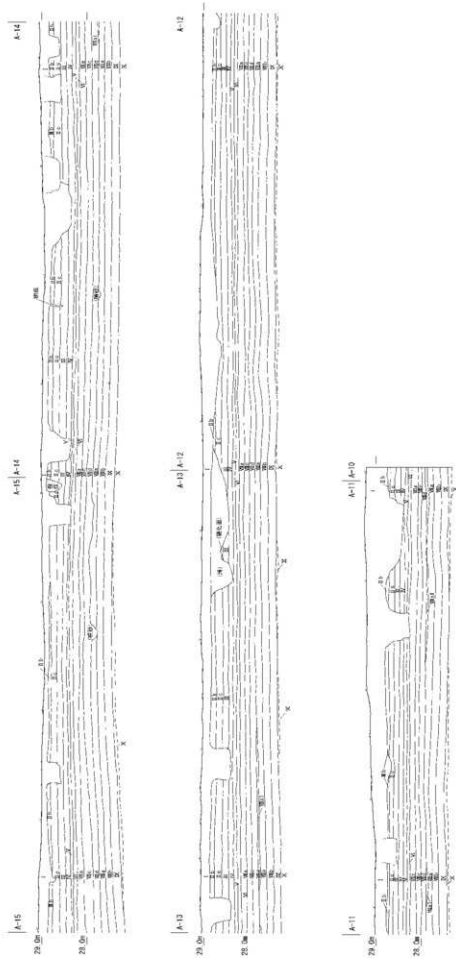
第 13 图 土層断面图 調査区南壁 (1)



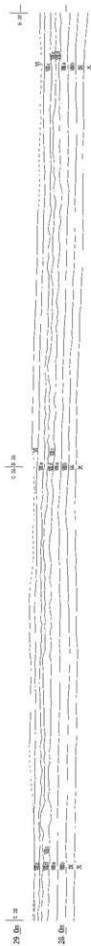
第 14 图 土層断面図 調査区南端 (2)



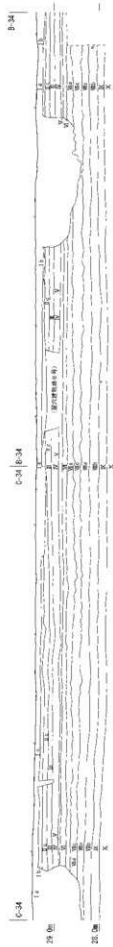
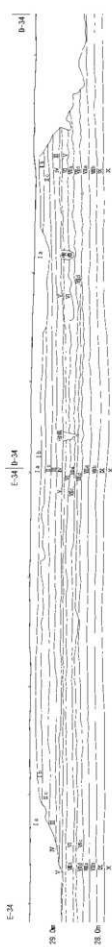
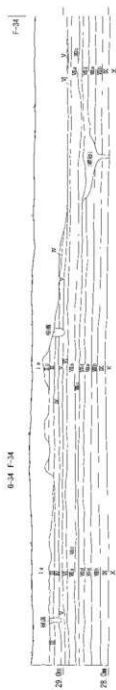
第 15 图 土層断面図 調査区南壁 (3)



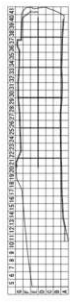
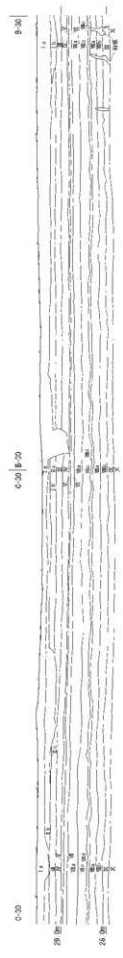
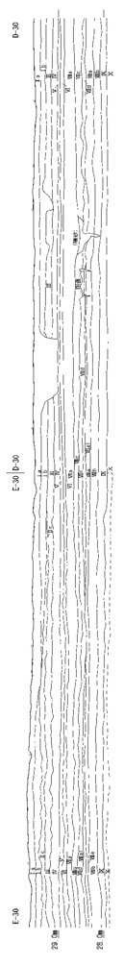
第 16 图 土層断面図 調査区南壁 (4)



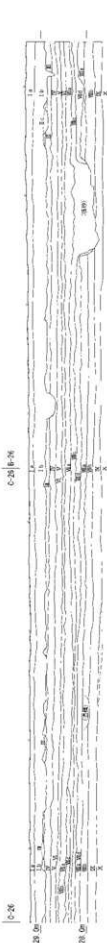
第17図 土層断面図 38区ライン



第18図 土層断面図 34区ライン



第19図 土層断面図 30区ライン



第 20 図 土層断面図 26 区ライン

第3節 遺構新旧対応表

第8表 春日堀遺跡遺構対応表

調査時の遺構名	記載遺構名	時代	備考
S0116	落上1穴1号	縄文後期	--
S0134	落上1穴2号	縄文後期	--
S0126	落上1穴3号	縄文後期	--
S0125	土坑1号	縄文後期	--
S0017	土坑2号	縄文後期	--
SAM00	堀穴建物跡1号	弥生時代中期	--
SAM03	堀穴建物跡2号	弥生時代前期後半～古墳時代前半	--
SAM09	堀穴建物跡3号	弥生時代前期後半～古墳時代前半	--
SAM04	堀穴建物跡4号	弥生時代前期後半～古墳時代前半	--
SAM06	堀穴建物跡5号	弥生時代前期後半～古墳時代前半	--
SC019	堀穴建物跡6号	弥生時代前期後半～古墳時代前半	SAM06 埋土中
SAM11	堀穴建物跡7号	弥生時代前期後半～古墳時代前半	--
SAM12	堀穴建物跡8号	弥生時代前期後半～古墳時代前半	--
SAM14	堀穴建物跡8号	弥生時代前期後半～古墳時代前半	--
SC007	堀穴建物跡8号	弥生時代前期後半～古墳時代前半	SAM14 埋土中
SC009	堀穴建物跡9号	弥生時代前期後半～古墳時代前半	SAM14 埋土中
SAM25	堀穴建物跡9号	弥生時代前期後半～古墳時代前半	--
SAM03	堀穴建物跡10号	弥生時代前期後半～古墳時代前半	--
SAM27	堀穴建物跡11号	弥生時代前期後半～古墳時代前半	--
S0026	土坑3号	弥生時代前期後半～古墳時代前半	--
S0027	土坑4号	弥生時代前期後半～古墳時代前半	--
SC008	遺構集中区1	弥生時代前期後半～古墳時代前半	--
SAM10	堀穴建物跡12号	古墳時代終末期	--
SAM08	堀穴建物跡13号	古墳時代終末期	--
SAM02	堀穴建物跡14号	古墳時代終末期	--
SAM25	堀穴建物跡15号	古墳時代終末期	--
SAM19	堀穴建物跡16号	古墳時代終末期	--
SAM05	堀穴建物跡17号	古墳時代終末期	--
SAM06	堀穴建物跡18号	古墳時代終末期	--
SAM07	堀穴建物跡19号	古墳時代終末期	--
SAM22	堀穴建物跡20号	古墳時代終末期	--
S0011	堀立柱建物跡1号	古墳時代終末期	--
S0009	堀立柱建物跡2号	古墳時代終末期	--
S0013	堀立柱建物跡3号	古墳時代終末期	--
S0004	堀立柱建物跡4号	古墳時代終末期	--
S0006	堀立柱建物跡5号	古墳時代終末期	--
S0007	堀立柱建物跡6号	古墳時代終末期	--
S0014	堀立柱建物跡7号	古墳時代終末期	--
S0002	溝跡1号	古墳時代終末期	--
S0021	溝跡2号	古墳時代終末期	--
S0018	溝跡3号	古墳時代終末期	--
SC020	溝跡4号	古墳時代終末期	S0002 埋土中
SC021	溝跡4号	古墳時代終末期	S0002 埋土中
SC022	溝跡4号	古墳時代終末期	S0002 埋土中
SC002	溝跡4号	古墳時代終末期	S0002 埋土中
SC019	溝跡4号	古墳時代終末期	S0002 埋土中
SC011	溝跡4号	古墳時代終末期	S0002 埋土中
SC012	溝跡4号	古墳時代終末期	S0002 埋土中
SC013	溝跡4号	古墳時代終末期	S0002 埋土中
SC014	溝跡4号	古墳時代終末期	S0002 埋土中
SC015	溝跡4号	古墳時代終末期	S0002 埋土中
SC016	溝跡4号	古墳時代終末期	S0002 埋土中
SC017	溝跡4号	古墳時代終末期	S0002 埋土中
SC018	溝跡4号	古墳時代終末期	S0002 埋土中
S0053	埋土穴構穴跡1号	古墳時代終末期	S0021 埋土中
SC001	遺構集中区2	古墳時代終末期	--
S0001	堀立柱建物跡8号	古代	--
S0005	堀立柱建物跡9号	古代	--
S0003	堀立柱建物跡10号	古代	--
S0002	堀立柱建物跡11号	古代	--
S0010	堀立柱建物跡12号	古代	--
S0012	堀立柱建物跡13号	古代	--
S0015	堀立柱建物跡14号	古代	--
S0001	ヒツト列1号	古代	--
SC001	落上1号	古代	--
S0001	堀穴建物跡21号	中世	--
S0002	土坑墓1号	中世	--
S0028	溝跡1号	中世	--
S0027	溝跡1号	中世	--
S0002	ヒツト列2号	中世	--
S0009	溝跡4号	中世	--
S0004	溝跡2号	中世	--
S0006	溝跡2号	中世	--
S0007	溝跡2号	中世	--
S0008	溝跡2号	中世	--
S0014	溝跡5号	中世	--
S0020	溝跡6号	中世	--
S0013	溝跡7号	中世	--
S0015	溝跡8号	中世	--
S0019	溝跡8号	中世	--
S0016	溝跡9号	中世	--
S0017	溝跡9号	中世	--
S0011	溝跡10号	中世	--
S0010	溝跡11号	中世	--
SC003	日蓮寺1号	中世	S0010 埋土中
S0027	溝跡12号	中世	--
S0025	溝跡13号	中世	--
S0012	溝跡14号	中世	--
S0001	溝跡4号	中世	--
S0003	溝跡4号	中世	--
S0005	溝跡5号	中世	--
S0025	溝跡6号	中世	--

第四章 発掘調査の結果

第1節 縄文時代中期・後期の調査

1 調査の概要

本遺跡では、この時代の調査は予定していなかったが、Ⅱ層以下の無遺物層掘削中に落とし穴を検出したため、予定を変更して調査を実施した。調査の結果、B・D-29・30区、F-40区において落とし穴3基、土坑2基を検出した(第21図)。

遺物は春日式土器、丸尾式土器が、Ⅱc層を中心に出土した。ただし、出土量は少なく、古墳時代、古代の遺物と混在した状態であった。土器の出土地点は、34区以東に集中する傾向があり、落とし穴の分布とは異なる傾向がみられた。

2 遺構

(1) 落とし穴

落とし穴は、いずれも円形プランで深さが2mを超えるものがあり、概ね10～20m間隔で検出された。

本来の掘り込み面は、落とし穴1号の検出層位から、Ⅱc層であると推測される。調査の都合上、検出面が異なっているが、形態や埋土が共通していることから、ほぼ同時期に構築されたとみられる。時期は、御池火山灰を含むⅢ層上面で検出されていることや、霧島市上野原遺跡の落とし穴に類似していることから、縄文時代後期であると判断した。

落とし穴1号(第22図)

Ⅲ層上面で検出した。平面形は円形で、掘り方は上部が外側に開く形態である。

規模は、上端1.58m×1.64m、下端0.52m×0.64m、深さ2.2mを計る。逆茂木痕は確認されなかった。埋土はⅡc層からⅣ層をベースとする黒色土がレンズ状に堆積しており、自然埋没と判断される。

落とし穴2号(第22図)

Ⅵ層上面で検出した。平面形は円形で、掘り方は上部が外側に開く形態である。規模は上端1.1m×0.96m、下端0.55m、深さ1.9mを計る。逆茂木痕は確認されなかった。埋土はⅡc層からⅣ層をベースとする黒色土がレンズ状に堆積しており、自然埋没と判断される。

落とし穴3号(第22図)

V層上面で検出した。平面形は円形で、西端が削平されている。掘り方の上部は階段状に開く。規模は上端1.37m、下端0.52m×0.58m、深さ1.65mを計る。逆茂木痕は確認されなかった。埋土はⅡc層からⅣ層

をベースとする黒色土がレンズ状に堆積しており、自然埋没と判断される。

(2) 土坑

土坑1号(第22図)

V層の池田湖火山灰上面で検出した。平面は不正形に近く、壁面は階段状に掘られている。埋土の黒色砂質土は、Ⅲ層に含まれる灰白色パミスを多量に含む。レンズ状堆積であることから自然埋没と判断される。埋土の状況から縄文時代後期と判断した。

分布や形態、埋没状況が落とし穴に近く、製作途中で放棄された落とし穴の可能性もある。

土坑2号(第22図)

V層の池田湖火山灰上面で検出した。平面は円形に近く、埋土は2層に分かれる。土器小片2点が出土した。埋土の状況から縄文時代後期と判断した。

3 遺物

(1) 春日式土器(第23図1.2)

1はキャリバー状の口縁部である。口唇部に刻目、口縁部外面には横位の突帯文を1条巡らす。その下には、縦位の連続沈線文と斜位の突帯文を施す。内面調整は貝殻条痕である。2は直立する口縁部に刻目突帯文を巡らす。調整は、内外面貝殻条痕である。

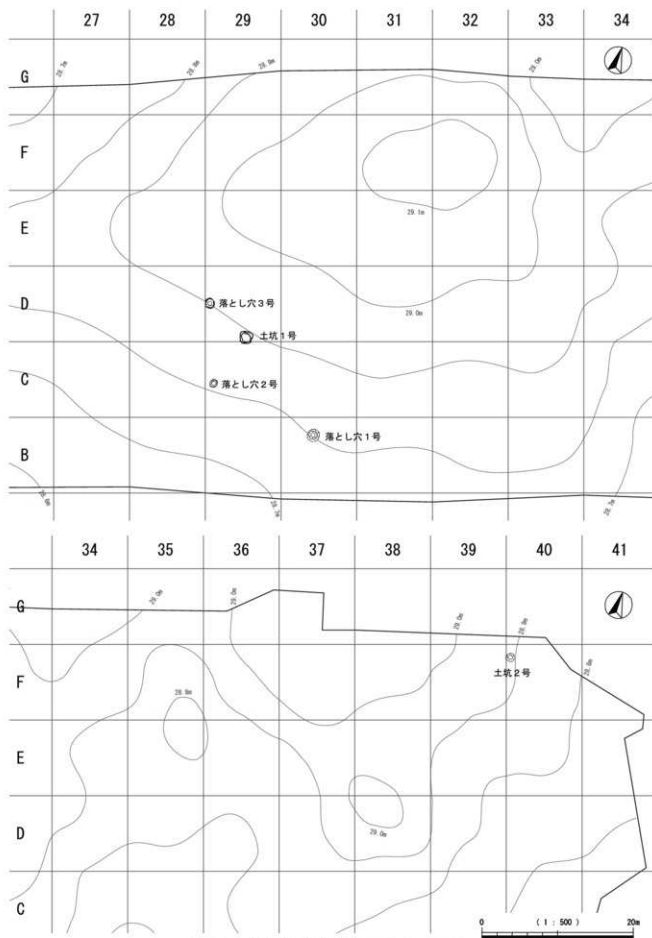
(2) 丸尾式土器(第23図3～19)

口縁部文様帯が、市来式土器に比べ薄いことから丸尾式土器と判断した。平口縁と波状口縁があり、胎土に黒雲母を含む個体が多い。

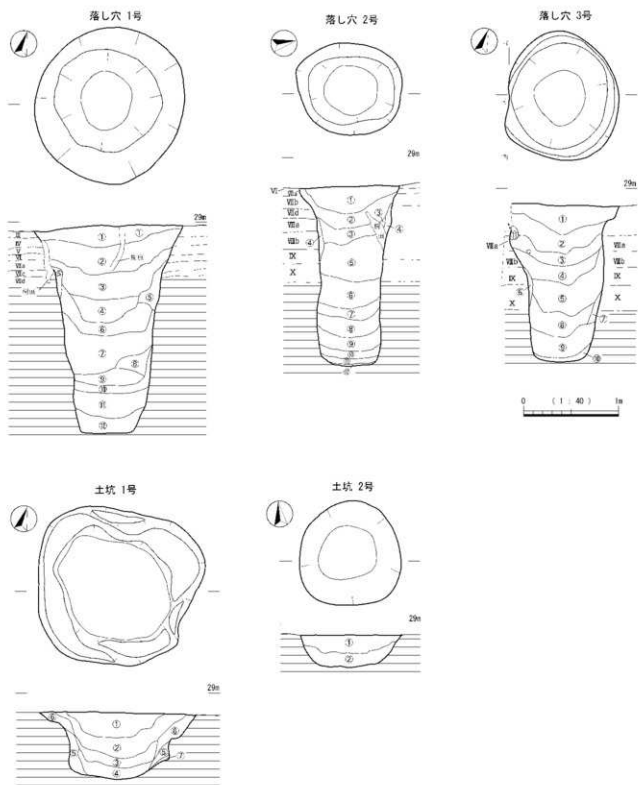
3, 4は口縁部が断面三角形を呈するもので、口縁部外面に円形刺突文、貝殻刺突文、沈線文を施す。4は口縁部に曲線状の沈線文を描いている。

5～18は口縁部がわずかに肥厚し、頸部との境に小さな隆起をもつものである。文様帯をはみ出して頸部まで施文されている。5, 6は同一個体である。貝殻刺突文、沈線文が口縁部から頸部にかけて密に施されている。黒雲母、白色砂粒を含む粗い胎土を使用している。7は太めの沈線文と刺突文、8は沈線文と貝殻刺突文を施す。

9～11は同一個体である。平口縁で、連続した刺突文を3列巡らす。施文具はヘラ状工具である。16は浅い貝殻刺突文が施されるが、文様構成は崩れ、形骸化の兆しがみられる。17は波状口縁で外面に貝殻刺突文を施す。18は波状口縁の無文土器である。19



第 21 図 縄文時代後期遺構配置図 (1/500)



第 22 図 縄文時代後期の遺構

第9表 縄文時代後期の遺構埋土注記

溝とし穴1号

層位	内 容
①	黒色土 (10YR1.7/1) II c層類似。締まりやや強い、粘性やや弱い、田層微量含む。
②	黒褐色土 (10YR2/2) III層類似。締まりやや強い、粘性やや弱い、白色粒少量含む、黄褐色粒微量含む。
③	黒褐色土 (10YR2/1) II c層とII層の混土。締まり、粘性やや強い、白色粒微量、黄褐色粒少量含む。
④	黒色土 (10YR2/1) 締まり、粘性やや強い、③と類似するが締まりが弱くII層の割合が多い。
⑤	黒色土 (10YR1.7/1) 締まりやや弱い、粘性やや強い、黄褐色粒多量含む、アカホヤブロックあり。
⑥	黒褐色土 (10YR2/2) 締まり弱い、粘性強い、黄褐色粒微量、池田軽石微量含む。
⑦	黒色土 (7.5YR2/1) II c層類似。締まり弱い、粘性強い、サツマブロック少量含む。
⑧	黒褐色土 (10YR2/2) II c層とX層の混土。締まり弱い、粘性強い、サツマ粒微量含む。
⑨	黒褐色土 (10YR2/3) II c層とX層の混土。締まり弱い、粘性強い、⑤に類似するがX層の割合が多い。
⑩	暗褐色土 (10YR3/4) X層類似。締まり弱い、粘性強い、サツマ粒微量含む。
⑪	黒褐色土 (10YR2/2) II c層類似。締まり弱い、粘性強い、暗褐色土 (X層) にサツマ粒少量含む。
⑫	褐色土 (10YR4/6) XIV層類似。締まり弱い、粘性強い、黒色土 (II c層) 少量含む。

溝とし穴2号

層位	内 容
①	黒色土 (10YR1.7/1) 褐色、灰白色パミスを多量含む、褐色パミスを微量含む。
②	黒色土 (10YR1.7/1) 色調は①層に比べ黒い、含有物は①層同様に褐色、灰白色パミスを多量含む、褐色パミスを少量含む。
③	黒色土 (10YR1.7/1) 粘性、締まり有り。色調は②層に比べ黒い、褐色、灰白色パミスを中量含む、褐色パミスを微量含む。
④	黒色土 (10YR1.7/1) 色調は①層に似る。締まり、粘性は有り。褐色、灰白色パミスを多量含む、褐色パミスを微量含む。
⑤	黒色土 (10YR1.7/1) 色調は②層に似る。締まりは強く粘性有り。褐色、灰白色パミスを中量含む、褐色パミスを微量含む。
⑥	黒色土 (10YR1.7/1) 色調は全層の中で最も黒い。締まり粘性は有るが③層に比べやや劣る。褐色、灰白色パミスを多量含む、褐色パミスを少量含む。
⑦	黒色土 (10YR1.7/1) ⑥層に似るが色調はわずかに明るい。締まり粘性は弱い。褐色パミスを多量に含む。
⑧	黒色土 (10YR1.7/1) 上層の黒色土とX層との混土。色調は全層の中で最も明るい。締まりはまったくないが粘性は有る。褐色、灰白色パミスを少量含む。
⑨	小礫混 褐色粘質土 (7.5YR4/3) 締まりなし。粘性有り。X II～XVI層相当の混土層。
⑩	小礫を少量含む褐色粘質土 (7.5YR4/3) 締まりやや有り。粘り強い。X II～XIII層起源の埋土か。
⑪	黒色土 (5YR1.7/1) 締まりなし。粘りあり。X II～XIII層土を少量含む黒色土。締まりなくやわらかい。II～IV層起源の黒色土とX II～XIII層相当の黒色土の混土層。
⑫	砂粒を多く含む粘質土 (7.5YR4/4) 締まりなし。粘り有り。XIV～XVI層相当の埋土で床面付近に薄く堆積する。

溝とし穴3号

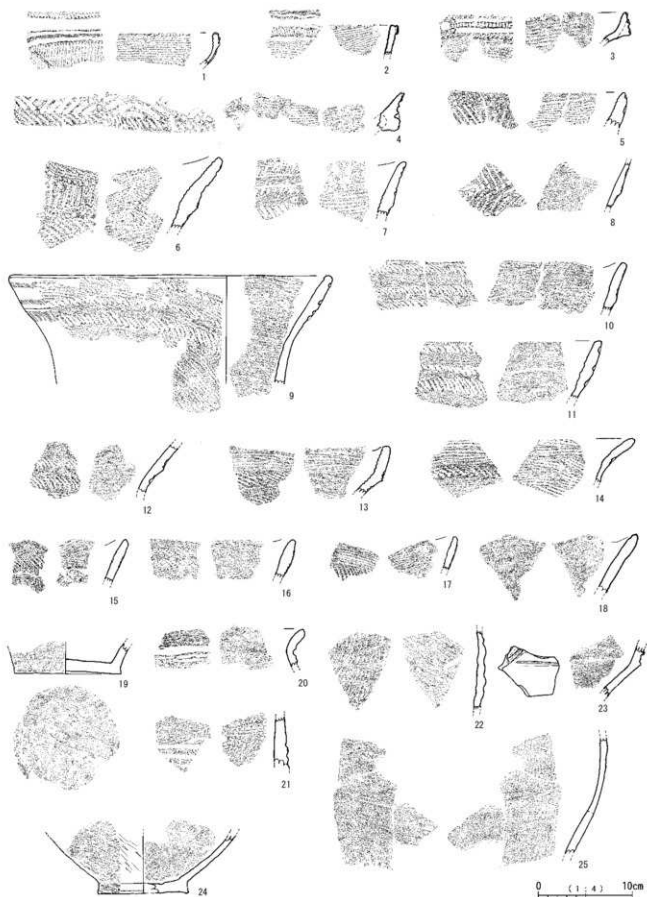
層位	内 容
①	黒色土 (10YR1.7/1) 締まり・粘性はやや強い。褐色、灰白色パミスを多量、褐色パミス (池田) を微量含む。
②	黒色土 (10YR1.7/1) 色調は①層に比べやや黒い。含有物は①層同様に褐色、灰白色パミスを多量、褐色パミスを微量含む。
③	黒色土 (10YR1.7/1) 色調は②層に比べわずかに黒い。含有物は②層同様に褐色、灰白色パミスを多量、褐色パミスを微量含む。
④	黒色土 (10YR1.7/1) 締まりは強く粘性も有り。色調は③層に比べわずかに黒い。含有物は褐色、灰白色パミスを中量、褐色パミスを微量含む。
⑤	黒色土 (10YR1.7/1) 締まり・粘性共に有るが、④層に比べ締まりはやや劣る。色調は②層に似る。含有物は褐色、灰白色パミスを中量、褐色パミスを微量含む。
⑥	黒色土 (7.5YR1.7/1) 締まりは弱く粘性もやや弱い。含有物はX層のサツマ層の粒子を多量、褐色、灰白色パミスを中量含む。
⑦	黒色土 (7.5YR1.7/1) 締まり・粘性は⑥層に似るが締まりはやや劣る。含有物は⑥層同様にX層のサツマ層の粒子を多量含む。褐色、灰白色パミスを中量含む。
⑧	黒色土 (10YR1.7/1) 色調は③層に似る。含有物は褐色、灰白色パミスを多量、褐色スコリアを微量含む。
⑨	黒色土 (7.5YR1.7/1) 締まり・粘性はやや弱い。含有物は褐色、灰白色パミスを多量、X層のサツマ層の粒子・ブロックを中量含む。褐色パミスを微量含む。
⑩	褐色土 (7.5YR4/3) XIV層主体の混土層。やや粘性の弱い土で、粘りの弱い少量の黒色土 (⑤) を粒状に含む。
⑪	埋層ブロック

土坑1号

層位	内 容
①	黒褐色土 (10YR2/1) 締まりは強く粘性も有り。褐色、灰白色パミスを多量 (田層相当)、褐色パミスを少量含む。
②	黒色土 (7.5YR1.7/1) 色調は①層に比べわずかに黒い。土質・含有物共に①層に似るが褐色、灰白色パミスは中量である。
③	黒色土 (10YR1.7/1) 土質は②層同様に色調はさらに黒くなる。褐色・灰白色パミスを中量含む。
④	黒褐色土 (10YR2/1) 締まりは強く粘性も有り。色調は①層に似る。褐色、灰白色パミスを少量含む。
⑤	黒褐色土 (10YR2/1) 締まりは強く粘性も有り。褐色、灰白色パミスを多量に含む。褐色パミスを微量含む。
⑥	黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは強く粘性も有り。褐色、灰白色パミスを多量に含む。褐色パミスを微量含む。
⑦	黒色土 (10YR1.7/1) 締まりは強く粘性も有り。褐色・灰白色パミスを微量含む。

土坑2号

層位	内 容
①	黒褐色土 (10YR3/1) 粘性、締まり有り。池田パミスを少量含む。
②	黒色土 (7.5YR3/2) 粘性、締まり有り。池田パミスを少量含む。



第 23 図 縄文時代中期・後期の出土遺物

は平底で、内外面ナデ調整が施される。

(3) 型式不明土器 (第 23 図 20～25)

小片のため、型式名が特定できなかった土器をまとめて報告する。20 は口縁部が外反し、頭部に 1 条の凹線文を施す。外面は摩耗している。21 は胴部片で、

3 条の凹線文が残っている。22 は外面を条痕で調整した後、太く浅い凹線文を施す。宮之迫 1 式土器の可能性はある。23 は浅鉢の胴部屈曲部である。斜位の突帯文と横位の沈線文が残っている。

24 は深鉢の平底で、外面に煤が付着している。25 は深鉢の胴部である。

第 10 表 縄文土器観察表

種図番号	番号	出土地点	器種	型式	文様	色調	調整	胎土	備考
23	1	F-30 II c	深鉢	春日式	刻目文、貼付突帯文、沈線文	褐色	貝殻条痕	角閃石多	
	2	一括①	深鉢	春日式	刻目突帯文	にぶい褐色	貝殻条痕	角閃石少、長石、石英	
	3	B-34 II b	深鉢	丸尾式	貝殻刺突文、沈線文、刺突文	褐色、にぶい黄色	ナデ、貝殻条痕	角閃石、石英、白色砂	
	4	B-37 II c、C-38 II c、D-38 II c	深鉢	丸尾式	刺突文、沈線文、貝殻刺突文	褐色	貝殻条痕	長石、雲母、赤色砂多	
	5	G-30	深鉢	丸尾式	貝殻刺突文、沈線文	褐色	ナデ、貝殻条痕	長石、雲母少、赤色砂多	
	6	F-34 II c	深鉢	丸尾式	貝殻刺突文、沈線文、刺突文	褐色	貝殻条痕	石英、雲母、白色砂	
	7	C-38 II e	深鉢	丸尾式	沈線文、刺突文	にぶい褐色	ナデ、貝殻条痕	長石、雲母、赤色砂多、白色砂	
	8	B-39 II c	深鉢	丸尾式	沈線文、刺突文、貝殻刺突文	褐色	ナデ	角閃石、石英、白色砂多	
	9	B-38 II c、C-37 II b F	深鉢	丸尾式	刺突文	赤褐色	貝殻条痕、荒いナデ	長石、石英、雲母、白色砂多	10、11 と同一個体
	10	B-39 II c、C-39 II b F	深鉢	丸尾式	刺突文	にぶい褐色	横ナデ、ナデ、ケズリ	雲母、赤色砂多、白色砂	
	11	C-37 II b F	深鉢	丸尾式	刺突文	褐色、赤褐色	ケズリ後ナデ	石英、雲母、白色砂多	
	12	C-38 II c F	深鉢	丸尾式	刺突文	褐色	ナデ	長石、雲母、白色砂	
	13	A-32 II b	深鉢	丸尾式	貝殻刺突文	褐色	貝殻条痕、ナデ	長石、石英	
	14	C-38 II c	深鉢	丸尾式	貝殻刺突文	にぶい赤褐色	貝殻条痕	石英、白色砂多	
	15	C-38 II e	深鉢	丸尾式	貝殻刺突文	褐色、にぶい褐色	ナデ、条痕	角閃石、長石、雲母少	
	16	D-37 II e	深鉢	丸尾式	貝殻刺突文	にぶい褐色	ナデ	長石、雲母、白色砂多	
	17	C-38 II c	深鉢	丸尾式	貝殻刺突文	褐色	ナデ、貝殻条痕	角閃石少、石英	
	18	E-33	深鉢	丸尾式	-	明褐色、褐色	ナデ	長石多、雲母、白色砂	
	19	SD179 I	深鉢	丸尾式	-	褐色	ナデ	角閃石、石英、白色砂	
	20	E-32 II c F	深鉢	-	凹線文	褐色	ナデ	石英、白色砂多	外面煤付着
	21	F-29、SM13 ①	深鉢	-	凹線文	にぶい褐色	ナデ	角閃石、石英	
	22	E-29 II c	深鉢	宮之迫 I 式か	凹線文	にぶい赤褐色	条痕、ケズリ後ナデ	角閃石少、石英	条痕後凹線文を施す
	23	C-34 II b	浅鉢	-	-	赤褐色	ナデ	角閃石、石英、白色砂	
	24	C-34 II b	深鉢	-	-	褐色	ケズリ後ナデ、ナデ	長石、石英、白色砂多	外面煤付着
	25	F-29 II b F	深鉢	-	-	赤褐色	ナデ、条痕	角閃石、石英、白色砂	

- は計測不能

第2節 縄文時代晩期末～弥生時代中期の調査

1 調査の概要

縄文時代晩期末～弥生時代中期の遺構・遺物は、B～D-16～35区で検出された。検出された遺構・遺物は、弥生時代中期の竪穴建物跡1軒、刻目突帯文土器、入来I式、山ノ口I・II式などである。

竪穴建物跡の周囲は、IV層まで削平されており、遺物包含層であるIIb層は残存していなかった。遺物は、遺構から離れたB～D-19区とB～D-27～35区の2か所で散在して出土している。

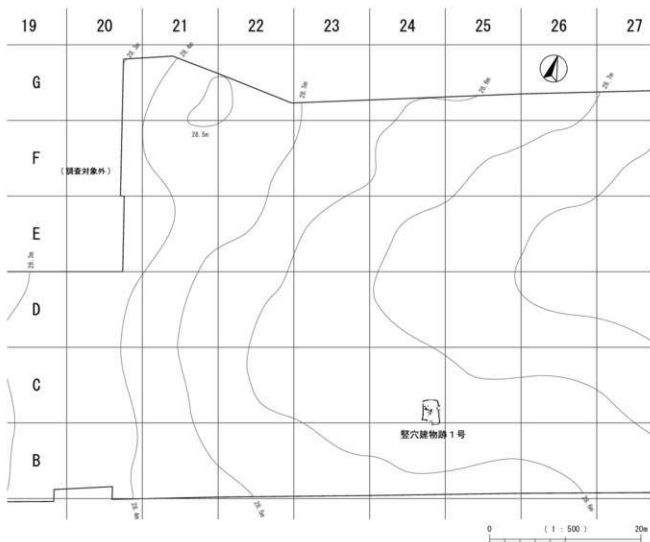
土器の中には、縄文時代から弥生時代への移行期に相当する資料があるため、時代を横断した時期区分として報告する。

2 遺構

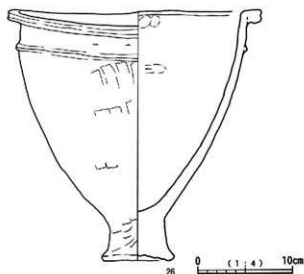
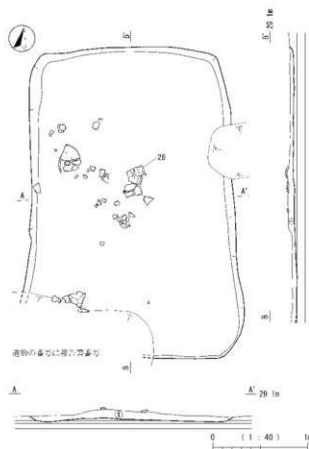
竪穴建物跡1号（第25図）

C-24区で検出された。重機で表土を除去したところ、甕形土器が出土したため、遺構精査を行った。竪穴の掘り込み面はIIb層と考えられるが、遺構検出面はIV層である。竪穴は、攪乱によって一部壊されているが、平面プランが長方形で、規模が3.3m×2.14m、深さが約4cmである。上部が削平され床面付近が残った状態であり、本来の規模・形態は不明である。柱穴は確認されなかった。埋土は黒色土で、御池火山灰を多く含んでいた。

出土遺物は、完形に近い甕形土器が、床面から5cm程度浮いた位置で出土した。住居内で出土した土器片は、この甕形土器1個体である。土器は山ノ口I式であり、弥生時代中期中頃の竪穴建物跡である。



第24図 弥生時代中期遺構配置図（1/500）



埋土
① 黒色砂質土 (10YR2/1) 粘性、しまりやや有り。
黄色バミスを多量に含む。

第25図 竪穴建物跡1号及び出土遺物

出土遺物

26は、口径26.8cm、底径7.7cm、器高26.5cmの甕形土器である。胴部を3分の1程度欠いているが、完形品に近い。部厚い口縁が、L字状に曲がり、口唇部は浅く窪んでいる。胴部に1条の突帯文を巡らし、底部は浅い上げ底の充実脚台となる。内外面ナデ調整で、上胴部には工具痕が所々に残り、外面に煤が付着している。口縁部の歪みが大きく、砂粒の多い胎土を使用している。山ノ口I式と考えられる。土器附着炭化物の年代は、2190 ± 20BPである。

3 遺物 (第26図)

(1) 縄文時代晩期末～弥生時代前期前半

27～32は甕形土器である。

27, 28は同一個体である。27は厚みのある口縁部が、短く直立する。外面はナデ調整、内面はミガキ調整である。28は屈曲する胴部片である。内外面ミガキ調整である。

29, 30, 32は刻目突帯文をもつ甕形土器である。口縁部と屈曲する胴部に刻目突帯文を添付している。口縁部の刻目突帯文は、口唇部から少し離れた位置に施している。突帯は小さく、刻目は爪やヘラ状工具による深い刺突刻目である。条痕やケズリの後、ナデ調整を行うために、器面は平滑となる。31は、口唇部

下端に浅い刻目を施す。甕形土器に分類したが、内外面ミガキ調整であることから、浅鉢の可能性もある。

33～36は浅鉢である。33は復元口径27.6cmで、口縁部外面と頸部の付け根に、ヘラ描き沈線文を施す。34は波状口縁を呈する浅鉢で、口縁部外面に突帯文を1条施している。外面に煤の付着がみられる。35は、外面にミガキ調整、内面にケズリを施す。36は薄い平底で内面に煤が付着している。

27, 28は縄文時代晩期末の末添式に近く、29, 30, 32は弥生時代前期前半の甕形土器である。浅鉢は、縄文系の形態であるが、27～32と共伴する可能性があるため一括して報告した。

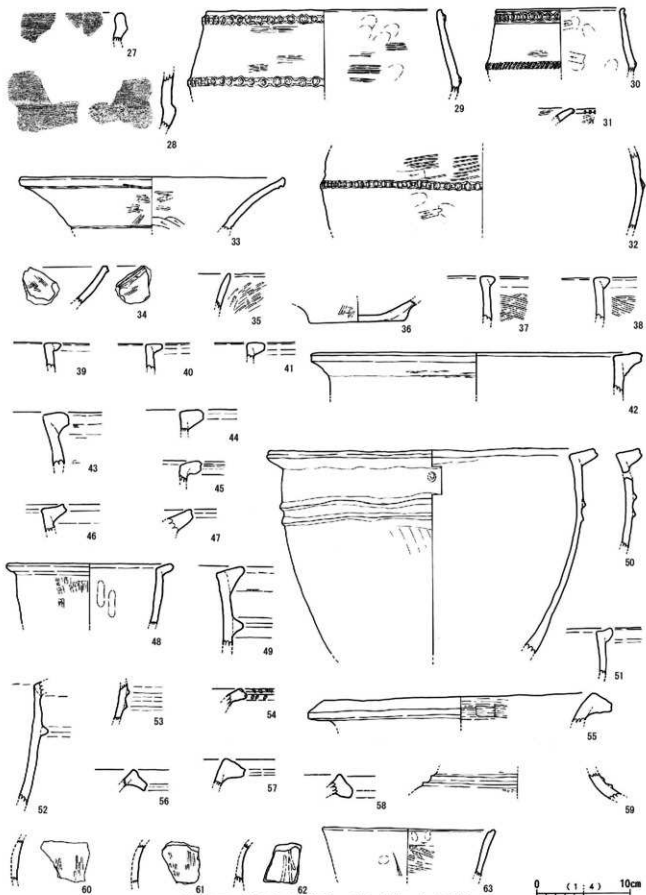
(2) 弥生時代中期

37～53は甕形土器である。

37～41は、突帯が口縁部と一体化し平坦口縁を形成する。口唇部は無文で、外面にはハケ目、ナデ調整を施す。入来I式と考えられる。

42～45は、厚みのある口縁部がやや上向きに取り付けられている。口唇部には浅い窪みを施し、調整はナデ調整である。山ノ口I式と考えられる。

46, 47, 48, 50は、口縁部がくの字状を呈する甕形土器である。口縁断面は、台形状で口唇部が浅く窪み、調整はナデ、ハケ目調整である。48は口縁が薄く、



第 26 図 縄文時代晩期末～弥生中期の出土遺物

L字状に折れ曲がっている。50は復元口径34.4cmで、焼成後に外側から穿孔を1か所施している。49は大甕の口縁部である。46～50は山ノ口Ⅱ式と考えられる。

51は、短い口縁部が上向きに取り付けられ、口縁部上面が浅く凹む。外面には煤が付着している。口縁部の特徴から黒髪文の影響を受けた甕形土器と考えられる。胎土は、他の土器と同じである。

52、53は山ノ口Ⅱ式の甕形土器の胴部片である。54～62は甕形土器である。54は口唇部中央に沈線を描き、その上下に刻目を施す。弥生前期末～中期初頭頃ではないかと推察される。

55～58は口縁部がへらの字状に下垂する口縁部で、59はその頸部と考えられる。口唇部は平坦で、中央が浅く凹んでいる。59は2条の突帯文が頸部の付け根に巡る。山ノ口Ⅰ・Ⅱ式の甕形土器と考えられる。

60～62は、壺の頸部片と考えられる。内面が剥落しているため正確な器厚は不明である。外面が丹塗りであり、須玖式の可能性がある。

63は鉢形土器である。復元口径18.4cmで、胴部外面に縦方向のヘラ描き沈線が1条残っている。薄く丁寧な作りである。

第11表 弥生土器観察表

() は復元口径・径

标本番号	発出地点	器種	型式	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整	色調	胎土	備考	
25	26	惣穴1号、22、㊶	甕	山ノ口Ⅰ式	26.8	7.7	26.5	(外) ナズ (内) ナズ	褐色、にぶい褐色	長石、雲母、赤色・白色砂粒	突帯文1条、煤付着
27	F-31, 1598, II c F	甕	竪溝式	—	—	—	(外) ナズ (内) ナズ	褐色	石英、白色砂、赤色砂	27と同一個体	
28	C-33, 41956, II c	甕	竪溝式	—	—	—	(外) ナズ (内) ナズ	にぶい褐色	角閃石、長石、石英、白色砂(多)	27と同一個体	
29	B-37, 41166, II b	甕	刻目突帯文 土器	(23)	—	—	(外) ナズ (内) 垂直、指押後ナズ	赤褐色	角閃石、長石、石英、白色砂		
30	B-32, 42867, II b F	甕	刻目突帯文 土器	(13.6)	—	—	(外) ナズ (内) ナズ	赤褐色	角閃石、長石、石英、白色砂		
31	B-26, 19428, II b F	甕	刻目突帯文 土器	—	—	—	(外) 刻目文、ミガキ (内) ミガキ	暗褐色	角閃石、石英		
32	B-26, 19499, II b F	甕	刻目突帯文 土器	—	—	—	(外) 貝殻条痕、ケズリ、指押し (内) ナズ	赤褐色	角閃石、長石、石英、白色砂		
33	30136	浅鉢	—	(27.6)	—	—	ケズリ、ミガキ	明褐色	雲母少、白色砂粒	沈線文	
34	E-34, 1017, II b F	浅鉢	—	—	—	—	(外) 沈線、ミガキ、スズ付着 (内) ミガキ	褐色	長石、雲母(少)、白色砂	煤付着、波状口縁、突帯文1条	
35	B-26, 19398, II b	浅鉢	—	(14.2)	—	—	(外) ミガキ (内) ケズリ後ナズ	にぶい褐色	角閃石、長石、石英、白色砂		
36	B-35, 41572, II b	浅鉢	—	(19.8)	—	—	(外) ミガキ (内) ナズ、煤付着	褐色	角閃石、長石、白色砂	煤付着	
37	D-34, 41408, II b	甕	大甕Ⅰ式か	—	—	—	(外) ハケメ (内) ナズ	明赤褐色	長石、雲母		
38	E-33, 表土一汚	甕	大甕Ⅰ式か	—	—	—	(外) ハケメ (内) ナズ	明赤褐色	雲母、長石(多)、石英		
39	B-33, 紙カケラシ	甕	大甕Ⅰ式か	—	—	—	ナズ	褐色、黒褐色	雲母、長石、白色・赤色砂		
40	F-11, 72, II	甕	大甕Ⅰ式か	—	—	—	ナズ	褐色、長石	雲母、長石		
41	F11, 76, II	甕	大甕Ⅰ式か	—	—	—	ナズ	にぶい褐色	雲母、長石		
42	D-17, 36714, II b	甕	山ノ口Ⅰ式	(35.5)	—	—	ナズ	にぶい赤褐色	雲母、長石、石英		
43	D-17, 36718, II b	甕	山ノ口Ⅰ式	—	—	—	ナズ	赤褐色、にぶい赤褐色	雲母、石英、白色砂		
44	B-19, 38141, II b	甕	山ノ口Ⅰ式	—	—	—	ナズ	褐色	長石、石英、白色砂		
45	B-19, 38140, II b	甕	山ノ口Ⅰ式	—	—	—	ナズ	にぶい褐色	雲母、長石、白色砂		
46	B-16, 36534, II b	甕	山ノ口Ⅱ式	—	—	—	ナズ	明赤褐色	雲母、長石		
47	C-36, 紙カケラシ	甕	山ノ口Ⅱ式	—	—	—	ナズ	褐色	雲母、長石、石英、白色砂		
48	D-17, 36707, II b	甕	山ノ口Ⅱ式	(17)	—	—	(外) ハケメ、ナズ (内) ナズ	にぶい褐色	長石、白色砂、赤色砂(少)		
49	D-17, 36704, II b	大甕	山ノ口Ⅱ式	—	—	—	ナズ	褐色	雲母、長石、白色砂、赤色砂	突帯文	
50	惣穴1号、4、㊶	甕	山ノ口Ⅱ式	(34.4)	—	—	(外) ハケメ後ナズ (内) ナズ	黒褐色、褐色	雲母、角閃石、長石	三角突帯文2条、穿孔あり、煤付着	
51	B-17, 36373, II b	甕	黒髪式	—	—	—	ナズ	明赤褐色、にぶい赤褐色	雲母、長石、白色砂(多)	煤付着	
52	D-16, 36537, II b	甕	山ノ口Ⅱ式	—	—	—	ナズ	にぶい黄褐色	雲母、長石、白色砂	三角突帯文1条	
53	B-19, 38152, II b	甕	山ノ口Ⅱ式	—	—	—	ナズ	にぶい褐色	石英、白色砂、赤色砂	三角突帯文2条	
54	惣穴6号、一掃、㊶	甕	山ノ口Ⅰ式	—	—	—	(外) ナズ、ミガキ (内) ナズ	にぶい赤褐色	角閃石、長石、石英	沈線文	
55	D-17, 36698, II b	甕	山ノ口Ⅱ式	(32.0)	—	—	(外) ナズ (内) ハケメ	にぶい赤褐色	雲母、長石		
56	C-18, 38134, II b	甕	山ノ口Ⅱ式	—	—	—	ナズ	褐色	雲母、長石、白色砂		
57	C-18, 38133, II b	甕	山ノ口Ⅱ式	—	—	—	ナズ	明赤褐色	雲母、長石、白色砂		
58	D-18, 38127, II b	甕	山ノ口Ⅱ式	—	—	—	ナズ	褐色	雲母、長石、白色砂		
59	惣穴1号、14、㊶	甕	山ノ口Ⅱ式	—	—	—	ナズ	明赤褐色	雲母、角閃石、長石、白色砂	三角突帯文2条	
60	C-27, 19381, II b F	甕	須玖式	—	—	—	ミガキ	にぶい赤褐色	角閃石、石英、白砂粒	丹塗り	
61	C-27, 19378, II b	甕	須玖式	—	—	—	ミガキ	明赤褐色	角閃石、石英、白砂粒	丹塗り	
62	D-27, 19380, II b	甕	須玖式	—	—	—	ミガキ	明赤褐色	角閃石、石英、白砂粒	丹塗り	
63	C-36, 39255, II b	鉢	山ノ口Ⅱ式	(18.4)	—	—	(外) 指押さへ、ナズ (内) ハケメ後ナズ	明赤褐色	角閃石、長石、石英		

- は計測不能

第3節 弥生時代終末期から古墳時代前期の調査

1 調査の概要

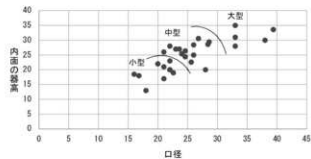
弥生時代終末～古墳時代前期の遺構・遺物は、G～B-26～41区、B-13区で検出された。検出された遺構は、竪穴建物跡10軒、土坑2基、遺物集中区1か所である。多くの竪穴建物跡はⅢ層上面で検出したが、本来の掘り込み面はⅡc層付近と想定される。7軒の竪穴建物跡では、炭化材や焼土跡が検出されており、焼失竪穴建物跡と考えられる。

遺物は、土器、礫石器、砥石、軽石製品、鉄鏝が出土した。遺物は、包含層が削平されているため、多くが遺構内で出土し、中には祭祀に使用されたと考えられる土器や軽石製品が含まれている。焼失竪穴建物跡の遺物は、住居廃絶に伴う祭祀行為によって廃棄された可能性が高く、一括性の高い資料である。

出土遺物は遺構単位で報告するが、遺構内に土器溜りが形成されている場合は、土器溜りと埋土内の遺物を分けて報告する。甕形土器については、口径と胴部内面器高の法量差から、小型、中型、大型に分類して報告する(第27図、第12表)。

第12表 甕形土器の分類基準

小型品	口径18～22cm, 器高13～23cm
中型品	口径22～30cm, 器高20～30cm
大型品	口径33～40cm, 器高28～40cm



第27図 甕形土器法量図

2 遺構

(1) 竪穴建物跡2号(第29, 30図)

① 検出区・検出層位

G・F-34・35区, Ⅲ層上面

② 規模・形態

表土直下で検出され、平面形が5.35m×4.9mの方形を呈する。調査時には気づかなかったが、整理作業時に土層断面の再検討を行ったところ、④層が貼床、⑤～⑦層がベット状遺構の盛土の可能性があり、内部構造は2段のベット状になると推測される(第29図

上)。柱穴は、地山上面で3基検出したが、本来は貼床から掘り込まれていたと考えられる。

③ 埋土・遺物出土状況

埋土は①～⑦層に分層した。①～③層が自然埋没土で、④層が貼床、⑤～⑦層がベット状遺構の盛土と考えている。

遺物は、甕形土器や礫石が、③層から多量に出土した。土器は完形品が多く、貼床近くに水平堆積していることから、住居廃絶時に廃棄されたと考えられる。また、少量の炭化材が土器に混じって出土した。

④ 性格

竪穴の規模や構造、出土遺物から竪穴住居跡と判断される。

⑤ 出土遺物(第31, 32図)

土器は竪穴廃絶時に近い③層の出土である。

甕形土器(64～73)

64は大型品である。口縁部は、く字状に折れ曲がり、上胴部が弱く張り出す。底部は平底となる。内外面に細かいハケ目を施す。胴部外面には、焼成時に生じたと思われる亀裂が多数残っている。

65～67, 70は中型品である。口縁部がく字状に折れ曲がり、上胴部が弱く張り出す。底部は低脚が多く、内外面にハケ目調整を施す。65は口縁が直立し、頸部に刻目突帯文を巡らす。刻目は、深い布目刻目である。よく使い込まれており、胴部内外面に剥離、摩耗している。66は口縁部外面に、ハケ目を重ねて施す。内外面に煤が付着している。67, 68は、胴部外面にケズリ状の強いハケ目を施す。

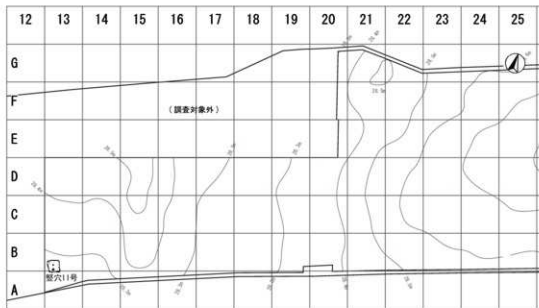
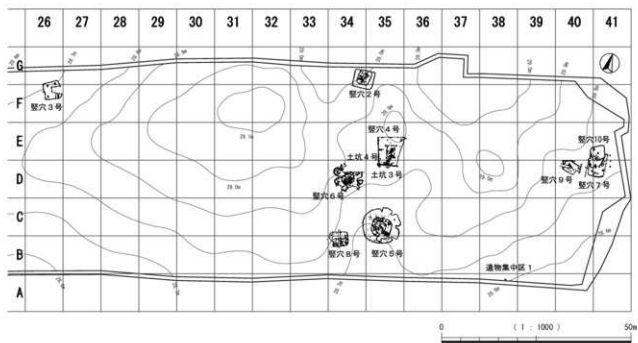
71, 72は小型品である。71は胴部の張り出しが弱く、底部は低脚となる。内外面に細かいハケ目調整を施すが、下胴部外面は二次焼成により調整が消えている。72は内外面にハケ目を密に施す。胴部外面は二次焼成により剥落している。

73は丸底で鉢に近い器形であるが、煮沸具として使用されているため、甕形土器に分類した。二次焼成による器面の剥離が胴部に連続してみられ、剥離後も使用され続けている。全面に煤が付着し、内外面にハケ目調整を施す。胎土に小石を多量に含む。

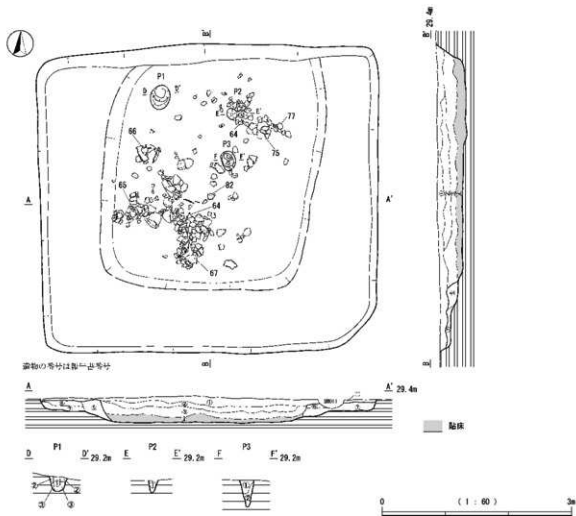
壺形土器(74～76, 79)

74は大型品で、胴部は球形に近いと推測される。薄手の作りで、内外面にハケ目調整を施す。下胴部に煤が付着している。

75, 76は胴部が縦長の楕円形で、底部は平底となる。75は厚手の作りで、外面に煤が付着している。76は薄手で、胎土は泥質土を使用している。79は大型壺の底部である。底部は小さな平底で、煤が付着している。外面に粗いハケ目を施す。



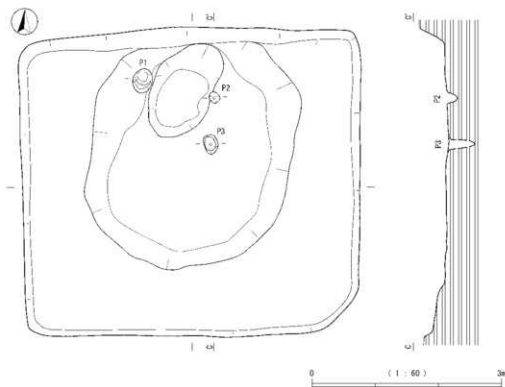
第 28 図 弥生時代末～古墳時代前期遺構配置図 (1 / 1000)



埋土

- ① 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 粘性弱い、しまりやや有り。池田降下軽石を極微量含む。トレンチャーによって攪乱されている。
 - ② 黒褐色砂質土 (10YR3/2) 粘性弱い、しまりやや有り。池田降下軽石、アカホヤブロックを微量含む。
 - ③ 黒褐色砂質土 (10YR3/2) 粘性弱い、しまりやや有り。池田降下軽石、アカホヤブロックを少量含む。多量の土部を包含する。
 - ④ 黒褐色砂質土 (10YR2/2) 粘床。粘性やや有り、しまり有り。池田降下軽石少量、VI層ブロックとアカホヤブロックを中量含む。
 - ⑤ 黒褐色砂質土 (10YR3/2) 硬土。粘性弱い、しまり有り。池田降下軽石、アカホヤブロック極微量含む。
 - ⑥ 黒褐色砂質土 (10YR2/2) 硬土。粘性弱い、しまり有り。池田降下軽石、淡黄色ハミス微量含む。
 - ⑦ 黒色砂質土 (10YR2/1) 硬土。粘性やや有り、しまり有り。池田降下軽石極微量含む。
- P 1
- ① 黒褐色砂質土 (10YR2/2) 柱痕跡。粘性やや有り、しまり有り。褐色粒を微量含む。
 - ② 黒褐色砂質土 (10YR2/2) 柱掘方埋土。粘性やや有り、しまり有り。アカホヤブロックを少量含む。
 - ③ 黒色砂質土 (10YR2/1) 柱掘方埋土。粘性やや有り、しまり有り。アカホヤブロックを微量含む。
- P 2・3
- ① 黒色砂質土 (10YR2/1) 粘性やや有り、しまり有り。アカホヤブロックを微量含む。
 - ② 黒色砂質土 (10YR2/1) 粘性やや有り、しまり有り。アカホヤブロックを極微量含む。

第 29 図 竪穴建物跡 2 号 貼床上面遺物出土状況



第30図 竪穴建物跡2号完掘状況

鉢形土器 (77, 78)

77, 78は小型品である。77はコップ状の深い器形を呈し、底部が浅い上げ底となる。内外面ナデ調整を施す。78は器壁が薄く、内外面にハケ目調整を施す。内面に煤が付着している。

高坏 (80)

80は深い坏部を有する高坏である。口縁部が外反しながら直立気味に立ち上がる。口縁部外面には幅広くストロークの長いミガキを施している。

敲石 (81)

81は細長い棒状礫を素材とし、上下端部に敲打痕が残っている。

砥石 (82, 83)

82, 83は正面に砥面を形成している。砥面には錆が随所に見られ、鉄製品を研磨したものと考えられる。

(2) 竪穴建物跡3号 (第33図)

① 検出区・検出層位

G・F-26区, III層上面

② 規模・形態

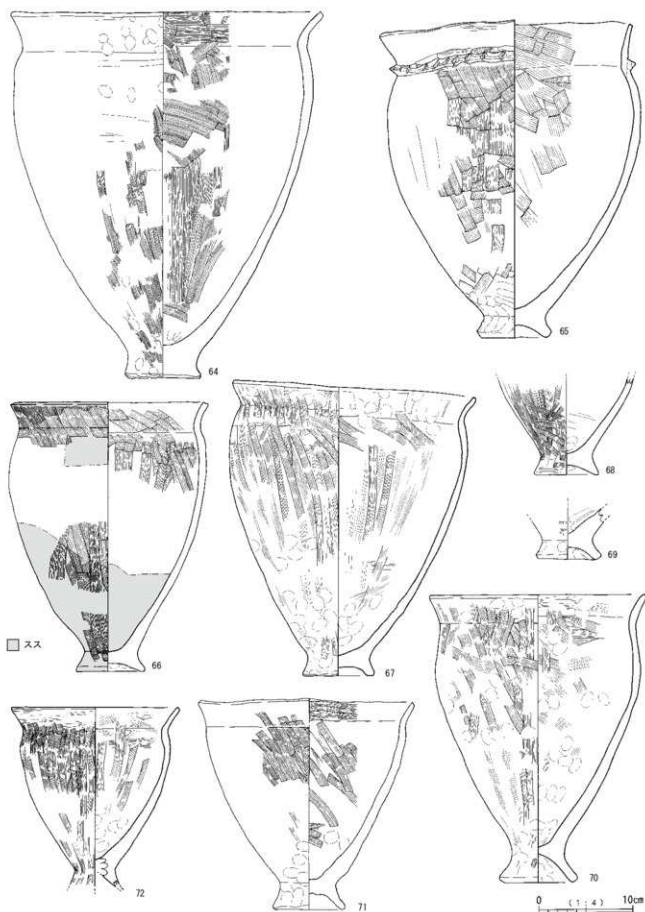
平面形が4.45m×4.53mの方形を呈する。竪穴の一部は、先行トレンチと攪乱によって切られている。柱穴や焼土跡が⑥・⑦層上面で検出されたため、この層を貼床と判断した。検出された柱穴は4基で、P1, P2では柱痕跡が確認された(第33図上)。

貼床を除去した後、浅い方形の掘り込みと柱穴2基を検出した(第33図下)。柱穴と貼床の変遷から、2段階で2本柱の建物跡から4本柱の建物跡へと建て替えが行われている。

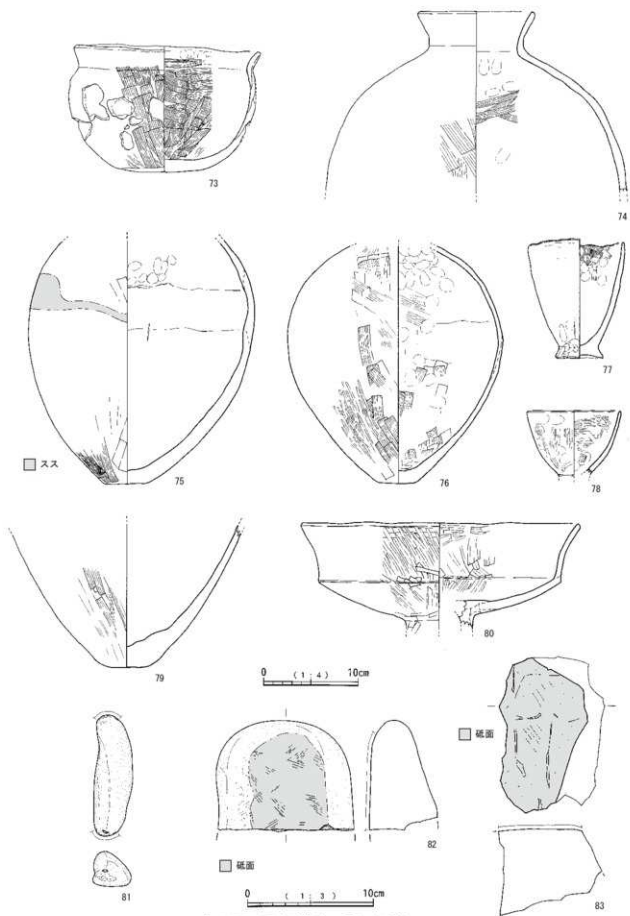
③ 埋土・遺物出土状況

埋土は①～⑩層に分層した。①～⑤層が自然埋没土で、⑥, ⑦層が貼床、⑧～⑩層が建て替えに伴う埋め土である。貼床上面では、焼土層が竪穴の北部から西側にかけてブロック状に検出され、焼土層上位では炭化材が出土した。

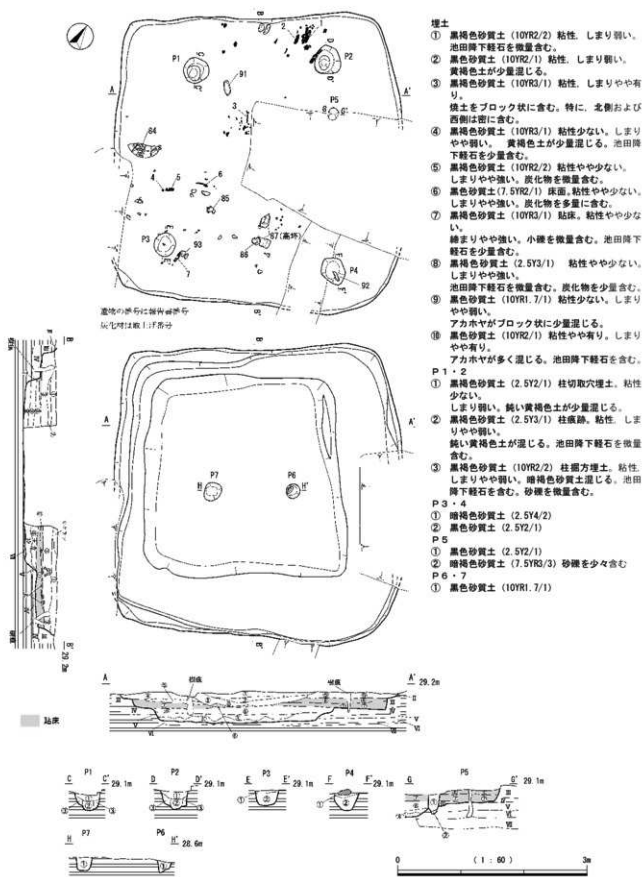
遺物は、高坏や敲石が焼土層上位で出土している。これらは、焼却行為が行われた後、廃棄された可能性がある。貼床の下層では、遺物や炭化材の出土は認められなかった。



第31図 竪穴建物跡2号出土遺物1



第 32 図 竪穴建物跡 2 号出土遺物 2



第 33 図 竪穴建物跡 3 号遺物出土状況及び完掘状況

④ 性格

建物構造や出土遺物、炭化材や焼土跡の状況から、焼失堅穴住居跡と判断される。

⑤ 出土遺物 (第 34 図)

土器は 84, 87 が、堅穴廃絶時に近い⑤層出土である。

甕形土器 (84 ~ 86)

84 は中型品である。口縁部が緩やかに外反し、胴部は球状に膨らむ。内外面に細かいハケ目調整を密に施す。下胴部は二次焼成の痕跡がみられる。

85 は小型品である。口縁部は先細りし、細かいハケ目を掻き上げるように施す。内面はハケ目後、ナデ調整である。

86 は大型品の底部と推測される。内面天井部は平坦に成形されている。

高坏 (87)

復元口径 35 cm の大型品で、器壁の薄い精良品である。口縁部は、坏部下半から外開きに立ち上がる。胎土は精良土を使用し、内外面に磨滅している。

敲石 (88 ~ 90)

88 は全面に敲打痕が形成されている。正面と左側面は、強い敲打による浅い窪みと磨面が形成されている。89 は砂岩の亜円礫を素材とし、敲打痕が上下両端に形成されている。全面焼けている。90 は長さ 17.7 cm の棒状礫を素材とし、下端に敲打痕を形成している。正面と上端にも弱い敲打痕がみられる。焼けている可能性がある。

台石 (91, 92)

91 は正面下部に縦 22.4 cm、横 10 cm の剥離面を形成している。敲打部が剥離しており、強い衝撃によって形成されたと考えられる。92 は角礫状の砂岩を素材としている。敲打痕は正面中央部に集中している。焼けている可能性がある。

軽石製品・礫 (93 ~ 95)

93, 94 は軽石製品である。93 は正面を研磨し、裏面に浅い穿孔が施されている。94 は正面を研磨している。

95 は方形の砂岩小礫である。

(3) 堅穴建物跡 4号 (第 35, 36 図)

① 検出区・検出層位

E・D-35区、Ⅲ層上面

② 規模・形態

平面形が 7.6 m × 7.03 m の方形を呈し、東側を堅穴建物跡 13 号によって切られている。床面は浅い 2 段掘りで、掘り込みの中央と南側で土坑が検出された。中央の土坑は埋土に焼土跡を含むことから炉跡と考えられる。

炉跡の近くでは、大型の台石 (128) が床面に設置された状態で出土した。

床面直上で 8 基の柱穴を確認した。主柱穴は、P 1 ~ P 4 と考えられ、4 本柱の建物と想定される。柱穴では、柱痕跡が確認された。南壁近くでは、柱穴が 4 基確認された。これらの柱穴は、壁際に並んで配置されており、入り口に関連する施設の可能性はある。

③ 埋土・遺物出土状況

埋土は①~⑧層に分層した。①, ②層は自然埋没土である。床面の上位に堆積した③層は、住居廃絶後の堆積層で、遺物が多量に出土した。遺物の分布は、堅穴の南側に偏り、いくつかの土器溜まりを形成している。遺物溜りでは、甕形土器の破片が、重ねられた状態で出土しており、意図的に破壊・廃棄された可能性がある。

炭化材は、堅穴の北側で出土し、遺物の分布とは重複しない傾向がみられた。遺物と同じ③層に包含されており、長さが 36 cm の大型部材が含まれている。

④ 性格

大型の炭化材は二次堆積ではなく、現地で焼失・遺存した可能性がある。また、意図的に破壊された土器は祭祀に関連するものと考えられる。炭化材の出土状況や祭祀遺物の存在は、堅穴建物跡 5号、8号と類似しており、本遺構は焼失堅穴住居跡と判断される。

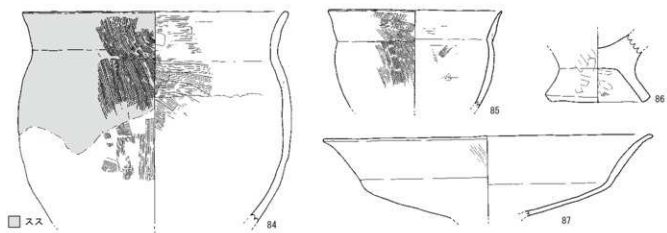
⑤ 出土遺物 (第 37 ~ 41 図)

土器は、堅穴住居廃絶時に近い床面直上から③層にかけて出土したものである。

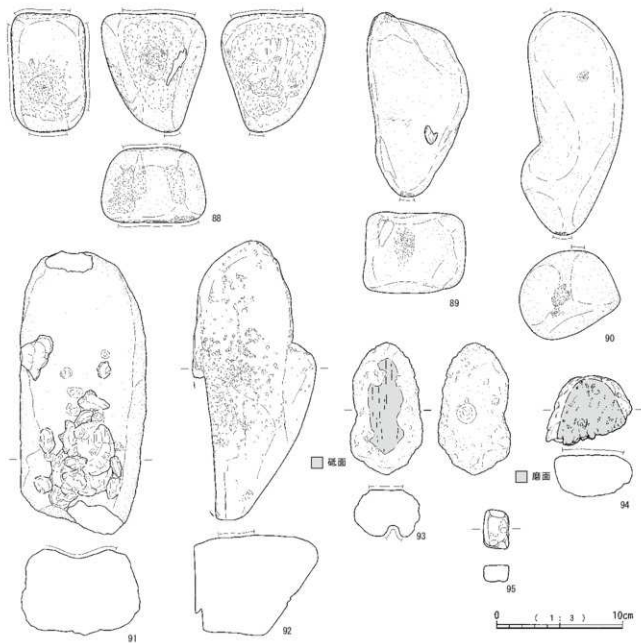
甕形土器 (96 ~ 107)

96 ~ 98 は大型品である。口縁部が緩やかに外反し、胴部の張り出しが弱い。96 は脚部の器壁が厚く、重量感がある。内外面は丁寧なナデ消しを行っている。97 は、ヘラ状工具によって突帯の上下を押圧している。押圧は左から右方向へ行われている。下胴部はケズリ状の工具ナデを施す。98 は口縁が大きく開き、底部は平底となる。刻目突帯文は、大ぶりの刻目を密に施すため、縄目状に見える。

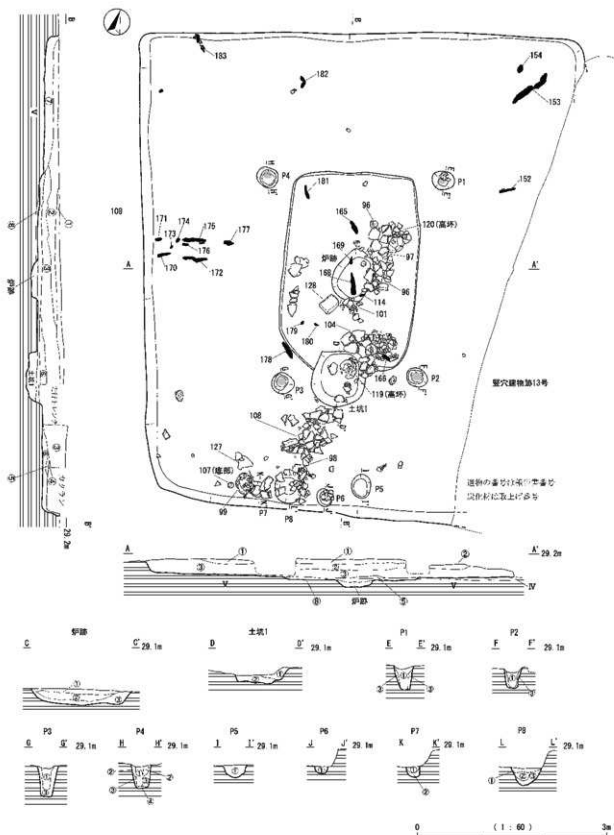
99 ~ 102 は中型品である。99 は頸部がしまり、胴部中位が膨らむ器形である。脚高があり、器壁が厚い。



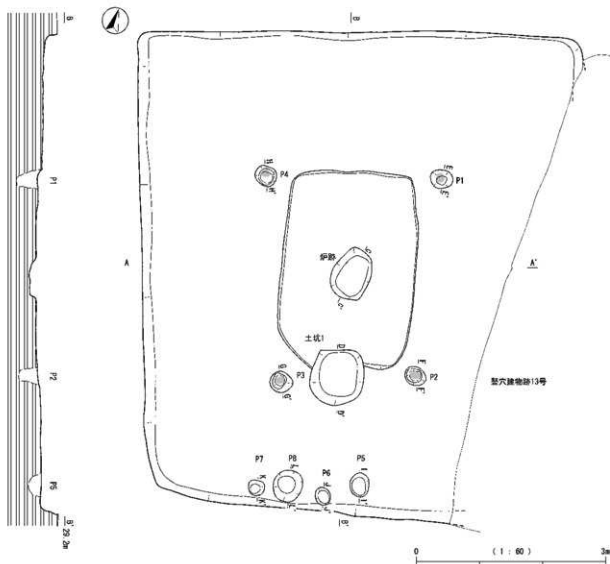
0 (1 : 4) 10cm



第34図 竪穴建物跡3号出土遺物



第35図 竪穴建物跡4号遺物出土状況



埋土

- ① 黒色砂質土 (10YR2/1) 粘性弱い。しまり有り。池田降下軽石を極僅かに含む。
 - ② 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 粘性やや有り。しまり有り。池田降下軽石を少量含む。土器、炭化材をあまり含まない。
 - ③ 黒褐色砂質土 (10YR2/2) 粘性有り。しまり有り。多量の土器と建材と見られる炭化材を多量に含む。南から北に向かってブロック状に斜堆積している。住居廃絶後の堆積物。
 - ④ 黒褐色砂質土 (10YR2/2) 粘性有り。しまり有り。③層に類似。
 - ⑤ 黒褐色砂質土 (10YR2/2) とアカホヤブロックの混土。住居南側のみ広がる。
 - ⑥ 黒色砂質土 (10YR2/1) 粘性やや有り。しまり有り。池田降下軽石と赤色焼土粒を少量含む。
 - ⑦ 黒色砂質土 (10YR1/7/1) 粘性弱い。しまり有り。池田降下軽石を微量含む。北から南へ斜堆積しており、住居廃絶後の自然堆積と考えられる。
 - ⑧ 黒色砂質土 (10YR2/1) 粘性やや有り。しまり有り。池田降下軽石とアカホヤブロックを中量含む。住居中央に掘り運られた長方形プランの中に堆積。
- P 1~4
- ① 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 柱痕跡。粘性弱い。しまりやや有り。池田降下軽石を微量含む。
 - ② 黒褐色砂質土 (10YR2/2) 柱痕跡方土。粘性弱い。しまり有り。池田降下軽石とアカホヤブロックを含む。
 - ③ 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 柱痕跡方土。粘性弱い。しまり有り。池田降下軽石を微量含む。
 - ④ 暗褐色砂質土 (10YR3/3) 柱痕跡方土。粘性有り。しまり有り。

P 5~7

- ① 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 粘性有り。しまり有り。池田降下軽石を極微量含む。
 - ② 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 粘性やや有り。しまり有り。池田降下軽石を微量。アカホヤブロックを中量含む。
- P 8
- ① 黒色砂質土 (10YR1/3) 粘性やや有り。しまり有り。アカホヤブロック少量含む。
 - ② 黒色砂質土 (10YR1/3) 粘性やや有り。しまり有り。池田降下軽石を微量含む。
 - ③ 黒色砂質土 (10YR1/3) 粘性やや有り。しまり有り。アカホヤブロック中量含む。
- 土坑 1
- ① 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 粘性有り。しまり有り。池田降下軽石を極微量含む。
 - ② 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 粘性やや有り。しまり有り。池田降下軽石を微量。アカホヤブロックを中量含む。
- 炉跡 1
- ① 暗褐色砂質土 (10YR3/3) 粘性やや有り。しまり有り。池田降下軽石、アカホヤブロック、炭化物、焼土粒を微量含む。
 - ② 暗褐色砂質土 (10YR3/3) アカホヤブロックとの混土。
 - ③ 暗褐色砂質土 (10YR3/3) 粘性やや有り。しまり有り。黒土を一部葉層状に含む。

第 36 図 竪穴建物跡 4 号完掘状況

内外面ナデ調整を施す。100は頭部に下垂する刻目突帯文を施す。刻目は布目刻目である。内外面粗いナデを施す。101は薄手で、色調、胎土が他とは異なっている。胎土に赤色小石を含み搬入品の可能性がある。内外面の摩擦が著しい。102は口径が器高より大きく、逆三角形のプロポーションとなる。工具押さえによって、口縁部と胴部の境が有段となる。内外面ハケ目調整を施す。

103は小型品である。口縁の外反が弱く、低脚である。内外面ナデ調整を施す。

104, 105は、丸底を呈する大型の甕形土器である。104は口縁が外側に開き、胴部には外側から穿孔を施す。厚手で、器面には粘土紐の凹凸と接合痕が残っている。外面には煤が付着している。105は口縁部が直立気味に立ち上がり、上胴部が弱く屈曲する。内外面ナデ調整で、下胴部には煤が付着している。

大甕 (108)

108は床面直上付近で出土した大甕で、口径41.2cm、器高65.5cm、底径7cmを計る。口縁は直立し、胴部は膨らみをもつが、底径が小さく、自立することは困難である。頭部には下垂する刻目突帯文を巡らす。煤が上胴部に付着し、煮沸具として使用されている。

甕形土器 (109 ~ 111)

109は胴部が卵形で、底部は丸底である。外面に21条のヘラ描き沈線文を施すことから、祭祀用と考えられる。床面付近(③層)の出土である。110は部厚い丸底、111は浅い上げ底である。

小型丸底甕 (112 ~ 114)

112は丸底の胴部から口縁部が直線的に開く。口縁部と胴部の境には、横沈線を2条引いた後に、縦方向の刻目を施している。口径12cm、器高8cmである。113は口径21cmで、口縁部は外反しながら開く。口縁部と胴部の境は、有段となり刻目を施している。薄手で砂粒を多く含む胎土を使用している。114は口径27.2cm、器高16.9cmの大型品である。口縁は外反気味に開き、底部は突起状となる。口縁部と胴部の境に削り出し突帯を作った後、刻目を施す。色調は赤褐色で丁寧な作りである。113, 114は通常的小型丸底甕より大型であるため、祭祀用と考えられる。

鉢形土器 (115 ~ 118)

115は丸底の小鉢である。内外面に指頭瓦痕を多く残す。116, 117は、部厚い円盤状の底部もち、口縁部は直立気味に外反する。作りが粗雑で、117は胴部が傾いている。胎土は泥質で、小石を含み、外面に亀裂が多数見られる。

118は口縁部が外傾し、胴部は鍋形に近い。器厚が均一で、内外面がハケ目調整を施す。

高坏 (119 ~ 124)

119, 120は皿状の坏部から口縁部が大きく外反する。口縁部と坏部の境には、小さな立ち上りを形成している。119は口径40.5cm、器高29.4cmの大型品である。脚部は楕円に膨らみ穿孔が2か所残る。脚内面にはしぼり痕が残っている。口縁部の煤は、二次付着と考えられる。120は口径30.5cmで口縁が短い。内外面にミガキを施す。

121, 122は坏部が楕円を呈する。器壁が薄く丁寧な作りで、内外面にハケ目やミガキを施す。123は脚部がスカート状に開く。胎土や焼成から121, 122の脚部と考えられる。124は細身の脚部で、焼成がやや不良である。

小型土器・蓋 (125 ~ 127)

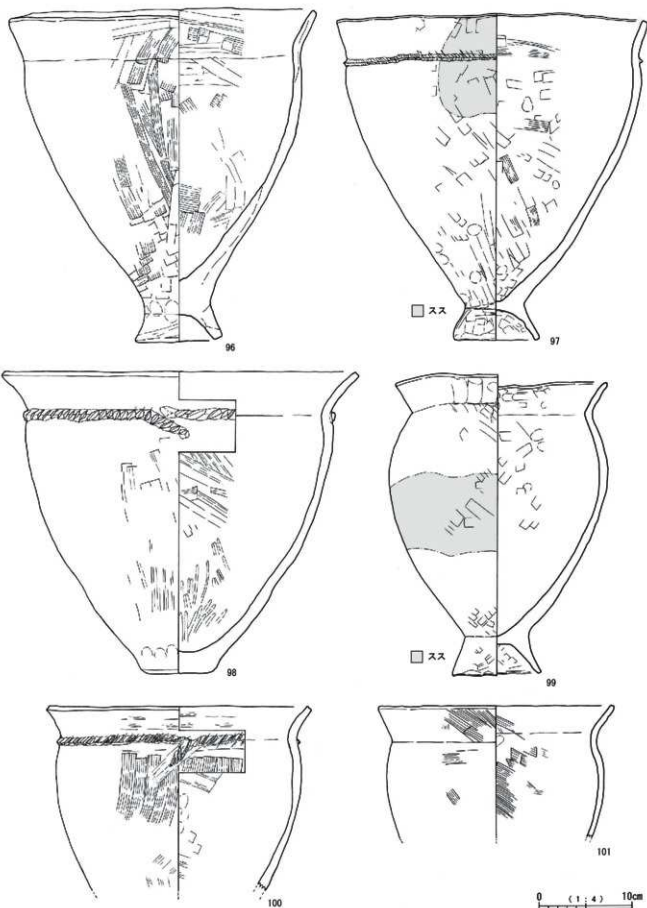
125は手づくねによって製作された小型土器である。126, 127は蓋である。127は口径28cm、器高14.3cmである。口縁部の内外に煤が付着している。

台石・敲石 (128, 130)

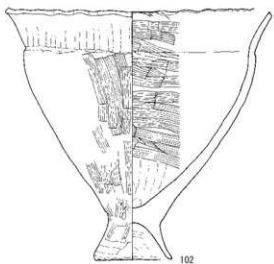
128は炉跡の近くで出土した台石である。敲打は台石の中央部に集中し、その周辺に砥面が形成されている。表面には鉄分が付着しており、鉄器生産に関連する可能性がある。130は正面と上端に敲打痕が形成されている。

軽石製品・礫 (129, 131, 132)

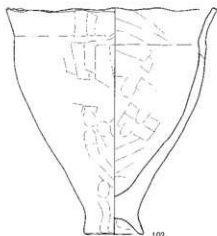
129は軽石製品で正面を研磨している。側面と裏面には、切断時のものと思われる工具痕が残っている。131, 132は砂岩及び凝灰岩の小礫である。



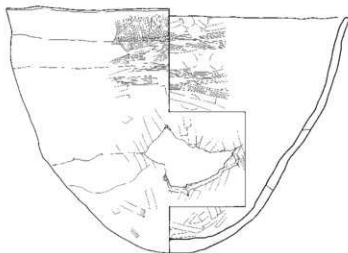
第 37 図 竪穴建物跡 4号出土遺物 1



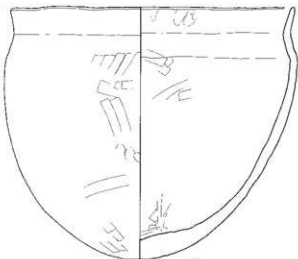
102



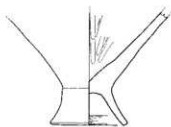
103



104



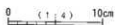
105



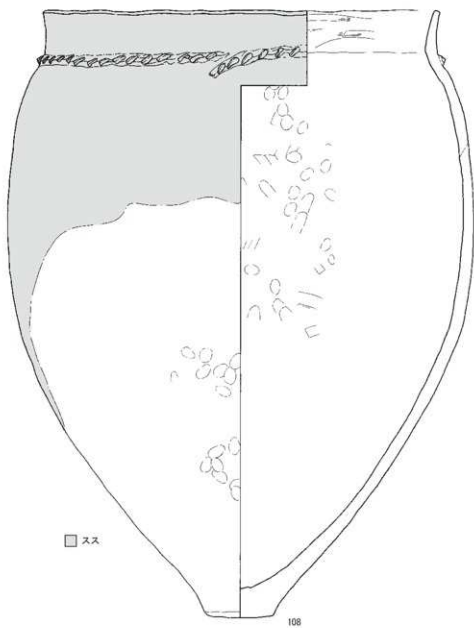
106



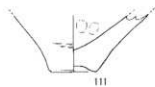
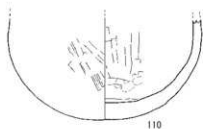
107



第 38 图 竖穴建物跡 4 号出土遺物 2

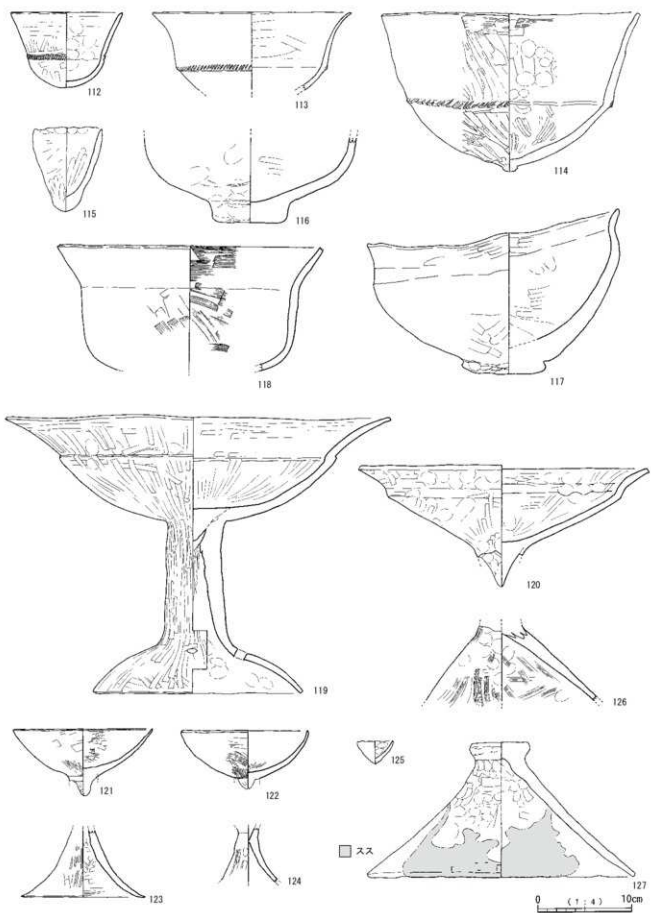


■ スス

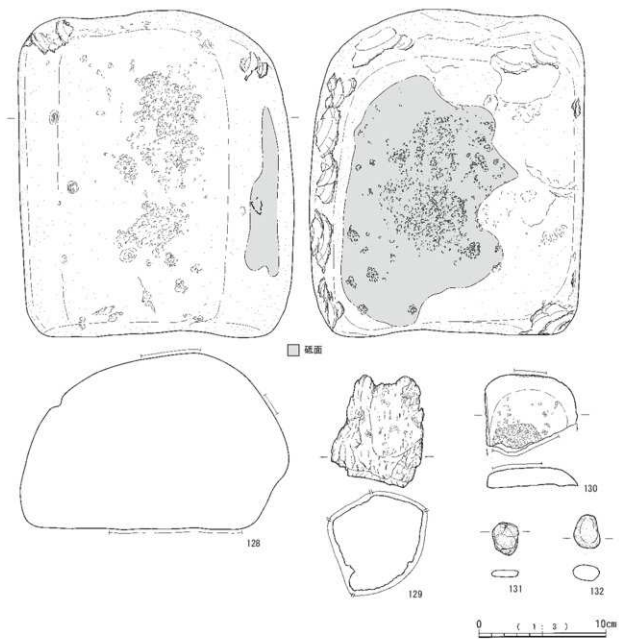


0 (1:4) 10cm

第 39 図 竪穴建物跡 4 号出土遺物 3



第40図 竪穴建物跡4号出土遺物4



第 41 图 竖穴建物跡 4 号出土遺物 5

(4) 竪穴建物跡5号(第42回)

① 検出区・検出層位

B・C～34・35区, III層上面

② 規模・形態

平面形が10.4m×9.7mを呈する大型の竪穴建物跡である。北側から東側にかけて花卉状の掘り込みが確認できた。

内部は3段のベット状となり、上段がIV層、中段がV層(池田湖火山灰)、下段がVIIa層(アカホヤ火山灰)まで掘り込んでいる。

中段の掘り込みプランは不整形で、南側の一部が掘り込まれ突出している。また床と壁面に硬化面が形成されている部分があった。3段目の掘り込み部分は、硬く締まった④層によって埋められその上面に貼床(③層)が造られている。そのため、使用時の床面は2段であったと想定される。

柱穴は中央に2基、その周囲に6基確認された。中心部の柱穴P1、P2-1は貼床の上面で検出された。掘り込みが浅く、柱痕跡の周囲にはアカホヤと黒色土が混ざった非常に固い硬化面が形成されている。自重式の柱と想定され柱穴の床面は非常に固い、硬く締まった④層で下段の掘り込みを埋めた理由は、柱の沈下防止を目的としている可能性がある。

また、P2-1に切られたP2-2が、貼床の下で検出されたことから、P2-2からP2-1へ立て替えが行われている。P3～6の深さは40～60cm程度で、柱痕跡から、柱の直径は8～10cm程度と推測される。P4では、柱抜き取り痕と柱の当たりを確認した。P7、P8は浅いが、柱穴の可能性があるのでに記録した。

貼床を除去した後、地山層上面で浅い土坑1を確認した。

③ 埋土・遺物出土状況

床面直上から②層にかけて土器溜り、炭化材、焼土層(層厚5cm程)が検出された。床面と壁面が焼けた痕跡は確認されていない。炭化材と焼土は住居の西側半分で確認され、住居全体が焼け落ちた状態ではなかった。床面近くに焼土層があり、炭化材はその上面で検出された。

遺物は床面直上と②層で出土した。床面直上の遺物は、竪穴南東部で土器溜まりを形成している。土器溜まりは、大型の甕型土器や蓋の破片を重ねて敷き詰められた状態で方形に広がって出土した。土器溜まりには、穿孔を有する土器が含まれており、祭祀に伴って破砕行為が行われ、廃棄されたと推測される。なお、竪穴西部で炭化材や焼土層は確認されていないため、土器溜り周辺では焼却行為は行われていない。

②層の遺物は、炭化材の直上で完形品に近い甕型土器などが潰れた状態で出土した。これらの土器は、出土層位から焼失行為後に廃棄されている。

このほかに、土器溜りの南東で小磯溜りを検出した。直径1cm程の円礫が、30cm～40cmの範囲に密集していた。礫の堆積に厚みがなく土器小片が混ざることから、廃棄されたものと判断される。

②層の土壌洗浄を行ったところ、イネ、コナラ属果実、ブナ科果実、マメ科(ハギ属?)種子が検出された。

④ 炭化材について

表13は、計測可能な炭化材の一覧表である。炭化材は形態から以下に分類できる。

- ① 直径9～25cm程度の棒状の材
- ② 直径17～30cm程度の杖状の材
- ③ 幅3～28cm程度、厚み2cmの板材
- ④ 直径24～53cm程度の丸太材

最も多い炭化材は、①～③である。①～③は竪穴西部で中心に向かって放射状に出土した。①は計測値から垂木である可能性が高い。②、③は①と混在して出土しており、垂木の間を補強する屋根材や壁材と推測される。

④は竪穴中央付近で検出されたが、方向に一貫性がない。径が大きく梁などに使われた建材の可能性が高い。炭化材の樹種同定では、アカガシ重属2点、アワブキ属4点、タブノキ属4点、カツラ1点が確認されている。

⑤ 性格

建物構造や出土遺物、炭化材や焼土跡の状況から、焼失竪穴住居跡と判断される。炭化材の状況から、屋根の一部が焼失・遺存したものと判断される。土器の破砕・廃棄は、建築材の焼却後焼却行為が行われていない地点で行われている。このことから、建物の移転に伴う廃屋儀礼(建築材焼却と土器破砕行為)が行われたものと考えられる。

⑥ 出土遺物(第44～48回)

土器溜り出土遺物

土器は全て床面直上で出土した。

変形土器(133～139)

133は大型品で、頸部に刻目突帯文を施す。刻目はへら状工具による鋭い刻目である。内外面にミガキを施す。

134～136は中型品である。134は縦位の沈線に斜めに引いた後、刻目突帯文を添付している。沈線と刻目は、位置と方向が一致しており、沈線は刻目を施す目印の可能性が高い。外面に煤が付着し、下腹部は二次焼成により変色している。135は突帯が高く、内外面に粗いハケ目を施す。

137は小型の甕形土器で、内外面にナデ調整を施す。
139は胴部外面の大部分が剥離している。器面が摩耗しており、剥離後も使用されている。

大甕 (140)

140は意図的に破砕され、敷き詰められた状態で出土した。口径45.9cm、器高59.6cm、底径8.6cmを計る。口縁は緩やかに外反し、頭部に交差する刻目突帯文を巡らす。胴部には外側から穿孔が1か所施されている。底径が小さく、自立することは困難である。胴部に煤が付着し、煮沸具として使用されている。

甕形土器 (141～146)

141は胴部が縦長の楕円形を呈し、口縁部は短く外傾する。底部は丸底である。上胴部の剥離は、焼成時破裂痕の可能性がある。143は大甕形で、胴部は球形に近いと推測される。薄手で、内面はケズリ後ナデ調整である。

144は胴部が球形を呈し、口縁部は短く外反する。底部は丸底で、胴部には接合痕が部分的にみられる。外面調整は頭部がハケ目、胴部はハケ目後ミガキ調整である。内面はハケ目後ミガキ調整で、全体的に丁寧な作りである。145は大甕形で、胴部に外側から穿孔を施している。底部付近には煤が付着している。146は底部近くにケズリ調整を施す。

小型丸底甕 (147)

147は丸底の胴部から口縁部が直線的に開く。口縁部と胴部の境は不明瞭で、わずかに有段となる。外面はミガキ調整、内面はナデ調整を施す。

高坏 (148～151)

148、149は浅い皿状の坏部から口縁部が大きく外反する。148は口径35.6cmの大甕形で、精製品である。薄手で内外面にストロークの長いミガキを施す。149は口縁部の一部に煤が付着している。

150、151は裾部がスカート状に開く。150は直径9mmの穿孔が1か所残っている。色調が白っぽく、胎土に赤色小石を含む。

小型土器、蓋 (152、153)

152は手づくねで製作された小型土器である。153は口径28cm、器高13.5cmの蓋である。取手は中空で、口縁部内面に煤が付着している。

①・②層出土遺物

床面直上で出土した土器は、154、155、159の甕形土器、164の甕形土器、165の鉢形土器である。②層出土土器は、157の甕形土器、167、168の鉢形土器、170の高坏である。これ以外の大型土器は、炭化材直上の出土であり、全て住居居絶時に近い時期のものである。

甕形土器 (154～161)

154～159は中型品である。口縁の外反が弱く、上胴部付近がわずかに膨らむ器形である。底部は低脚のものが多い。154は外面にハケ目を密に施す。155は頭部に刻目突帯文を1条施す。刻目の施文には、ハケ目工具を使用している。156は頭部に断面方形の刻目突帯文を施す。刻目は連続して斜方向に施されており、縄目状に見える。白色の精製土を使用している。158は下胴部外面が剥離しているが、剥離後も使用されている。

159は胴部中位に最大径があり、底部は高脚である。色調が白っぽく、胎土に小石を多く含む。160は小型品で内外面にナデ調整を施す。161は丸底で鉢に近い器形であるが、煮沸具として使用されているため、甕形土器に分類した。大型甕の底部を思わせる作りであり、製作途中で甕形土器に転用した可能性がある。外面には、二次焼成を受け、煤が付着している。

甕形土器 (162～164)

162は小型の短頸甕である。薄手で外面に丁寧なミガキを施す。163は二重口縁甕と推測される。外面に縞波状文が施されている。

鉢形土器 (165～168)

165、166は平底の小型品で、165は内外面にハケ目を施す。167は口径23cm、器高18.2cmの脚付鉢である。器形の歪みが大きく、調整は粗雑である。168は外面に粗いミガキを施す。

高坏、小型土器 (169～175)

169、170は高坏で口縁部が大きく開く。内外面ミガキ調整を施す。171は坏部が楕円形を呈し、外面にハケ目後ナデ調整を施す。173は大甕品の脚部である。脚裾部は楕円形に膨らみ、外側から穿孔を4か所施す。内面にはしぼり痕が残る。174は裾部に1か所穿孔が残っている。摩滅しているが、調整はミガキと推測される。

175は手づくねで製作された小型土器である。内外面に指頭圧痕が残る。

軽石製品 (176～178)

176は正面に浅い凹みがみられる。正面、裏面を研磨している可能性がある。177は正面に浅い凹みが2か所みられる。各面を研磨している。178は方形の軽石で、正面を研磨している。

砥石、敲石、礮 (179～182)

179は手持ち砥石で、正面に砥面を形成している。180は敲石である。上下両端と左側面に削り敲打痕を形成している。全体を研磨によって整形している可能性がある。181、182は砂岩製の小礮である。

埋土

- ① 黒褐色砂質土 (10YR2/1) 住居の中央部に堆積。②層よりも色調が明るい。土器片を所々に含む。
 ② 黒褐色砂質土 (10YR1.7/1) ①層よりキメが細かく、しまっている(しっとりとしている)。
 炭化材、焼く跡、土器溜、充形土器を含む。
 ③ 黒褐色砂質土 (10YR1.7/1) 粘床、池田湖火山灰と黒色ブロックが入り混じり、硬化面を形成。
 中央のみ堆積。
 ④ 黒褐色砂質土 (10YR1/3) 黒色土と池田湖火山灰の混土。硬化面のように硬くしまっている。着下段のベッド状部分を埋積。

P 1

- ① 黒色砂質土 (10YR1/3) 柱痕跡。しまりなし。
 ② アカホヤと黒色土の混土によって形成された硬化面。非常に硬い。
 柱痕跡の周囲に広がる。
 ③ 黒褐色砂質土 (10YR1/3) 柱礎方埋土。硬くしまっている。

P 2

- a 黒色砂質土 (10YR1/2) 柱痕跡。しまりがなく柔らかい。
 b 黒色土と池田湖火山灰の混土からなる硬化面。柱痕跡の周囲に広がる。
 c 黒褐色砂質土 (10YR2/1) 柱礎方埋土。硬くしまっている。
 d 黒色砂質土 (10YR2/1) アカホヤブロック混入。人為的に埋め戻された土。
 しまりがなくて柔らかい。

P 3～8

- ① 黒褐色砂質土 (10YR1/3) 竈穴の埋土と同じ土。抜き取り穴に堆積。
 ② 黒褐色砂質土 (10YR2/1) 柱痕跡。しまりがなく柔らかい。
 ③ 黒褐色砂質土 (10YR2/1) ②層よりしまりがなく、ポロポロ崩れる。
 ④ 黒褐色砂質土 (10YR1/3) 柱礎方埋土。アカホヤの小ブロック混入。
 ⑤ 柱礎方埋土。暗褐色土とアカホヤ混じりの土。硬い。
 ⑥ 黒褐色砂質土 (10YR1/3) 柱礎方埋土。硬くしまっている。
 ⑦ 黒褐色砂質土 (10YR1/3) 池田湖火山灰混じる。
 土坑埋土
 ① 黒色砂質土 (10YR1/3) アカホヤブロック所々混じる。しまりが無い。



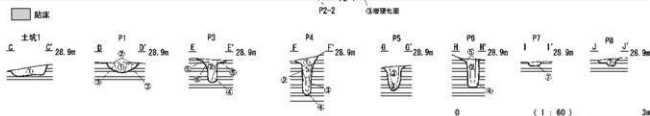
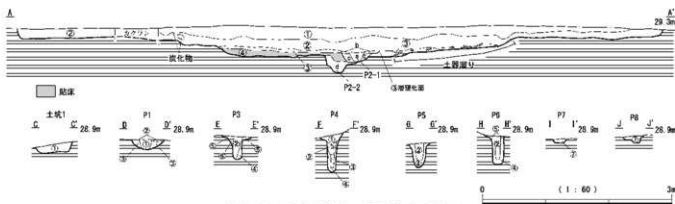
第 13 表 竈穴建物跡 5号出土炭化材一覧

No.	取り上げ番号	出土層位	形状	法量 (cm)		備考	No.	取り上げ番号	出土層位	形状	法量 (cm)			備考		
				長さ	幅						長さ	幅	厚さ			
1	10	床直	丸太	36	7	5	アカガシ亜属	25	35	①	不明	23	6	3		
2	11		不明	14	6	2		26	52		板材	16	8	1		
3	12	①	板材	12	3	2	アカガシ亜属	27	54		不明	66	7	3		
4	13	①	割材	5	3	2	断面半円形	28	55	①	丸太	25	8	5	タブノキ属	
5	14		割材	4	3	1		29	56	②	丸太	24	8	5		
6	15		不明	4	3	1		30	57	②	板材	15	5	1	カツラ	
7	16	床直	不明	2	2	1		31	58		棒状	23	4	4		
8	17		板材	4	8	1		32	59		丸太	30	7	7		
9	18	床直	割材	20	4	2	断面半円形	33	60	不明	60	6	—			
10	19		割材	7	4	2	断面半円形	34	61		不明	10	10	—		
11	20		不明	3	2	1		35	62		不明	14	4	4		
12	21		不明	3	2	1		36	63		不明	15	3	—		
13	22		不明	10	3	1		37	64		不明	24	5	—		
14	23		不明	5	8	2		38	69		不明	23	4	—		
15	24		板状	3	8	2		39	70		不明	70	8	—		
16	25		不明	6	5	4		40	71	②	不明	26	7	6	タブノキ属	
17	26		枝状	30	3	2		41	72		不明	22	6	—		
18	27	①	棒状	9	5	3	断面円形	42	73		板材	40	6	2		
19	28	①	棒状	17	5	4	アワブキ属	43	74		板材	16	2	1		
20	29		枝状	20	2	1		44	75	②	板材	26	8	2	タブノキ属	
21	30	①	板状	14	6	1		45	76	②	板材	28	7	2	アワブキ属	
22	31		枝状	30	2	1		46	77		不明	35	5	2		
23	32	①	板状	11	2	2	アワブキ属	47	79	②	丸太	53	8	8	アワブキ属	
24	33		板状	17	3	1		48	83		床直	丸太	34	6	6	タブノキ属

- は計測不能



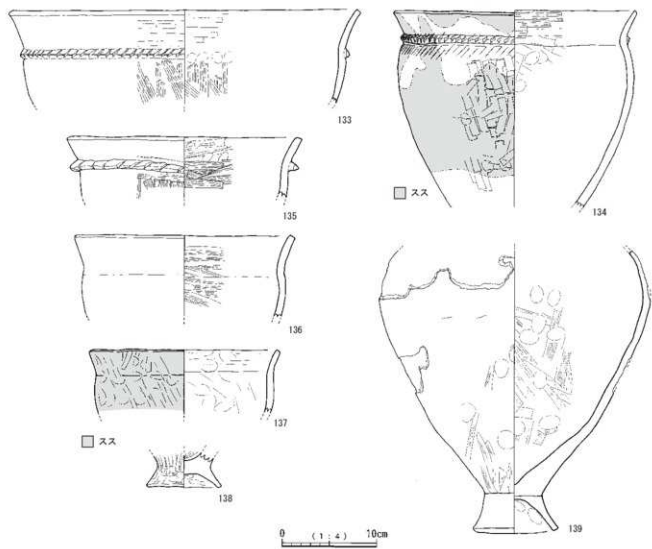
遺物の番号は調査番号
炭化種の番号は、表13の最上段参照



第 42 図 竪穴建物跡 5号遺物出土状況



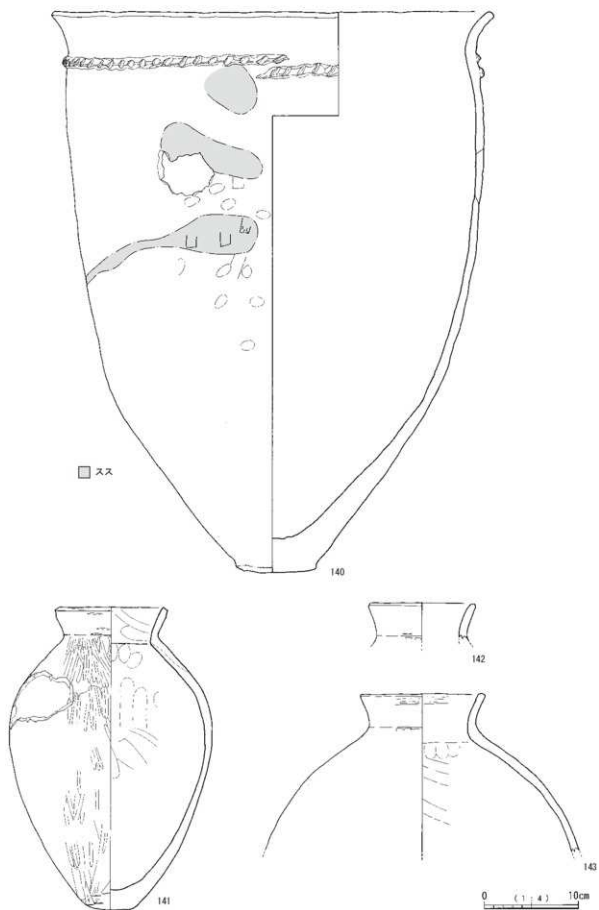
第43图 竖穴建物跡5号完掘状况



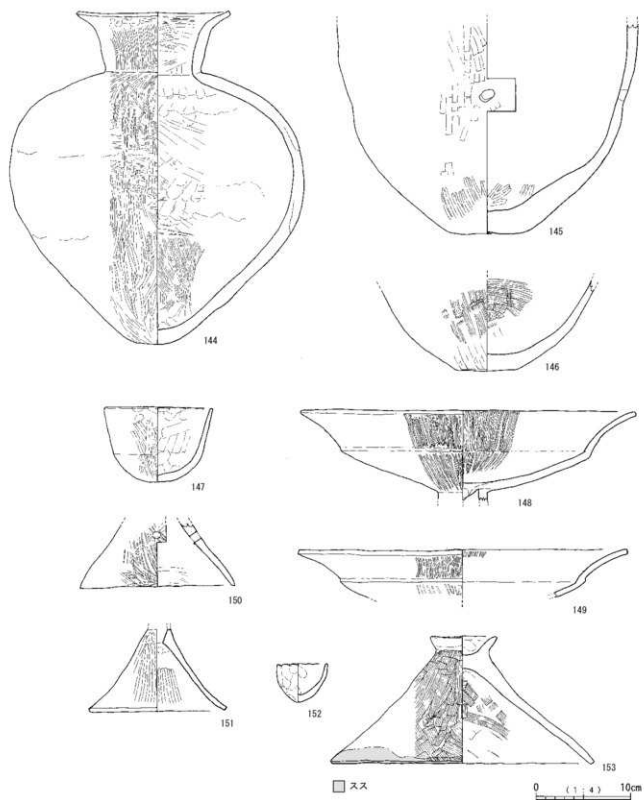
第 44 図 竪穴建物跡 5 号土器溜り出土遺物 1



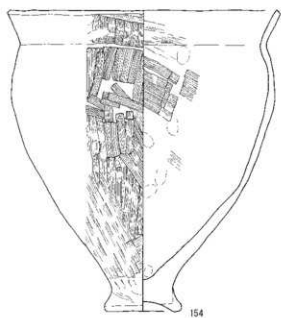
炭化材出土状況



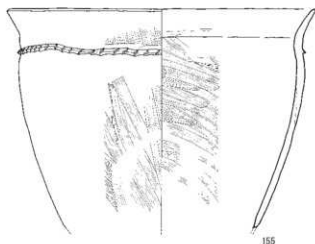
第 45 図 竪穴建物跡 5 号土器溜り出土遺物 2



第46図 竪穴建物跡5号土器溜り出土遺物3



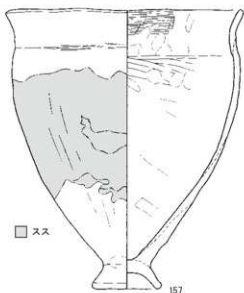
154



155

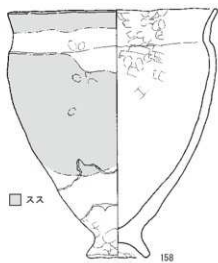


156



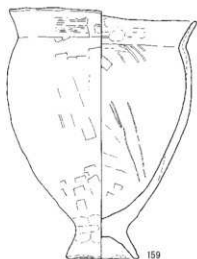
■ スス

157



■ スス

158



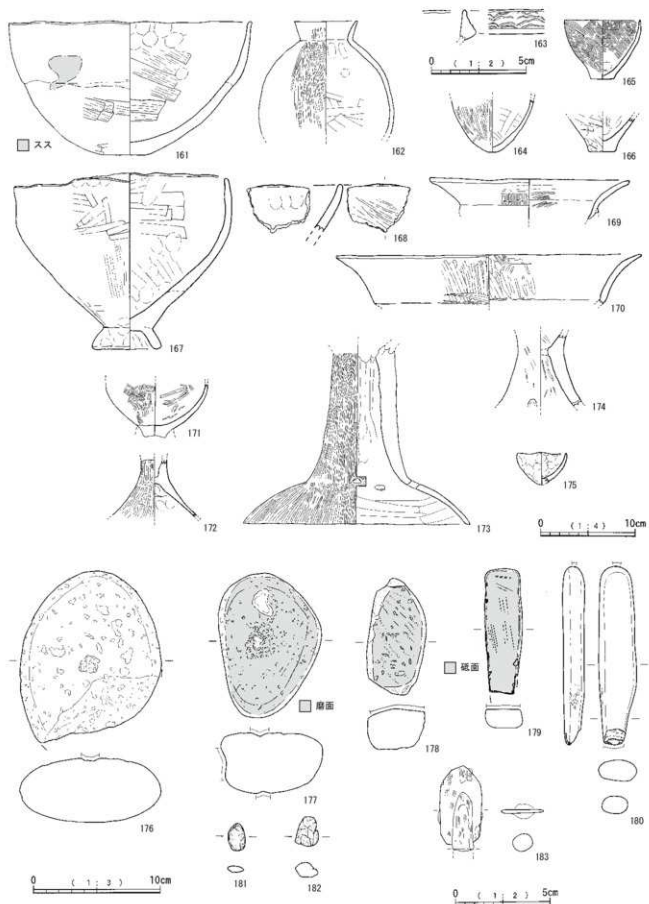
159



160

0 (1:4) 10cm

第 47 図 竪穴建物跡 5 号出土遺物 4



第48図 竪穴建物跡5号出土遺物5

鉄織 (183)

183は床面直上で出土した長さ4.2cm、幅2.2cmの無茎織である。木質の根挟みが残存しており、表面には木質が付着している。

(5) 竪穴建物跡6号 (第49図)

① 検出区・検出層位

D-34区, III層上面

② 規模・形態

直径7.7mの花弁形を呈する竪穴建物跡である。南側は攪乱、北側は先行トレンチにより、削平されている。

床面は2段のベット状となっている。上段は、地山のIV層を床面とし、硬化面がブロック状に形成されている。

下段は不整形な隅丸形状となる掘り込みであり、V層(池田湖火山灰)を床面とする。掘り込みの壁面が硬化しているが、張り床は確認されなかった。

柱穴は、床面で検出されなかったため、測量終了後に床面を5cmほど下げて再度精査を試みたが、確認できなかった。

③ 埋土・遺物出土状況

焼土が竪穴北部を中心とする床面直上で検出された。炭化材は焼土中に混在しており、特に竪穴北部で残存状況が良好である。

土器は床面直上と②層で出土した。特に②層上部で多量に出土し、竪穴中心部は密度が高く隙間がほとんどない状況であった。土器は表面が被熱したような状況は認められず、焼土よりも上位で出土している。建物焼失した後に廃棄されており、良好な一括資料である。

焼土、炭化材の出土量が多い範囲と土器集中区の範囲が異なる点から、住居内で場の利用に差異が存在する。土器は同一個体が同一面に広がり、重なっている(重ねられている)状況が認められる。また、土器溜りには穿孔された土器やミニチュア土器が、床面直上では磨製石器が出土し、何らかの祭祀行為が行われた可能性がある。

なお、小礫が埋土中で出土しているが、竪穴建物跡5号のようにまとまっている状況ではなかった。

④ 炭化材について

表14は、計測可能な炭化材の一覧表である。炭化材は形態から以下に分類できる。

① 幅5～43cm程度の板状の材

② 幅9～12cm程度の割材(角状に加工)

最も多いのは①で、②は少ない。炭化材は長さが43cmと長いものがあり、ベット状部分北側で多く出

土している。また、竪穴建物跡5号にみられた棒状及び杖状の材は出土していない。炭化材の樹種同定では、タブノキ属6点、アワブキ属1点が確認されている。

⑤ 性格

建物構造や出土遺物、炭化材や焼土跡の状況から、焼失竪穴住居跡と判断される。土器の破砕、廃棄は、建築材の焼却後焼却行為の行われていない地点で行われている。このことから、建物の移転に伴う慶屋儀礼(建築材焼却と土器破砕行為)が行われたものと考えられる。

⑥ 出土遺物 (第50～55図)

土器は住居廃絶時に近い床面直上及び②層の出土である。

変形土器 (184～201)

184, 185は大型品である。184は口径39.6cm、器高35cmで、胴部に穿孔を2か所施す。穿孔は外側から穿たれている。口縁部の外反は弱く、頸部に刻目突帯文を1条巡らす。器壁が薄く丁寧な作りで、内外面にハケ目、ナデを密に施す。185は扁平な突帯に、縦長の刻目を連続して施す。

186～198は中型品である。間延びした口縁部が弱く外反し、上胴部付近が弱く膨らむ器形である。脚高が高いものと低いものがあり、調整はハケ目後ナデ調整が主である。

186は下胴部に大きな剥離が形成されている。剥離面が摩耗しているために、使用時に剥離したものと考えられる。粗雑な作りで、器面が歪み、凹凸がある。胎土は泥質で小石を含む。187は口縁部に粗いハケ目を掻き上げ状に施す。188は内外面の割れ口に粘土塊が付着している。粘土塊は補修痕の可能性がある。193, 194は上胴部の張り出しが強く、下胴部は大きく剥離している。二次焼成の痕跡があり、使用による剥離と考えられる。193は表面にモミ痕が残っている。195は鉢形土器に近い器形である。キメの細かい精良土を使用している。

197, 198は口縁が直線的に開き、胴部形態はバケツ形に近い器形となる。197は刻目の上位に斜位のヘラ描沈線を施す。

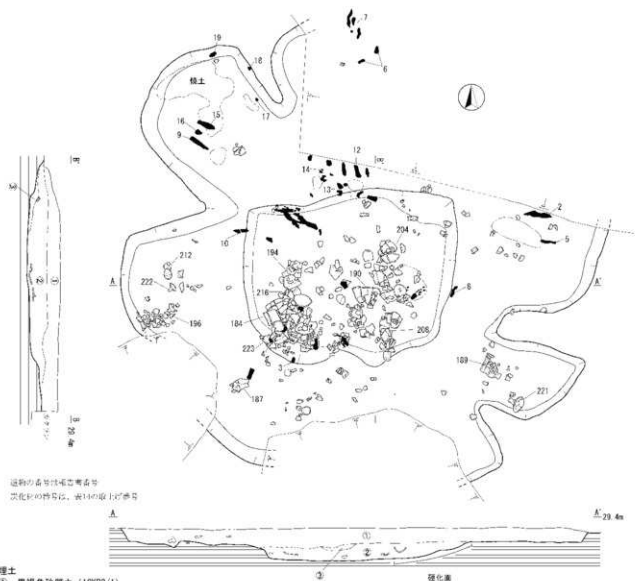
200, 201は小型品である。200は、泥質土を使用し、外面には収縮による亀裂が多数みられる。201は胴部外面が剥落している。

大甕 (202, 203)

202は大甕の胴部、203は底部と考えられる。203は外面が大きく剥離しており、剥離面が焼けている。

壺形土器 (204～210)

204～207は胴部が縦長の楕円形を呈し、口縁部は短く外傾する。204は底部が平底で、胴部全体に煤

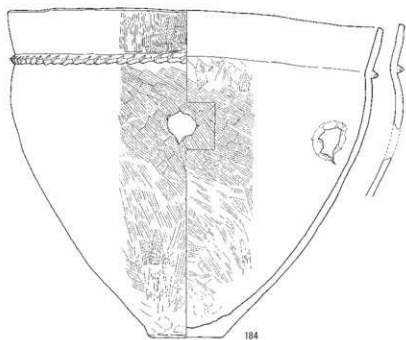


第 49 図 竪穴建物跡 6 号遺物出土状況及び完掘状況

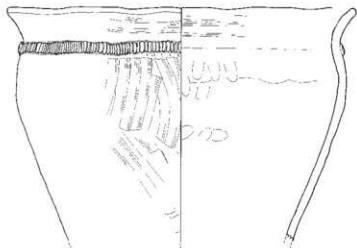
第 14 表 竪穴建物跡 6 号出土炭化材一覧

No.	取り上げ番号	出土層位	形状	法量 (cm)			備考	No.	取り上げ番号	出土層位	形状	法量 (cm)			備考
				長さ	幅	厚さ						長さ	幅	厚さ	
1	2	2	板状	43	8	-	タブノキ属	10	12	2	板状	22	6	-	
2	3	2	板状	5	4	-	タブノキ属	11	13	2	不明	10	8	-	
3	4	2	不明	7	2	-		13	14	2	不明	6	3	-	
4	5	2	板状	25	6	-		14	15	2	板状	28	8	-	
5	6	2	割材	10	8	-	アワブキ属	15	16	2	割材	9	8	-	タブノキ属
6	7	2	板状	30	8	-	タブノキ属	16	17	2	不明	5	5	-	
7	8	2	不明	20	4	-		17	18	2	不明	18	4	-	
8	9	2	板状	24	8	-	タブノキ属	18	19	2	割材	12	6	-	タブノキ属
9	10	2	不明	8	6	-									

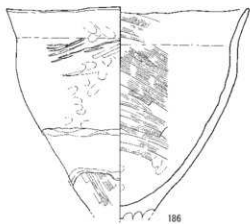
- は計測不能



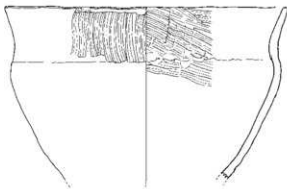
184



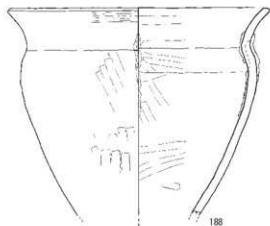
185



186



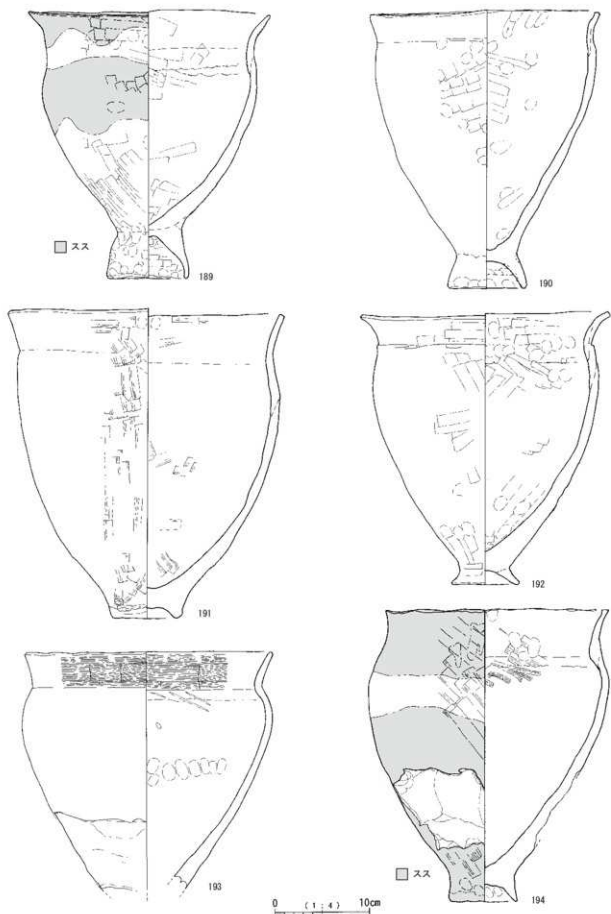
187



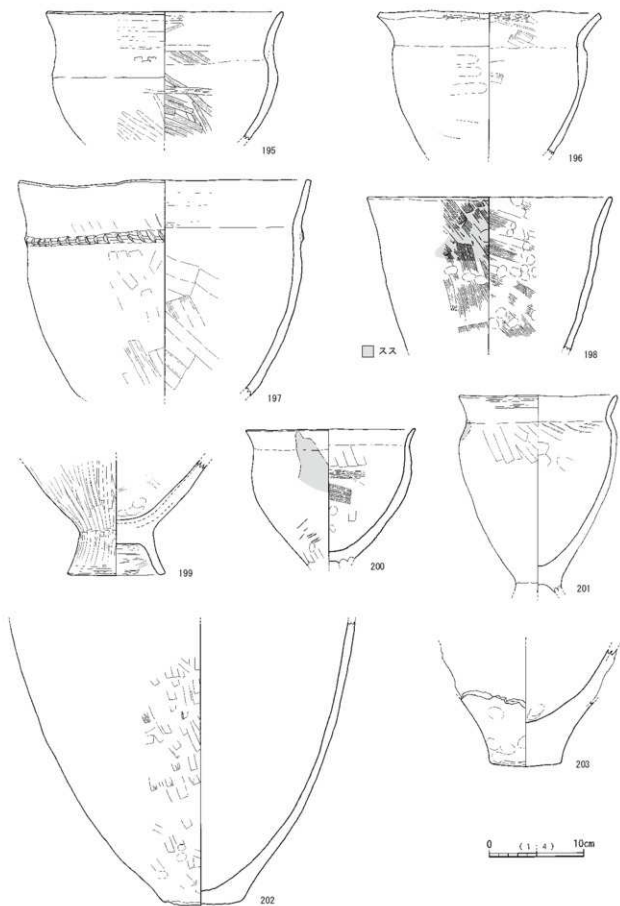
188

0 (1:4) 10cm

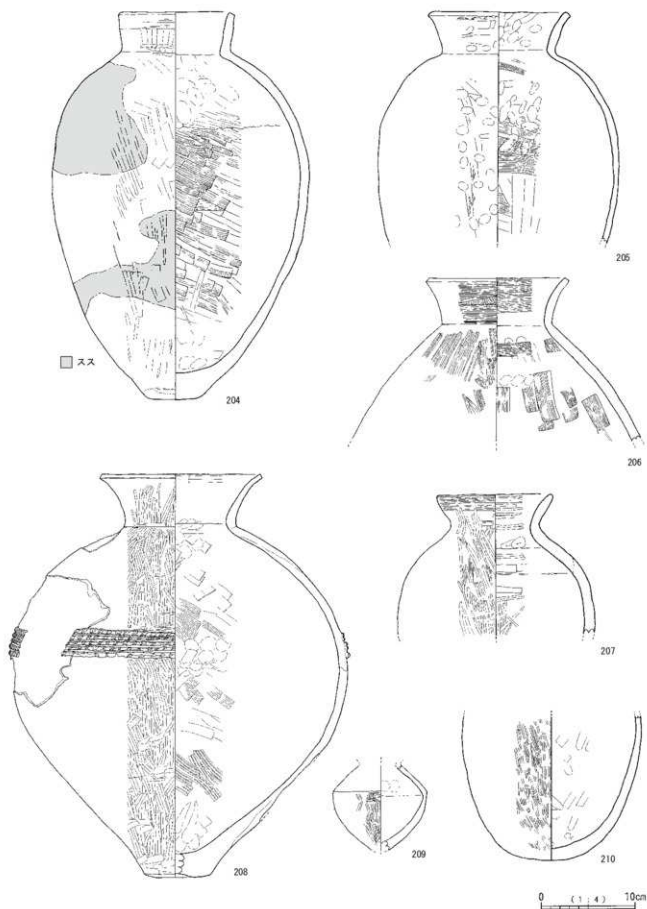
第 50 图 竖穴建物跡 6 号出土遺物 1



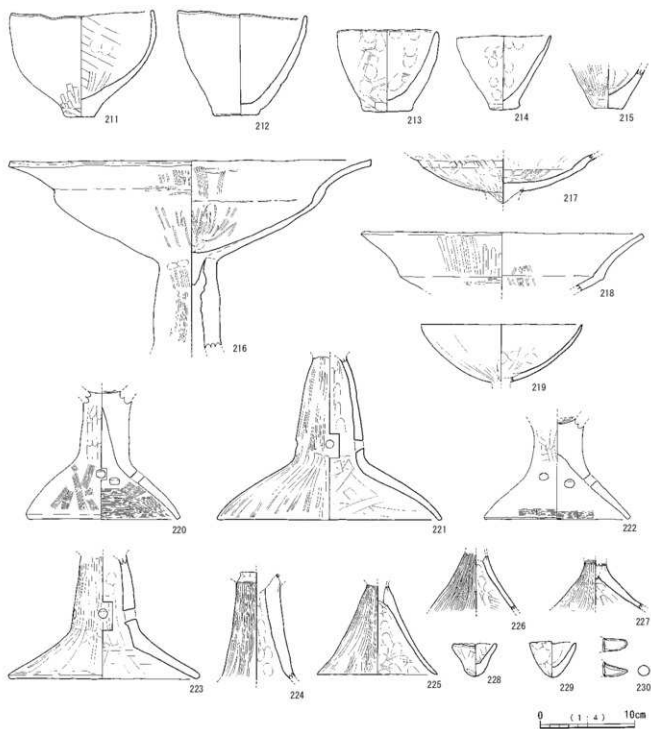
第51図 竪穴建物跡6号出土遺物2



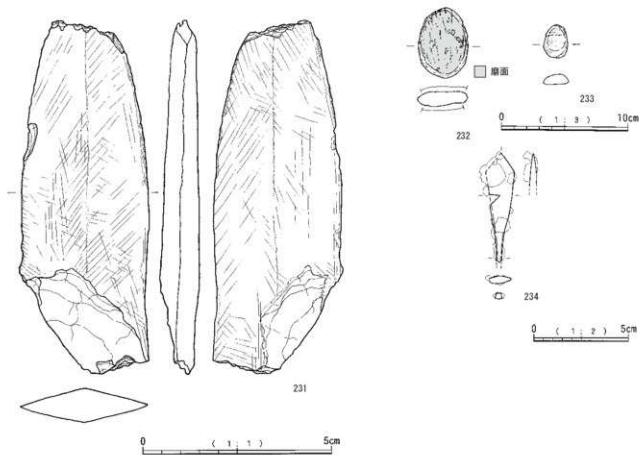
第 52 図 竪穴建物跡 6 号出土遺物 3



第 53 図 竪穴建物跡 6 号出土遺物 4



第 54 图 竖穴建物跡 6 号出土遺物 5



第 55 図 竪穴建物跡 6 号出土遺物 6

が附着している。下胴部外面は、1/3 程度剥離している。205 は薄手の壺で、内外面にハケ目とナデを施す。206 は大型で、上胴部はなで肩となる。207 は内面に一部ケズリ調整を施す。

208 は胴部が球形を呈し、口縁部は短く外反する。底部は平底で、胴部には扁平な刻目突帯文を上下 2 条巡らす。突帯は斜方向の刻目を施した後、横沈線を上部突帯に 1 条、下部突帯に 2 条施し、計 5 条の「見かけ上突帯文」としている。外面は接合面での剥落が多く見られる。

209 は胴部がそばん形を呈する小型壺である。

鉢形土器 (211 ~ 215)

211 は口縁が内弯し、底部は厚い平底となる。外面には細かい亀裂が入る。212 ~ 214 は口縁が直線的に開く平底の鉢である。212 は外面に多数の亀裂が入る。高坏 (216 ~ 227)

216 ~ 218 は、浅い皿状の坏部から口縁が大きく開く。216 は口径 38.2 cm の大型品である。217 は胎土が精良で、内外面に丁寧なミガキを施す。口縁部の煤は二次付着と考えられる。218 は口縁部外面に暗文風のミガキを縦方向に施す。

219 は楕形の坏部である。器壁の薄い精製品で、内外面は摩滅している。

220, 221 は脚裾部が碗状に膨らみ、穿孔が 4 か所施されている。222, 223 は裾部が脚柱部から屈折状に開き、穿孔が 222 は 4 か所、223 は 2 か所施されている。225 ~ 227 は脚裾部がスカート状に開く。外面にはハケ目状のミガキを施す。

小型土器、土製品 (228 ~ 230)

228, 229 は、手づくねで製作された小型土器である。230 は取手状の土製品である。

磨製石器 (231)

231 は床面直上で出土した磨製石器である。器種は、先端と基部を欠損しているため特定できないが、両面に鑄を形成しており石剣の可能性が高い。黒色の粘板岩を素材としている。

軽石製品・礫 (232, 233)

232 は両面に磨面を形成する扁平な軽石製品である。233 は碁石状の砂岩小礫である。

鉄銚 (234)

234 は圭頭銚である。厚さ 4 mm 程で銚身と基部の境が不明瞭である。

(6) 竪穴建物跡7号(第56図)

① 検出区・検出層位

D・E-40・41区, III層上面

② 規模・形態

北側を竪穴建物跡10号, 西側を水路によって切られており, 正確な平面形や規模は不明である。残された竪穴や柱穴から推測すると, 一辺6m程の方形住居跡であった可能性がある。

竪穴の北西部を中心に床面が一段下がる場所が確認された。南側は検出が難しく, 一部確認できなかった。一段下がった部分には, アカホヤと黒色土の混土(③層)があり, 貼床の可能性はある。

柱穴と考えられるビツは, 床面で10基検出された。P5~P7は, 水路部分に当たり, アカホヤ上面で検出した。この部分は, 竪穴が削平されていたが, 埋土や形態から竪穴建物跡7号に伴う柱穴と判断した。柱穴は壁近くに配置されるものが多く, P8, P9では柱痕跡や柱の当たりを確認している。また, P10は砥石を根石として再利用している。

土坑は, 竪穴の中心部付近で1基確認された。埋土に炭化物を多く含むため伊跡の可能性はある。

③ 埋土・遺物出土状況

埋土は3層に分かれ, 上層のIIc層と①層は自然埋没土である。土器の多くは, IIc, ①層で出土しており, 竪穴が埋没する途中段階で混入したものと考えられる。

②層の上部では焼土のほか, 灰白色の物質が②層と混ざり固結した状態で確認された。灰白色の物質は, 直径15cmの範囲に厚さ4cmで堆積しており, 灰と思われる。②層全体には, 炭化物が多く含まれ, 小さな炭化材も見られた。焼失行為に伴い形成された堆積層と推測される。③層は, 床が一段下がった部分でみられることから貼床の可能性はある。

竪穴南側の床面直上で, 礎, 石器等(258, 262~264)が出土したが, 床面及び②層で出土した遺物は少ない。

④ 性格

建物構造や出土遺物, 炭化材や焼土跡の状況から, 焼失竪穴住居跡と判断される。また, 穿孔を有する土器が出土しており, 祭祀行為が行われた可能性がある。

⑤ 出土遺物(第57・58図)

246, 248の鉢形土器は, 床面直上及び②層の出土で, 竪穴建物廃絶時の土器である。それ以外の土器は, 二次堆積である。

壺形土器(235~237)

全て小型品である。235は完形品で, 縦長の胴部から口縁部が外反する。底部は低脚で, 外面の下胴部は強いハケ目によって砂粒が動いている。237は頸部に刻目突帯文を1条施す。刻目はハケ目工具によって施

されている。内外面に細かいハケ目調整を施す。

壺形土器(238~241)

238は口縁部で内外面にナデ調整を施す。239は胴部で外面にミガキを施す。241は大型品で, 胴部中に突帯文を2条施す。下胴部には外側から穿孔を施している。

小型丸底壺, 鉢形土器(242~248)

242は小型丸底壺である。厚手の作りで, 口縁部と胴部の境にハケ目工具を押し当て低い段を形成する。外面に細かいハケ目を施す。

243~246は平底の小鉢である。243は焼成時に生じたと思われる亀裂が多数みられる。245は器高が低く, 口縁が内湾する。内外に指頭圧痕が多く残る。246は小さな平底の鉢で, 外面にミガキを施す, 丁寧な作りである。247は手づくねで作られた, 厚手の鉢である。

248は丸底の鉢である。口縁部が先細りし, 内湾する形態となる。器壁は厚く, 外面にハケ目調整を施す。

高坏(249~254)

249は口縁部が弱く外反する。粗製品で器壁が厚く, 内外面に粗いミガキを施す。胎土に赤色小石を含む。

250, 251は坏部が碗形となる。精製品で器壁が薄く, 砂粒を含まない精良土を使用している。白っぽい色調である。252は大型品である。精製品で, 特に作りが丁寧である。内面の一部が薄い茶色に変色している。外面は摩耗している。

253, 254は脚部がスカート状に開く。253は器壁の薄い精製品で, 色調が白っぽく, 外面にハケ目を施す。

小型土器(255)

255は手づくねで製作された小型土器である。

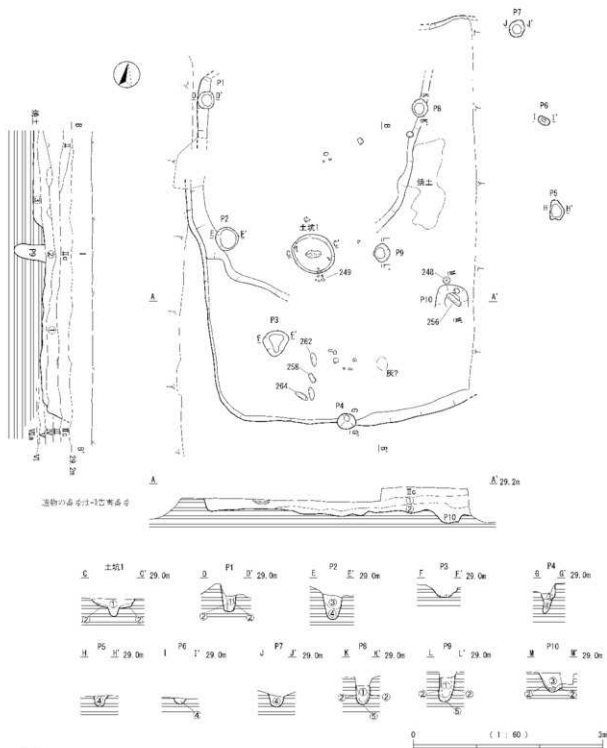
砥石(256, 257)

256はP10の根石に転用されていた。砂岩を利用した柱状の砥石で, 4面に砥面を形成する。鉄製品の研磨用と考えられ, 上部には線状の溝が残る, 側面を中心に鉄分が付着している。右側面の下半には自然面の一部が残存し, 左側面には破断面の痕跡が残る。

257は砂岩製砥石の破片で, 正面に砥面を形成している。

敲石, 礎(258~265)

258は全面に敲打痕がみられる。正面, 裏面, 左側面は敲打によって浅い凹みが形成されている。259は小さな扁平礎で, 上下両端に敲打痕が形成されている。260は正面に砥面, 下面に敲打痕が形成されている。砥石を敲石に転用した可能性がある261は正面, 裏面に敲打痕が集中し, 凹みを形成している。側面にも連続的に敲打痕があり, 一部は剥離状となっている。262~264は棒状の敲石である。262は左下側面に弱い敲打痕が形成されている。263は正面中央が凹んでおり, 右半分を中心に敲打痕が残る。上端の敲打は概



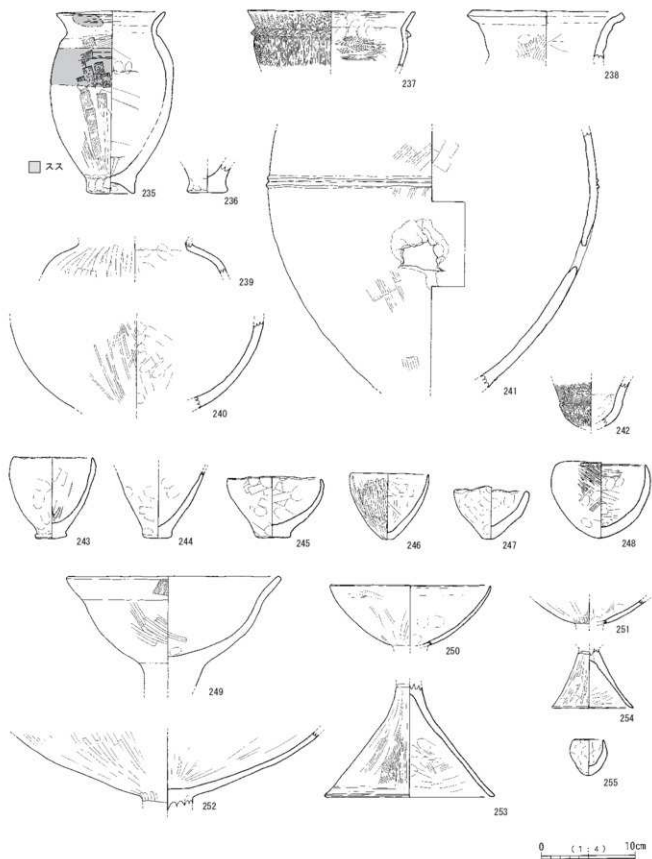
埋土

- ① 黒褐色砂質土 (10YR3/1) しまりがなく、大型の土器片含む。土器は廃棄された可能性有り。
- ② 黒色砂質土 (10YR2/1) ①層よりしまっている。炭化物を多く含む。上部に焼土が形成されている。敲石が出土。
- ③ にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/3) アカホヤと黒色土が混在した埋土。一段下がった部分に堆積。

土坑

- ① 黒色砂質土 (10YR1.7/1) 炭化物多い。アカホヤ混じり。
 - ② 黒色砂質土とアカホヤの混土。
- P1-P10
- ① 黒色砂質土 (10YR1.7/1) 柱痕跡
 - ② 黒色砂質土 (10YR2/1) 柱掘方埋土
 - ③ 黒色砂質土 (10YR1.7/1) アカホヤブロック混じり。しまり無し。
 - ④ 黒色砂質土 (10YR2/1)
 - ⑤ 柱の当たり。黒色土が硬化。

第56図 竪穴建物跡7号遺物出土状況及び完掘状況



第 57 図 竪穴建物跡 7 号出土遺物 1



第 58 図 竖穴建物跡 7号出土遺物 2

0 (1) 10cm

痕状で下端は一部剥離している。264は下端に弱い敲打痕が形成されている。

265は角礫状の自然礫である。焼けている。

(7) 竪穴建物跡8号(第59図)

① 検出区・検出層位

B・C-34区, II c層上面

② 規模・形態

西側は先行トレンチによって切られているが、壁際の小ピットP18～21が残っており、それから復元すると5m×3.8m程の隅丸長方形を呈すると推測される。掘り込みはV層(池田湖火山灰)まで達し、深さは30cm程である。

柱穴は中央に3基検出され、壁際では小ピットが18基確認された。P1とP2は、貼床上面で検出され、長軸方向に並び、掘り込みが約48cmと深いことから主柱穴と考えられる。柱痕跡の直径は、検出面で15cm前後である。柱穴痕跡周囲には硬い焼土(②層)がレンズ状に堆積しており、柱掘方埋土には黒色土とアカホヤを混ぜた土を使用している。

P3は、貼床(③層)下位で検出した。P1の断り割る際に断面に検出したため、上端の約半分は推定ラインである。検出面から、P1, 2以前に掘られた主柱穴と想定される。

P4～P21は、壁際で検出された直径5cmの小ピットである。検出面は貼床上面で、ピットの埋土に焼土が混じっていたため検出することができた。壁板を固定する柱穴の可能性がある。

竪穴の南側で、不整形な土坑を1基検出した。断面は摺鉢状で、小ピット同様、埋土に焼土が流れ込んでいる状況が確認できた。検出面は貼床上面である。

③ 埋土・遺物出土状況

埋土は①～③層に分層した。①層が自然埋没土、③層が貼床である。黒色土でややしまった①層を除去すると、焼土や黒色土が混ざる②層を検出した。②層を除去すると、貼床の③層が広がり、住居南側に土坑1、中央にP1, P2が検出できた。貼床は池田湖火山灰と黒色土の混土で硬くしまる。貼床を除去すると、池田湖火山灰が厚く堆積するV層の掘り込み面が広がった。

焼土は②層に形成され、竪穴南側に厚く堆積している。アメンボ状に床面に広がり、土坑内に流れ込んでいた。炭化材は、住居の東南部で出土しており、出土層位は焼土直上である。特に南西側では、1.1m×1.3mの範囲に、穿孔したと思われる炭化材や、板状の材が方向を揃えて出土した。

出土土器は、竪穴北側の床面直上で、変容した小型

丸底壺や土器溜まりを検出した。土器の出土位置は、焼土跡の範囲と異なっている。このほかに、直径1cmほどの円礫が多数出土した。

また、焼土層の土埃洗浄を行ったところ、クリ・ブナ科果実、イネ科穎果が検出された。

④ 炭化材について

表15は、計測可能な炭化材の一覧表である。炭化材は形態から以下に分類できる。

①幅3～9cm、厚み1～4cmの板材

②直径2～4cmの棒状の材

③直径1cmの杖状の材

最も多いのは①の板材で、竪穴の南西隅で方形にまとまって出土した。次に多いのが②の棒状の材で、住居跡東側で散乱した状態で出土している。炭化材の樹種同定では、スダジイ3点、ヒノキ科1点、アワブキ属3点、コナラ亜属コナラ節1点が確認されている。

⑤ 性格

建物構造や出土遺物、炭化材や焼土跡の状況から、焼失竪穴住居跡と判断される。変容した小型丸底壺は、一般的な形態ではなく、祭祀に使用するために製作した土器と考えられる。

また、火事のように住居全体が焼け落ちた状態ではなく、土器の破砕、廃棄は、建築材の焼却後か焼却行為の行われていない地点で行われている。このことから、建物の焼却処分などの廃屋儀礼に関連すると推測される。

⑥ 出土遺物(第60図)

土器は全て床面直上で出土した。

壺形土器(266～268)

266は胴部が縦長の楕円形を呈し、口縁部は短く外傾する。底部は丸底である。上胴部に縦方向のヘラ描沈線がみられる。267は大型品の胴部で、外側から穿孔を1か所施す。薄手で内外面にナデ調整を施す。

特殊土器(269)

269は小型丸底壺の変容形と考えられる土器で、胴部が左右に広がり、底部は突起状の平底となる。器厚は4mmしかなく、非常に薄い。頸部直下にはヘラ描による格子目文と横沈線を2条施し、肩部には曲線文を2条施している。真上から見ると長軸方向に沿って接合面があり、土器は接合面から割れている。胴部を2つに分けて作成し、合成することによって、製作したと考えられる。

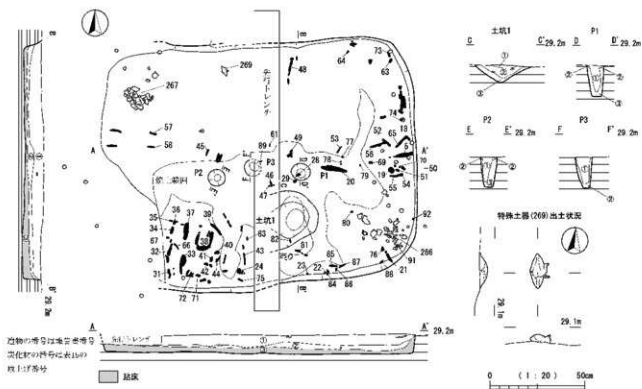
磨石・礫(270～272)

270は凝灰岩製の磨石で両面に磨面を形成している。271, 272は砂岩の小礫である。

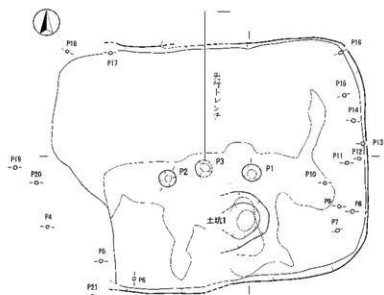
第 15 表 竪穴建物跡 8 号出土炭化材一覧

No.	取り上げ番号	出土層位	形状	法量 (cm)			備考	No.	取り上げ番号	出土層位	形状	法量 (cm)			備考
				長さ	幅	厚さ						長さ	幅	厚さ	
1	5		板材	29	7	2		37	56		板材	24	4	1	
2	18		棒状	17	4	2	断面円形	38	57		板材	9	4	2	アワブキ属
3	19		板状	9	6	1		39	58		杖状	10	1	1	ヤシ類?
4	20		板材	23	8	2		41	61		不明	1	4	1	
5	21		棒状	26	4	3	断面円形	42	63		板材	5	3	1	
6	22		不明	4	3	1		43	64		板材	6	3	1	
7	23		不明	2	3	1	ヒノキ科	44	65		棒状	15	3	3	断面円形
8	24		板材	5	7	3	アワブキ属	45	66		杖状	10	2	2	アワブキ属
9	27		板材	—	8	3	スダジイ	46	67		不明	4	1	1	
10	28		不明	5	2	1		47	68		不明	6	2	1	
11	29		不明	3	5	2		48	69		板材	6	8	2	
12	31		不明	13	3	1		49	70		板材	4	3	2	
13	32		棒状	30	2	2	断面円形	50	71		不明	4	2	1	
14	33		板材	20	5	2		51	72		板材	7	4	1	
15	34		棒状	13	5	4	断面円形	52	73		板材	8	2	2	
16	35		板材	8	3	1		53	74		不明	7	3	1	
17	36		板材	8	6	3		54	75		不明	9	3	2	
18	37		板材	26	8	4		55	76		板材	7	9	1	
19	38		棒状	17	5	2	スダジイ	56	77		不明	7	3	1	
20	39		板材	25	5	3		57	78		不明	4	3	1	
21	40		板材	8	5	2		58	79		不明	3	2	1	
22	41		板材	9	4	2		59	80		不明	3	4	1	
23	42		板材	16	4	1		60	81		不明	22	3	1	
24	43		杖状	65	2	1		61	82		不明	2	5	1	
25	44		杖状	14	2	1		62	83		棒状	8	3	1	断面円形
26	45		棒状	11	3	2	スダジイ	63	84		棒状	10	3	2	断面円形
27	46		板材	12	3	2		64	85		棒状	10	3	1	断面円形
28	47		板材	12	3	1		65	86		棒状	9	3	1	断面円形
29	48		棒状	43	4	3	タブノキ属	66	87		棒状	10	3	1	断面円形
30	49		不明	10	8	4		67	88		不明	8	1	2	
31	50		板材	6	4	1		68	89		不明	3	2	1	
32	51		板材	5	4	1		69	90		不明	5	2	1	
33	52		棒状	15	3	1	断面円形	70	91		不明	5	2	1	
34	53		棒状	14	3	1	断面円形	71	92		板材	3	3	1	
35	54		板材	4	4	1		72	93		板材	7	9	2	コナラ亜属コナラ属
36	55		板材	19	4	1									

— は計測不能



P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	29.0m
U	U	U	U	U	U	U	U	U	
P13	P14	P15	P16	P17	P18	P19	P20	P21	29.0m
U	U	U	U	U	U	U	U	U	



埋土

- ① 黒褐色砂質土 (2.5YR3/1) しまり有り。
- ② 焼土と黒色土が混ざる。東側は炭化物の量が少ない。中央部分に厚く堆積。
- ③ 粘床、池田層火山灰と黒色土の混土層。しまり有り。

P 1 - P 2

- ① 黒色砂質土 (10YR2/1) 柱痕跡。黄褐色土が混じる。
- ② 焼土と黒褐色土の混土。
- ③ 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 柱痕跡方土。2~3cmのアコホヤブロック含む。

P 3

- ① 黒色砂質土 (10YR1.7/1) 柱痕跡。2cm大の褐色ブロック混じる。
- ② 黒色砂質土 (10YR2/1) 柱痕跡方土。1mm大のバミス混じる。

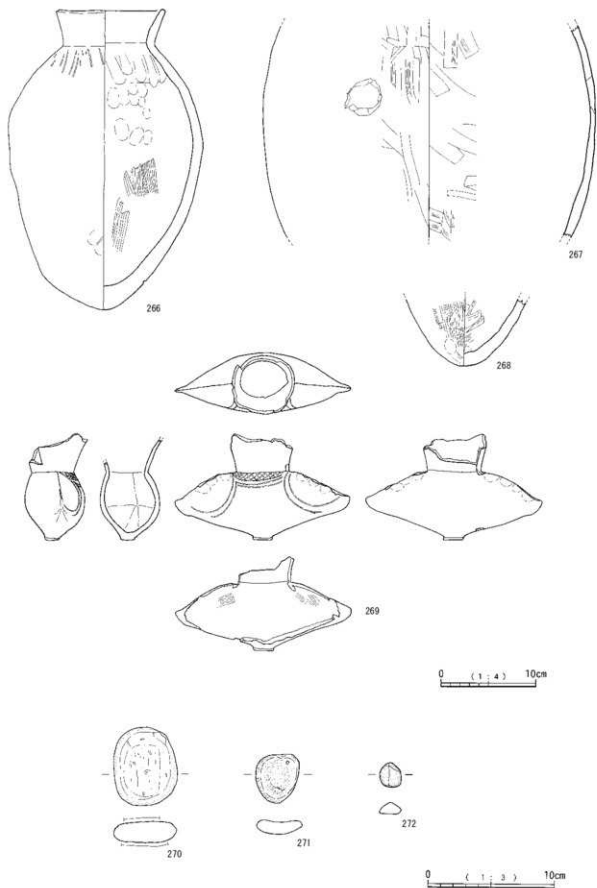
土坑

- ① 黒褐色砂質土 (10YR1/3)
- ② 黒褐色砂質土 (10YR1/3) 黄褐色土(焼土)が混じる。
- ③ 黒褐色砂質土 (10YR1/3) 褐色土(焼土)少量混じる。

小ピット

- ① 黒褐色砂質土 (10YR1/3) 焼土混ざり。

第 59 図 竪穴建物跡 8 号遺物出土状況及び完掘状況



第 60 図 竖穴建物跡 8 号出土遺物

(8) 竪穴建物跡9号(第61図)

① 検出区・検出層位

D-40区, III層上面

② 規模・形態

平面形が3.87m×3.05mの長方形を呈する。攪乱によって切られており残存状況はそれほど良くない。

竪穴の中央で直径24cmの柱穴を1基検出した。柱穴は検出が難しく、床面を数cm掘り下げた位置で検出した。柱痕跡の直径は8cm程度である。

③ 埋土・遺物出土状況

炭化材や完形品に近い土器が②層上面と床面で検出された。②層上面の炭化材は、柱穴近くに集まっており、長さが約40cmと残りがよい。炭化材の主軸は柱穴を向いており、上層構造の一部が焼け残った可能性がある。28の丸太材, 31の角材は直径が8~10cmで、梁や柱材の可能性がある。床面の炭化材は小片で数量も少なかった。

②層上面の土器の中には底部を縦に裁断し、胴部片を重ねた甕形土器(274)や穿孔のある軽石製品(282)が出土した。また、床面直上では完形に近い甕形土器(275, 276)が横向きで出土したほか、小型の鉢(281)が上を向いた状態で検出された。いずれも一括性が高く、意図的に遺棄されたものと判断される。

④ 炭化材について

- ① 直径3cm程度の棒状の材
- ② 幅6cm程度, 厚み2cmの板材
- ③ 直径8cm程度の丸太材
- ④ 幅10cm, 厚み6cmの角材

炭化材の樹種同定では、コナラ亜属クスギ節4点が確認されている。

⑤ 性格

焼土跡は確認されなかったが、大型の炭化材は二次堆積ではなく、現地で焼失、遺存したものと判断した。また、意図的に破砕された土器や穿孔をもつ軽石製品の祭祀に関連するものと考えられる。炭化材の出土状況や祭祀遺物の存在は、竪穴建物跡5号, 8号と同じであり、本遺構は焼土竪穴住居跡と考えられる。

⑥ 出土遺物(第62図)

273~276の甕形土器, 278の鉢形土器は竪穴廃絶時に近い②層の出土である。

甕形土器(273~277)

273は大型品で、器壁が薄く、外面はハケ目後ナデ調整、内面はナデ調整である。274は中型品で、口縁部が弱く外反し、胴部の張りが弱い。底部は低脚となる。内外面にハケ目を施す。

275, 276は小型品である。275は細身のプロポーションで内外面に細かな亀裂がみられる。外面は摩耗して

いる。276は口径が大きく、器高の低いプロポーションである。口縁部の浅い沈線は、製作途中で偶発的についたものと考えられる。口縁部にはハケ目を掻き上げ状に施す。277は靱圧痕が付着している。

鉢形土器(278~281)

278, 279は皿状の胴部から口縁部がL字状に屈折する。厚手の作りである。280は脚部の歪みが大きく、全体的に雑な作りである。器面が凹凸している。281は平底の小鉢で、口縁部が楕円形に成形されている。内外面はケズリ調整である。

軽石製品(282, 284)

282は方形に形を整えた軽石の中央に正面から穿孔を施している。下面には、浅い縦方向の溝がみられる。284は正面に切断面が2面形成され、断面が三角形形状を呈する。

台石(283)

正面に敲打痕が形成され、欠損後、上下両端に二次加工が施される。裏面は節理面である。

(9) 竪穴建物跡10号(第63図)

① 検出区・検出層位

E-40・41区, III層上面

② 規模・形態

平面形が3.5m×3.55mの方形を呈し、竪穴建物跡7号を切っている。本来の掘り込み面は、調査区壁面の観察から、IIc層付近と想定される。

竪穴の中央で柱穴1基, 北西部で土坑1基を検出した。柱穴は直径35cm, 深さ45cmで、柱痕跡と柱の当たりを確認した。土坑からは、敲石(296)が床面で出土した。

③ 埋土・遺物出土状況

埋土は、全て自然埋没土で4層に分層した。南西隅では敲石(288~295)や土器(285)が③から④層にかけて出土した。遺物は床面に近い位置で検出され、土器の多くは内面を上に向けた状態であった。出土状況から住居の廃絶直後に廃棄されたものとみられる。

④ 性格

竪穴の規模や構造、出土遺物から竪穴住居跡と判断される。

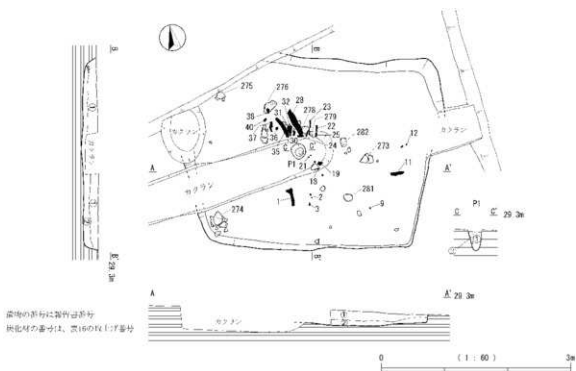
⑤ 出土遺物(第64図)

壺形土器, 高坏, 小型土器(285~287)

285は大型壺の底部である。平底で、内外面にハケ目後ナデ調整を施す。

286は楕円形の高坏である。器壁の薄い精製品で、内面は黒色である。

287は丸底の小型土器である。外面にハケ目を施す。



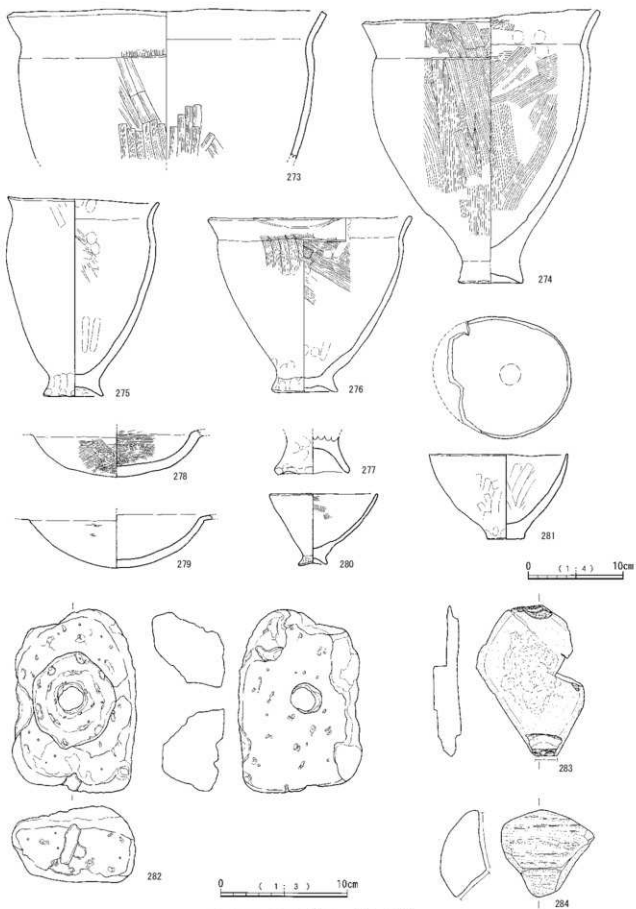
- 埋土
- ① 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 土器片含む。
 ② 黒色砂質土 (10YR1/2) 上面に炭化材、大型土器片、軽石製品含む。
 P 1埋土
 ① 黒色砂質土、柱痕跡。
 ② 黒色砂質土、柱礎片埋土。アカホヤ含む。しまり無し。

第 61 図 竪穴建物跡 9号遺物出土状況及び完掘状況

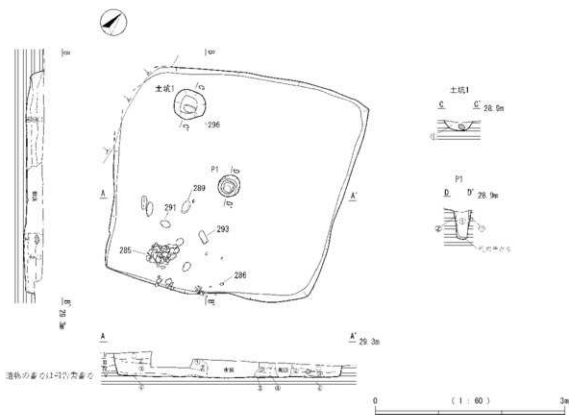
第 16 表 竪穴建物跡 9号出土炭化材一覧

No.	取り上げ番号	出土層位	形状	法 量 (cm)			備 考	No.	取り上げ番号	出土層位	形状	法 量 (cm)			備 考
				長さ	幅	厚さ						長さ	幅	厚さ	
1	1	②上	板材	24	3	2		12	24	②上	棒状	8	3	3	
2	2	②	小片	—	—	—		13	25	②上	小片	—	—	—	
3	3	②	小片	—	—	—		14	28	②上	丸太材	40	8	9	コナラ亜属クヌギ節
4	9	床上	小片	—	—	—		15	30・31	②上	角材	23	10	6	コナラ亜属クヌギ節
5	11	床上	板材	23	6	2		16	32	②	小片	—	—	—	
6	12	床上	小片	—	—	—		17	35	②	丸太材	40	6	6	コナラ亜属クヌギ節
7	18	②上	小片	—	—	—		18	36	②	小片	—	—	—	
8	19	②上	板材	14	6	2		19	37	②	小片	—	—	—	
9	21	②	小片	—	—	—		20	38	②	小片	—	—	—	
10	22	②	棒状	20	3	3		21	40	②	小片	—	—	—	
11	23	②	棒状	8	3	3	コナラ亜属クヌギ節								

— は計測不能



第 62 图 竖穴建物跡 9 号出土遺物



埋土

- ① 黒褐色砂質土 (10YR3/1) しまりなし。池田湖火山灰を少量含む。
- ② 黒褐色砂質土 (10YR3/2) しまりなし。アカホヤ火山灰を少量含む。③層より明るい。
- ③ 黒色砂質土 (7.5YR1.7/1) しまりあり。池田湖火山灰を多く含む。遺物を多く含む。
- ④ 黒色砂質土 (7.5YR2/1) しまりあり。③層より明るく池田湖火山灰を多く含む。アカホヤのブロックを所々に含む。

土坑埋土

- ① 黒色砂質土 (10YR2/1) 粘性やや強い。褐色土のブロック含む。
- P1 埋土
- ① 黒色砂質土 (10YR2/1) 柱痕跡。下部に柱の当たりが確認される。
 - ② 黒色砂質土 (10YR2/2) 柱間方埋土。しまりやや有り。アカホヤブロック多く含む。

第 63 図 竪穴建物跡 10号遺物出土状況及び完掘状況

敲石 (288 ~ 290)

288 は表裏面に敲打痕と磨面が形成されている。正面と裏面は、比較的大きな敲打痕が集中するため、浅い凹みとなっている。側面にも敲打痕が形成されている。289 は大型で厚みのある楕円礫を使用している。正面には敲打痕が集中し、その周囲に磨面が形成されている。下端にも僅かな敲打痕が認められる。裏面が特に焼けている。290 は大型の円礫を使用している。敲打痕は正面中央に集中し、周縁部には剥離を伴う敲打痕が形成される。一部が被熱により黒色又は赤色に変色している。

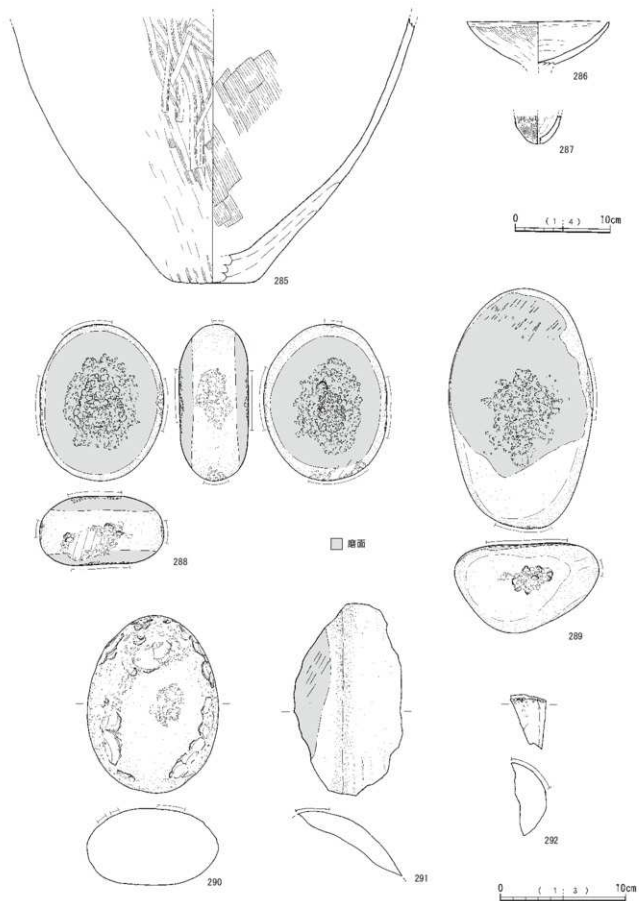
台石 (291, 292)

291, 292 は台石の一部で焼けている。砥面、敲打

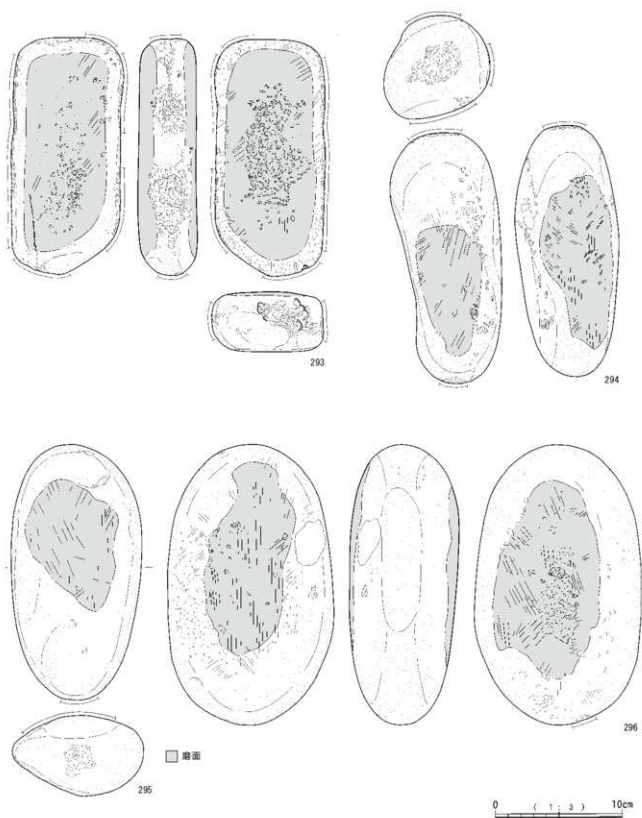
痕が形成されている。

砥石 (293 ~ 296)

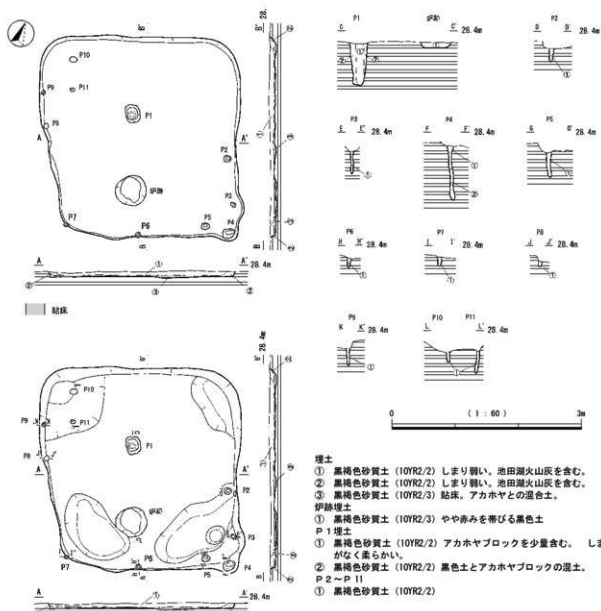
293 は扁平な砂岩角礫を使用している。正面と裏面を砥面として使用した後、敲打痕が形成されている。両側面は、敲打によって凹み、上端は著しい敲打により、形状が変化している。294 は棒状の垂円礫を使用している。砥面は正面と右側面に形成されている。上下両端の敲打痕は被熱しており、鉄分が付着している。鍛冶具の槌石として使用された可能性がある。296 は楕円形の円礫を素材とした砥石である。正面の砥面周囲には敲打痕と擦痕がみられる。裏面は敲打による浅い凹みが形成された後、砥面として利用されている。



第64図 竪穴建物跡10号出土遺物1



第 65 図 竪穴建物跡 10 号出土遺物 2



第 66 図 竪穴建物跡 11 号完掘状況

(10) 竪穴建物跡 11 号 (第 66 図)

① 検出区・検出層位

A・B-13区、V層上面

② 規模・形態

平面形が 2.97 m × 3.16 m の方を呈する。重機で表土を除去した後、V層上面で検出した。削平されているため、床面付近のみ残存している。

貼床上面で柱穴 1 基、炉跡 1 基を検出した。柱穴は平面プランが隅丸方形に近く、柱痕跡を確認できた。

この他に、杭状の小ピットが壁際で 9 基検出された。検出面は地山の直上であるが、本来は貼床上面から掘り込まれていた可能性がある。同様の小ピットは、竪穴建物跡 8 号で検出されており、壁板を固定する杭穴

の可能性がある。

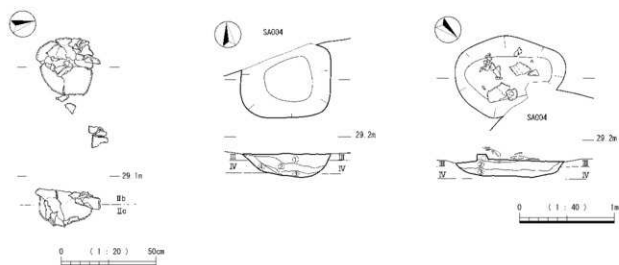
また、竪穴の四隅は地山層が浅く掘り込まれていた。

③ 埋土・遺物出土状況

埋土は、①、②層が自然埋没土で、③層が貼床である。出土遺物は確認されていない。

④ 性格

出土遺物は確認されなかったが、竪穴の形態、埋土から弥生時代終末から古墳時代前期頃の竪穴住居跡と推測される。



土坑3埋土

- ① 黒褐色砂質土 (7.5YR3/1) アカホヤブロック、土器片を含む。
- ② 暗褐色砂質土 (7.5YR3/3) しまり有り。アカホヤブロック、土器片含む。
- ③ 黒褐色砂質土 (10YR2/3)
- ④ 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 池田湖火山灰を少量含む。

土坑4埋土

- ① 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 焼土、炭化物を含む。
- ② 黒褐色砂質土 (10YR2/3) 褐色土ブロックを少量含む。
- ③ 黒褐色砂質土 (10YR2/3) 池田湖火山灰を少量含む。

第67図 遺物集中区、土坑

(11) 遺物集中区1 (第67図)

A-38区IIb層で、壺形土器の胴部が横倒しの状態で検出された。遺構内遺物の可能性を考え、周辺の精査を行ったが、遺構は検出されなかった。胴部外面が摩滅していることから、しばらくの間、地表に露出していた可能性がある。

出土遺物 (第68図)

297は大型壺の胴部である。幅広の突帯文を沈線で上下に分割した後、刻目を施している。刻目はハケ目工具で施文されている。外面は摩滅しており、内面は大部分が剥落している。

(12) 土坑3号

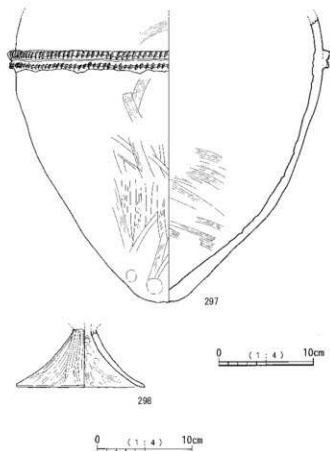
検出面はIII層上面である。平面プランは方形で、竪穴建物跡4号に切られている。埋土は4層に分かれ自然埋没している。

(13) 土坑4号

検出面はIII層上面である。平面プランは楕円形で、竪穴建物跡4号に切られている。遺物が①層で出土しているが、埋土が竪穴建物跡4号に近いので、竪穴建物跡4号の混入品である可能性がある。

出土遺物 (第68図)

298はスカート状に開く高環の脚部である。外面にはハケ目状のミガキを施す。



第68図 遺物集中区1、土坑4出土遺物

第17表 土器観察表(1)

() は復元口径・底径

検出番号	番号	出土段階	層	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調査	色調	胎土	備考	
31	64	壺穴2号	㊸	壺	32.6	8.0	38.8	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ	楕	角閃石、長石、赤色砂	表面に亀裂多発	
	65		㊸	壺	28.8	7.0	33.5	(外) ハケメ (内) 粗いハケメ、新緑	楕	角閃石、石英、赤色砂	外面付着。1条斜目突帯 (1964土2180)	
	66		㊸	壺	20.9	7.2	28.4	(外) ハケメ (内) ハケメ	(外) 楕 (内) 明赤褐色	長石、石英、赤色砂、白色砂	外面付着	
	67		㊸	壺	26.0	7.4	31.6	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ、ナデ	明赤褐色	角閃石、長石、石英、赤色砂、白色砂	外面付着	
	68		㊸	壺	-	6.8	-	(外) ハケメ、ナデ (内) ナデ	楕	角閃石、長石、石英、赤色砂		
	69		㊸	壺	-	7.0	-	(外) ハケメ、ナデ (内) ナデ	楕	角閃石、長石、石英、雲母、赤色砂、白色砂		
	70		㊸	埋土一括	壺	23.0	7.4	30.5	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ、ナデ	楕	角閃石、長石、石英、雲母、赤色砂	外面付着
	71		㊸	一部一括埋土	壺	22.2	7.2	22.2	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ、ナデ	楕	長石、石英、雲母	外面付着
	72		㊸	埋土一括	壺	18.0	-	-	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ	楕	角閃石、長石、石英、赤色砂	外面付着
	73		㊸	壺	19.2	9.9	13.4	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ、ナデ	明赤褐色	長石、石英、赤色小石	外面付着	
32	74	壺穴2号	㊸	壺	(12.4)	-	-	(外) ハケメ後ナデ (内) ハケメ	明赤褐色	長石、雲母、白色砂	外面付着	
	75		㊸	埋土一括	-	4.7	-	(外) ハケメ後ナデ (内) ナデ	赤褐色	角閃石、長石、石英、白色砂	外面付着	
	76		㊸	埋土一括	壺	-	3.7	-	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ、ナデ	楕	炭質土、矽質土、角閃石、石英、赤色砂、白色砂	
	77		㊸	埋土一括	鉢	10.2	4.9	12.7	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ後ナデ	にぶい楕	角閃石、石英、赤色砂、白色砂	外面は二次付着の可能性
	78		㊸	埋土一括	鉢	10.0	-	-	(外) ハケメ (内) ハケメ	楕	角閃石、石英、赤色砂	外面付着
	79		㊸	埋土一括	壺	-	-	(4.0)	(外) ハケメ後ナデ (内) 新緑	(外) にぶい赤褐色 (内) 楕	長石、石英、雲母、赤砂、白色砂	
	80		㊸	埋土一括	高坏	29.6	-	-	(外) ミガキ (内) ミガキ	楕	角閃石、石英、赤色砂	
	81		㊸	壺	(27.9)	-	-	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ、ナデ	楕	長石、石英、赤色砂	外面付着	
34	85	壺穴3号	㊸	壺	18.0	-	-	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ後ナデ	明赤褐色	角閃石、長石、白色砂		
	86		㊸	壺	-	-	9.6	(外) ナデ (内) ハケメ、ナデ	にぶい楕	角閃石、長石、白色砂		
	87		㊸	高坏	(35.0)	-	-	(外) ミガキ、厚紙 (内) 厚紙	楕	矽質土、長石、石英、赤色砂		
	89		㊸	壺	32.6	9.2	35.3	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ後ナデ	楕	角閃石、石英、赤色砂、白色砂	外面付着 (234土220)	
37	97	壺穴3号	㊸	壺	32.5	8.8	34.6	(外) ナデ、工具痕 (内) ハケメ後ナデ	明赤褐色	角閃石、長石、雲母、白色砂	1条突帯、外面付着 (393土218)	
	98		㊸	壺	(37.0)	(6.4)	32.0	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ、ナデ、ミガキ	楕	角閃石、長石、石英、白色砂	1条斜目突帯	
	99		㊸	壺	22.4	9.0	31.3	(外) ナデ (内) ナデ	楕	石英、赤色砂、白色砂	外面付着	
	100		㊸	壺	(28.0)	-	-	(外) ハケメ (内) 粗いナデ	(外) 楕 (内) 明赤褐色	角閃石、長石、雲母、白色砂	1条斜目目下突帯、外面付着、包合層と整合	
	101		㊸	壺	(24.3)	-	-	(外) ハケメ後ナデ (内) ハケメ後ナデ	楕	角閃石、長石、赤色小石		
	102		㊸	壺	28.2	8.4	26.7	(外) ハケメ、ナデ、ミガキ (内) ハケメ	(外) 楕 (内) 陶灰	角閃石、長石、石英、白色砂	外面付着	
	103		㊸	壺	22.2	6.4	24.0	(外) ナデ、工具痕 (内) ハケメ後ナデ	楕	角閃石、石英、赤色砂、白色砂、白色小石	黒泥	
	104		㊸	壺	36.5	7.8	26.2	(外) ハケメ (内) ハケメ	楕	角閃石、石英、赤色小石、白色小石	穿孔1個あり、外面付着、内外面整合あり	
39	105	壺穴4号	㊸	壺	(30.0)	(2.3)	26.8	(外) ナデ、ケズリ (内) ナデ	にぶい楕	角閃石、石英、赤色砂	内外面付着	
	106		㊸	壺	-	7.7	-	(外) ナデ (内) ナデ	楕	長石、石英、白色砂		
	107		㊸	壺	-	8.1	-	(外) ハケメ (内) ナデ	明赤褐色	長石、石英		
	108		㊸	壺	(41.2)	7.0	65.5	(外) ハケメ (内) ナデ	明赤褐色	角閃石、長石、赤色砂	1条突帯、覆付着	
	109		㊸	壺	-	-	-	(外) ナデ (内) ハケメ後ナデ	にぶい楕	角閃石、石英、赤色砂、白色砂	21条のヘア線状シズメ	
	110		㊸	壺	(4.0)	-	-	(外) ハケメ後ナデ (内) ハケメ後ナデ	楕	角閃石、石英		
	111		㊸	壺	-	4.7	-	(外) ナデ (内) ナデ	明褐色	長石、石英、赤色砂、白色砂		
	112		㊸	小型丸底鉢	12.0	2.0	8.0	(外) ナデ、ミガキ (内) ナデ	楕	石英、赤色砂、白色砂	1条斜目突帯	
40	113	壺穴4号	-	大型丸底鉢	(21.0)	-	-	(外) ナデ (内) ナデ	楕	長石、赤色砂、白色砂	1条斜目突帯	
	114		㊸	壺	27.2	-	16.9	(外) ナデ後ミガキ (内) ナデ、ミガキ	赤褐色	角閃石、石英、白色砂		
	115		㊸	壺	7.1	0.4	8.8	(外) ナデ (内) ナデ	にぶい赤褐色	角閃石、石英、赤色砂		
	116		㊸	壺	-	6.4	-	(外) ナデ (内) ナデ	浅黄褐色	長石、石英、白色砂		
	117		㊸	壺	(26.8)	(8.9)	17.5	(外) ナデ (内) ナデ	明赤褐色	角閃石、長石、石英、赤色砂、白色砂	亀裂多発	
	118		㊸	壺	(27.4)	-	-	(外) ハケメ後ナデ (内) ハケメ	にぶい楕	角閃石、石英		
	119		㊸	高坏	40.5	21.5	29.4	(外) ヘラミガキ (内) ナデ、ヘラミガキ	明赤褐色	角閃石、長石、石英	穿孔あり、覆あり	
	120		㊸	高坏	30.5	-	-	(外) ナデ、ヘラミガキ (内) ナデ、ヘラミガキ	楕	角閃石、長石、石英、赤色砂、黒色砂		
	121		㊸	壺	(14.8)	-	-	(外) ミガキ (内) ハケメ	にぶい楕	角閃石、石英、赤色砂、白色砂		
	122		㊸	壺	(13.3)	-	-	(外) ハケメ後ミガキ (内) ナデ後ミガキ	にぶい楕	角閃石、石英、白色砂		
	123		㊸	高坏	-	(13.2)	-	(外) ミガキ (内) ナデ	にぶい楕	矽質土、赤色砂		
	124		㊸	高坏	-	-	-	(外) ナデ (内) ナデ	にぶい楕	角閃石、長石、赤色砂		
125	㊸	小型土器	3.8	0.2	2.4	(外) ナデ (内) ナデ	楕	矽質土、長石、白色砂				

- は計測不能

第18表 土器観察表(2)

神田 番号	出土遺構	層	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	調査	色調	胎土	備考
40	竪穴4号	①	甕	-	-	-	(外) ハケメミガキ (内) ハケメ後ナデ	明褐色	黄褐色、長石、石英、赤色砂、 白色砂	種子痕あり
		②	甕	28.0	6.1	14.3	(外) ナデ (内) ナデ	橙	黄褐色、石英、赤色砂、白色砂	口縁部内外面保存者、沈 黙あり (1859 ± 20BP)
133		③	甕	137.2	-	-	(外) ナデ、ミガキ (内) ナデ、ミガキ	橙	黄褐色、石英、赤色砂、白色砂	1条刻目黄帯 (1959 ± 20BP)
134		④	甕	23.9	-	-	(外) ナデ (内) ハケメ後ナデ	橙	黄褐色、長石、白色砂	1条刻目黄帯、外面保存者 沈黙文あり
44		①	甕	32.7	-	-	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ	にぶい黄	長石、石英、赤色砂、白色砂	1条刻目黄帯
		②	甕	23.3	-	-	(外) ナデ (内) ハケメ	橙	長石、石英、赤色砂、白色砂	
		③	甕	28.2	-	-	(外) ナデ (内) ナデ	橙	黄褐色、長石、石英、白色砂	外面保存者
		④	甕	-	8.4	-	(外) ナデ、ミガキ (内) ナデ、ミガキ	橙	黄褐色、長石、石英、白色砂	
		⑤	甕	-	9.0	-	(外) ナデ (内) ハケメ	明赤褐色	黄褐色、白色砂	大部分が剥離
45		①-Ⅰa 定床直	大甕	45.9	8.6	39.6	(外) ハケメ、ナデ (内) ナデ	橙	黄褐色、長石、赤色砂、白色砂	1条刻目黄帯、穿孔1個 あり、外面保存者
		①-Ⅰb ②	甕	11.0	3.5	32.1	(外) ナデ、ミガキ (内) ナデ	橙	長石、赤色砂、白色砂	焼成時破損痕あり
		②、④-Ⅰc ③	甕	11.0	-	-	(外) ミガキ (内) ナデ	赤褐色	黄褐色、石英、赤色砂	
		④	甕	13.2	-	-	(外) ナデ (内) ケズリ後ナデ	明赤褐色	黄褐色、長石、白色砂	
		⑤、Ⅱ-Ⅰa ①	甕	16.3	3.0	35.2	(外) ハケメ後ミガキ (内) ハケメ後ミガキ	橙	黄褐色、長石、赤色砂	
145		②	甕	-	6.0	-	(外) ナデ、ミガキ (内) ナデ、ミガキ	にぶい黄	黄褐色、石英、赤色砂、白色砂	外面保存者、穿孔1個あり
146		③	甕	-	8.0	-	(外) ハケメ、ミガキ、ケズリ (内) ハケメ、ナデ	(外) 橙 (内) にぶい黄	黄褐色、長石、石英、赤色砂、 白色砂	外面保存者
147		④	小型丸 底甕	11.4	2.2	8.0	(外) ミガキ (内) ナデ	(外) 黒 (内) にぶい黄	長石、白色砂	
46		①、Ⅱ b 高坪	高坪	35.6	-	-	(外) 丁寧なミガキ (内) 丁寧なミガキ	明赤褐色	黄褐色、石英、雲母、白色砂	包含層と接合
		②	高坪	35.0	-	-	(外) ミガキ (内) ミガキ	橙	黄褐色、石英、白色砂	外面保存者
		③	高坪	-	16.4	-	(外) ミガキ (内) ナデ	にぶい黄	長石、赤色小石	穿孔あり
		④、Ⅱ c 高坪	-	14.5	-	-	(外) ミガキ (内) ミガキ	にぶい黄	黄褐色、石英、白色砂	器底部6号と接合、 包含層と接合
		⑤	小型土 器	15.3	0.3	4.1	(外) ナデ (内) ナデ	(外) 灰地 (内) 焼灰	長石、赤色砂、白色砂	
153		一拵	甕	28.0	16.8	13.5	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ、ナデ	橙	黄褐色、石英、白色砂	外面保存者 (1921 ± 21BP)
154	竪穴5号	①-Ⅰa 床直	甕	28.8	17.0	31.9	(外) ハケメ (内) ハケメ後ナ デ	(外) 灰地 (内) に ぶい黄	黄褐色、長石、石英、白色砂	器底部6号と接合、 外面保存者 (1916 ± 21BP)
		①-Ⅰb、②、 床直	甕	32.0	-	-	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ、ナデ	橙	黄褐色、石英、赤色砂、白色砂	1条刻目黄帯
156		①-Ⅰc	甕	24.3	-	-	(外) ナデ (内) ハケメ、ナデ	(外) 明赤褐色 (内) にぶい黄	黄褐色、長石、石英、赤色砂、 白色砂	1条刻目黄帯
47		①、②、Ⅱ a 土器	甕	25.2	6.4	29.9	(外) ナデ (内) ハケメ、ナデ、土器底	(外) 明赤褐色 (内) 加地	石英、赤色砂、白色砂	外面保存者 (1909 ± 21BP)
		③	甕	26.3	6.2	26.4	(外) ナデ (内) ハケメ、ナデ	橙	黄褐色、石英	外面保存者 (1916 ± 22BP)
		④-Ⅰa、Ⅱ a 床直	甕	28.0	7.0	26.5	(外) ナデ (内) ナデ	明赤褐色	長石、赤色小石、白色小石	外面保存者
		⑤、Ⅰc 床直	甕	22.1	7.4	23.1	(外) ナデ (内) ナデ	橙	長石、雲母、赤色砂、白色砂	外面保存者
		⑥	甕	25.8	4.6	14.2	(外) ハケメ後ナ デ (内) ハケメ	橙	長石、雲母、赤色砂、白色砂	外面保存者
162		①-Ⅰa、② ③	甕	16.7	-	-	(外) ナデ、丁寧なミガキ (内) ナデ	橙	緑黄土、赤色砂	縞縞状文
163		④-Ⅰa 二重口 底甕	-	-	-	(外) ナデ (内) ナデ	にぶい黄	緑粘土、石英、赤色砂		
164		床直、一拵	甕	-	1.0	-	(外) ミガキ (内) ナデ	明赤褐色	赤褐色	
165		床直	鉢	8.0	2.4	6.8	(外) ハケメ (内) ハケメ	橙	長石、赤色砂	
166		①-Ⅰa	鉢	-	3.0	-	(外) ナデ (内) ナデ	明赤褐色	黄褐色、長石、石英、赤色砂、 白色砂	
167		②	鉢	23.0	7.3	18.2	(外) ハケメ後ナデ (内) ナデ	明赤褐色	黄褐色、長石、白色砂	
48		③	鉢	-	-	-	(外) ナデ、軽いミガキ (内) ナデ	(外) にぶい黄 (内) にぶい黄	黄褐色、長石、石英、赤色砂、 白色砂	
		④	鉢	-	-	-	(外) ナデ、軽いミガキ (内) ナデ	(外) にぶい黄 (内) にぶい黄	黄褐色、長石、石英、赤色砂、 白色砂	
		⑤	高坪	21.2	-	-	(外) ナデ、ミガキ (内) ナデ、ミガキ	橙	黄褐色	
		⑥、①-Ⅰa ②-Ⅰa、Ⅱ b	高坪	32.0	-	-	(外) ハケメ後ミガキ (内) ハケメ後ミガキ	橙	黄褐色、赤色砂、白色砂	包含層と接合
		⑦、⑧	高坪	-	-	-	(外) ハケメ後ミガキ (内) ミガキ	橙	長石、石英、赤色砂	
172		①-Ⅰa、 ②-Ⅰa	高坪	-	-	-	(外) ミガキ (内) ナデ	明赤褐色	黄褐色、石英、赤色砂、白色砂	
173		①、②	高坪	-	24.0	-	(外) ミガキ (内) ナデ	明赤褐色	黄褐色、長石、石英、白色砂	穿孔あり
174		③	高坪	-	-	-	(外) ミガキ (内) -	明赤褐色	赤褐色	穿孔あり、内面収縮あり
175		④、①-Ⅰa 小型土 器	高坪	5.2	-	-	(外) ナデ (内) ナデ	にぶい黄	長石、赤色砂、白色砂	
50	竪穴6号	床直	甕	39.6	7.6	35.0	(外) ハケメ後ナ デ (内) ハケメ後ナ デ	橙	黄褐色、石英、赤色砂、白色砂	穿孔あり、1条刻目黄帯
		①、床直	甕	37.0	-	-	(外) ハケメ後ナ デ (内) ハケメ後ナ デ	橙	黄褐色、石英、白色砂	1条刻目黄帯

- は計測不能

第19表 土器観察表(3)

時期番号	番号	出土遺構	層	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調査	色調	胎土	備考
50	186		一括	甕	(25.7)	-	-	(外) ナズ, 割罫 (内) 幅広いハケメ	橙	赤色砂, 白色砂	外面煤付着
	187		①, Ⅱ b	甕	(30.0)	-	-	(外) 幅広いハケメ, ナズ (内) ハケメ, ナズ	橙	黄褐色, 長石, 白色砂	外面煤付着, 包含物と煤合
	188		-	甕	(28.0)	-	-	(外) ハケメ後ナズ (内) ハケメ後ナズ	橙	黄褐色, 石英	
	189		①, Ⅱ a, Ⅱ b	甕	23.5	8.5	28.3	(外) ナズ, クワリ状ミガキ (内) ナズ	明赤褐色	黄褐色, 石英, 白色砂	外面煤付着, 包含物と煤合 (187 ± 20P)
51	190		埋土内	甕	24.5	7.8	29.5	(外) ナズ (内) ナズ	にぶい橙	黄褐色	
	191		-	甕	29.2	6.8	32.6	(外) ナズ, ハケメ (内) ナズ, ハケメ	橙	黄褐色, 石英, 赤色砂, 白色砂	内面剥落
	192		①, Ⅱ, ②, ③, Ⅲ a, Ⅲ b	甕	26.5	7.2	28.7	(外) ナズ (内) ナズ	にぶい橙	黄褐色, 白色砂	
	193		灰土一括埋土	甕	(26.3)	-	-	(外) ハケメ, ナズ (内) ハケメ, ナズ	橙	石英, 白色砂	細粒あり, 外面煤付着, 焼成時破損あり (189 ± 20P)
52	194		埋土内	甕	23.5	7.8	31.0	(外) ナズ, 割罫 (内) ナズ	にぶい橙	長石, 石英, 白色砂	外面煤付着, 外面割罫, 二次焼成時黄色
	195		①, Ⅲ a, Ⅲ b	甕	(25.0)	-	-	(外) ナズ, 幅広いミガキ (内) ナズ, ハケメ	橙	精良土, 白色砂	
	196		①	甕	(23.8)	-	-	(外) ハケメ後丁寧ナズ (内) ハケメ, 丁寧ナズ	黄褐色	黄褐色, 石英, 白色砂	外面煤付着
	197		①, ①-一括	甕	(31.0)	-	-	(外) ハケメ後ナズ (内) ナズ, ハケメ後ナズ	橙	黄褐色, 石英, 赤色砂	1条刻目突部, ヘラ指式 備わらず, 外面煤付着, 包 含物と煤合
53	198		一括, Ⅱ b	甕	(24.7)	-	-	(外) ハケメ (内) ハケメ	橙	黄褐色, 石英, 赤色砂	外面煤付着, 包含物と煤合
	199		-	甕	-	10.4	-	(外) ハケメ, ハケメヘラミガキ (内) ハケメ, ミガキ状ナズ	赤褐色	黄褐色, 長石, 石英, 白色砂	
	200		-	甕	(18.0)	-	-	(外) ナズ (内) ハケメ後ナズ	橙	黄褐色, 黄褐色, 白色砂	内外赤煤付着, 内面に二次 付着の可能性あり
	201		-	甕	(16.6)	-	-	(外) ナズ, 割罫 (内) ナズ	橙	長石, 石英, 白色砂	口縁部煤付着
	202		①	大甕	-	8.4	-	(外) ハケメ後丁寧ナズ (内) 丁寧ナズ	橙	黄褐色, 長石, 石英, 白色砂	
	203		-	大甕	-	7.6	-	(外) ナズ (内) ナズ	にぶい赤褐色	黄褐色, 長石, 石英, 赤色砂, 白色砂	焼成時破損す
	204		-	甕	11.3	5.0	41.1	(外) ナズ, ミガキ, 割罫 (内) ハケメ, ナズ	橙	黄褐色, 長石, 白色砂	外面煤付着
	205		①, 一括, Ⅲ a, Ⅲ b	甕	(15.0)	-	-	(外) ハケメ, ナズ (内) ハケメ, ナズ	橙	黄褐色, 長石, 赤色砂	
	206	竪穴6号	①, 一括埋土	甕	(15.0)	-	-	(外) ハケメ, ミガキ (内) ハケメ, ハケメ後ナズ	(外) 橙 (内) 明赤褐色	石英, 赤色砂, 白色砂	
	207		-	甕	(12.2)	-	-	(外) ハケメ後ミガキ (内) ミガキ, 一部クワリ	明赤褐色	黄褐色, 白色砂	
208	-		甕	17.2	7.0	42.7	(外) ナズ, ミガキ (内) ハケメ後ナズ	明赤褐色	白色砂	見247伏突部原文	
209	-		①, Ⅱ b 下	甕	-	-	-	(外) ミガキ (内) ナズ	橙	精良土	
210		①, ①-一括	甕	-	8.0	-	(外) ミガキ (内) ナズ	にぶい橙	黄褐色, 石英, 赤色砂, 白色砂		
54	211		-	鉢	15.3	2.9	11.3	(外) ナズ, 工長ナズ (内) ナズ (内) ナズ	にぶい橙	黄褐色, 石英, 白色砂	
	212		床着	鉢	13.5	4.8	11.2	(外) ナズ (内) ナズ	橙	石英, 赤色砂, 白色砂	外面に亀裂多数
	213		①, ②	鉢	10.8	3.4	8.7	(外) ナズ (内) ナズ	橙	黄褐色, 長石, 白色砂	
	214		①-一括	鉢	(10.0)	(5.2)	8.0	(外) ナズ (内) ナズ	にぶい橙	黄褐色, 石英, 赤色砂, 白色砂	
	215		①	鉢	-	3.0	-	(外) ミガキ (内) 板ナズ後ナズ	明褐色	黄褐色, 長石, 石英, 赤色砂, 白色砂	
	216		①, Ⅲ a, Ⅲ b, Ⅲ c, ナケナ	高坏	(38.2)	-	-	(外) ナズ, ミガキ (内) ナズ, ミガキ	(外) にぶい橙 (内) にぶい赤褐色	黄褐色, 石英, 赤色砂, 白色砂	包含物と煤合
	217		床着	高坏	-	-	-	(外) 丁寧なミガキ (内) 丁寧なミガキ	明褐色	精良土, 黄褐色, 長石, 石英, 白色砂	外面煤付着
	218		床着	高坏	(30.0)	-	-	(外) ミガキ (内) ミガキ	橙	黄褐色, 石英, 白色砂	
	219		一括	高坏	17.0	-	-	(外) ミガキ後ナズ, 割罫 (内) ミガキ後ナズ, 割罫	橙	黄褐色, 長石, 石英, 白色砂	精良土
	220		②	高坏	-	16.2	-	(外) ミガキ, ハケメ状ミガキ (内) ハケメ, ナズ	橙	石英, 赤色砂, 白色砂	穿孔あり
	221		①	高坏	-	24.0	-	(外) 丁寧なミガキ (内) ヘラミガキ	明黄褐色	黄褐色, 長石, 石英, 赤色砂	穿孔あり, 外面煤付着, 内面破り痕
	222		床着	高坏	-	15.6	-	(外) ミガキ, ナズ (内) ナズ	橙	石英, 紫褐色, 赤色砂, 白色砂	穿孔あり
	223		床底	高坏	-	19.8	-	(外) ミガキ (内) ミガキ	明褐色	黄褐色, 長石, 石英, 白色砂	穿孔あり, 外面煤付着
	224		①	高坏	-	-	-	(外) ミガキ (内) ナズ	赤褐色	石英, 赤色砂	内面破り痕あり
	225		一括	高坏	-	12.8	-	(外) ハケメ状ミガキ (内) ヘラナズ	にぶい橙	長石, 石英, 赤色砂, 白色砂	竪穴埋物跡5号と煤合
	226		①	高坏	-	-	-	(外) ハケメ状ミガキ (内) ヘラミガキ	明黄褐色	黄褐色, 長石, 石英, 赤色砂	
	227		-	高坏	-	-	-	(外) ハケメ状ミガキ (内) ヘラクワリ	明赤褐色	黄褐色, 長石, 石英	
	54	228		-	小型土器	4.7	0.8	3.5	(外) ナズ (内) ナズ	橙	石英
229			-	小型土器	4.9	0.2	3.8	(外) ナズ (内) ナズ	橙	石英, 白色砂, 赤色小石	
230			Ⅱ b	土製品	-	-	-	(外) ナズ (内) ナズ	内黄褐色	精良土, 石英	肥テ少

- は計測不能

第20表 土器観察表(4)

棟号 番号	出土層	層	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調査	色調	胎土	備考			
235	57	壱穴7号	-	壱	11.5	5.2	19.3	(外) 黒いハケメ (内) 下黒ナデ	(外) 橙 (内) 陶灰	角閃石、石英、白色砂	外面保存層 (1917 ± 200P)		
236			-	壱	-	3.6	-	(外) ナデ (内) ナデ	明黄陶	角閃石、長石、赤色砂、白色砂			
237			I	壱 (17.4)	-	-	-	(外) ハケメ (内) ハケメ、ナデ	橙	角閃石、石英、赤色砂、白色砂	1条和目刻目突部		
238			I	壱 (18.7)	-	-	-	(外) ハケメ、ナデ (内) ナデ	にぶい黄陶	長石、石英、赤色砂、白色砂			
239			-	壱	-	-	-	(外) ヘラミガキ (内) ナデ	橙	角閃石、石英、赤色砂、白色砂			
240			II	壱	-	-	-	(外) ミガキ (内) ナデ	(外) にぶい陶 (内) 橙	角閃石、長石、雲母、白色砂			
241			I	壱	-	-	-	(外) ハケメ、摩滅 (内) ハケメ、摩滅	(外) にぶい黄陶 (内) 灰黄	角閃石、長石、石英、赤色砂、白色砂	2条突部、穿孔あり		
242			I	小型丸 底壱	-	-	-	(外) ハケメ (内) ナデ	にぶい黄陶	角閃石、長石、赤色砂、白色砂			
243			II c	鉢形 土器	8.8	3.2	8.6	(外) ナデ (内) ナデ	(外) 明黄陶 (内) 橙	石英、赤色砂、白色砂	焼成時亀裂多数の可能性		
244			I	鉢形 土器	-	2.8	-	(外) ナデ (内) ナデ	明赤陶	角閃石、長石、石英、赤色砂、白色砂			
245			床直	鉢形 土器	16.2	3.7	6.5	(外) ナデ (内) ナデ	明赤陶	石英、赤色砂、白色砂			
246			床直	鉢形 土器	8.4	1.0	7.0	(外) ミガキ (内) ナデ	橙	石英、赤色砂、白色砂、 赤色小石	内外面保存層		
247			埋土内	鉢形 土器	8.0	1.0	5.5	(外) ナデ (内) ナデ	にぶい陶	角閃石、石英			
248			II	鉢形 土器	9.6	0.8	8.3	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ後ナデ	橙	石英、赤色砂、白色砂			
249			II	高坏 (22.0)	-	-	-	(外) 黒いミガキ (内) 黒いミガキ	橙	角閃石、石英、赤色小石			
250			I	高坏 17.0	-	-	-	(外) ミガキ後ナデ (内) ナデ	にぶい陶	精良土、角閃石、長石	精製品		
251			I	高坏	-	-	-	(外) ミガキ後ナデ (内) ミガキ後ナデ	にぶい陶	角閃石、長石	精製品		
252			I	高坏	-	-	-	(外) ヘラミガキ、摩滅 (内) 丁寧なヘラミガキ	灰黄	角閃石、赤色砂	精製品		
253			I	高坏	-	18.0	-	(外) 丁寧なハケメ (内) ハケメ	灰黄陶	長石、黄褐色砂	精製品		
254			II	高坏	-	8.6	-	(外) ヘラミガキ (内) ミガキ	明赤陶	角閃石、石英、赤色砂			
255			-	小型 土器	3.2	0.7	3.8	(外) - (内) -	にぶい黄陶	角閃石、長石、白色砂			
266			60	壱穴8号	床直、II b	壱	(11.8)	0.5	32.5	(外) ナデ (内) ナデ、ミガキ	橙	長石、石英	包合層と接合、ヘラ跡さ び線文
267					床直	丸壱	-	-	-	(外) 丁寧なナデ (内) 丁寧なナデ	橙	石英、雲母、赤色砂	穿孔あり
268	II b	壱			-	(1.0)	-	(外) ハケメ (内) ハケメ後ナ デ	(外) にぶい赤陶 (内) 灰陶	角閃石、石英、赤色砂、白色砂	包合層と接合		
269	床直	特殊 土器			-	2.1	-	(外) ハケメ、ナデ (内) -	明黄陶	精良土、角閃石、石英	ヘラ跡さび線文		
273	62	壱穴9号	II上	壱	(34.0)	-	-	(外) ハケメ後ナデ、ハケメ (内) ナデ、ハケメ	橙	角閃石、長石、石英、赤色砂、 白色砂、赤色小石	外面保存層		
274			I、II、II上	壱	25.3	6.6	29.0	(外) ハケメ (内) ハケメ	橙	長石、石英、赤色砂	胴部下半二次焼成 (1931 ± 220P)		
275			①、②	壱	(15.7)	16.1	21.3	(外) 下黒ナデ、摩滅 (内) ハケメ後ナデ	橙	角閃石、長石、石英、白色砂	内外面細小穴亀裂		
276			床直	壱	21.4	6.6	18.5	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ、ナデ	橙	角閃石、石英、赤色砂	(1966 ± 220P)		
277			I	壱	-	7.5	-	(外) ナデ (内) ナデ	橙	角閃石、長石、石英			
278			II	鉢	-	0.8	-	(外) ハケメ (内) ハケメ	にぶい陶	角閃石、石英、赤色砂			
279			II	鉢	-	1.3	-	(外) ナデ (内) ナデ	にぶい陶	角閃石、長石、石英、赤色砂			
280			I	鉢	11.3	2.9	7.6	(外) ナデ、後ナデ (内) ハケメ後ナデ	橙	角閃石、長石、赤色砂			
281			-	鉢	(14.7)	3.8	9.0	(外) タヌ目後ナデ (内) タヌ目後ナデ	明赤陶	角閃石、石英、雲母、白色砂			
285			64	壱穴10号	③	壱	-	8.5	-	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ、ナデ	(外) 明黄陶 (内) 明赤陶	角閃石、石英、赤色砂、白色砂	
286	①、②	高坏			15.0	-	-	(外) ハケメ後ナデ (内) ナデ	(外) にぶい黄陶 (内) 黒色	精良土、石英、赤色砂、白色砂	精製品		
287	-	小型 土器			-	0.6	-	(外) ハケメ (内) ナデ	にぶい陶	角閃石、石英、赤色砂			
297	68	土器 集中区1	II b、II c	壱	-	1.5	-	(外) ハケメ、摩滅 (内) ハケメ、剥落	橙	石英、雲母、赤色砂	2条和目刻目突部、包合 層と接合		
298			土灰4	I	高坏	-	13.6	-	(外) ハケメ後ミガキ (内) ナデ	にぶい黄陶	角閃石、長石、石英、赤色砂、 白色砂		

- は計測不能

第21表 鉄製品観察表

棟号番号	番号	遺構名	層	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	備考	図面番号
48	183	壱穴5号	床直	鉄鎌	4.2	2.2	0.2	6.3	木質付着	19
55	234	壱穴6号	埋土一括	鉄鍬	5.7	1.5	0.4	4.7		18

- は計測不能

第22表 石器観察表

挿入番号	番号	遺構名	層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	備考
32	81	竪穴2号	①一括	礫石	9.60	3.00	2.75	88.23	
	82	竪穴2号	③	砥石	8.90	10.90	5.50	745.12	
	83	竪穴2号	③	砥石	12.00	8.80	6.60	858.00	
34	88	竪穴3号	①	礫石	9.40	8.25	5.95	695.43	
	89	竪穴3号	③	礫石	14.60	8.10	6.50	1104.02	焼けている
	90	竪穴3号	③	礫石	17.70	8.00	7.10	1222.18	焼けている
	91	竪穴3号	③	台石	22.40	10.00	7.40	2712.34	
	92	竪穴3号	⑤	台石	22.10	9.75	7.85	1882.90	焼けている
	93	竪穴3号	①	軽石製品	10.50	5.80	3.70	41.67	
	94	竪穴3号	埋土	軽石製品	5.30	6.80	3.30	17.90	
41	128	竪穴4号	⑤直上	台石	25.80	21.75	13.90	13860.00	
	129	竪穴4号	埋土	軽石製品	9.00	7.10	7.50	108.40	
	130	竪穴4号	—	礫石	6.10	7.20	1.45	95.00	
	131	竪穴4号	③	礫	2.60	2.10	0.50	4.20	
	132	竪穴4号	③	礫	2.70	2.10	1.20	9.00	
	176	竪穴5号	床直	軽石製品	13.50	11.10	5.10	180.87	
	177	竪穴5号	床直	軽石製品	11.40	8.20	4.80	87.45	
48	178	竪穴5号	④一括	軽石製品	9.20	4.50	3.10	30.60	
	179	竪穴5号	①	砥石	9.90	3.00	1.50	85.02	
	180	竪穴5号	①	礫石	14.10	3.00	1.78	115.38	
	181	竪穴5号	一括	礫	2.20	1.40	0.50	2.30	
	182	竪穴5号	一括	礫	2.40	1.90	1.20	5.80	
	231	竪穴6号	床直	摩製石剣	9.40	3.40	0.90	31.40	
55	232	竪穴6号	①一括	軽石製品	5.50	4.00	1.20	9.20	
	233	竪穴6号	①一括	礫	3.10	1.90	0.80	5.90	
	256	竪穴7号	P10	砥石	27.50	7.15	5.60	1713.80	
58	257	竪穴7号	II	砥石	8.20	2.80	6.40	205.00	
	258	竪穴7号	②床直	礫石	16.95	8.10	5.40	1180.32	
	259	竪穴7号	②	礫石	2.90	2.55	1.35	15.44	
	260	竪穴7号	II	礫石	6.85	3.20	6.00	147.93	
	261	竪穴7号	②	礫石	11.29	9.88	4.45	820.32	焼けている
	262	竪穴7号	②床直	礫石	22.50	8.20	5.80	1363.14	
	263	竪穴7号	②床直	礫石	20.00	8.00	7.75	1603.84	
	264	竪穴7号	②床直	礫石	22.20	10.00	7.25	1814.88	
	265	竪穴7号	II	礫	17.90	9.50	8.70	2266.23	焼けている
	60	270	竪穴8号	—	磨石	6.20	5.00	1.70	73.50
271		竪穴8号	一括	礫	3.80	3.50	0.70	20.40	
272		竪穴8号	一括	礫	1.90	1.70	0.90	4.30	
62	282	竪穴9号	②	軽石製品	14.40	9.80	6.00	126.50	
	283	竪穴9号	I	台石	11.90	8.50	2.40	207.24	
	284	竪穴9号	I	軽石製品	7.30	6.80	3.60	24.90	
64	288	竪穴10号	③下	礫石	12.36	9.75	5.50	1010.35	
	289	竪穴10号	②下	礫石	19.00	11.30	7.01	2056.05	焼けている
	290	竪穴10号	①下	礫石	14.10	10.33	6.00	1104.57	
	291	竪穴10号	③下	台石	15.10	8.30	1.70	275.00	焼けている
65	292	竪穴10号	③	台石	3.90	2.70	5.80	60.00	焼けている
	293	竪穴10号	②	砥石	18.80	8.70	4.60	1449.54	
	294	竪穴10号	②下	砥石	19.80	8.50	8.10	1808.59	
	295	竪穴10号	②下	砥石	20.20	13.50	6.60	1910.36	焼けている
	296	竪穴10号	P11	砥石	22.20	13.10	8.70	3671.52	

— は計測不能

第4節 古墳時代終末期（7世紀）の調査

1 調査の概要

古墳時代終末期の遺構・遺物は、B～G-26～41区で検出された。遺構は、竪穴建物跡9軒、掘立柱建物跡7棟、溝状遺構3基、地下式横穴墓1基である。竪穴建物跡と溝状遺構の埋土には、間聞岳起源の紫コラ（西暦874年）及び桜島起源のP4火山灰（西暦764年）が堆積している。遺構はⅢ層上面の検出事例が多いが、本来の掘り込み面はⅡb層付近と想定される。

遺物は板貫式土器新段階、須恵器、礫石器、鉄製品が出土した。遺物は、包含層が削平されているため、遺構内で出土したものが多く。

2 竪穴建物跡

（1）竪穴建物跡12号（第71図）

① 検出区・検出層位

D-36・37区、Ⅱc層上面

② 規模・形態

平面形が5.4m×5.6mの方形を呈する。

貼床上面で、炉跡1基、柱穴8基を検出した。炉跡は竪穴中央に配置され、埋土に焼土跡を含んでいる。貼床上面では、炉跡を中心に硬化面が形成されている。

柱穴は炉跡の四方に配置され、4本柱の建物跡と想定される。各柱穴は、2基1組になることから、上屋の建て替えが1回行われていると考えられる。

貼床を除去すると、床面が2段掘りとなり、浅い土坑状の掘り込みが竪穴北部で検出された。

③ 埋土・遺物出土状況

埋土は、①～⑬層に分層した。①～⑫層が自然埋没土、⑬層が貼床である。⑬層には、間層を挟んで上部に紫コラ、下部にP4火山灰が堆積している。

遺物は貼床直上で土器片や礫石器、青銅製品が出土した。竪穴南側では、6個の礫石器がまとめて検出されている。これらの遺物は、竪穴廃絶後に廃棄されたと考えられる。

④ 性格

竪穴の規模や構造、炉跡の存在、出土遺物から竪穴住居跡と判断される。

⑤ 出土遺物（第72図）

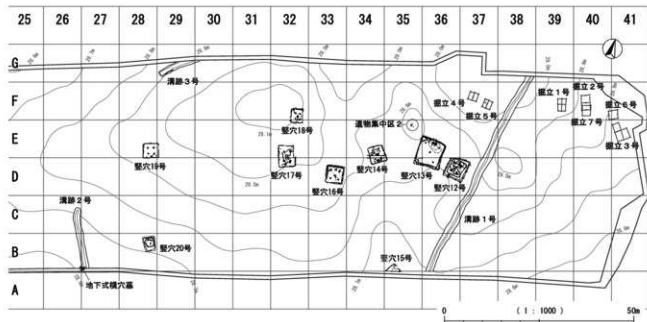
300、310、320、322が床面直上の遺物である。なお、305は紫コラより上層で出土しており、古代の須恵器の可能性が高い。

壺形土器、坏、小型土器（299～303）

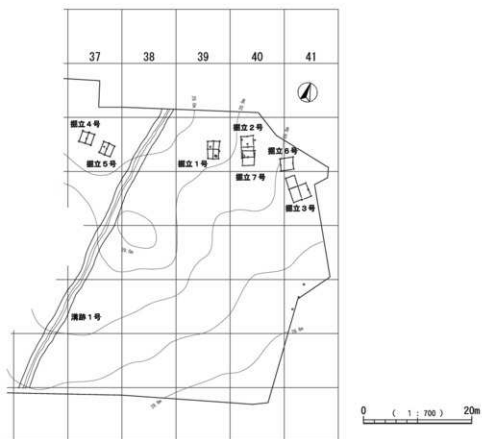
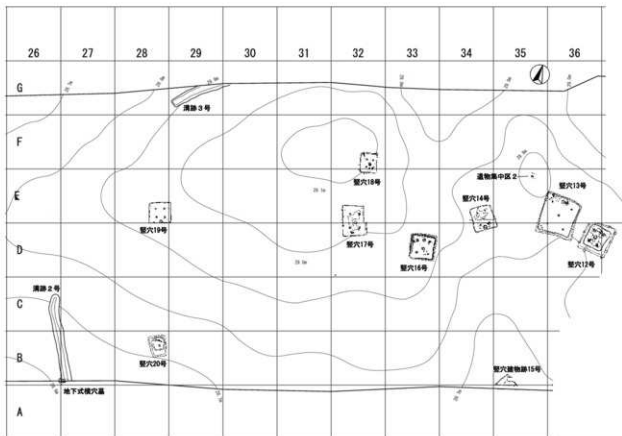
299は口径19cmの壺形土器である。胴部突帯は上下を工具で押さえているため歪んでいる。調整は丁寧なナデ調整である。

300～302は坏である。300は口縁端部が折れ曲がり、脚部の厚い底部をもつ。体部は幅立のミガキを施し、橙色を呈する。301は粗製の坏である。厚手で胎土は泥質である。302は口縁部が直立する精製品である。器壁が薄く、内外面摩滅しているが、調整はミガキと推測される。

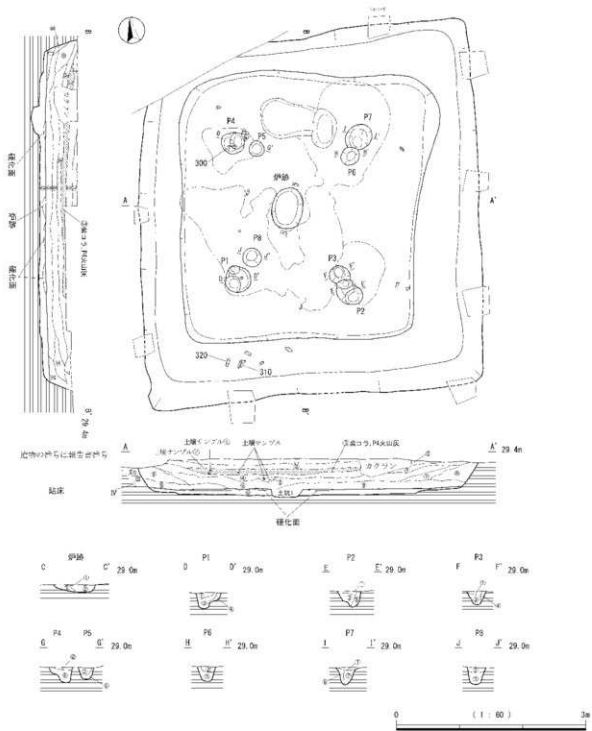
303は古墳時代前期の小型土器で、混入品と考えられる。



第69図 古墳時代終末期遺構配置図（1/1000）



第70図 飛鳥時代遺構配置図 (1 / 700)



第 71 図 竪穴建物跡 12 号遺物出土状況及び掘削状況

須恵器 (304, 305)

304 は坏Gの蓋で、口縁部内面には小さなかえりが作られている。外面天井部は回転ヘラケズリ、体部は回転ナデ調整である。内面は回転ナデ調整を施す。305 は甕の胴部片である。外面は格子目タタキ、内面は車輪状の当て具痕が残る。紫コラより上位の①層で出土しているため、古代の可能性が高い。

敲石 (306 ~ 314)

棒状の亜円礫を素材とする敲石である。306 は正面中央が敲打により凹み、その周囲に敲打、擦痕が多数形成されている。右側面、裏面、下面には局所的な敲打痕が形成されている。307 は正面、裏面、下面に敲打痕が形成されている。

308 は裏面と下面に微細な敲打痕が形成されている。また、正面と裏面には、長軸方向に直行して帯状の擦痕が認められた。緊縛痕の可能性もある。309 は正面中央と下面に弱い敲打痕が形成されている。310 は、

左側面と下端部に敲打痕が形成されている。

311 は上下両端に擦痕状の敲打痕が形成されている。312 ~ 314 は上下両端、側面に弱い敲打痕が形成されている。

軽石製品、礫 (315 ~ 320)

315、316 は軽石製品である。316 は正面と右側面に磨面を形成し、焼けている。316 は溝状の凹みが正面と裏面に形成されている。凹みの幅は 2 cm 程度、縦方向に残っている。

317 は扁平な砂岩礫である。318 ~ 320 は棒状の亜円礫で、318 は焼けている。

鉄銹、青銅製品 (321, 322)

321 は鉄銹の基部付近と考えられる。厚さ 3 mm 程度、断面方形である。322 は耳環と考えられる。全体が緑青の錆に覆われているが、蛍光エックス線分析の結果、銀の成分が検出された。

12号埋土

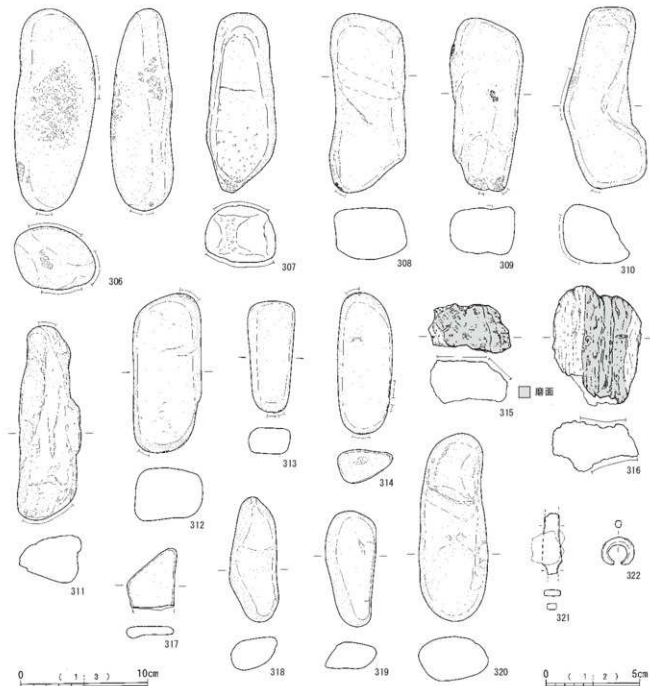
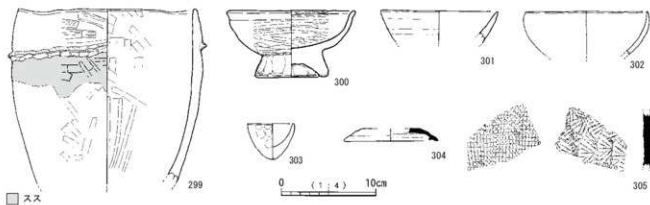
- ① 黒色砂質土 (10YR2/1) II b 層類似。しまりやや強い、粘性やや弱い。紫コラ、白色粒微量含む。
- ② 黒褐色砂質土 (10YR2/2) II b 層類似。しまりやや強い、粘性やや弱い。紫コラ少量含む。
- ③ 黒褐色砂質土 (10YR2/1) 上部は紫コラ主体。しまり強い、粘性やや弱い。黒色砂質土 (II c 層か) 微量含む。下部の一部に P 4 火山灰の黄/ハミスをわずかに含む。
- ④ 黒色砂質土 (10YR1, 7/1) II c 層類似。しまりやや強い、粘性やや強い。紫コラ少量含む。
- ⑤ 黒色砂質土 (7.5YR2/1) 紫コラをブロック状に含む。II c 層類似。しまりやや強い、粘性やや弱い。
- ⑥ 黒色砂質土 (10YR2/1) II c 層類似。しまりやや強い、粘性やや強い。III 層、池田湖火山灰、小砂り少量含む。
- ⑦ 黒褐色砂質土 (10YR2/2) II c 層類似。しまりやや強い、粘性やや強い。III 層、池田湖火山灰微量、小砂り少量含む。
- ⑧ 黒褐色砂質土 (10YR2/2) III 層類似。しまりやや強い、粘性やや強い。7 層よりやや強い。
- ⑨ 黒色砂質土 (10YR1, 7/1) II c 層類似。しまりやや強い、粘性やや弱い。III 層、池田湖火山灰、小砂り少量含む。
- ⑩ 黒褐色砂質土 (10YR2/2) III 層類似。しまりやや強い。黒色砂質土 (II c 層か) 微量含む。
- ⑪ 黒色砂質土 (10YR2/1) II c 層と III 層の混土。しまりやや強い、粘性やや弱い。
- ⑫ 黒色砂質土 (10YR2/1) II c 層類似。しまりやや強い、粘性やや弱い。III 層含む。池田湖火山灰微量含む。
- ⑬ 黒色砂質土 (10YR2/1) 団床。上面に硬化面を形成。アカホヤ微量。池田湖火山灰少量含む。P 1 ~ P 6
- ① 黒色砂質土 (10YR2/1) II c 層類似。しまりやや弱い、粘性やや強い。アカホヤ少量。池田湖火山灰微量含む。
- ② 黒色砂質土 (10YR2/1) II c 層類似。しまりやや弱い、粘性やや強い。アカホヤ、池田湖火山灰微量含む。
- ③ 黒褐色砂質土 (10YR1, 7/1) II c 層類似。しまりやや強い、粘性やや強い。アカホヤブロック多量。池田湖火山灰微量含む。
- ④ 黒褐色砂質土 (10YR2/2) II c 層類似。しまりやや弱い、粘性やや弱い。褐色土 (V 層) 多量含む。アカホヤブロック有り。
- ⑤ 黒褐色砂質土 (10YR2/2) II c 層類似。しまりやや強い、粘性やや強い。アカホヤ多量含む。
- ⑥ 黒色砂質土 (10YR1, 7/1) II c 層類似。しまりやや強い、粘性やや強い。アカホヤブロック多量含む。③に類似するが、しまり有り。
- ⑦ 黒色砂質土 (10YR1, 7/1) II c 層類似。しまりやや強い、粘性やや弱い。アカホヤブロック少量含む。
- ⑧ 黒色砂質土 (10YR1, 7/1) II c 層類似。しまりやや強い、粘性やや弱い。アカホヤ多量含む。

伊路

① 黒色砂質土 (10YR2/1) II c 層類似。しまりやや弱い、粘性やや強い。アカホヤ微量含む。

② 褐色砂質土 (7.5YR4/6) 2 ~ 3 cm の腐植土がブロック状に入る。しまりやや弱い、粘性やや強い。黒色砂質土微量含む。

③ 黒褐色砂質土 (10YR2/2) II c 層類似。しまりやや強い、粘性やや弱い。焼土含む。



第72図 竪穴建物跡12号出土遺物

(2) 竪穴建物跡 13号 (第73図)

① 検出区・検出層位

D・E-35・36区, II c層上面

② 規模・形態

最も規模が大きい建物跡で、平面形が6.68m×7.4mの方形を呈する。古墳時代前期の竪穴建物跡4号を切り、古代の掘立柱建物跡9号に切られている。

貼床上面で炉跡1基と柱穴4基を検出した。炉跡1は北壁近くに配置され、被熱した②層上面が火床面である。埋土に焼土粒を含む。柱穴は四方に配置され、4本柱の建物跡と想定される。P1では柱痕跡が確認された。

貼床を除去すると、床面が2段掘りとなり、竪穴中央部で炉跡2を検出した。炉跡2から炉跡1へと変遷している。炉跡2は、充填された黒色砂質土(②層)が下層にあり、その上層に焼土層が形成されている。鉄滓の出土はなかった。

③ 埋土・遺物出土状況

埋土は、②層に分層した。①層が自然埋没土、②層が貼床である。

遺物は貼床直上で土器片がまとまって出土した。これらの遺物は、竪穴廃絶後に廃棄されたと考えられる。

④ 性格

竪穴の規模や構造、炉跡の存在、出土遺物から竪穴住居跡と判断される。

⑤ 出土遺物 (第74図)

323, 324, 325, 327, 331, 332, 333, 335, 338が床面直上の遺物である。

変形土器 (323～326)

323は口縁が内弯し、胴部に刻目突帯文を施す。突帯は上下をハケ目工具によって成形している。刻み目は間隔がまばらで、下から上に押し切るように施されている。

324～326は口縁が直立し、刻目は下から上に押し切るように施す。324は外面に接合痕が多くみられる。325は突帯の歪みが著しく、刻目が3か所残る。326は、口径が16cmと小さい。内外面に凹凸や接合痕がみられる。

鉢形土器 (327, 328)

327は長頸蓋で、器形が大きく傾いている。器面調整が粗雑で、ミガキ調整は一部に施されている。

328は小型品の胴部である。厚手で内外面ナゲ調整を施す。

鉢形土器 (329～334)

329は平底で器壁が厚い。内外面に粗いミガキを施し、底部外面に煤が付着している。

330～332は脚付鉢である。331は煤が付着してい

ることから、煮沸具の可能性もある。外面はケズリ後ナゲ調整である。

334は口縁部が内弯する。厚手で内外面にミガキ調整を施す。無頸蓋の可能性も考えたが、断定できなかったため鉢形土器に分類した。

器種不明品 (335, 336)

335は平底の底部で、外面に工具痕が残る。336は底部内面が厚いために、盛り上がっている。

剥片, 礫 (337, 338)

337は磨製石器に関連する剥片と考えられる。石材はホルンフェルスである。正面は研磨されており、下端には二次加工が施されている。混入品の可能性が高い。338は砂岩の自然礫である。

(3) 竪穴建物跡 14号 (第75図)

① 検出区・検出層位

D・E-34・35区, II c層上面

② 規模・形態

平面形が4.1m×4.5mの方形を呈する。一部が慢乱と先行トレンチに切られている。

床面直上で土坑2基と柱穴4基を検出した。土坑1は被熱痕を確認できなかったが、中央に配置されていることや周囲に硬化面が形成されていることから炉跡の可能性が高い。土坑2は浅く、南東壁際で検出された。柱穴は四方に配置されており、4本柱の建物と想定される。P2・P4では柱痕跡が確認できた。

③ 埋土・遺物出土状況

埋土は、全て自然埋没土で①～⑤層に分層した。②層が紫コラ、③層がP4火山灰を含む堆積層である。⑤層は、住居廃絶後の堆積層で、大型の土器片や礫石器が床面直上で出土した。遺物は、竪穴廃絶後に廃棄されたと考えられる。

④ 性格

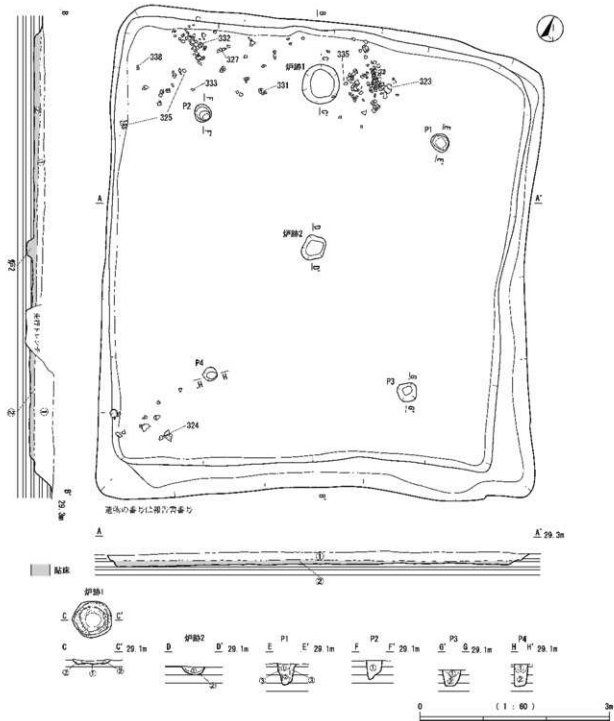
竪穴の規模や構造、炉跡の存在、出土遺物から竪穴住居跡と判断される。

⑤ 出土遺物 (第76図)

339, 340, 344, 346, 347, 348, 349が床面直上の遺物である。

変形土器 (339～341)

339は口径18cmの小型品で、口縁部が内弯する。胴部突帯は歪んでおり、刻目の間隔は広い。刻目は下から上に工具で押し切って施している。外面に煤の付着がみられる。340は突帯を工具押しさえによって成形しているため、突帯の歪みが大きい。調整は粗雑で、外面に接合痕が残る。341は底面に木炭痕らしき痕跡がみられる。



埋土

- ① 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 粘性やや弱い。しまり有り。池田湖火山灰と橙色パミスをわずかに含む。
- ② 黒色砂質土 (10YR2/1) 粘土。上面で所々硬化面が見られる。粘性やや有り。池田湖火山灰を微量と橙色パミスを少量含む部分的にアカホヤブロックを多量に含む。

炉跡1

- ① 黒色砂質土 (10YR2/1) 粘性弱い。しまりやや有り。焼土粒を極微量含む。
- ② 黒色砂質土 (10YR2/1) 火床。被熱により硬化している。粘性非常に弱い。池田湖火山灰を極少量含む。

炉跡2

- ① 黄褐色砂質土 (10YR5/8) 粘性有り。しまり有り。黒色砂質土ブロックに池田湖火山灰を少量含む。
- ② 黒褐色砂質土 (10YR2/2) 粘性やや有り。しまり有り。池田湖火山灰を微量含む。土性がやや粗くジャリジャリしている。

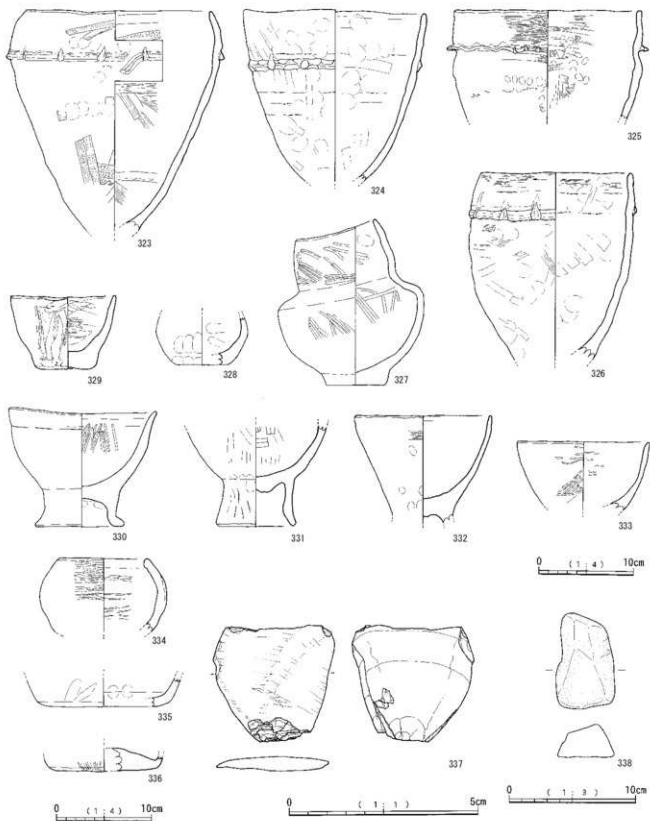
P 1

- ① 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 柱痕跡。粘性弱い。しまり有り。アカホヤブロックを微量含む。
- ② 黒色砂質土 (10YR1.7/1) 柱痕跡。粘性有り。しまり弱い。
- ③ 黒色砂質土 (10YR2/1) 柱振り方埋土。粘性弱い。しまり有り。アカホヤブロックを微量含む。

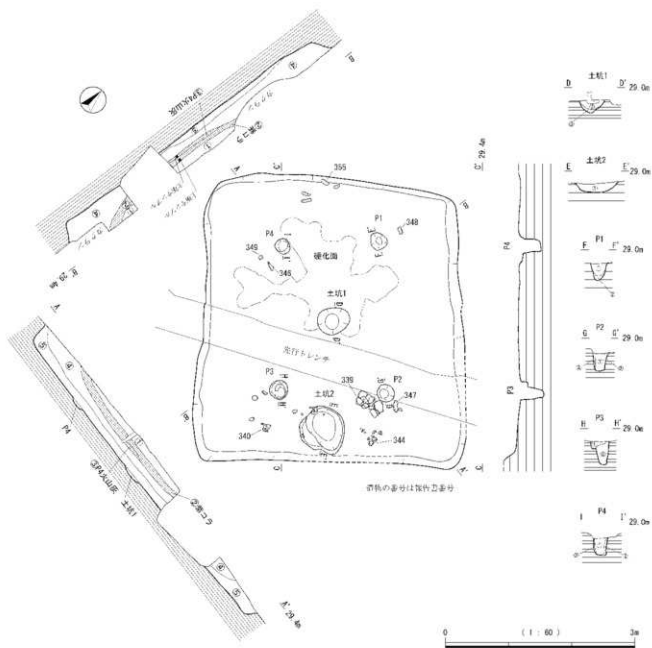
P 2 ~ P 4

- ① 黒褐色砂質土 (10YR2/2) 粘性やや有り。しまり有り。土性細かく含有物無し。
- ② 黒褐色砂質土 (10YR2/2) 粘性やや有り。しまり有り。池田軽石とアカホヤブロックを少量含む。

第 73 図 竪穴建物跡 13 号遺物出土状況及び完掘状況



第 74 图 竖穴建物跡 13 号出土遺物



埋土

- ① 黒色砂質土 (10YR2/1) しまり有り、粘性有り、池田湖火山灰を微量含む。
- ② 灰黄色火山灰 (2.5Y7/2) 詰コラ、黒色砂質土が層状に混じる。
- ③ P4火山灰と黒色砂質土の混土、粘性やや有り、しまり有り。
- ④ 黒色砂質土 (10YR2/1) しまり強い、粘性有り、黄褐色バミスと池田湖火山灰微量含む。
- ⑤ 黒色砂質土 (10YR2/1) しまり強い、粘性有り、下面が床面となる。

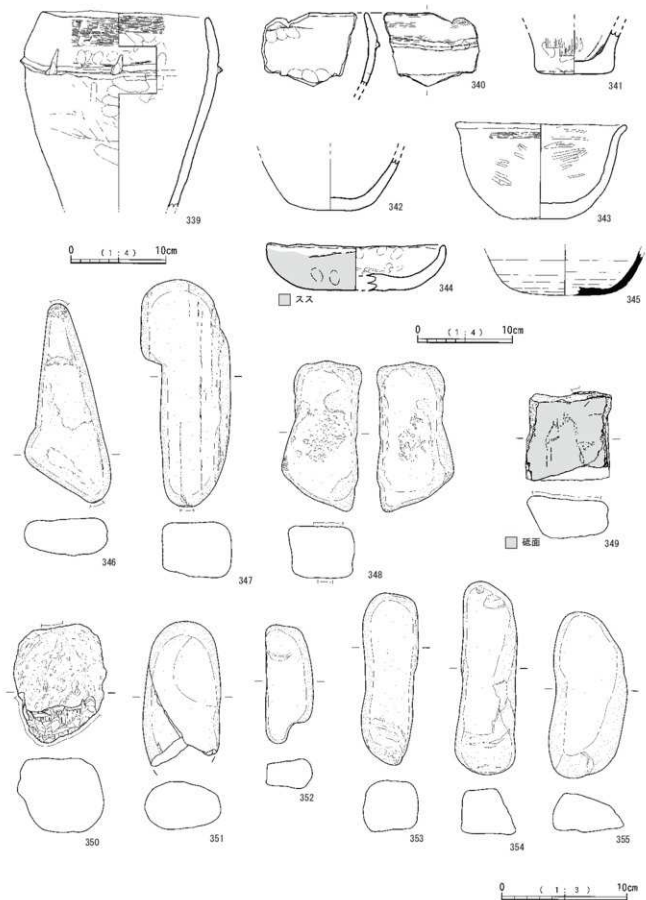
土坑1

- ① にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3) 粘性やや有り、しまり有り、黒褐色土をブロック状に含む。
- ② にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3) 粘性やや有り、しまり有り、黒褐色土を含む。
- ③ 黄褐色砂質土 (10YR5/6) とにぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3) の混土。

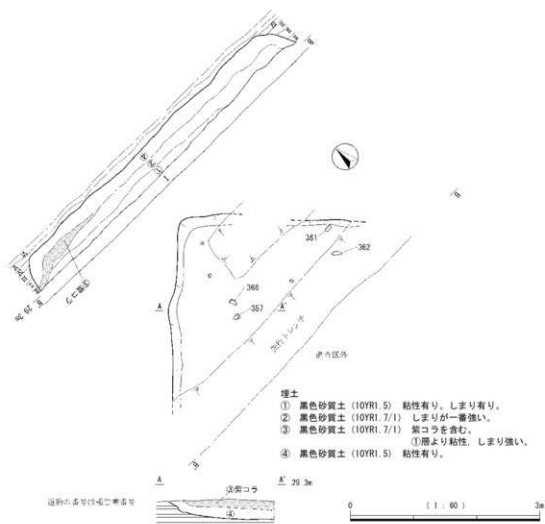
土坑2

- ① 黒褐色砂質土 (10YR2/2) 粘性弱い、しまり有り、池田湖火山灰微量含む。
- P1・P3
- ① 黒褐色砂質土 (10YR2/2) 粘性弱い、しまり有り、池田湖火山灰少量含む。
- ② 黒褐色砂質土 (10YR2/2) 粘性弱い、しまり有り、アカホヤブロック含む。
- P2・P4
- ① 黒色砂質土 (10YR2/1) 柱痕跡、粘性あり、しまり弱い、アカホヤブロックを微量含む。
- ② 暗褐色砂質土 (10YR3/3) 柱囲り方埋土、しまり有り、粘性有り、池田湖火山灰とアカホヤブロック少量含む。

第75図 竪穴建物跡14号遺物出土状況及び完掘状況



第 76 図 竪穴建物跡 14 号出土遺物



第 77 図 竪穴建物跡 15 号遺物出土状況及び完掘状況

壺形土器、鉢形土器、坏 (342～344)

342 は壺形土器の底部である、内外面摩耗している。

343 は口縁が外反する厚手の鉢形土器である。底部は丸底に近く、口縁部と底部の特徴は古代の甕に似ている。底部内面が剥落している。

344 は浅い皿状の粗製坏である。厚手で粗雑な作りである。外面に接合痕がみられ、器面の凹凸が著しい。須恵器 (345)

345 は壺の底部と考えられる。外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナゲ調整を施す。外面には自然軸が付着している。

敲石、砥石 (346～349)

346, 347 は棒状礫を素材とした敲石である。上下両端に敲打痕を形成している。敲打は弱く、擦痕状に近い。348 は正面、裏面に敲打痕が形成されている。表面が焼けている。

349 は角礫を利用した砥石である。正面に砥面を形成し、裏面は平坦面作出のためのケズリ痕が残る。上端に弱い敲打痕が形成されている。

軽石製品、礫 (350～355)

350 は軽石製品で上面が研磨されている。下端は周辺からの加工によって分割されている。

351～355 は棒状の礫で、敲石等の素材として持ち込まれた可能性がある。焼けて、一部が黒色化しているものがある。

(4) 竪穴建物跡 15 号 (第 77 図)

① 検出区・検出層位

B-35 区, II 層上面

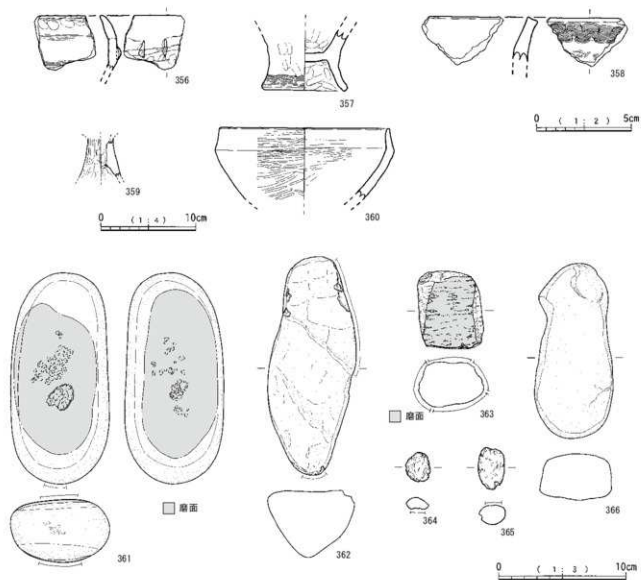
② 規模・形態

規模は、竪穴の大部分が調査区外にあるため不明であるが、方形を呈する竪穴建物跡であると推測される。掘り込み面が硬く締まっており、床面と考えられる。柱穴は検出されなかった。

③ 埋土・遺物出土状況

埋土は、全て自然埋没土で①～④層に分層した。③層には、紫コラが堆積している。遺物は、土器が床面直上で、石器が④層で出土した。

また、炭化種実が床面直上で多数出土したため、土



第78図 竪穴建物跡15号出土遺物

種水洗を行った。分析の結果、炭化種子の大半はブナ科果実でこの他にコナラ属果実、クリ、イネが検出されている。コナラ属果実及びクリの放射性炭素年代は、弥生時代後期の年代であり、古い炭化種実が混入した可能性が高い。

④ 性格

炉跡、柱穴は明らかではないが、竪穴の規模から竪穴住居跡の可能性がある。

⑤ 出土遺物 (第78図)

357, 361, 362, 366が床面直上の遺物である。

甕形土器 (356, 357)

356は内湾する甕形土器の口縁部である。刻目が粗雑なため、突帯の粘土がはみ出している。内外面粗いナデ調整を施す。357は脚部内面天井部が平坦に成形

されている。脚端部はハゲ目を横方向に施す。

壺形土器、高坏、浅鉢 (358～360)

混入品と考えられる資料である。358, 359は古墳時代前期の壺形土器、高坏である。360は縄文時代晩期末から弥生時代前期頃の浅鉢と考えられる。

敲石 (361, 362)

361は磨敲石で正面、裏面に敲打痕と磨面を形成している。362は棒状の礫を利用し、下面と右側面に弱い敲打痕を形成している。

軽石製品、礫 (363～366)

363～365は軽石製品である。363は研磨により方形に加工されている。364, 365は碁石状の軽石製品で、磨面を形成している。

366は棒状の砂岩で、焼けている可能性がある。

(5) 竪穴建物跡 16号 (第79図)

① 検出区・検出層位

D-33区, II c層上面

② 規模・形態

平面形が4.7m×4.83mの方形を呈する。

貼床直上で炉跡1基, 土坑1基, 柱穴5基, 小ピット17基, 壁際溝を検出した。炉跡は竪穴中央に配置され, 焼土や被熱して赤化した埋土が確認された。また, 炉跡南側では, 貼床上面に硬化面が形成されている。柱穴は炉跡の四方に配置され, 4本柱の建物跡と想定される。柱痕跡がP3, P4で確認された。壁際溝は, 南西コーナーを除き竪穴を全周している。溝の中には, 直径10cmの小ピットが検出された。小ピットは, 壁板を固定する柱穴の可能性がある。

貼床を除去すると, 浅い土坑状の掘り込みが壁際で検出された。また, 工具痕と考えられる凹凸が, 掘り込み面に多数残っている。

③ 埋土・遺物出土状況

埋土は, ①~⑩層に分層した。①~⑩層が自然埋没土, ①層が貼床である。③層には紫コラ, ④層にはP4火山灰が堆積している。

遺物は竪穴廃絶後に堆積した⑧, ⑨層で出土しているが, 床面から浮いたものが多く, 竪穴の埋没に伴って混入したと考えられる。

また, 炉跡埋土の土壌洗浄を行ったところ, イネ, オニグルミ, プナ科果実を検出した。放射性炭素年代は, イネが1310±20BP, オニグルミが1355±20BPで, 7世紀後半を中心とする年代が計測されている。

④ 性格

竪穴の規模や構造, 炉跡の存在, 出土物から竪穴住居跡と判断される。

⑤ 出土遺物 (第80図)

367, 368, 372, 375, 376, 377, 379が床面直上の遺物である。

甕形土器 (367~371)

367は口縁が直立する。突帯は不整形で, 刻目は突帯を押し切って下から上に施す。外面には接合痕が残る。368は上胴部が屈曲し, 口縁近くに穿孔が1か所残っている。刻目の施文方法は367と同じで, 外面に接合痕が残る。369は小型品で口縁部が内湾する。刻目は粗大で, 突帯を押し潰すように深く押圧するため, 器面まで達している。371は鉢形土器の底部である可能性がある。

甕 (372, 373)

372は口径28.5cm, 器高26.5cmでほぼ完形品である。底部の蒸気孔は, 復元値で8.2cmである。上胴部に交差する刻目突帯は1条施す。突帯は粗雑で, 刻目を下

から上に押し切って施している。胎土は砂粒が少なく, 色調が白っぽい。搬入品である。上胴部は使用により摩滅しているが, 下胴部は摩滅がみられず, 器面調整が残っている。摩滅の境付近が甕を載せた甕形土器と接していた部分と考えられ, これを参考にするに甕を載せた甕形土器の口縁部内径は19cm前後となる。

373は甕の底部で内外面ミガキ調整を施す, 胎土から搬入品と判断される。

小型丸底壺 (374)

374は古墳時代前期の小型丸底壺で混入品である。

礫石, 敲石 (375~378)

375は正面, 裏面, 側面に敲打痕と砥面が形成されている。また, 上面と破断面である下面にも敲打痕が形成されている。

376は敲石で正面に磨面, 上面欠損部に敲打痕が形成されている。377, 378は棒状礫を利用した敲石で, 下面に敲打痕を形成している。

礫 (379~381)

379, 380は棒状の砂岩礫, 381は扁平な礫である。

(6) 竪穴建物跡 17号 (第81図)

① 検出区・検出層位

D・E-32区, III層上面

② 規模・形態

平面形が4.42m×5.6mの長方形を呈する。東西壁面の一部は, 先行トレンチと攪乱によって切られている。貼床の上下で, 焼土, 柱穴を確認した。

貼床は⑤層で硬化面が形成されている。その上面で焼土跡1か所, 柱穴4基(P1-1, P5~P8)を検出した。柱穴の配置から4本柱の竪穴建物跡と想定される。焼土跡は炉跡と考えられ, 周囲には硬化面が形成されている。

貼床を除去した後, 掘り込み面で柱穴P1-2, P2, P3, P4と溝状遺構を検出したほか, ベット状に一段下がる立ち上がりを確認した。貼床下層で検出された4本の柱穴は, 初期に構築された柱穴で, 建て替えの際に埋められたと判断した。

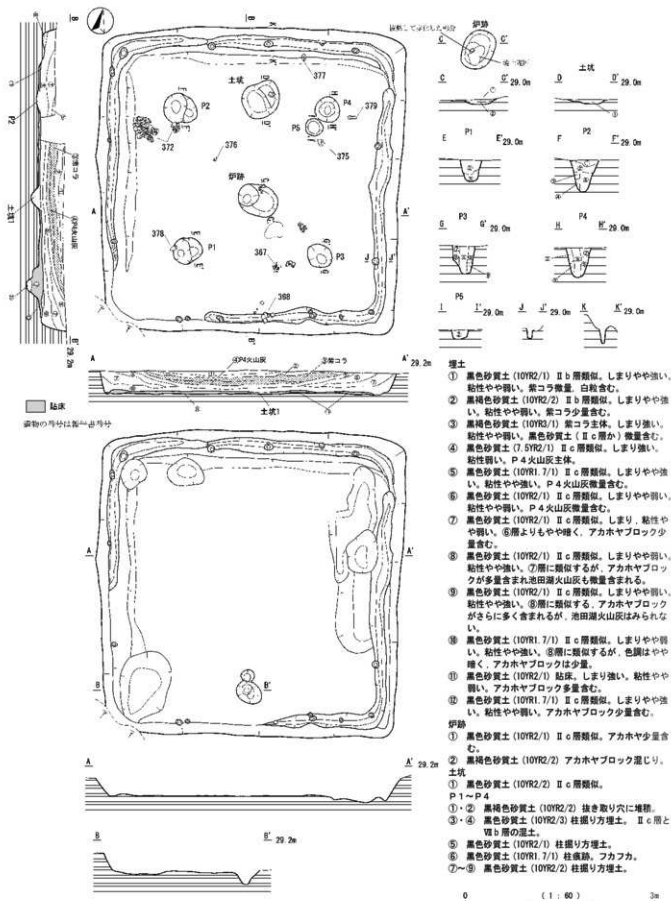
また, 4本柱の柱間寸法や竪穴の立ち上がり, 建て替え後に広がっていることから, 建物の拡張が行われた可能性がある。

③ 埋土・遺物出土状況

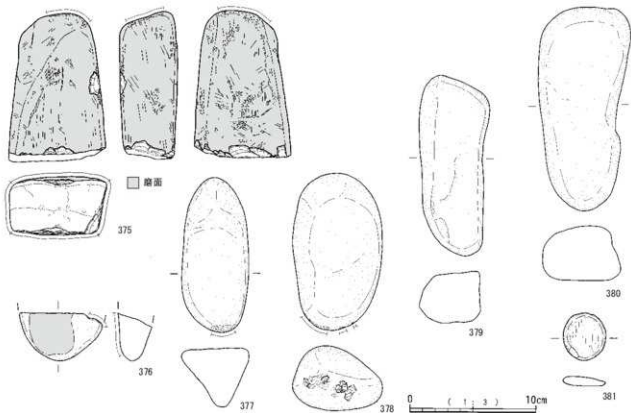
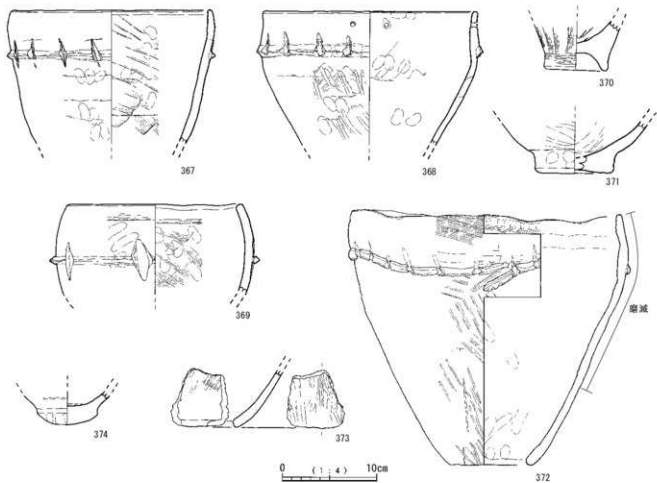
埋土は9層に分かれ, ①~⑦層が自然埋没土, ⑧層が貼床, ⑨層が溝状遺構の埋土である。遺物は貼床直上で, 甕形土器や敲石が出土した。特に敲石は, 4個重なった状態で出土している。

④ 性格

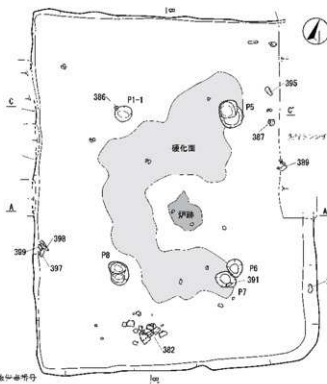
竪穴の規模や構造, 炉跡の存在, 出土物から竪穴



第 79 図 竪穴建物跡 16 号遺物出土状況及び完掘状況



第 80 图 竖穴建物跡 16 号出土遺物



遺物の番号は左半部番号

埋土

- ① 黒褐色砂質土 (10YR1/3) 粘性、しまり有り、池田湖火山灰を微量含む。
- ② 黒褐色砂質土 (10YR1/3) 粘性有り、しまりやや強い。池田湖火山灰を微量含む。
- ③ 黒色砂質土 (10YR2/1) 粘性、しまり有り。
- ④ 黒褐色砂質土 (10YR2/1) 粘性有り、しまりやや強い。池田湖火山灰を微量含む。
- ⑤ 黒褐色砂質土 (10YR1/3) 粘性有り、しまりやや強い。池田湖火山灰を微量含む。
- ⑥ 黒色砂質土 (10YR2/1) 粘性有り、しまりやや強い。
- ⑦ 黒色砂質土 (10YR2/1) 粘層よりキメが細かい。
- ⑧ 黒色砂質土 (10YR2/1) 粘床。上面の一部が硬化している。アカホヤの小ブロックを中量含む。
- ⑨ 黒色砂質土 (10YR2/1) 溝の埋土。粘性やや有り。アカホヤブロックと池田湖火山灰を微量含む。

P 1

- ① 黒色砂質土 (10YR1.7/1) 柱痕跡。粘性やや有り、しまり弱い。
- ② 黒色砂質土 (10YR2/1) 柱方埋土。粘性弱い、しまり有り。
- ③ 黒色砂質土 (10YR2/1) 柱方埋土。アカホヤブロック微量含む。
- ④ 黒褐色砂質土 (10YR2/2) P1-2の埋土。アカホヤブロック微量含む。

P 2

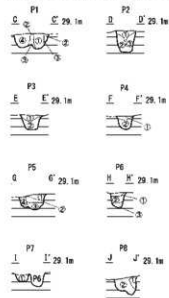
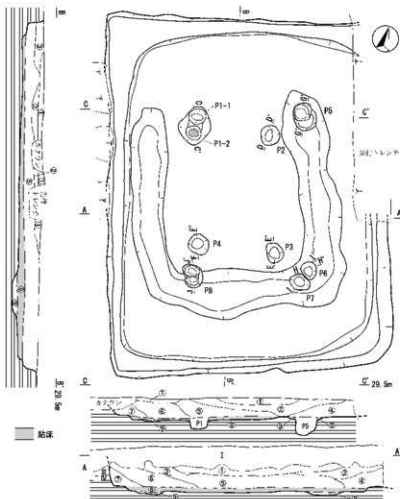
- ① 黒色砂質土 (10YR1.7/1) アカホヤ、VI層をブロック状に含む。
- ② 黒色砂質土 (10YR2/1) アカホヤブロックを中量含む。
- ③ 黒色砂質土 (10YR2/1) アカホヤブロックを微量含む。

P 5

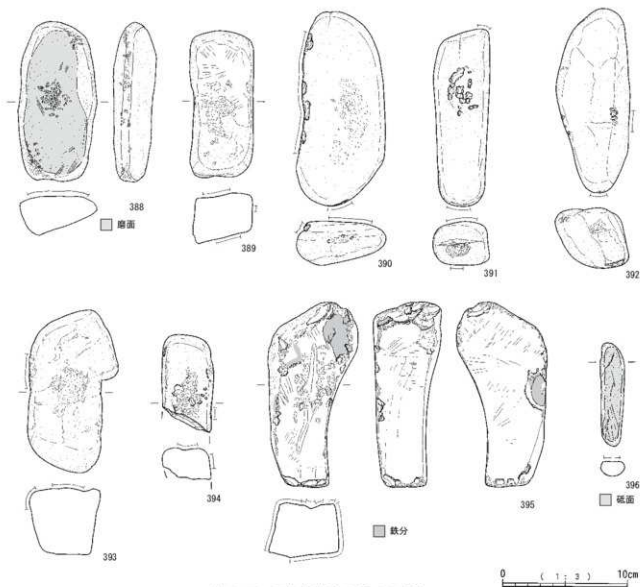
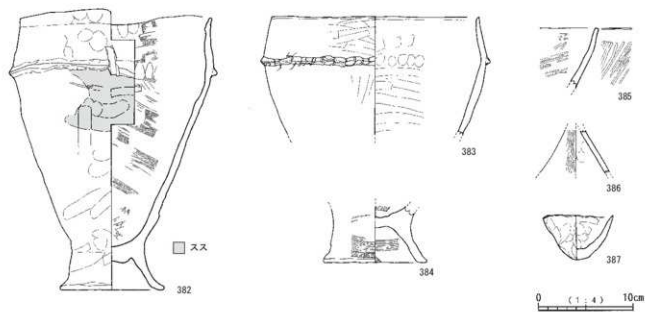
- ① 黒色砂質土 (10YR2/1) アカホヤブロック中量含む。
- ② 黒色砂質土 (10YR2/1) アカホヤブロック微量含む。
- ③ 黒色砂質土 (10YR1.7/1) アカホヤブロック少量含む。
- ④ 黒色砂質土 (10YR2/1) アカホヤブロック微量含む。

P 3・4・6・7・8

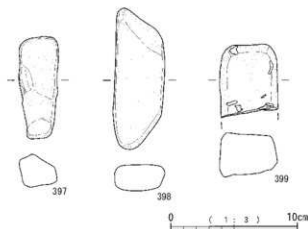
- ① 黒色砂質土 (10YR3/2) アカホヤブロック少量含む。
- ② 黒色砂質土 (10YR2/1) アカホヤブロック微量含む。
- ③ 黒色砂質土 (10YR2/2) アカホヤブロック少量含む。



第 81 図 竪穴建物跡 17 号遺物出土状況及び完掘状況



第 82 図 竪穴建物跡 17 号出土遺物 1



第83図 竪穴建物跡17号出土遺物2

住居跡と判断される。

⑤ 出土遺物 (第82, 83図)

382, 386, 387, 389, 391, 395, 397, 398, 399 が床面直上の遺物である。

変形土器, 鉢形土器 (382～385)

382は口径20.3cm, 器高29.4cmの変形土器である。長身のプロポーシオンで、突帯を胴部屈曲部に巡らし、粗大な刻目を2か所施している。383は胴部が屈曲する変形土器で、突帯の上下を指押さえによって成形している。

385は鉢形土器の口縁部である。

高坏, 小型土器 (386, 387)

386の高坏, 387の小型土器は古墳時代前期の遺物で、混入品である。

敲石 (388～394)

388, 389は正面に磨面と敲打痕が形成されている。390～394は棒状礫を利用した敲石で、正面, 側面, 下面に敲打痕を形成している。392は連続した溝状の傷が正面の縁にみられる。

砥石 (395, 396)

395は各4面を砥石として利用している。表面には断面V字状の研ぎ痕がある。また、裏面と上下両端部には敲打痕が形成されている。各面に鉄分の付着があり、鉄製品の研磨用と考えられる。396は砂岩の手持ち砥石である。正面に砥面が形成される。

礫 (397～399)

397～398は砂岩の棒状礫である。399は全面が焼けている。

(7) 竪穴建物跡18号 (第84図)

① 検出区・検出層位

E・F-32区, III層上面

② 規模・形態

規模は、竪穴西側が攪乱に切られているため不明であるが、一辺3.75m程の方形竪穴建物跡と推測される。床面直上で炉跡1基, ビット5基を検出した。炉跡は、②層が火床で、強い被熱のために地山が硬化している。鍛冶炉を想定して調査を行ったが、鉄滓等は確認されなかった。炉跡の四方に配置されたP1～P4が柱穴と考えられ、4本柱の建物跡と想定される。P1, P3では、柱痕跡が確認された。なお、P5は規模が小さく、南に傾いているため柱穴ではないと判断した。

③ 埋土・遺物出土状況

埋土は、全て自然埋没土で①～⑥層に分層した。②層が紫コラ, ③層がP4火山灰を含む堆積層である。遺物は、壺や礫石器が⑤層で出土した。特に竪穴北西部では、8個の敲石が並ぶように出土している。遺物は床面近くで出土しており、竪穴廃絶後に廃棄されたと考えられる。

④ 性格

竪穴の規模や構造, 炉跡の存在, 出土遺物から竪穴住居跡と判断される。

⑤ 出土遺物 (第85図)

400, 401, 402, 404, 405, 412が床面直上の遺物である。

変形土器, 鉢形土器 (400～402)

400は変形土器の口縁部で、上胴部に刻目突帯文を施す。内外面丁寧なナデを施す。

401, 402は鉢形土器である。401は器形が歪んでおり、内外面に指頭圧痕を多く残す。底部が厚い。402は器壁が厚く、歪んでいる。外面に粗いミガキを施す。

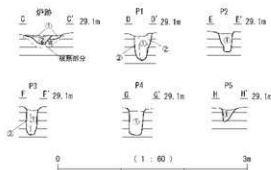
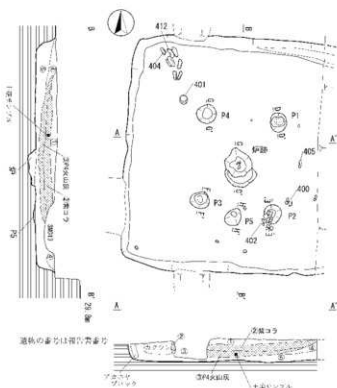
敲石, 砥石 (403～409)

403～405は棒状礫を利用した敲石である。正面, 下面に敲打痕を形成している。

406～409は砥石である。406は正面に擦痕, 側面に敲打痕が形成されている。409は鉄分の付着がみられる。表面の一部が剥落している。

礫 (410～413)

410～413は棒状の砂岩礫である。411, 413は焼けている。



埋土

- ① 黒色砂質土 (1092/1) 粘性やや有り、しまり有り、黄褐色パミスと池田火山灰をわずかに含む。
- ② 紫コラを主体とする、黒色砂質土が混じる、粘性弱い、しまりやや強い。
- ③ P4火山灰と黒色砂質土の混土、P4火山灰はフロック状に黒色砂質土は層状に積層する、黒色砂質土をきむための粘性やや有り、しまり有り。
- ④ 黒色砂質土 (1092/1) 粘性やや有り、しまり有り、池田火山灰をわずかに含む。
- ⑤ 黒色砂質土 (1092/1) 粘性やや有り、しまりやや強い、池田火山灰と茶褐色砂質土 (V層) を小フロック状に含む。

伊勢

- ① 黒色砂質土 (1092/1) 暗褐色砂質土を含む、粘性やや有り、しまりやや弱い、焼土フロック粒と炭化物粒を少量含む、撈取しておらず、火床面ではない。
 - ② 灰黄褐色砂質土 (1094/2) 粘性有り、しまり有り、炭化物粒を少量とアカホヤフロックを微量含む、火床となる、圓り込み面は破断して硬化している。
- P1, P3
 ① 黒色砂質土 (1092/1) 柱痕跡、粘性やや有り、しまりやや弱い。
 ② 黒褐色砂質土 (1092/2) 柱痕跡有り、粘性やや有り、しまり有り、アカホヤフロックを微量含む。
- P2, P4, P5
 ① 黒色砂質土 (1092/1) 粘性やや有り、しまり弱い。

第 84 図 竪穴建物跡 18号遺物出土状況及び掘削状況

(8) 竪穴建物跡 19号 (第 86 図)

① 検出区・検出層位

E-28・29区、Ⅲ層上面

② 規模・形態

平面形が 4.05m × 3.85m の方形を呈する。

貼床直上で土坑 1 基、ピット 5 基を検出した。竪穴中央に配置された P1 ~ P4 が柱穴と考えられ、4 本柱の建物跡と想定される。土坑は南壁に接して検出された。

③ 埋土・遺物出土状況

埋土は、①~⑧層に分層した。①~⑦層が自然埋没土で⑧層が貼床である。①層が紫コラ、②、③層が P4 火山灰を含む堆積層である。

遺物は少なく、床面直上付近に礫石器が数点があるほかは土器片が少々あるのみである。竪穴廃絶後に廃棄されたと考えられる。

④ 性格

竪穴の規模や構造、出土遺物から竪穴住居跡の可能性がある。

⑤ 出土遺物 (第 87 図)

414 は砂岩の柱状礎を利用した敲石である。正面と上下両端に敲打痕が形成されている。上端には黒色の付着物が観察される。

415, 416 は砂岩礎である。

(9) 竪穴建物跡 20号 (第 88 図)

① 検出区・検出層位

B-28 区、Ⅱb 層上面

② 規模・形態

平面形が 2.98m × 3.85m の長方形を呈する。時代を特定できる出土遺物はないが、埋土に紫コラ、P4 火山灰を確認できるため、古墳時代終末期の遺構と判断した。

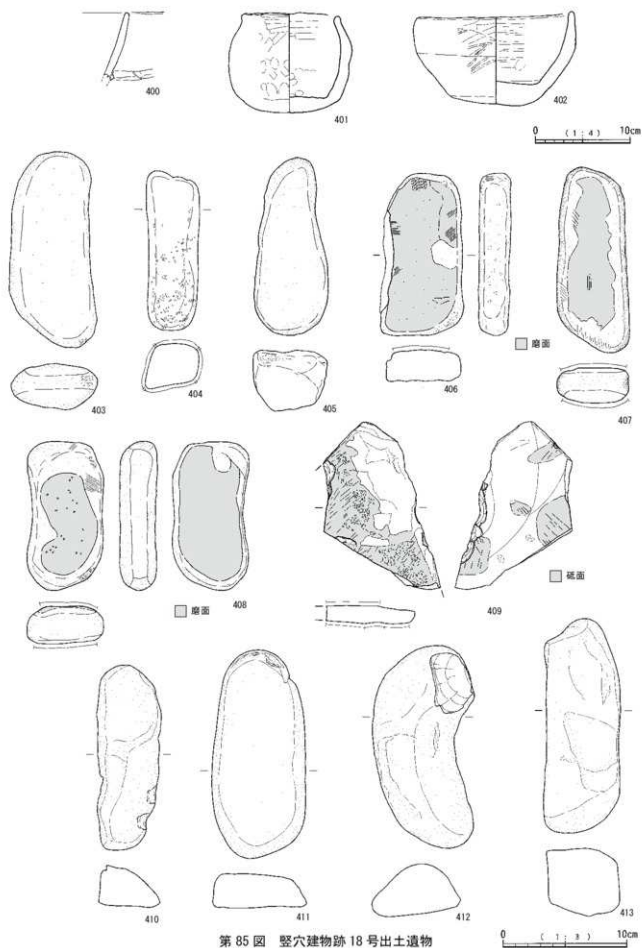
床面は浅い二段掘りとなり、床面直上で土坑 2 基とピット 1 基を検出した。土坑 1 は中央にあるため、炉跡の可能性も考慮して調査を行ったが、焼土跡は確認されなかった。土坑 2 は浅く、弧状に近い平面形である。P1 は浅く、柱穴と判断できる根拠は得られなかった。

③ 埋土・遺物出土状況

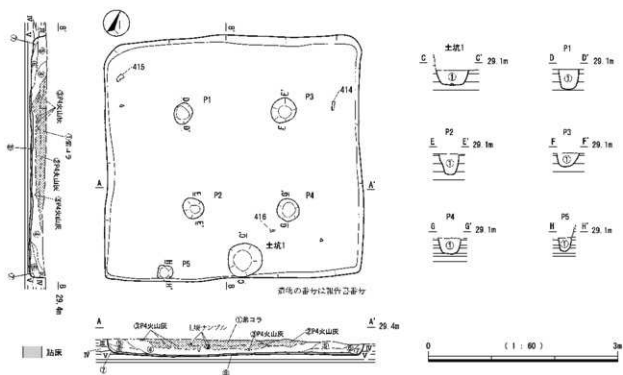
埋土は、全て自然埋没土で①~⑩層に分層した。③層が紫コラ、⑤層が P4 火山灰を含む堆積層である。遺物は、礫が数点出土した。

④ 性格

炉跡、柱穴は明らかではないが、竪穴の規模から、竪穴住居跡の可能性もある。



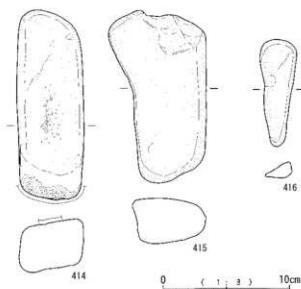
第 85 图 竖穴建物跡 18 号出土遺物



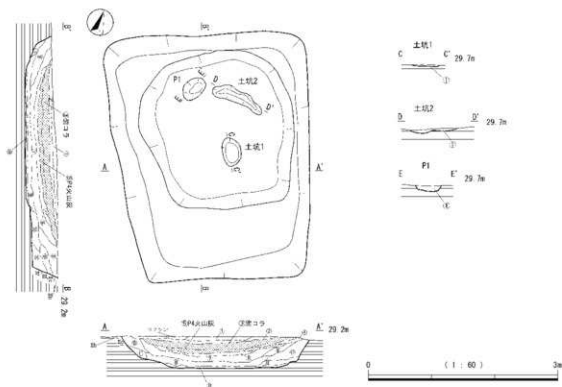
埋土

- ① 黒褐色砂質土 (10YR3/2) 紫コウを主体とする。しまり強い。
- ② 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) しまり強い。P4火山灰が多く混ざる。粒子粗い。
- ③ 黄褐色砂質土 (2.5Y7/6) しまり強い。P4火山灰ブロック状に含む。
- ④ 黒色砂質土 (7.5YR2/1) しまりやや弱い。池田湖火山灰を少量含む。
- ⑤ 黒色砂質土 (10YR2/1) しまりやや強い。
- ⑥ 黒色砂質土 (10YR1/1) しまりやや強い。
- ⑦ 黒色砂質土 (7.5YR1/1) しまり非常に強い。穂粒子わずかに含む。
- ⑧ 黒色砂質土 (10YR1/1) 粘床。しまりやや強い。
- ⑨ 黒色砂質土 (7.5YR1/1) しまり弱り。池田湖火山灰とアカホヤブロックを少量含む。

第 86 図 竪穴建物跡 19号遺物出土状況及び完掘状況



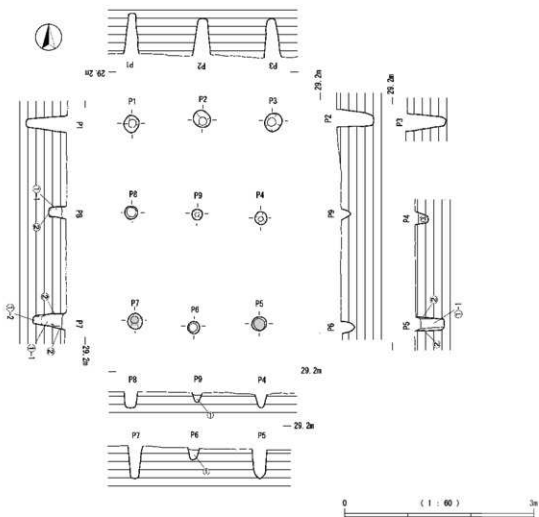
第 87 図 竪穴建物跡 19号出土遺物



埋土

- ① 黒色砂質土 (10YR1.7/1) 粘性有り。しまりやや弱い。
 - ② 黒色砂質土 (10YR2/1) 粘性有り。しまり有り。紫コラ少量含む。
 - ③ 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 粘性やや強い。しまりやや弱い。紫コラを主体とする土層。
 - ④ 黒色砂質土 (7.5YR2/1) 粘性やや強い。しまりやや弱い。
 - ⑤ 黒色砂質土 (7.5YR2/1) 粘性やや強い。しまりやや弱い。P4火山灰をブロック状に含む。紫コラ少量含む。
 - ⑥ 黒色砂質土 (10YR1.7/1) 粘性やや弱い。しまり有り。黄褐色粒を微量含む。
 - ⑦ 黒色砂質土 (10YR2/1) 粘性やや強い。しまり有り。御池火山灰を微量含む。
 - ⑧ 黒色砂質土 (10YR2/1) 粘性有り。しまりやや弱い。⑦層よりもやや明るい。
 - ⑨ 黒色砂質土 (10YR2/1) 粘性有り。しまりやや弱い。Ⅲ層を含む。
 - ⑩ 黒色砂質土 (10YR1.7/1) 粘性有り。しまり有り。Ⅲ層。池田湖火山灰を微量含む。
 - ⑪ 黒色砂質土 (10YR2/1) 粘性有り。しまり有り。Ⅲ層を主体とする。
 - ⑫ 黒色砂質土 (10YR2/1) 粘性有り。しまりやや強い。池田湖火山灰を微量含む。
 - ⑬ 黒色砂質土 (10YR1.7/1) 粘性やや強い。しまりやや弱い。Ⅳ層を主体とする。池田湖火山灰を少量含む。
 - ⑭ 黒色砂質土 (7.5YR1.7/1) 粘性有り。しまりやや弱い。アカホヤブロックを少量含む。
- 土坑1
- ① 黒色砂質土 (10YR1.7/1) 粘性有り。しまりやや弱い。アカホヤブロックを少量含む。
- 土坑2. P1
- ① 黒色砂質土 (10YR2/1) 粘性やや強い。しまりやや弱い。アカホヤのブロックを多量に含む。

第88図 竪穴建物跡20号完掘状況



埋土

- ①-1 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 柱痕跡。粘性。しまり弱い。
- ①-2 黒褐色砂質土 (7.5YR3/2) 柱痕跡。粘性。しまり普通。
- ② 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 柱の埋め土。粘性普通。しまり強い。アカホヤブロック含む。
- ③ 黒褐色砂質土 (10YR1/3) 粘性普通。しまり弱い。

第89図 掘立柱建物跡1号

3 掘立柱建物跡 (第89～95図)

本節で報告する掘立柱建物跡は、主軸が磁北から7～22°振れており、主軸が磁北を向く古代の掘立柱建物跡とは時期が異なることが想定される。また、柱間寸法や床面積も古代の建物に比べ小さく、構造的に宮崎県下耳切第3遺跡の掘立柱建物跡に類似することから、古墳時代終末期の遺構と判断した。

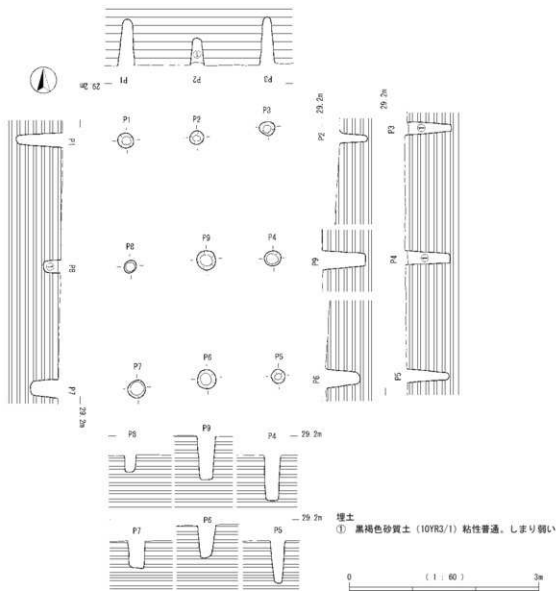
検出した建物跡は、総柱建物跡2棟、側柱建物跡5棟である。うち5棟は、調査区で最も標高が高い溝跡1の東側で確認された。掘立柱建物跡と竪穴建物跡は溝跡を挟んで分布域が異なっている。

掘立柱建物跡1号 (第89図)

F-39区、III層上面で検出された。梁行2間×桁行2間の南北方向に長い9本柱の総柱建物跡である。梁行の長さ2.2m、桁行3.06mで総面積6.7㎡である。主軸は、磁北から西に16°振れている。

柱間寸法は、北側梁行1.1m、南側梁行0.95m・1.05mで、桁行は東側1.55m・1.65m、西側1.36m・1.7mを計る。

柱穴は直径25～30cmで、P5、P7、P8には柱痕跡が確認された。中央梁行を構成するP4、P8、P9、南側梁行のP6は20cm程の深さであるが、その他の柱穴は約60cmと深い。柱穴から遺物は出土しなかった。



第90図 掘立柱建物跡2号

掘立柱建物跡2号 (第90図)

F-40区で検出された。検出面は、P6、P9がⅢ層上面、それ以外の柱穴はV層上面である。梁行2間×桁行2間の南北方向に長い9本柱の総柱建物跡である。梁行の長さ2.2m、桁行3.9mで総面積8.6㎡である。主軸は、磁北から西に21°振れている。

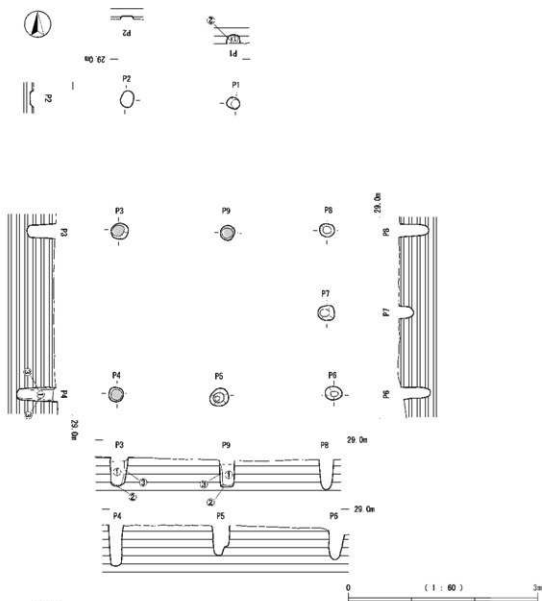
柱間寸法は、北側梁行1.1m、南側梁行1.1mで、桁行は東側2.05m・1.85m、西側2m・1.95mを計る。柱穴は直径20～30cmである。柱痕跡は確認されず、遺物は出土しなかった。

掘立柱建物跡3号 (第91図)

E-41区、Ⅲ層上面で検出された。平面形がL字状を呈する9本柱の側柱建物跡である。規模は南側の梁行が3.4m、西側の桁行が長さ4.65mで、総面積15.8㎡となる。側柱建物跡の中で最も大型である。主軸は北から西に36°振れている。

柱間寸法は、北側梁行1.2m・1.1m、南側梁行1.6m・1.8mで、桁行は東側1.25m・1.25m・2m、西側2.6m・2.1mを計る。

柱穴は直径20～30cmで、最も深い柱穴は検出面か



埋土

- ① 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 柱痕跡。粘性普通。しまり強い。
- ② 黒褐色砂質土 (10YR1/3) 柱の当たり。粘性有り。非常に固く硬層が硬化している。
- ③ 黒褐色砂質土 (10YR1/3) 柱の埋め土。粘性普通。しまり強い。

第91図 掘立柱建物跡3号

ら70 cmの深さがある。なお、P1、P2は、V層上面で検出したため浅くなっている。柱痕跡がP1、P3、P4、P9で、柱の当たりがP3、P9で確認された。柱穴から遺物は出土しなかった。

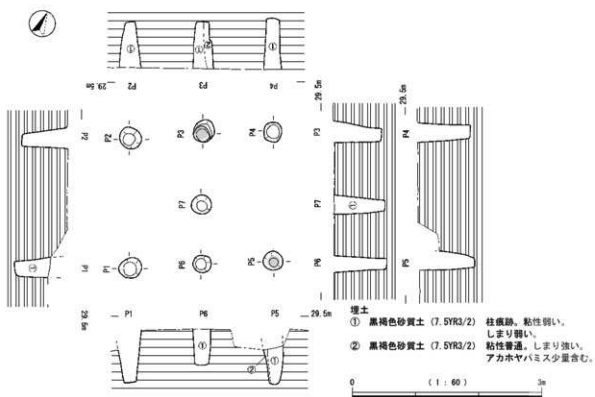
掘立柱建物跡4号 (第92図)

F-37区、Ⅲ層上面で検出された。梁行1間×桁行2間の長方形を呈する7本柱の側柱建物跡である。建物の中心にP7があり、中央の梁行は2間となる。P1、P5は、攪乱によって上部が削平されている。

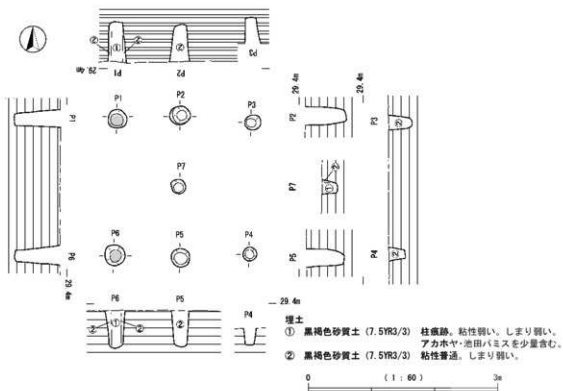
梁行の長さ2.05m、桁行2.25mで、総面積4.6㎡となる小規模な建物である。主軸は磁北から東に82°振れている。規模と方位は、東側にある掘立柱建物跡5号と類似している。

柱間寸法は、東側梁行2.1m、西側梁行2.05mで、桁行は北側1.1m・1.15m、南側1.15m・1.1mを計る。

柱穴はしっかりとした造りで、直径30～35cm、深さが60～80cmである。柱痕跡がP3、P5で確認された。柱穴から遺物は出土しなかった。



第 92 図 掘立柱建物跡 4 号



第 93 図 掘立柱建物跡 5 号

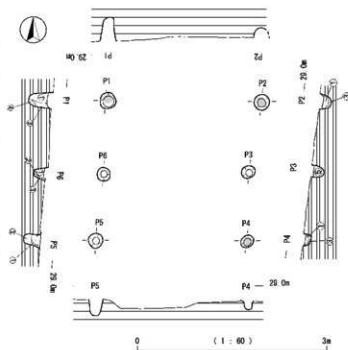
掘立柱建物跡5号(第93図)

F-37区で検出された。P1、P2、P5、P6はⅢ層上面で、P3、P4、P7はⅤ層上面で検出された。梁行1間×桁行2間の長方形を呈する7本柱の側柱建物跡である。建物の中心にP7があり、中央の梁行は2間となる。

梁行の長さ2.1m、桁行2.1mで、総面積4.4㎡となる小規模な建物である。主軸は、磁北から西に7°振れている。規模と方位は、西側にある掘立柱建物跡4号と類似している。

柱間寸法は、東側梁行2.1m、西側梁行2.15mで、桁行は北側1.1m・1m、南側1.08m・1.03mを計る。

柱穴はしっかりとした造りで、直径30～35cm、深さが60～70cmである。柱痕跡がP1、P6、P7で確認された。柱穴から遺物は出土しなかった。



- 埋土
- ① 黒褐色砂質土 (10YR2/2) 柱痕跡、粘性普通、しまり弱い、径1mm程度の赤色粒含む。
 - ② 黒色砂質土 (10YR2/1) 柱の当たり。粘性、しまり強い。
 - ③ 黒褐色砂質土 (7.5YR2/2) 柱の埋土。粘性普通、しまり強い。
 - ④ 黒色砂質土 (10YR2/1) 柱の埋め土。粘性、しまり強い。アカホヤブロック含む。
 - ⑤ 黒褐色砂質土 (10YR2/2) 粘性普通、しまり弱い。

第94図 掘立柱建物跡6号

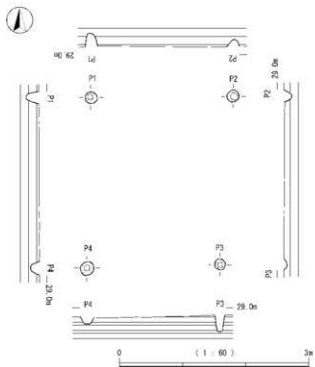
掘立柱建物跡6号(第94図)

F-40、41区、Ⅴ層上面で検出された。梁行2間×桁行1間の方形を呈する6本柱の側柱建物跡である。

梁行の長さ2.2m、桁行2.45mで、総面積5.4㎡である。主軸は、磁北から西に22°振れている。

柱間寸法は、東側梁行1.1m・1.1m、西側梁行1.15m・1.05mで、桁行は北側2.45m、南側2.35mを計る。

柱穴は直径20～25cmで、本来の掘り込み面から下がった位置で検出しているため浅くなっている。柱痕跡がP1、P2、P4、P5、P6、柱の当たりがP6で確認された。柱穴から遺物は出土しなかった。



第95図 掘立柱建物跡7号

掘立柱建物跡7号(第95図)

F-40区、Ⅴ層上面で検出された。梁行1間×桁行1間の長方形を呈する4本柱の側柱建物跡である。

梁行の長さ2.28m、桁行2.7mで、総面積6.2㎡となる。主軸は、磁北から西に17°振れている。

柱間寸法は、北側梁行2.28m、南側梁行2.1mで、桁行は東側2.65m、西側2.7mを計る。

柱穴は直径20cmで、本来の掘り込み面から下がった位置で検出しているため、浅くなっている。柱痕跡は確認されず、遺物は出土しなかった。

4 溝跡

溝跡は3条検出された。3条の溝跡は離れた地点で検出されているが、火山灰の堆積状況や形態、出土遺物が共通しており、一連の遺構である可能性が高い(第96図)。遺構の年代は7世紀後半と考えられる。

(1) 溝跡1号(第97図～101図)

Ⅲ層上面で検出されたが、本来の掘り込み面はⅡb層上部付近と想定される。検出された規模は、長さ約55m、幅2.23m、深さ0.65mで調査区を南北に横断している。断面形は緩やかなV字状をなす。

溝跡がほぼ埋没する段階で、紫コラとP4火山灰が降下している。紫コラは溝跡全体に、P4火山灰はブロック状に堆積していた。基本的に自然埋没しているが、埋土⑦の状況から一部掘り返されている可能性がある。

⑦層と⑧層の境では、大小13箇所の遺物溜りを検出した。検出層位が共通しており、溝跡の機能停止に伴って、一括廃棄されたと考えられる。これに対し、遺物溜り上層で出土した土器は総じて小片で、二次堆積と考えられる。以下、遺物溜りと出土遺物の概要について報告する。

① 遺物溜り1号(第99図)

甕形土器、鉢形土器、坏が溝の中央から東側で検出された。所属層位は⑦層下部から⑧層上面である。

出土遺物(第102図 417～420)

417は楕形の鉢形土器である。突帯には、楕円形の刻目を上から下にまばらに施す。器壁が厚く重量感があり、器面の凹凸が顕著である。

418は口縁が内傾する粗製の坏である。厚手で、内外面に太いミガキを横方向に施す。器形の歪み、凹凸が目立つ。

419、420は甕形土器の底部である。内面天井部が平坦に成形されている。

② 遺物溜り2号(第99図)

甕形土器、坏、蔽石が溝の中央で検出された。所属層位は、⑦層下部から⑧層上面である。

出土遺物(第102図 421～424)

421、422は浅い楕形の精製坏である。精良土を使用し、橙色を呈する。421は内外面を丁寧に磨いており、底面には「十」のヘラ描き記号がみられる。422は内外面が摩滅しており、調整は不明である。

423は平底の甕形土器底部である。外面にケズリを施す。

424は断面三角形の棒状礫を利用した蔽石である。正面、右側面、上端に蔽打痕が形成されている。上端の蔽打痕は痕跡が弱い。

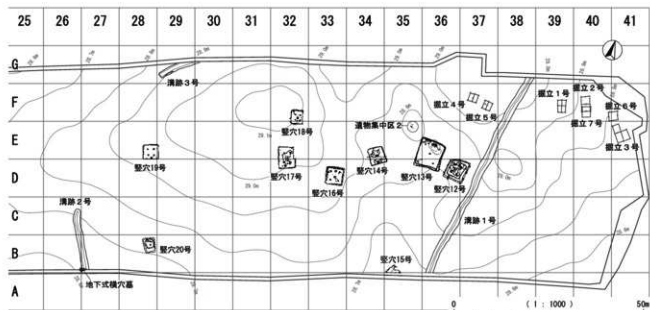
③ 遺物溜り3号(第99図)

大型の甕形土器、壺形土器が溝の中央で検出された。所属層位は、⑦層下部から⑧層上面である。

出土遺物(第102図 425、426)

425は長胴で丸底の壺形土器である。完形品で口径16cm、器高42.8cmを計る。頸部に突帯文を巡らし、竹管状の円形刻目を施す。胎土は精良で、丁寧な作りである。内外全面にミガキ調整を施す。

426は口縁が直立する甕形土器である。胴部には下



第96図 古墳時代終末期遺構配置図(1/1000)

垂する刻目突帯文を1条巡らし、ヘラ切りによる細い刻目をまばらに施す。下胴部が剥離しており、調整は粗く、器面に凹凸がみられる。

④ 遺物溜り4号(第99図)

甕形土器、須恵器が⑦層下部から⑧層上面で検出された。東壁に沿って出土しており、溝の東側から廃棄された可能性が高い。甕形土器は破片の状態で見つめられ、やや離れた位置で須恵器の高環が出土した。

出土遺物(第103図 427～432)

427～431は口縁が直立する甕形土器である。427は長身のプロポーションで、胴部に粗雑な刻目突帯文を施す。刻目はまばらで、突帯を下から上に押し切つて施されている。内外面には粗いハケ目がナゲ消されずに残っている。428、430は突帯を上下の工具押さえによって成形している。431は口縁が内湾する小型の甕形土器である。外面にミガキを施す。

432は須恵器の高環である。口径10.1cm、器高7.7cmの小型品で、坏部が椀形となる。脚部は短脚で、端部は面取りがなされ、下方に突出している。内外面回転ナゲ調整を施す。

⑤ 遺物溜り5号(第100図)

甕形土器、甕形土器、坏、高環が床面から20cm程浮いた状態で検出された。所属層位は⑧層で、一括して廃棄された可能性が高い。

出土遺物(第103図 433～441)

433は完形の甕形土器で、胴部が傾いている。胴部突帯は大きく歪み、刻目の間隔は広い。刻目は粗大で、突帯を押し切るように下から上に施している。内外面に粗いハケ目を施す。

434は口径が17cmと小さく、口縁部が弱く外反する。胴部突帯は交差し、上下を工具で押さえ成形している。煤が口縁近くまで付着している。435、436は低脚となる甕形土器の底部である。

437は小型の壺である。厚手の作りで、外面は摩耗しているが調整はミガキと推測される。胴部外面に煤が付着し、接合痕がみられる。

438は金魚鉢状の鉢形土器である。器壁が厚く、内外面に粗いナゲを施す。439は口縁が直線的に開く平底の鉢形土器である。下胴部内面が剥落している。

440は口縁が直線的に開く坏である。胎土は泥質で、厚みがある。

441は方頭罐である。錆のため表面観察ができないが、エックス線写真には、細身の鉄線らしきラインが内部に映っている。刃部と茎の境に木質が残る。

⑥ 遺物溜り6号(第100図)

完形品の甕形土器が、床面から20cm程浮いた状態で出土した。出土位置は溝跡の中央である。

出土遺物(第104図 442)

442は完形品の甕形土器で、口径19.9cm、器高24.1cmを計る。口縁は内湾し、底部は低脚である。胴部突帯は粗雑で、指と工具押さえによって成形している。胎土は泥質で、内外面に粗いハケ目、ミガキを施す。

⑦ 遺物溜り7号(第100図)

須恵器の高環が、床面から20cm程浮いた状態で検出された。出土位置が東壁に近く、溝の東側から廃棄された可能性がある。

出土遺物(第104図 443)

443は須恵器の高環である。口径12cm、器高6.7cmの小型品で、坏部が椀形となる。脚部は短脚で、端部が下方に突出している。内外面回転ナゲ調整を施す。

⑧ 遺物溜り8号(第100図)

甕形土器が、西壁近くで検出された。出土層位は⑤層と⑥層の境界付近である。溝の西側から廃棄若しくは、流れ込んだ可能性がある。

出土遺物(第104図 444)

444は大型壺の下胴部である。外面はミガキ調整を施す。内面は剥落している。

⑨ 遺物溜り9号(第100図)

完形品の鉢形土器が、床面付近に正置された状態で出土した。出土位置は、溝跡の中央である。

出土遺物(第104図 445)

445は平底の鉢形土器である。厚手で重量感があり、底面にはヘラ描き記号がみられる。内外全面に幅広いミガキを施す。

⑩ 遺物溜り10号(第101図)

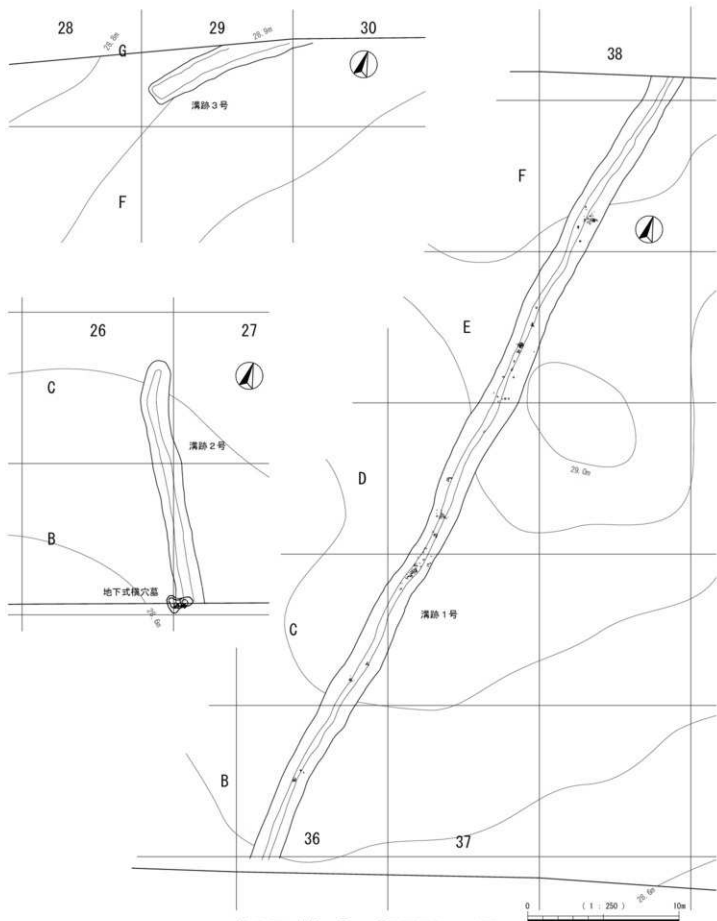
甕形土器が床面から20cm程浮いた状態で検出された。所属層位は、⑦層と⑧層の境界付近である。

出土遺物(第104図 446)

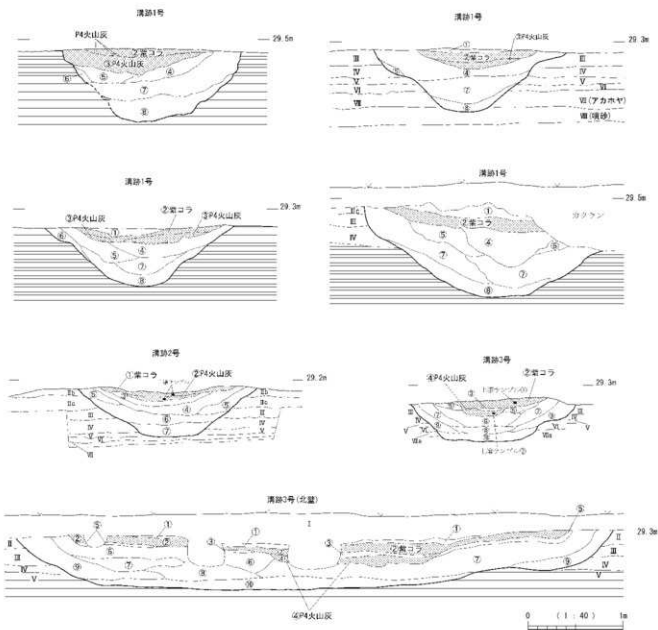
446は口縁が内湾する甕形土器で、胴部に1条の突帯文を施す。条痕状の粗いハケ目を施し、内外面に指頭圧痕による凹凸がみられる。接合痕が外面に残る。土器付着炭化物の年代は、1348 ± 21BPである。

⑪ 遺物溜り11号(第101図)

甕形土器、甕形土器が、溝跡の中央で検出された。所属層位は、床面付近から⑦層下部である。



第97図 溝跡1号～3号平面図 (1/250)



溝跡1号埋土

- ① 黒色砂質土 (10YR2/1) II c, II b層に近い。
- ② 褐灰色砂質土 (10YR4/2) 紫コラ
- ③ 黒色砂質土 (10YR3/1) 下部にP4火山灰を含む。
- ④ 褐灰色砂質土 (10YR4/1) しまり無し。
- ⑤ 黒色砂質土 (10YR2/1) しまり無し。黄色火山灰を含む。
- ⑥ 黒色砂質土 (10YR2/1) キメが細かく、しまりが良い。III層に近い土質。
- ⑦ 褐灰色砂質土 (10YR4/1) 池田湖火山灰を少量含む。
- ⑧ 黒色砂質土 (10YR2/1) 上部に土器溜りが形成される。

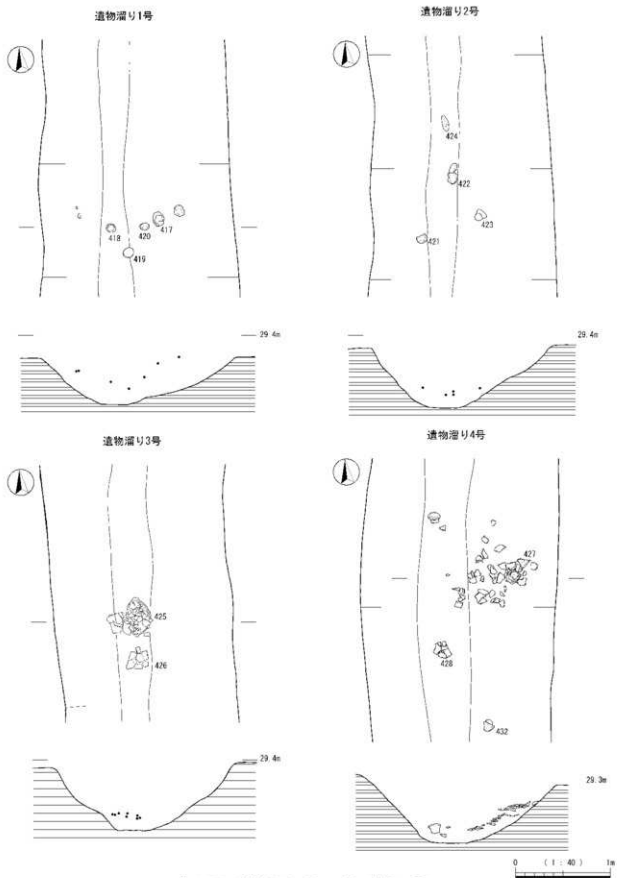
溝跡2号埋土

- ① 黒色砂質土 (10YR3/1) 紫コラを主体とする。
- ② 黒色砂質土 (7.5YR2/1) P4火山灰をブロック状に含む。紫コラを少量含む。
- ③ 黒色砂質土 (10YR1, 7/1) P4火山灰を微量含む。
- ④ 黒色砂質土 (10YR2/1) 御池火山灰を微量含む。
- ⑤ 黒色砂質土 (10YR2/1) 御池火山灰を多く含む。
- ⑥ 黒色砂質土 (10YR2/1) 池田湖火山灰を微量含む。
- ⑦ 黒色砂質土 (10YR1, 7/1) 池田湖火山灰を少量含む。

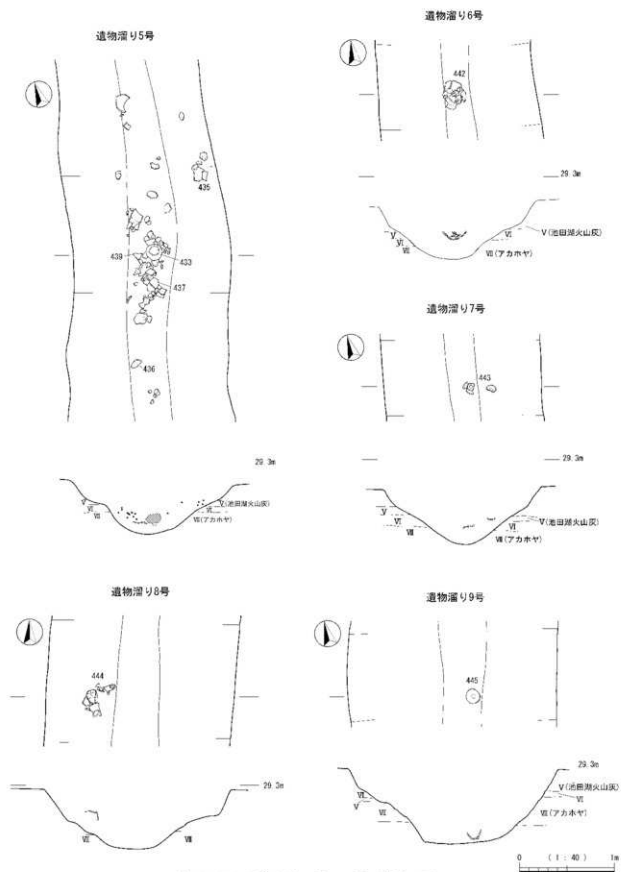
溝跡3号埋土

- ① 黒褐色砂質土 (10YR2/3) しまり弱い。
- ② 黒色砂質土 (10YR1, 7/1) 紫コラを含む。
- ③ 黒褐色砂質土 (10YR3/2) 1mm以下のP4を含む。
- ④ 黒色砂質土 (10YR1, 7/1) P4火山灰をブロック状に含む。
- ⑤ 褐灰色砂質土 (10YR4/1) しまり無し。
- ⑥ 黒色砂質土 (7.5YR1, 7/1) しまり弱い。
- ⑦ 黒色砂質土 (7.5YR2/1) しまり無し。
- ⑧ 黒色砂質土 (2.5YR2/1) しまり無し。
- ⑨ 黒色砂質土 (5YR2/1) しまり無し。
- ⑩ 黒色砂質土 (5YR2/1) しまり無し。

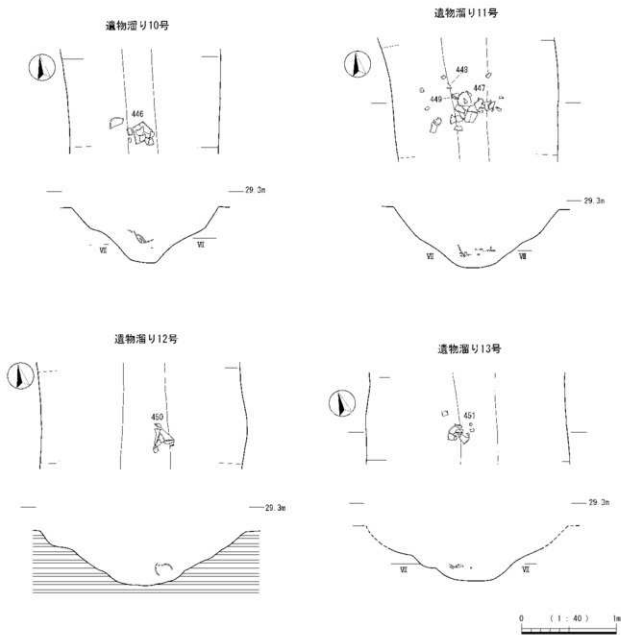
第98図 溝跡1号～3号土層断面図



第99図 遺物溜り1号～4号（溝跡1号）



第100図 遺物溜り5号～9号(溝跡1号)



第101図 遺物溜り10号～13号(溝跡1号)

出土遺物(第104図 447～449)

447は大型壺の下胴部である。底部は丸底に近い平底で、外面は摩耗している。448, 449は甕形土器の底部である。448は底部に木葉痕が残っている。

⑫ 遺物溜り12号(第101図)

甕形土器が、東壁の立ち上がり近くで検出された。所属層位は⑦層下部である。

出土遺物(第104図 450)

450は口径24.3cm, 器高27.5cmの甕形土器である。

口縁は小さく外反し、底部は低脚となる。胴部突帯は、上下を工具で押さえ成形している。内外面丁寧なナデ調整を施す。

⑬ 遺物溜り13号(第101図)

高坏が溝跡西壁付近で検出された。所属層位は⑦層上部である。

出土遺物(第104図 451)

451は黒色研磨を施した高坏である。坏部は楕形で、脚部がスカート状に開く。坏部内面の大部分が剥落し

ている。

(1) 溝跡1号出土遺物(第105～109図)

壘形土器(452～486)

452～458は口縁が直立若しくは内湾する壘形土器である。胴部に歪んだ突帯を巡らし、粗大な刻目をまばらに施している。刻目は、突帯を下から上に押し切って施すものが多い。調整は粗雑で、粗いハケ目やミガキを施し、内外面に接合痕を残すものがある。453は突帯のほとんどが剥落しており、突帯の上部にヘラ描き沈線がみられる。455の土器付着炭化物の年代は、1418±20BPである。

459、460は胴部に無刻目の突帯文を巡らし、外面には幅広のミガキを施す。461は口径17.5cmの小型品で口縁部が外反する。突帯の下部に縦位の沈線が1条みられる。

463は口縁が大きく開き、注口が1か所付いている。突帯は断面薄錐形で、上下を指押さえによって成形している。刻目は、突帯を下から上に押し切って施される。

467～486は底部である。467～475は脚部が高く、外面天井部を平坦に成形する。

476～479は低脚の底部である。480～486は平底で、483～485は木葉痕が残る。

壘形土器(487～492)

487は器高44.8cmの大型品である。口縁部は緩やかに外反し、胴部は長胴となる。底部は丸底で、口縁部の付け根に刻目突帯文を1条巡らす。胴部の内外面に煤が付着している。488は大型品の頸部で、ハケ目工具で刻目を施す。490は肩部で、精良な灰白色土を使用している。491は丸底に近い平底で、胎土は泥質である。被熱している可能性があり、胴部中位が摩滅している。

鉢形土器(493、494)

493は部厚い平底の鉢形土器である。外面に太いミガキを施す。494は口縁部が小さく折れ曲がる。厚手で、内外面ミガキを施す。

坏(495～501)

495～497は粗製坏である。器壁が厚く、器面調整は粗雑で、内外面に幅広のミガキを施す。498～501は粗製坏より一回り小さい坏である。器壁が薄いものと厚いものがあり、内外面に丁寧なミガキを密に施す。500は底部近くにケズリを施している。501は底面に「十」のヘラ描き記号がみられる。

甔(503、504)

503、504は下胴部で、蒸気孔の直径は6.7cm～7.2cmである。504は胴部外面に縦方向の突帯文が残る。

不明品(502)

502は器種不明品である。櫛描波状文が施文されていることから、古墳時代前期の土器と考えられる。

須恵器(505～511)

505は宝珠つまみをもつ坏Gの蓋である。口径10cmで、口縁部内面には小さなかえりが作られている。外面天井部は回転ナデ調整を施す。506はつまみを欠損した坏Gの蓋である。口径10cmで、口縁部内面には小さなかえりが作られている。外面天井部は回転ナデ調整を施す。509は坏または蓋の体部である。外面の体部下半は回転ナデ調整を施す。内面は回転ナデ調整である。

507は口径10.4cm、器高3.7cmの坏Gである。口縁部が直立し、底部外面は回転ナデ調整を施す。508は口径10.2cmの坏Gで、内外面に回転ナデ調整を施す。509は坏または蓋の体部である。外面の体部下半は回転ナデ調整を施す。上半は回転ナデ調整を施す。

510は高坏である。口径12cm、器高9cmの小型品で、坏部が桶形となる。脚部は短脚で、端部は外側に突出している。内外面回転ナデ調整を施す。

511は長頸甔の肩部と推測される。内外面回転ナデ調整を施し、自然軸がかかる。

鉄鏃(513～519)

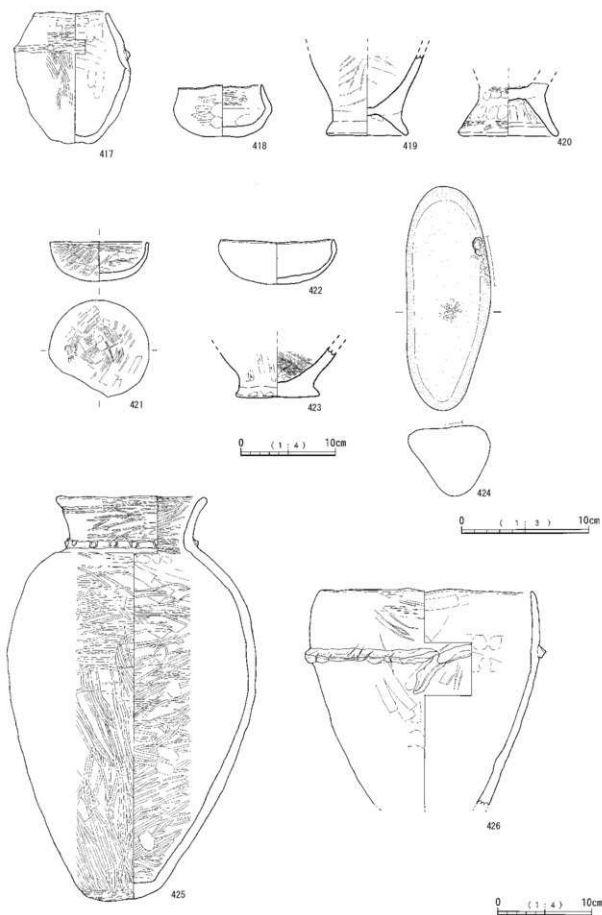
513は方頭鏃の刃部である。514、515は圭頭鏃である。鏃跡が著しく、エックス線写真から外形を復元した。515は茎に木質らしき痕跡が残る。

516は長頭鏃である。エックス線写真を見ると、刃部は三角形になると考えられる。茎は一回り細くなる。

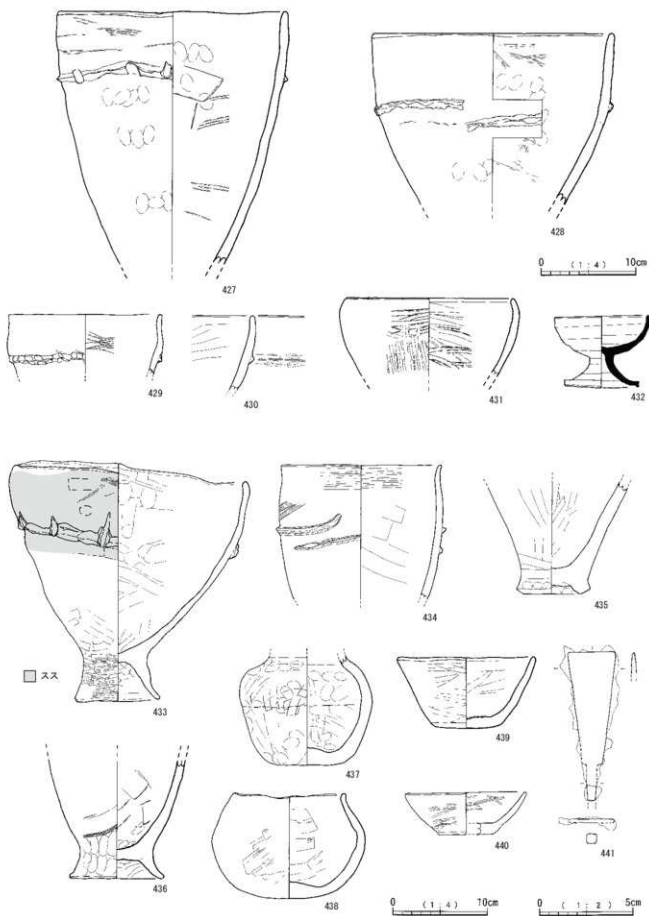
517は欠損した刃部、518、519は茎である。518は皮巻とみられる痕跡が残る。

軽石製品、礫(520、521)

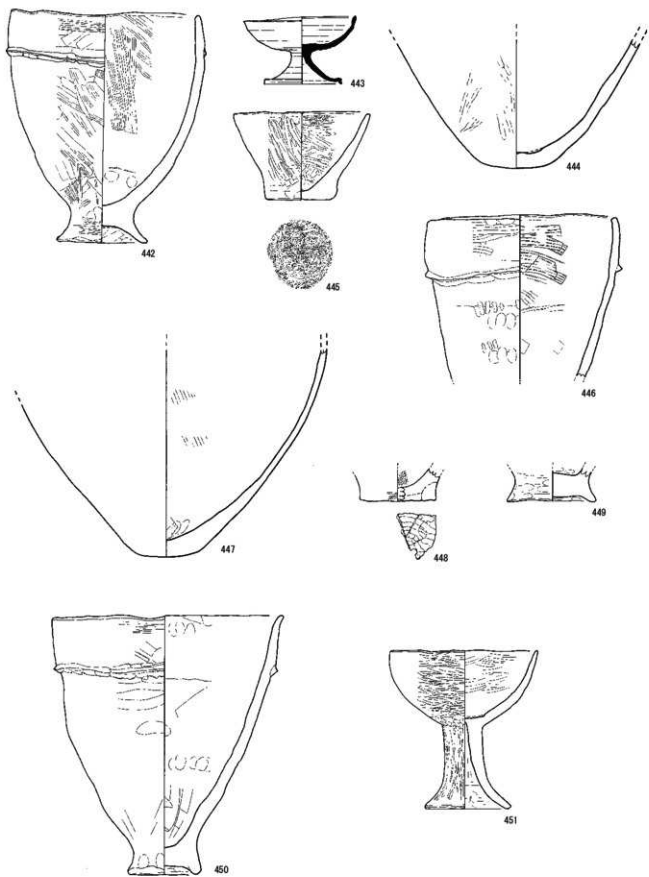
520は軽石を研磨によって三角形に加工している。521は砂岩の扁平礫である。



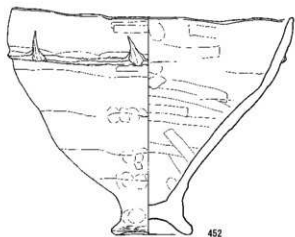
第 102 図 遺物溜り 1 号～3 号出土遺物



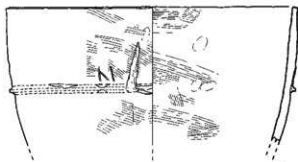
第 103 図 遺物溜り 4 号, 5 号出土遺物



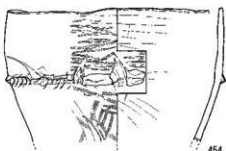
第 104 図 遺物溜り 6 号～ 13 号出土遺物



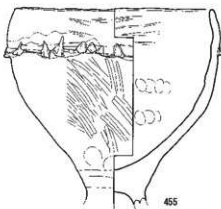
452



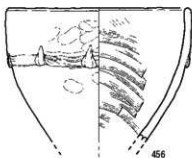
453



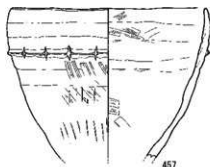
454



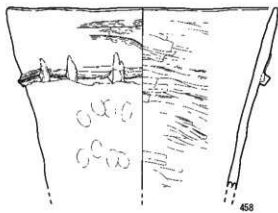
455



456



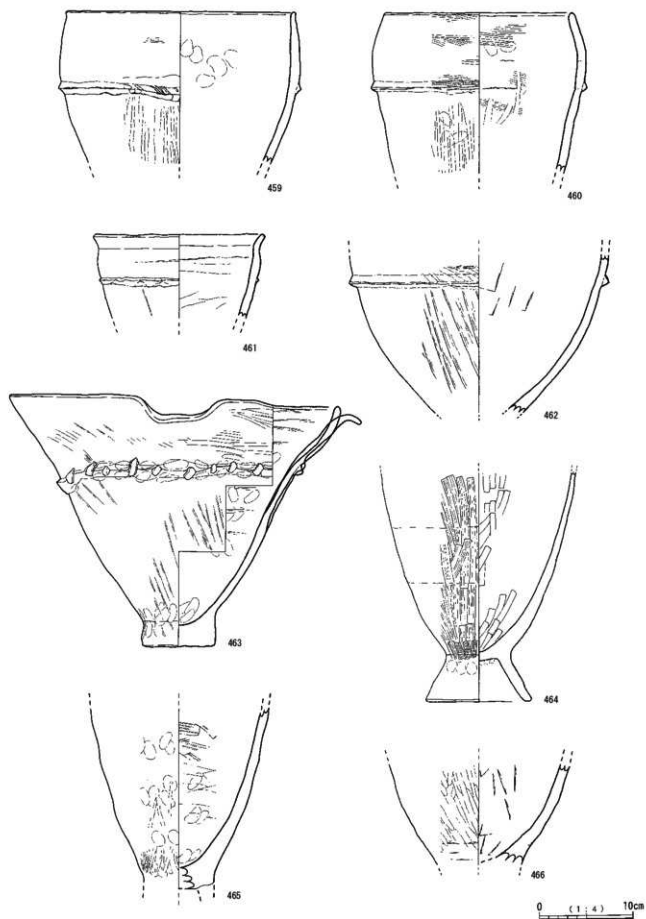
457



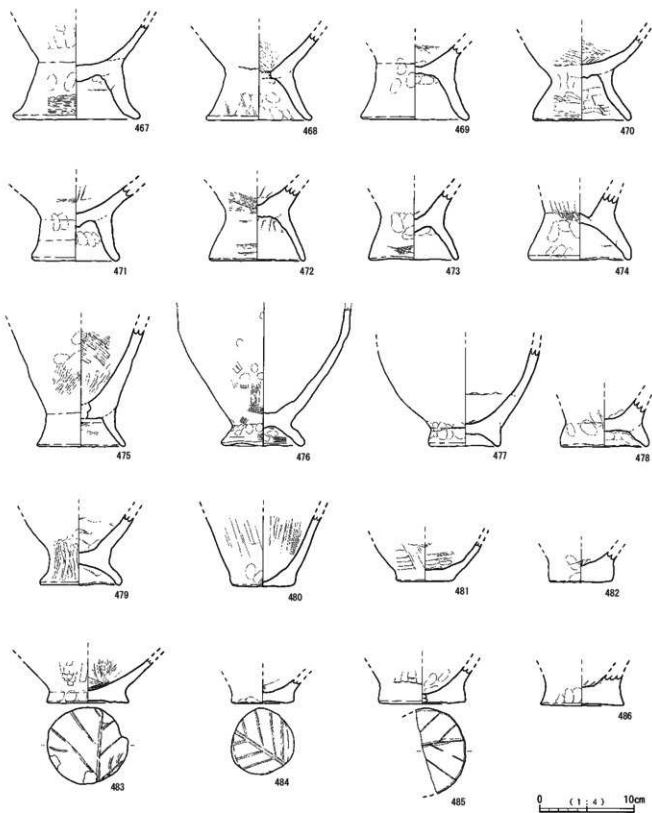
458

0 (1:4) 10cm

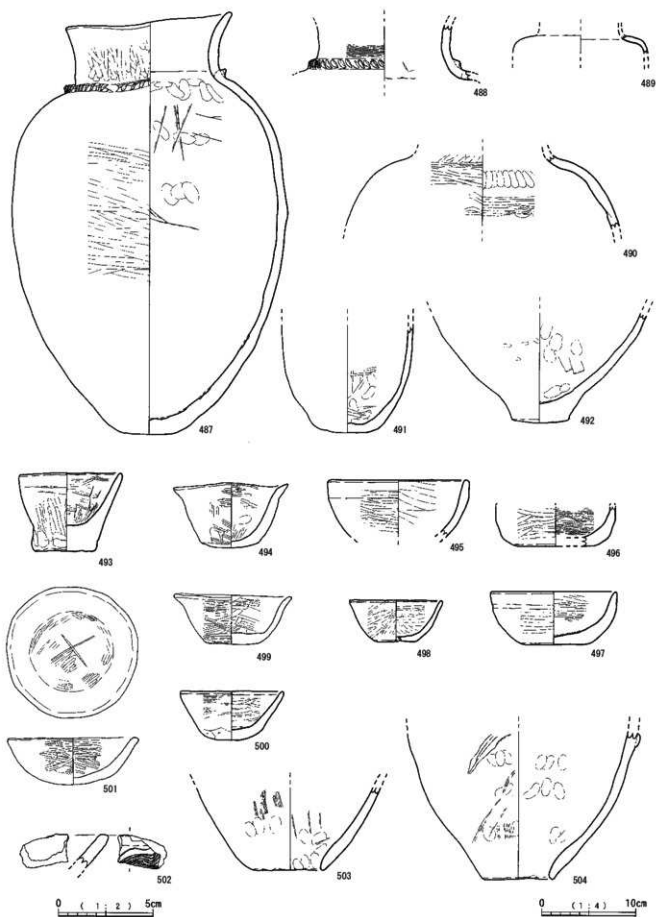
第 105 图 溝跡 1 号出土物 1



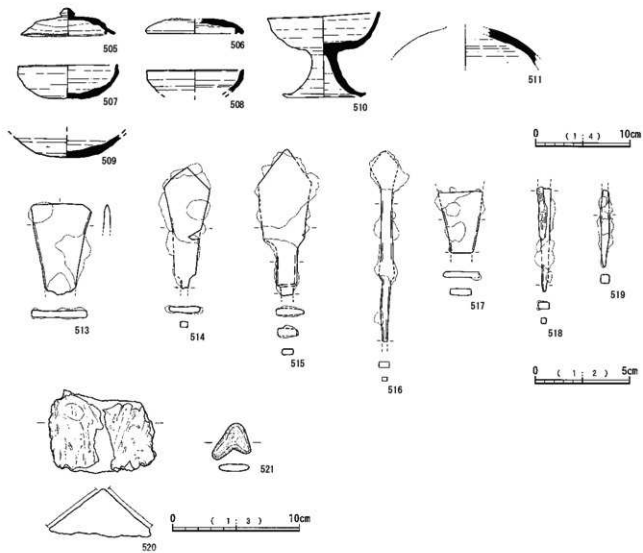
第 106 图 溝跡 1 号出土遺物 2



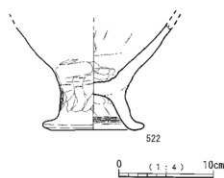
第 107 图 濛跡 1 号出土遗物 3



第 108 图 溝跡 1 号出土遺物 4



第 109 图 满迹 1 号出土遗物 5



第110図 溝跡2号出土遺物

(2) 溝跡2号 (第97, 98図)

B・C-26・27区のII b層上面で検出された。検出された規模は、長さ7.8m、幅1.9m、深さ0.45mで、南側は調査区外に延びている。底面が平坦で、断面は逆台形状である。

溝跡の調査中に地下式横穴墓を検出した。壁面の観察では、溝跡が埋没する前に壁面を掘り込んで玄室を構築している。

溝跡がほぼ埋没する段階で、紫コラとP4火山灰が降下している。火山灰の下位で甕形土器が1点出土した。

出土遺物 (第110図)

522は甕形土器の底部である。大型品で、接合時に脚部をねじった痕跡が残る。粗雑な作りである。

(3) 溝跡3号 (第97, 98図)

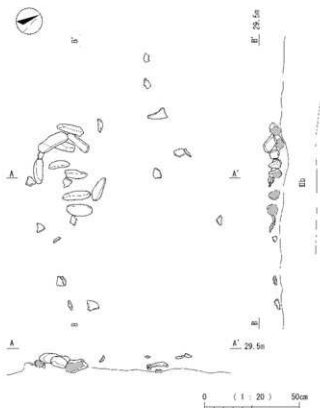
G-29区のII層上面で検出された。検出された規模は、長さ5.4m、幅1.55m、深さ0.43mで、北側は調査区外に延びている。底面が平坦で、壁は外側に緩く立ち上がる。

溝跡がほぼ埋没する段階で、紫コラとP4火山灰が降下している。出土遺物はなかった。

5 地下式横穴墓 (第112図)

南壁の土層断面で確認したため、北側半分天井部は確認することができなかった。天井部が崩落しているが、全長1.7m程の地下式横穴墓で、玄室は幅1.75m、高さ0.6mと推測される。溝跡が埋没する以前に、溝跡2号を掘り込み玄室を構築している。竪坑は玄室より一段低くなっており、アカホヤブロックを多量に含む土で埋められている。竪坑の南側には、玄室掘削時に廃棄されたアカホヤブロックが堆積していた。

玄室は竪坑から埋土(A~E)が流れ込んだ後、天



第111図 遺物集中区2

井部及び狭道の崩落(オ〜サ)が起き埋没している。アカホヤの土塊が狭道と玄室で検出されており、アカホヤ土塊を用いて閉塞していた可能性がある。人骨や副葬品は確認されなかった。溝跡が機能している段階に構築されることから、年代は7世紀後半頃と考えられる。

6 遺物集中区2 (第111図)

E-35区、表土直下で検出された。所属層位はII b層である。9個の礫石器、礫がまとまって出土し、その周囲に土器片がみられた。断ち割り調査を実施したが、明確な掘り込みは確認されなかった。

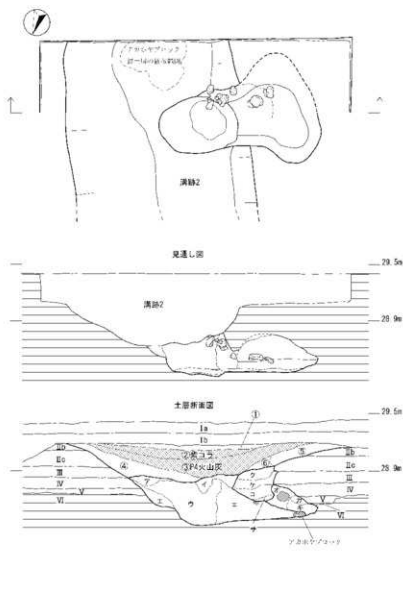
出土遺物 (第113図)

523は甕形土器である。上胴部が屈曲し、歪んだ突帯文を1条施す。調整が粗く、器面の凹凸が著しい。

524~528は棒状礫を利用した敲石である。524は正面に擦れの範囲が認められる。上下両端には鋭い敲打痕が形成される。526の敲打痕は研磨痕に近い。528は正面と右側面に鉄分の付着が認められる。

529は柱状の垂角礫を素材とした敲石である。砥面は正面に形成される。裏面には研磨痕と鉄分の付着がある。

530~532は棒状の砂岩礫である。敲石の素材として持ち込まれた可能性がある。



溝埋土

- ① 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 紫コラを少量含む。
- ② 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 紫コラを主体とする。
- ③ 黒色砂質土 (10YR1.7/1) II層主体。P4火山灰を少量含む。
- ④ 黒色砂質土 (10YR2/1) しまりやや弱い。
- ⑤ 黒色砂質土 (7.5YR2/1) しまり有り。
- ⑥ 黒褐色砂質土 (10YR3/1) しまり有り。

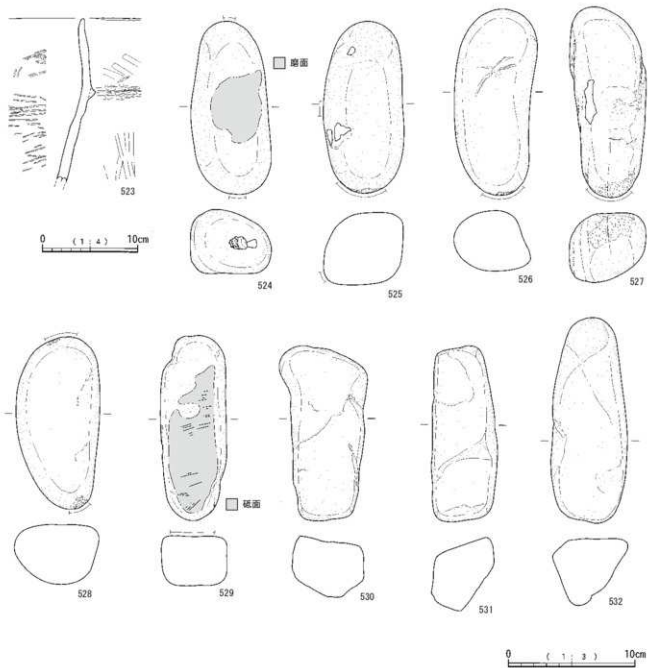
竪坑埋土

- ア 黒色砂質土 (10YR1.7/1) アカホヤブロックを少量含む。
- イ 黒色砂質土 (10YR1.7/1) アカホヤ、池田湖火山灰少量含む。
- ウ 黒色砂質土 (10YR1.7/1) アカホヤブロックを多量に含む。しまり弱い。
- エ 黒色砂質土 (10YR2/1) アカホヤブロック含む。

天井部陥落土

- オ III・IV層の陥落土。しまり弱い。
- カ III・IV層の陥落土とみられる。
- キ 黒色砂質土 (10YR1.7/1) しまり強い。アカホヤ少量含む。
- ク 底層陥落土
- ク 黒土ブロック。
- ケ IIc層陥落土。
- コ III層陥落ブロック。
- サ IV層陥落ブロック。

第 112 図 地下式横穴墓



第 113 図 遺物集中区 2 出土遺物

第 23 表 古墳時代終末期の土器観察表 (1)

() は復元口径・底径

神岡 番号	遺構 番号	遺構名	種	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整	色調	胎土	備考		
72	壱穴 12 号	299	①、②	甕	(19.0)	-	-	(外) ハケメ、丁寧なナデ (内) ナデ、ミガキ	明赤陶	白色砂		1 象突部、造物盛り 5 号、 罐類 1 号と接合	
		300	③	杯	(13.4)	(7.0)	7.0	(外) ナデ、工具ナデ、横ミガキ (内) ナデ、横ミガキ	粗	砂粒少量			
		301	④	杯	(12.2)	-	-	(外) ナデ (内) ナデ	にぶい粗	灰質土、角閃石、石英、 白色砂			
		302	⑤	高杯	(13.1)	-	-	(外) ミガキ (内) 摩滅	粗	緑白土、赤色砂			
		303	⑥	小型土器	3.1	0.6	3.8	(外) ナデ (内) ナデ	粗	角閃石、白色赤色砂			
74	壱穴 13 号	304	⑦	甕	(10.0)	-	-	(外) 回廊ヘラケズリ (内) 回廊ヘラケズリ	灰	緑白土		顕微鏡	
		305	⑧	甕	-	-	-	(外) 格子目タガキ (内) 当て具板	黄灰	緑白土		顕微鏡	
		323	⑨	甕	(19.0)	-	-	(外) ハケ後ナデ (内) ハケ後ナデ	粗	角閃石、石英		1 象突部	
		324	⑩	甕	(19.4)	-	-	(外) 板ナデ後ナデ、ヘラケズリ (内) ナデ、板ナデ後ナデ	明黄陶	角閃石		1 象突部、外面に接合痕アリ	
		325	⑪	甕	(18.4)	-	-	(外) ハケメ、ハケ後ナデ (内) ハケ後ナデ	粗、灰黄陶	角閃石、石英、白色砂		1 象突部、二次焼成	
		326	⑫	甕	(16.0)	-	-	(外) ヘラケズリ	明赤陶	角閃石、長石、石英、 白色砂		1 象突部、外面煤行着、 内外面に接合痕アリ	
		327	⑬	甕	8.7	6.1	17.6	(外) 粗いミガキ (内) ミガキ	明赤陶	石灰、白色砂		器底が積っている	
		328	⑭	甕	-	(15.42)	-	(外) ナデ (内) ナデ	粗	角閃石、石英、白色砂			
		329	⑮	鉢	(11.2)	(6.6)	7.7	(外) ナデ、粗いミガキ (内) ナデ、ミガキ	赤陶	長石、石英		外面煤行着	
		330	⑯	土	(15.0)	9.2	12.8	(外) ミガキ、摩滅 (内) ミガキ、割落	明赤陶	角閃石、石英、雲母		罐類 1 号と接合	
76	壱穴 14 号	331	⑰	鉢	-	-	-	(外) ナデ後ナデ (内) ナデ、工具板	粗	角閃石、石英		内外面煤行着	
		332	⑱	鉢	(14.1)	-	-	(外) ナデ (内) ナデ	にぶい黄陶	角閃石、石英、白色砂			
		333	⑲	鉢	(14.1)	-	-	(外) ミガキ (内) ミガキ、割落	粗	角閃石、長石、雲母、赤色砂		壱穴罐物類 17 号と接合	
		334	⑳	鉢	(9.4)	-	-	(外) 粗いミガキ (内) ナデ	粗	角閃石、赤色砂、白色砂			
		335	㉑	不明	-	(11.6)	-	(外) ナデ、工具板 (内) ナデ	粗	石灰、雲母			
		336	㉒	不明	-	(10.0)	-	(外) ナデ (内) ナデ	粗	角閃石、石英			
		339	㉓	甕	(18.0)	-	-	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ	粗	角閃石、石英、赤色砂		1 象突部、外面煤行着	
		340	㉔	甕	-	-	-	(外) ハケ後ナデ、ナデ (内) ハケ後ナデ	にぶい黄陶	角閃石、長石、石英		1 象突部、外面に接合痕アリ	
		341	㉕	甕	(7.0)	-	-	(外) ナデ (内) 板ナデ	黄陶、にぶい黄陶	長石、石英		底面に葉脈のような痕跡	
		342	㉖	甕	-	8.7	-	(外) 摩滅 (内) 摩滅	にぶい粗	角閃石、長石、石英、黒色砂			
78	壱穴 15 号	343	㉗	鉢	17.7	7.0	10.1	(外) ミガキ、割落 (内) ハケメ、ミガキ、割落	粗	角閃石、石英			
		344	㉘	杯	(18.8)	(1.0)	4.9	(外) ナデ、工具ナデ (内) ナデ	にぶい粗	角閃石、長石、石英		外面煤行着、接合痕アリ	
		345	㉙	甕	-	(9.0)	-	(外) 回廊ヘラケズリ (内) 回廊ヘラケズリ	灰白、灰黄	緑白土		顕微鏡	
		356	㉚	一級床面	-	-	-	(外) 粗いナデ、ナデ (内) ナデ、ハケ後ナデ	にぶい黄陶	角閃石、長石、石英		1 象突部、外面煤行着、 内外面に接合痕アリ	
		357	㉛	床底	甕	-	(8.7)	-	(外) ハケメ、ナデ (内) ナデ	にぶい粗	角閃石、長石、石英		
80	壱穴 16 号	358	㉜	甕	-	-	-	(外) 磨面段状文 (内) ナデ	にぶい粗、灰黄陶	角閃石、長石、石英、 白色砂		磨面段状文	
		359	㉝	一級床面	高杯	-	-	(外) ミガキ (内) ナデ	にぶい粗	長石、石英、赤色砂		壱穴罐物類 6 号と接合	
		360	㉞	床底	浅鉢	(17.0)	-	-	(外) ミガキ (内) ナデ、ミガキ	灰黄陶、にぶい粗	長石、石英、白色砂		黒泥
		367	㉟	一級	甕	-	-	-	(外) ナデ (内) ハケメ	にぶい黄陶	角閃石、長石、石英		1 象突部、外面煤行着、 内外面に接合痕アリ
		368	㊱	一級	甕	(22.2)	-	-	(外) ナデ、ミガキ (内) ナデ	にぶい黄陶、 にぶい粗	長石、石英		1 象突部、外面に接合痕アリ、 外面煤行着、接合痕アリ
		369	㊲	一級	甕	(18.2)	-	-	(外) ハケメ、ナデ (内) ハケメ、ハケ後ナデ	にぶい粗、にぶい粗	角閃石、長石、石英		1 象突部、外面煤行着
		370	㊳	一級	甕	-	6.1	-	(外) ハケメ、ナデ (内) ナデ、工具板	にぶい黄陶、灰黄	角閃石、石英、雲母		
		371	㊴	一級	雙耳鉢	-	(7.4)	-	(外) ナデ、ヘラケズリ (内) ナデ	浅黄陶	角閃石、長石、石英		
		372	㊵	一級	甕	28.5	8.2	26.5	(外) 粗いナデ、ミガキ、摩滅、割落 (内) 粗いハケメ、摩滅	明黄陶	角閃石、石英、雲母、 赤色砂		1 象突部、他の罐と比べて 白っぽい色調
		373	㊶	一級	甕	-	-	-	(外) ミガキ (内) ナデ、ミガキ	にぶい黄陶	角閃石、長石、石英		
82	壱穴 17 号	374	㊷	一級	小型丸底甕	-	6.4	-	(外) ナデ (内) ナデ	にぶい粗	角閃石、長石、石英		外面煤行着
		382	㊸	一級	甕	20.3	11.1	29.4	(外) ナデ、工具板 (内) ハケメ	明赤陶	石灰、白色砂		1 象突部、長身の甕
		383	㊹	一級	甕	(22.0)	-	-	(外) 丁寧なナデ (内) 丁寧なナデ	明赤陶	雲母、白色砂		1 象突部、外面煤行着
		384	㊺	一級	甕	-	10.8	-	(外) ハケメ (内) ハケ後ナデ	粗	長石、石英		
		385	㊻	一級	鉢	-	-	-	(外) ナデ、ミガキ (内) ミガキ	明陶、粗	角閃石、石英		
		386	㊼	一級	高杯	-	-	-	(外) ミガキ (内) ナデ	粗	石灰、赤色砂		
		387	㊽	一級	小型土器	7.4	1.0	4.7	(外) ナデ (内) ナデ	明赤陶	石灰、白色砂		1 象突部
		400	㊾	一級	甕	-	-	-	(外) 丁寧なナデ (内) 丁寧なナデ	明黄陶	長石、石英、赤色砂		1 象突部
85	壱穴 18 号	401	㊿	一級	鉢	9.8	6.0	10.6	(外) ナデ (内) ナデ	粗	角閃石、石英、白色砂		厚みのある厚底、蓋みあり、 内側に細目土層が多い
		402	㊿	一級	鉢	(16.6)	1.0	9.9	(外) ミガキ (内) ナデ	にぶい黄陶	角閃石、石英		蓋みのある器種の厚い鉢

一 は計測不能

第 24 表 古墳時代終末期の土器観察表 (2)

神岡 番号	遺構 番号	遺構名	種	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整	色調	胎土	備考
102	417	⑤下	鉢	7.4	2.3	13.8	(外) ミガキ (内) ナデ	楕	褐色	長石, 石英, 赤色砂	1条突部, 定形の種類は稀, 器壁が厚い
	418	⑤下	杯	8.8	3.0	5.4	(外) ミガキ (内) ミガキ	明赤褐色	緑白土	厚みがあり上縁部が最も	
	419	⑤下	甕	-	(8.7)	-	(外) ナデ, 工具痕 (内) ナデ, 割落	にぶい赤褐色, 明赤褐色	角閃石, 長石, 石英, 白色砂	外面燻付着	
	420	⑤下	甕	-	10.6	-	(外) ナデ (内) ナデ, ミガキ	にぶい楕	角閃石, 長石, 石英		
	421	⑤下	杯	10.5	0.4	4.2	(外) ナデ, ミガキ (内) ナデ, ミガキ	楕	緑白土	底に十字の記号あり	
	422	⑤下	杯	(12.2)	2.2	5.1	(外) 厚縁 (内) 厚縁	楕	緑白土	丸底の浅杯	
	423	⑤下	甕	-	9.8	-	(外) ナデ, ケズリ後ナデ (内) ハケメ, ナデ	楕	角閃石, 長石, 石英, 赤色砂		
	425	⑤下, ⑤中	甕	(16.0)	7.0	42.8	(外) ミガキ (内) ミガキ	明赤褐色	緑白土, 赤色砂, 白色砂	1条突部	
	426	⑤下, ⑤中	甕	(22.3)	-	-	(外) ナデ, 厚縁 (内) ナデ	にぶい赤褐色	長石, 石英, 白色砂	1条突部, 外面燻付着	
	427	⑤下	甕	(24.4)	-	-	(外) ハケメ後ナデ, 丁寧ナデ (内) ハケメ後ナデ, 丁寧ナデ	明赤褐色	長石, 石英	1条突部, 内外面燻付着	
103	428	⑤下, ⑤中	甕	(25.2)	-	-	(外) 丁寧ナデ, 粗いナデ (内) 丁寧ナデ, 粗いナデ	楕	長石, 石英, 雲母, 白色砂	1条突部	
	429	⑤下	甕	(12.5)	-	-	(外) ナデ (内) ハケメ, ナデ	にぶい黄褐色, にぶい楕	1条突部		
	430	⑤下	甕	-	-	-	(外) ナデ (内) ヘラナデ	明赤褐色	角閃石, 雲母, 白色砂	1条突部	
	431	⑤下	甕	(17.6)	-	-	(外) ハケメ, ハケメ後ナデ, 粗いミガキ (内) ハケメ, ハケメ後ナデ	にぶい楕, 明赤褐色	長石, 石英		
104	432	⑤下	高杯	10.1	7.9	7.7	(外) 厚縁後ナデ (内) 厚縁後ナデ	戻	白色砂	顕微鏡	
	433	-	甕	(24.4)	(9.0)	25.3	(外) 粗いハケメ, 粗いナデ (内) 粗いハケメ, 粗いナデ	赤褐色	長石, 白色砂	1条突部, 外面燻付着	
	434	-	一底土	甕	(17.0)	-	-	(外) ハケメ (内) ハケメ後ナデ	明赤褐色	角閃石, 白色砂	1条突部, 外面燻付着
	435	-	甕	-	6.2	-	(外) ナデ (内) ナデ	楕	黄白土, 角閃石	外面燻付着	
	436	-	一底	甕	-	(9.5)	-	(外) ハケメ後ナデ, ナデ (内) ナデ	にぶい赤褐色	角閃石, 長石, 石英	外面燻付着
	437	-	一底	甕	-	5.0	-	(外) ミガキ, 厚縁 (内) ナデ	赤褐色	角閃石, 長石, 石英, 白色砂	外面燻付着, 内外面に接合痕アリ
	438	-	鉢	鉢	11.9	3.9	11.2	(外) 粗いナデ (内) 粗いナデ	楕	角閃石, 石英, 赤色砂, 白色砂	
	439	-	一底	鉢	14.1	6.3	7.5	(外) ナデ, ミガキ, 厚縁 (内) ミガキ, 割落	赤褐色	長石, 石英	
	440	-	杯	杯	(13.0)	(5.6)	5.7	(外) ミガキ (内) ミガキ, 割落	楕	黄白土, 角閃石, 白色砂	
	442	⑤中	甕	甕	19.9	9.4	24.1	(外) 粗いミガキ, ハケメ後ナデ (内) 粗いハケメ, ナデ	楕	角閃石, 角閃石, 石英, 白色砂	1条突部, 外面燻付着, 接合痕アリ
104	443	⑤中	高杯	(12.0)	(7.1)	(6.7)	(外) 厚縁後ナデ (内) 厚縁後ナデ	粗楕	緑白土	顕微鏡	
	444	⑤中	大形甕	-	(7.4)	-	(外) ミガキ (内) 割落	にぶい黄褐色, 明赤褐色	長石, 石英, 厚縁石		
	445	⑤中	鉢	鉢	14.4	6.6	9.2	(外) ミガキ (内) ミガキ	明赤褐色	角閃石, 白色砂	底面に沈痕アリ
	446	⑤中	甕	甕	(20.3)	-	-	(外) ハケメ後ナデ (内) ハケメ後ナデ	赤褐色	角閃石, 赤色砂	1条突部, 外面燻付着, 接合痕アリ (1348 ± 2100?)
	447	⑤中	大形甕	-	6.6	-	-	(外) 厚縁 (内) ハケメ後ナデ, 工具ナデ	にぶい楕, 楕	長石, 石英, 赤色砂	外面燻付着
	448	⑤中	甕	甕	-	(8.0)	-	(外) ミガキ (内) ハケメ	にぶい赤褐色, にぶい黄褐色	角閃石, 長石, 石英, 赤色砂	底面に本車痕アリ
	449	⑤中	甕	甕	-	9.4	-	(外) ナデ (内) ナデ	明褐色	角閃石, 長石, 石英, 赤色砂, 白色砂	
	450	⑤中	甕	甕	(24.3)	7.2	27.5	(外) 丁寧ナデ (内) 丁寧ナデ	楕	黄白土, 石英, 白色砂	1条突部, 外面燻付着
	451	⑤中	高杯	高杯	15.7	9.0	16.8	(外) ミガキ (内) ナデ, ミガキ, 割落	にぶい楕	角閃石, 白色砂	黒色ミガキの高杯
	105	452	⑤下, ⑤中	甕	甕	30.0	8.0	24	(外) ナデ (内) ナデ, 工具痕	楕	角閃石, 石英, 白色砂
453		⑤下, ⑤中	甕	甕	(30.1)	-	-	(外) 粗いハケメ (内) ハケメ後ナデ	にぶい黄褐色, にぶい楕	母	1条突部, 外面燻付着
454		⑤下, ⑤中	甕	甕	(22.7)	-	-	(外) ミガキ (内) ナデ	明赤褐色	石英, 雲母, 白色砂	1条突部, カラシ上縁部
455		⑤下	甕	甕	-	(20.9)	-	(外) ハケメ後ナデ, ナデ, 粗いナデ (内) ナデ	楕	角閃石, 白色砂	1条突部, 外面燻付着 (438 ± 2000?)
456		⑤下	一底	甕	(18.8)	-	-	(外) ナデ, 横ナデ (内) 粗いハケメ, 横ナデ	にぶい楕, にぶい楕	石英, 白色砂	1条突部, 外面燻付着
457		⑤下	甕	甕	(20.0)	-	-	(外) ナデ, 工具痕 (内) ハケメ後ナデ	楕	石英, 白色砂	1条突部, 内外面に接合痕アリ, 聖武朝跡 13号と接合
458		⑤下	一底	甕	(28.4)	-	-	(外) 粗いハケメ, ナデ, 工具ナデ (内) 粗いハケメ, 粗いミガキ	楕	角閃石, 長石, 石英	1条突部, 外面燻付着
459		⑤下	一底	甕	(24.0)	-	-	(外) ナデ, 粗いミガキ (内) ナデ	粗楕, にぶい赤褐色	長石, 石英, 雲母	1条突部, 外面燻付着
460		⑤下	甕	甕	19.7	-	-	(外) ハケメ, ナデ, ミガキ (内) ハケメ後ナデ, ナデ	にぶい楕, にぶい楕	長石, 石英, 雲母, 白色砂	1条突部, 外面燻付着
461		⑤下, ⑤中	一底	甕	(17.5)	-	-	(外) ナデ (内) ナデ	にぶい楕, にぶい赤褐色	長石, 石英	1条突部, 内外面に接合痕アリ
106	462	⑤下, ⑤中	甕	甕	-	-	-	(外) ハケメ, ナデ (内) ナデ	にぶい黄褐色, にぶい楕	長石, 石英, 雲母, 白色砂	1条突部, 外面燻付着
	463	⑤下, ⑤中	甕	甕	(37.5)	7.7	(26.6)	(外) ハケメ後ナデ, ナデ, 粗いナデ (内) 粗いナデ	明赤褐色, にぶい赤褐色	角閃石, 長石, 石英	1条突部
	464	-	甕	甕	-	(11.2)	-	(外) ハケメ (内) ナデ	にぶい楕	角閃石, 長石, 石英, 雲母	外面燻付着, 遺跡跡 8号りと接合
	465	-	甕	甕	-	-	-	(外) ナデ, ミガキ (内) ハケメ後ナデ	明赤褐色	黄白土, 角閃石, 長石, 石英	外面燻付着, 二次焼成
	466	-	甕	甕	-	-	-	(外) ナデ, 粗いミガキ (内) ナデ	にぶい楕	長石, 石英, 雲母, 白色砂	

- は計測不能

第 25 表 古墳時代終末期の土器観察表 (3)

探跡番号	遺構名	層	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高 (cm)	調整	色調	胎土	備考
107	④下、⑤	④下	甕	-	12.5	-	(外) ナズ、靑い硝ナズ、工具ナズ (内) ナズ、硝ナズ	にぶい黄緑	長石、石英、雲母	大型品
		④下	甕	-	(11.2)	-	(外) ハケメ後ナズ、ナズ (内) ハケメ後ナズ、ナズ	にぶい黄緑、にぶい黄	長石、石英	
		⑤	甕	-	(11.5)	-	(外) ナズ (内) ナズ	にぶい赤褐色	角閃石、長石、石英、白色砂	
		④下	甕	-	9.9	-	(外) ナズ、ミガキ (内) ナズ、工具ナズ、ミガキ	緑、にぶい黄		外面黒付着
		埋土	甕	-	(9.4)	-	(外) ハケメ、ナズ (内) ナズ、工具底	にぶい黄緑、にぶい黄	長石、石英、雲母	外面黒付着、大型物の底
		-	甕	-	(10.2)	-	(外) 靑いハケメ (内) ナズ、工具ナズ	灰黄緑、にぶい黄	長石、石英	
		④下、⑤	甕	-	9.5	-	(外) 靑いナズ (内) ナズ	にぶい黄緑、にぶい黄	長石、石英	外面黒付着
		⑤	甕	-	10.3	-	(外) ナズ、靑いミガキ (内) ナズ	にぶい赤褐色	角閃石、長石、石英	外面黒付着、大型の胎土
		埋土、一括	甕	-	8.9	-	(外) ナズ、ミガキ (内) ハケメ、ハケメ後ナズ、ナズ、ミガキ	にぶい黄	角閃石、長石、石英	
		④、⑤、⑥	甕	-	4.3	-	(外) ハケメ後ナズ (内) ナズ	緑	角閃石、石英、雲母	
		M-一括	甕	-	7.1	-	(外) ナズ (内) ナズ	にぶい黄	霞石土、角閃石、長石、石英	外面黒付着、二次焼成
		埋土	甕	-	9.0	-	(外) 靑いナズ (内) 靑いナズ	にぶい黄	長石、長石、石英	
		埋土	甕	-	8.3	-	(外) 工具ナズ後ナズ、ミガキ (内) ナズ、工具ナズ後ナズ、工具底	にぶい黄	長石、石英	
		⑤	甕	-	6.4	-	(外) ナズ、靑いミガキ (内) ナズ、ミガキ、削落	にぶい赤褐色	長石、石英、赤色砂	平底長頸甕か
		⑤	甕	-	5.8	-	(外) ミガキ (内) ハケメ後ナズ、ナズ	にぶい赤褐色	長石、石英、白色砂	外面黒付着
		埋土、一括	甕	-	6.5	-	(外) ナズ (内) ナズ	にぶい黄、にぶい赤褐色	長石、石英	
		-	甕	-	8.6	-	(外) ナズ、靑いミガキ、黄緑 (内) ハケメ	明赤褐色	角閃石、長石、石英	底面に本葉痕あり
		一括	甕	-	6.6	-	(外) ナズ、黄緑 (内) 工具ナズ	にぶい黄、にぶい黄	長石、石英	底面に本葉痕あり
		埋土	甕	-	(9.0)	-	(外) ナズ、黄緑 (内) ナズ	にぶい黄、にぶい黄	長石、石英、白色砂	底面に本葉痕あり
埋土	甕	-	8.8	-	(外) ナズ (内) ナズ	にぶい赤褐色	角閃石、長石、石英、赤色砂	外面黒付着		
108	溝跡 1号	一括、カタタン	甕	(17.3)	5.0	44.8	(外) ナズ、横ナズ、ミガキ (内) ハケメ後ナズ、靑いナズ、横ナズ、削落	緑	角閃石、長石、石英	1象突部、内外面黒付着
		一括	甕	-	-	-	(外) ハケメ、ナズ (内) ナズ	にぶい黄	長石、石英、雲母	1象突部
		一括	甕	-	-	-	(外) 黄緑 (内) ナズ	明赤褐色	長石、石英、赤色砂	
		埋土	甕	-	-	-	(外) ミガキ (内) ナズ、ミガキ	にぶい黄褐色	角閃石、長石、石英	
		④、⑤、⑥、⑦	甕	-	6.3	-	(外) 摩滅 (内) ナズ、ミガキ	にぶい黄、にぶい黄	霞石土長石、石英、白色砂	
		④、⑤、⑥、⑦	甕	-	6.0	-	(外) ナズ、ミガキ (内) 工具ナズ後ナズ	にぶい赤褐色、にぶい黄	角閃石、長石、石英	外面黒付着
		埋土、一括	鉢	10.8	6.3	8.2	(外) ナズ、靑いナズ、ミガキ (内) ハケメ後ミガキ、靑いナズ	にぶい黄	霞石土、長石、石英、赤色砂	分厚い平底の鉢
		一括	鉢	12.3	3.0	6.9	(外) ミガキ (内) ミガキ	赤褐色	長石、石英	厚手の小型鉢
		④、⑤	鉢	(14.2)	-	-	(外) ナズ、ミガキ (内) ミガキ	にぶい黄、灰褐色	長石、石英、雲母	
		一括	鉢	-	(8.0)	-	(外) ナズ、ミガキ (内) ミガキ	にぶい黄	角閃石、長石、石英	内外面付着、厚みのある底地付
109	溝跡 2号	一括	鉢	(13.1)	(6.8)	5.6	(外) ナズ、靑いミガキ、摩滅 (内) ナズ、靑いミガキ、削落	にぶい黄	長石、石英	平底厚手の鉢、靑い胎土が透る
		埋土	鉢	(9.7)	(3.8)	4.2	(外) ナズ、ミガキ (内) ナズ、ミガキ	褐色	角閃石、長石、石英	薄手小型の鉢
		⑤	鉢	12.4	2.3	5.4	(外) 丁取なミガキ (内) 丁取なミガキ	緑	角閃石、石英	
		一括M	鉢	(10.8)	6.9	5.2	(外) ナズ、靑いナズ、ミガキ、タズミ後ナズ、ミガキ (内) ナズ、ミガキ	にぶい黄	長石、石英	
		一括	鉢	13.9	1.5	4.9	(外) 丁取なミガキ (内) 丁取なミガキ	緑	角閃石	厚手の鉢、耳口に十字のへら跡
		一括	不明	-	-	-	(外) ナズ (内) ナズ	にぶい黄	角閃石、長石、石英	縞線状文土
		⑤	甕	-	(6.7)	-	(外) ハケメ後ナズ、横ナズ (内) ナズ、工具ナズ	緑	角閃石、長石、石英、雲母、白色砂	
		埋土	甕	-	(7.2)	-	(外) ハケメ後ナズ、横ナズ (内) ナズ、横ナズ	明赤褐色	角閃石、長石、石英	黒面
		埋土	甕	10.0	-	3.0	(外) ナズ、回転ヘラタズリ (内) 回転ナズ	黄灰	白色砂	黄灰器
		埋土	一括	(10.0)	-	-	(外) 回転ヘラタズリ、回転ナズ (内) 回転ナズ	黄灰	緑点土	黄灰器
110	溝跡 2号	埋土	一括	(10.4)	10.4	3.7	(外) 回転ナズ (内) 回転ナズ	黄灰	緑点土	黄灰器
		一括	一括	(10.2)	-	2.3	(外) 回転ナズ (内) 回転ナズ	黄灰	長石、黒色砂	黄灰器
		⑤	一括 or 高	-	(6.7)	2.4	(外) 回転ヘラタズリ、回転ナズ (内) ナズ、回転ナズ	灰	長石	黄灰器
		-	高	12.0	7.8	9.0	(外) 回転ナズ (内) 回転ナズ	褐色	白色砂	黄灰器
		一括	一括	-	-	-	(外) 回転ナズ (内) 回転ナズ	褐色	緑点土	黄灰器
112	溝跡 2号	⑦	甕	-	10.7	-	(外) ナズ、しぼり痕 (内) ハケメ、ナズ	にぶい黄褐色	角閃石、長石、石英、白色砂	
		⑧	甕	-	-	-	(外) ナズ、ミガキ (内) ミガキ	赤褐色	雲母、白色砂	1象突部

一 は計測不能

第 26 表 石器観察表 (1)

採回番号	番号	遺構名	層	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
72	306	竪穴 12 号	④	敲石	16.0	6.4	5.0	688.56	
	307		Ⅲ下	敲石	14.2	5.6	4.6	535.00	
	308		④	敲石	14.2	6.1	4.1	590.96	
	309		⑫	敲石	13.7	5.8	3.7	489.85	
	310		床直下	敲石	14.4	6.6	4.3	563.35	
	311		⑫	敲石	15.3	5.0	3.8	406.58	
	312		⑫	敲石	12.6	5.4	4.9	551.44	
	313		⑫	敲石	8.9	3.8	2.0	118.38	
	314		⑫	敲石	11.2	4.3	2.6	184.83	
	315		上	軽石製品	3.9	6.5	4.1	29.00	
	316		上	軽石製品	9.4	6.9	3.9	45.00	
	317		下	礫	4.9	3.8	0.9	20.00	
	318		⑥	自然礫	9.9	3.9	3.2	155.96	
	319		⑨	自然礫	9.1	4.0	2.5	133.09	
	320		⑩床直	自然礫	14.8	5.5	4.4	467.46	
	74		337	竪穴 13 号	一括	調整剥片	3.0	3.2	0.4
338		床直	自然礫		7.5	4.6	2.6	128.72	
346		床直	敲石		15.7	6.7	4.8	464.25	
76	347	竪穴 14 号	⑤	敲石	17.9	7.0	4.4	821.28	
	348		床直	敲石	11.8	6.2	4.0	510.10	
	349		床直	砥石	7.0	6.7	3.4	230.40	
	350		⑤	軽石製品	9.4	7.4	5.8	90.63	
	351		⑤	自然礫	11.4	6.1	3.8	408.72	
	352		⑤	自然礫	9.3	3.8	2.6	138.30	
	353		⑤	自然礫	13.6	4.4	4.4	432.15	
	354		⑤	自然礫	15.3	4.8	3.8	472.09	
	355		⑤	自然礫	13.1	5.5	3.8	335.30	
	361		床直	敲石	16.1	7.8	5.0	1045.24	
	362		床直	敲石	17.3	7.0	5.7	768.63	
78	363	竪穴 15 号	一括床面	軽石製品	6.1	5.2	3.8	31.60	
	364		一括床面	軽石製品	2.3	1.8	0.9	1.30	
	365		埋土内	軽石製品	3.3	2.1	1.5	2.90	
	366		床直	自然礫	13.8	6.1	3.9	505.10	
	375		床直	砥石	11.6	7.7	4.6	663.93	
	376		床直	敲石	3.8	6.3	2.6	75.98	
80	377	竪穴 16 号	床直	敲石	12.3	5.3	5.6	381.00	
	378		⑧	敲石	12.4	7.1	5.1	573.90	
	379		床直	自然礫	14.3	5.5	4.4	538.88	
	380		⑨	礫	16.1	7.3	4.5	813.66	
	381		一括	礫	3.7	3.4	0.7	15.90	
	388		⑤	磨盤	12.6	6.1	3.4	370.00	
82	389	竪穴 17 号	⑤床直	敲石	11.5	5.0	4.3	436.34	
	390		⑤	敲石	15.3	7.1	3.5	451.04	
	391		⑥床直	敲石	14.0	4.5	3.5	349.13	
	392		③	敲石	14.5	5.8	4.8	504.12	
	393		⑤	敲石	12.9	7.1	5.2	719.39	
	394		⑤	敲石	7.8	4.1	2.5	124.45	
	395		床直	砥石	14.6	7.1	5.3	658.50	
	396		—	砥石	8.2	1.9	1.1	30.00	
	397		—	自然礫	8.0	3.1	2.9	106.54	
83	398	—	自然礫	11.1	4.1	2.3	172.59		
	399	—	自然礫	5.8	4.6	3.6	162.16		

— は計測不能

第27表 石器観察表(2)

挿図番号	番号	遺構名	層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	備考	
85	403	竪穴18号	⑤	敲石	15.5	6.8	3.7	557.50		
	404		⑤床直	敲石	12.5	4.2	3.2	315.00		
	405		⑤床直	敲石	14.2	6.0	4.6	447.50		
	406		⑤	砥石	12.8	6.7	2.5	399.50		
	407		⑤	砥石	16.6	5.7	2.8	385.50		
	408		⑤	砥石	11.8	6.0	3.0	393.50		
	409		④一括	砥石	13.2	9.2	1.5	202.51		
	410		⑤	自然礫	14.6	5.0	3.6	328.86		
	411		⑤	自然礫	16.4	7.4	2.8	587.32		
	412			床直	礫	16.1	8.0	4.6	660.80	
	413		⑤	自然礫	17.0	6.0	5.8	888.47		
87	414	竪穴19号	⑧	敲石	14.5	5.3	3.8	550.55		
	415		⑧	自然礫	13.6	7.7	3.9	542.48		
	416		⑧	自然礫	8.4	2.9	1.8	47.31		
102	424	遺物溜り2号	⑤下	敲石	17.7	6.6	5.5	860.71		
109	520	溝跡1号	一括埋土	軽石製品	6.2	8.3	3.6	10.00		
	521		埋土内	礫	2.8	3.0	0.6	5.40		
113	524	遺物集中区2	①	敲石	13.7	6.4	4.9	617.90		
	525		①	敲石	13.6	6.4	5.3	663.33		
	526		①	敲石	14.7	6.5	5.0	697.96		
	527		①	敲石	15.1	6.1	5.5	659.58		
	528		①	敲石	13.5	6.6	4.9	647.53		
	529		①	砥石	14.7	5.3	4.0	528.39		
	530		①	自然礫	13.8	6.9	5.2	677.70		
	531		①	自然礫	13.9	5.2	5.9	531.16		
532	①	礫	16.2	6.0	5.4	695.72				

- は計測不能

第28表 鉄製品観察表

挿図番号	号	遺構名	層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	備考
72	321	竪穴12号	下	鉄鏝(頭部)	3.20	0.80	0.30	5.76	
	322		床直	青銅製品(耳環)	1.50	1.70	0.40	-	
103	441	遺物溜り5号	-	鉄鏝	7.80	2.60	0.20	20.90	木質らしき残骸あり
109	513	溝跡1号	⑤, ⑩埋土	鉄鏝(刃部)	4.90	3.20	0.40	13.89	
	514		埋土一括	鉄鏝	6.4	2.3	0.3	11.85	錆ぶくれ著しい
	515		埋土一括	鉄鏝(定角式)	7.7	2.8	3.0	14.22	錆ぶくれ著しい, 茎に木質らしき痕あり
	516		埋土内	鉄鏝	10.0	1.9	0.3	8.09	
	517		埋土⑩	鉄鏝か	3.3	2.3	3.0	7.25	
	518		II a 一括	鉄鏝(基部)	5.5	0.6	0.4	3.93	木質と皮片の残骸あり
	519		埋土一括	鉄鏝(基部)	4.1	0.5	0.5	2.32	

- は計測不能

第5節 古代の調査

1 調査の概要

古代の遺構・遺物は、調査区東端の35～41区で検出された。遺物包含層はⅡb層であるが、削平が著しく残りは良くない。また、縄文時代から中世の遺物が混在した状態で出土している。遺構検出面はⅡc層及びⅢ層である。

検出された遺構・遺物は、掘立柱建物跡7棟、ピット列1条、焼土1基、土師器、須恵器、軽石製品である。

2 遺構

(1) 掘立柱建物跡 (第114図)

古墳時代終末期の掘立柱建物跡を埋土で識別することはできないが、いくつかの建物跡は柱穴内に古代の土師器片を包含していた。これらの建物跡は南北方向もしくは東西方向に主軸をもち、柱間寸法や床面積も累内で発見されており、古代の掘立柱建物跡と類似している。

これらを基準に古代の掘立柱建物跡を抽出した。

① 掘立柱建物跡8号 (第115図)

E・F-39・40区、Ⅲ層上面で検出された。梁行2間×桁行3間の東西方向に長い12本柱の総柱建物跡で、古代の建物では一番大規模な建物である。

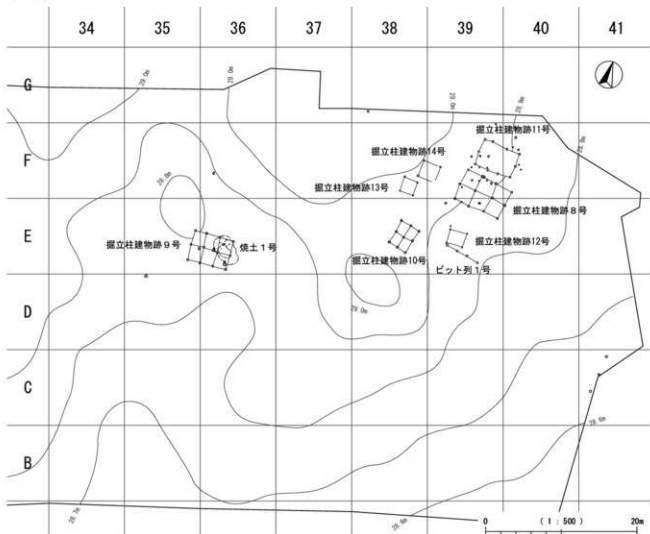
梁行の長さ4.2m、桁行6.5mで総面積27.3㎡である。主軸は、磁北から西に84°振れている。

柱間寸法は、西側梁行2.06m・2.14m、東側梁行2.06m・1.91mで、桁行は北側2.1m・2.05m・2.35m、南側2.06m・2.12m・2.1mを計る。

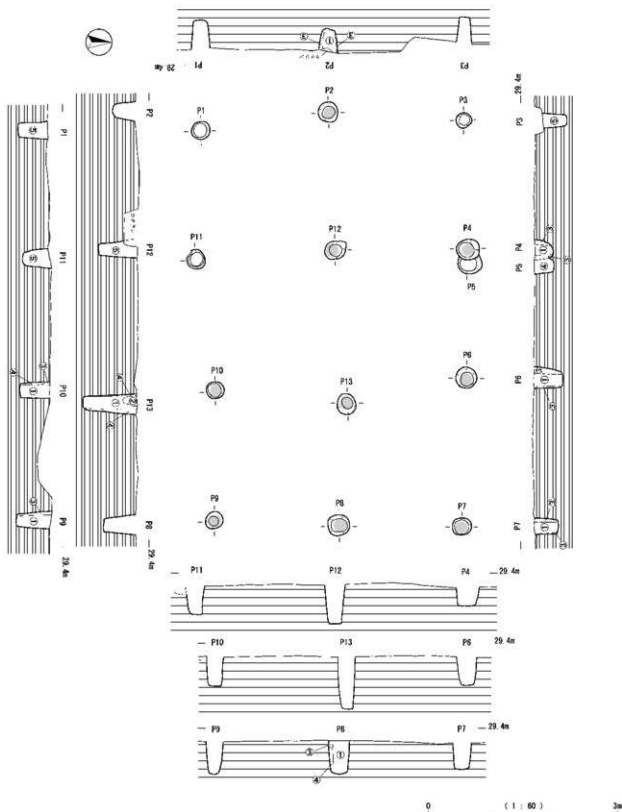
多くの柱穴の深さは、37～47cmであるのに対して、主軸中央部のP12、13は最も深く61～85cmある。

P4はP5を切っており、建て替えが行われている。柱穴は直径23～34cmで、P2、4、6、7、8、9、10、13には柱痕跡が確認された。

P6からは9世紀頃の土師器、P9からも9世紀頃の須恵器や土師器が出土した。



第114図 古代遺構配置図 (1/500)



埋土

- ① 黒褐色砂質土 (7.5YR3/2) 柱痕跡。粘性弱い。しまり弱い。アカホヤ・池田バミス少量含む。
- ② 黒褐色砂質土 (7.5YR3/2) 柱痕跡。粘性普通。
- ③ 黒褐色砂質土 (10YR2/3) 柱の埋め土。粘性普通。しまり強い。
- ④ 黒褐色砂質土 (10YR2/3) 粘性普通。池田バミス少量含む。しまり強い。
- ⑤ 黒褐色砂質土 (10YR2/2) 粘性弱い。

第 115 図 掘立柱建物跡 8 号

② 掘立柱建物跡9号 (第117図)

E-35・36区で検出された。検出面は、IIc層上面であるが、西側のP1, P9, P10はV層上面で検出された。焼土跡1号の調査後に検出されており、焼土跡1号より時期的に古いと考えている。

梁行2間×桁行3間の東西方向に長い12本柱の総柱建物跡である。梁行の長さ3.96m、桁行5.27mで総面積20.9㎡である。主軸は、磁北から西に91.5°振れている。

柱間寸法は、西側梁行2.02m・1.94m、東側梁行1.96m・1.91mで、桁行は北側1.53m・1.88m・1.86m、南側1.65m・1.75m・1.74mを計る。柱穴は直径25～32cmである。柱穴の深さは、主軸のP5, P10～12は15～35cmと浅い傾向があるのに対して、桁行側柱の柱穴は深く、最も深い東側のP4, P6が68cmある。P3, 4, 9には柱痕跡が確認された。柱の直径は15～22cmである。P3からは土師器片が3点出土した。

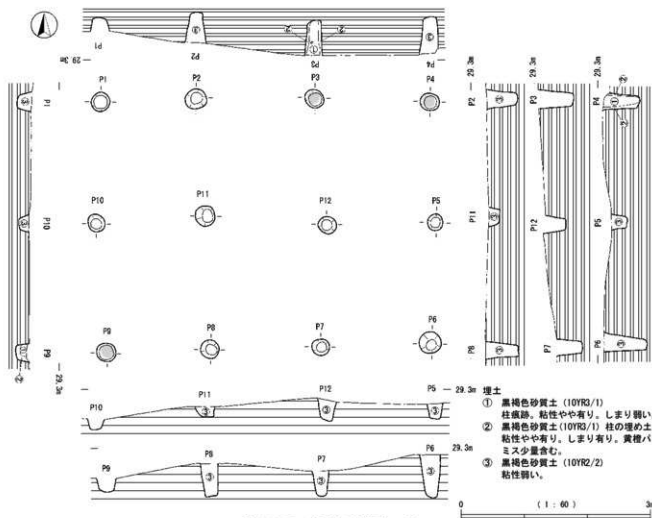


第116図 掘立柱建物跡8号出土遺物

出土遺物 (第116図)

533は、土師器の甕の口縁部である。9世紀頃のものと考えられる。口縁部は厚みがあり、緩やかに肥厚する。調整は、内外面にナデが施されている。胎土は、精緻な胎土を使用している。P6より出土した。

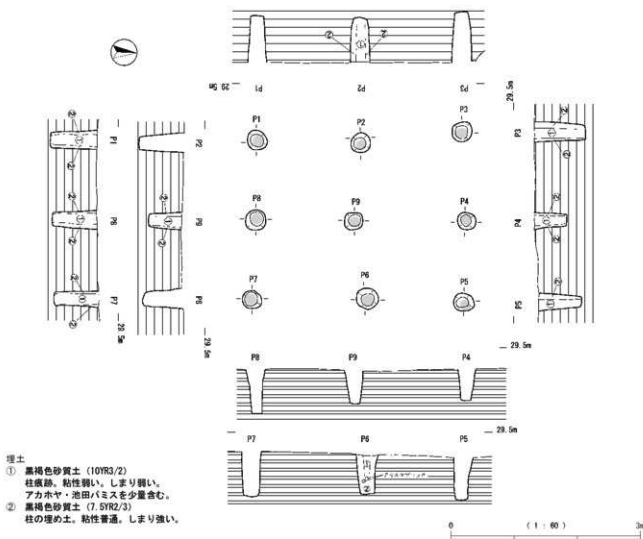
534は、須恵器の甕の胴部と思われる。9世紀頃のものと考えられる。外面は平行タタキが施され、内面は、同心円の当て具痕が施されている。胎土は、精製土が用いられている。P9より出土した。



第117図 掘立柱建物跡9号

埋土

- ① 黒褐色砂質土 (10YR3/1)
柱痕跡、粘性やや有り。しまり弱い。
- ② 黒褐色砂質土 (10YR0/1) 柱の埋め土。
粘性やや有り。しまり有り。黄橙バ
ミス少量含む。
- ③ 黒褐色砂質土 (10YR2/2)
粘性弱い。



第118図 掘立柱建物跡10号

③ 掘立柱建物跡10号 (第118図)

E-38区、Ⅲ層上面で検出された。梁行2間×桁行2間の長方形を呈する9本柱の総柱建物跡である。梁行の長さ2.7m、桁行3.4mで総面積9.2㎡である。主軸は、磁北から東に14°振れている。

柱間寸法は、北側梁行1.37m・1.33m、南側梁行1.22m・1.28mで、桁行は西側1.63m・1.62m、東側1.54m・1.86mを計る。

柱穴はしっかりしたつくりで、直径26～35cmである。柱穴の深さは、53cm～80cmで、本遺跡の古代の遺構の中でも総じて深い。全ての柱穴で直径15～22cmの柱痕跡が確認された。

P1, 2, 3, 7, 8から土師器の小片が7点出土した。

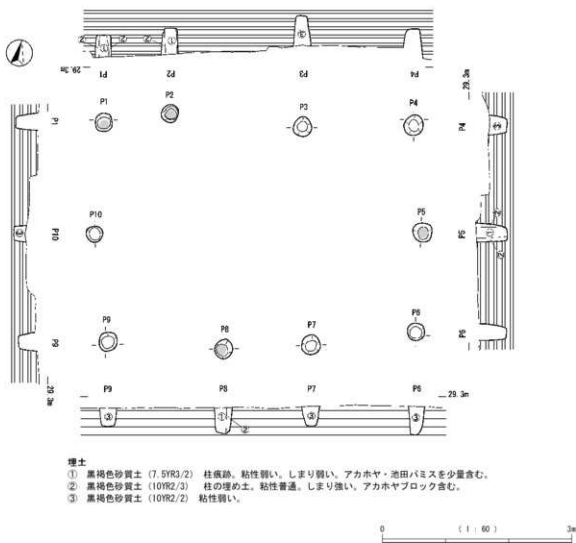
④ 掘立柱建物跡11号 (第119図)

F-39・40区、Ⅲ層上面で検出された。梁行2間×桁行3間の長方形を呈する10本柱の側柱建物跡である。桁行側柱は、柱の筋通りが良くない。

梁行の長さ3.48m、桁行4.93mで、総面積約17.2㎡となる。掘立柱建物跡8号、9号に続き3番目に大きい建物になる。主軸は磁北から西に84.5°振れており、方位は南側に隣接した掘立柱建物跡8号と類似している。

柱間寸法は、東側梁行1.72m・1.60m、西側梁行1.76m・1.72mで、桁行は北側1.05m・2.12m・1.76m、南側1.79m・1.44m・1.68mを計る。

柱穴は、一部削平を受けているが、直径26～28cm、深さが30～50cmである。柱痕跡は、直径17～19cmで、P1, 2, 5, 8で確認された。柱穴から遺物は出土しなかった。



第119図 掘立柱建物跡11号

⑤ 掘立柱建物跡12号 (第120図)

E-39区, III層上面で検出された。P1, P4はIII層上面で, P2, 3はV層上面で検出された。梁行1間×桁行1間の長方形を呈する4本柱の側柱建物跡である。梁行1.88m, 桁行2.27mで, 総面積4.3㎡となる小規模な建物である。主軸は, 磁北から東に87°振れている。

柱間寸法は, 東側梁行1.88m, 西側梁行1.81mである。桁行は北側2.27m, 南側2.14mである。

柱穴は, 直径18~20cmで, 深さは20~30cmと浅い。柱痕跡がP3, 4で確認された。柱穴から遺物は出土しなかった。

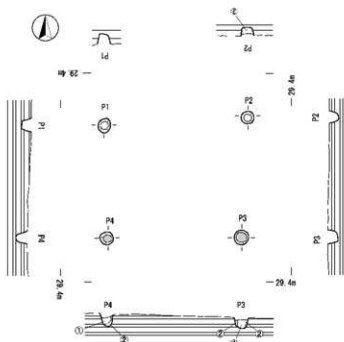
⑥ 掘立柱建物跡13号 (第121図)

F-38区, III層上面で検出されたが, P3, 4はV層の検出である。梁行1間×桁行1間のほぼ正方形を呈する4本柱の側柱建物跡である。

梁行の長さ1.81m, 桁行1.97mで, 総面積3.6㎡である。主軸は, 磁北を向く。

柱間寸法は, 梁行1.81mで, 桁行は東側1.8m, 南側1.97mを計る。

柱穴は直径18~25cmで, 深さは54~58cmである。P3, 4は掘り込み面から下がったV層で検出しているため浅くなっている。柱痕跡は確認されなかった。柱穴から遺物は出土しなかった。

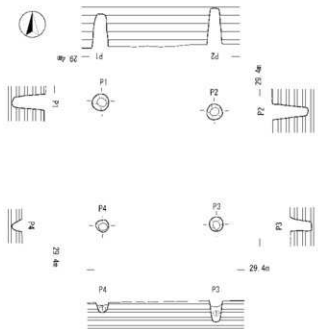


埋土

- ① 黒褐色砂質土 (10YR2/2) 柱痕跡。粘性弱い。しまり弱い。下部にアカホヤバミス少量含む。
 ② 黒褐色砂質土 (10YR2/3) 柱の埋め土。粘性普通。しまり弱い。



第 120 図 掘立柱建物跡 12 号

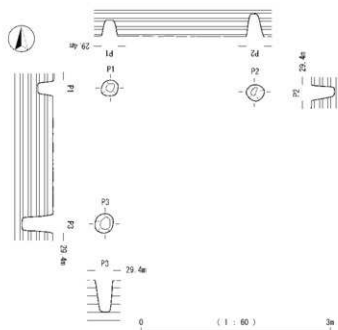


埋土

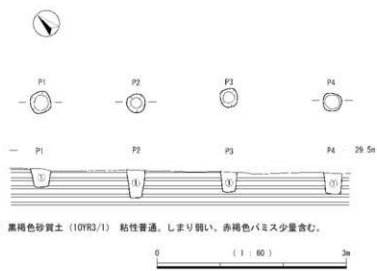
- ① 黒褐色砂質土 (10YR2/2) 粘性普通。しまり強い。



第 121 図 掘立柱建物跡 13 号



第122図 掘立柱建物跡14号



① 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 粘性普通、しまり弱い、赤褐色パミス少量含む。

第123図 ビット列1号

⑦ 掘立柱建物跡14号 (第122図)

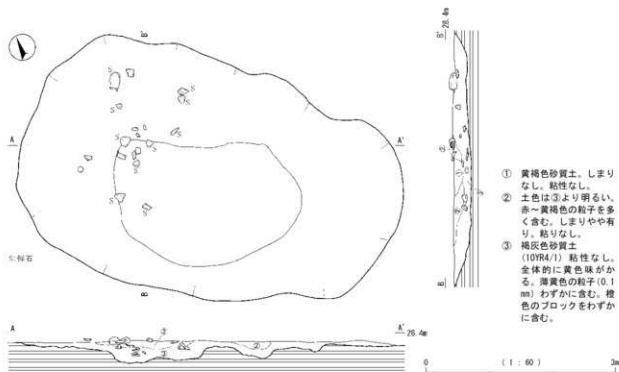
整理作業時に、3本の柱穴が直角に配置されていることに気づき復元した。南側の柱穴は検出が難しく、見つけることができなかったが、梁行1間×桁行1間の側柱建物跡の可能性はある。F-38・39区、Ⅲ層上面で検出され、主軸は磁北から西に85.5°振れている。

柱穴は直径27～31cmで、深さは掘り込み面から24～29cmあり、柱痕跡は確認されなかった。小片のため図化しなかったが、P2から土器片が2点、P3からは古代の土師器片が1点が出土した。

⑧ ビット列1 (第123図)

E-39、Ⅲ層で検出された。東西方向に4基のビットが一列に配置されている。柱穴の直径は29～32cm、掘り込み面からの深さは29～44cmあった。

小片のため図化しなかったが、P1から土器片が2点出土している。



第124図 焼土1号

(2) 焼土1号 (第124図)

焼土1号は、E-36区表土直下のII b層中～上位で検出された。

掘立柱建物跡9号との新旧関係については、焼土1号が先に検出されたことから時期的に新しいと判断した。

焼土跡は、長軸約4.1m短軸約2.56m、深さ約37.6cmの不定形プランを呈する。中心部に黄色味の強い焼土範囲(①層)があり、その周囲には焼土粒をわずかに③層が広がっていた。焼土域は、周辺の層と比べ、赤色から黄色の焼土粒を含み、やや縮まりがある。

焼土域では、軽石、土師器の甕、土師器の埴、坏が出土した。遺物の出土は北側に偏っている。鉄滓などの遺物は見られなかった。土師器のほとんどは、遺構の最深部付近で、出土している。軽石は、土師器に覆いかぶさるような状況で出土している。

出土遺物 (第125図)

土師器 (535～547)

535～537, 539～541は坏である。535, 536の体部は斜方向に伸び、胴部はやや曲線的に立ち上がる。口縁部は若干外側に開いている。口唇部は薄くなっている。535～537は底部を切り離す際、ヘラ切り痕をナデ消している。538は埴の可能性が高い。539は、535～537と異なった器具を使いヘラ切り痕をナデ消している。

539～541は底部である。541は、円盤状土製品

に加工されている。542は、胴部から口縁部にかけて斜方向に直線的に伸びる。口唇部は若干外側に開いており、やや玉縁状になっている。544は体部の器厚はあるが、口縁部は薄い。体部が大きく開くように立ち上がる。

546, 547は甕である。546は、径が29.8cmあり、口縁部がくの字状に外反する。胴部内面はヘラ削りが施され、口縁部と胴部の境界は、屈曲が強くなり、口縁部に煤が付着している。547は、甕の底部である。立ち上がり部分は厚みがあり、底部には煤が付着していた。内面は、全体的にヘラ削り後ナデが施されている。

須恵器 (548)

548は壺である。表面の摩耗が著しいが、頸部外面の色調から、本来は明赤褐色であったことがうかがえる。胎土は精緻である。

軽石製品 (549～552)

549は長さ18.2cm、幅11.3cm、厚み8.7cmである。人為的な穿孔が正面に3か所、下面に2か所施されている。正面の穿孔の深さは、上が0.5cm、中央が0.8cm、下が1.2cmである。下面の穿孔の深さは、左右ともに3.6cmあった。また、幅1mm程度の線状痕が各面に30本以上確認された。方向に規則性は確認できなかった。被熱を受けているため全体的に黄色身を帯びており、所々赤色に変化している部分がある。側面が特に赤みを帯びている部分が多く、一番色調が強かった。

550 は平面が正三角の形状をしている。被熱を受けているため全体的に黄色身を帯びており、所々赤色に変化している部分がある。正面の中央部が凹んでおり、穿孔と考えられる。径は最大 1.5 cm、深さは 8 mm 程度である。

551 は被熱を受けているため、全体的に黄色身を帯びており、所々赤色に変化している部分がある。全体的に摩耗が著しい。穿孔は、正面に 2 か所確認できた。右側は、径 9 mm、深さ 6 mm、左側は径 8 mm、深さ 7 mm ある。

552 は正面に複数の穿孔が確認された。人為的な穿孔は 17 か所確認されたが、多くは切り合っているため、それ以上に穿孔があったであろうと考えられる。線状痕は、幅 1 mm 程度の線状痕が 20 本以上確認された。主に、左上から右下に施されており、この他に横方向や縦方向に施されているものも確認できた。中央部に複数の穿孔が切り合っているため線状痕の切り合いは詳細に確認できなかった。

粘土塊 (553)

553 は、焼成不良の粘土塊である。正面には、幅 1 mm、長さ 2.5 cm の棒状の圧痕が、下面には不整形の穿孔が確認できた。共に、植物の圧痕と推測される。また、3 mm 幅の板状の痕跡や 1 ~ 4 mm 幅の工具痕と思われる直線状の沈線が複数確認できた。

3 出土遺物 (第 126 ~ 127 図)

包含層及び中近世の遺構で出土した遺物を報告する。

(1) 塊 (554 ~ 557)

554 は、高台内面の天井部が 4 mm 程度盛り上がり、底部は厚い。555 は、甕付が薄く、指で調整した痕跡がある。556 は、底径が 11.4 cm でやや大きい。高台の内外面は回転ナデ調整により丁寧に仕上げられている。557 は、見込みに黒化処理が施されているが、かなり摩耗している。高台は厚みがあり、高台は回転ナデ調整により丁寧に仕上げられている。

(2) 坏 (558 ~ 573)

いずれも、底部切り離しは回転ヘラ切りで行われている。558、560、563 はヘラ切り痕がそのまま残っている。

559 は、底部に焼成時にできたと思われる割れ目が見られる。560 は底部の摩耗が著しい。561 は、底部が欠損している。562 は、現存部において体部が大きく開くように立ち上がる。

563、564 は充実高台である。565 は、底部のみ残存しているが、器厚が厚い。566 の外面は回転ナデ調整によって丁寧に仕上げられている。569 は、内外面に

回転ナデを施し、底部のヘラ切りが丁寧に施されている。570 は、遺物の残存状況はわずかだが、内外面は回転ナデ、底部のヘラ切りは丁寧に施されている。571 は、内面に回転ナデが施される。底部の器厚は薄い。

(3) 塊・坏 (574 ~ 583)

底部が、欠損しているため、器種が判別できないものを一括して報告する。

574 は、体部の外面にナデ稜線が残る。575 の胴部はやや曲線的に立ち上がり、口縁部は若干外側に開いている。全体的に摩耗しているが、外面に煤が付着していた痕跡がある。576 は底部以外が残存しており塊の可能性が高い。口縁部は器厚が薄く、わずかに外反する。

579 は、体部と口縁部がほぼ同じ器厚で、口唇部はやや玉縁状になっている。583 は胎土が赤味を帯びている。

(4) 甕 (584 ~ 588)

584 は、口縁部がくの字状に外反する。口縁部と胴部の境は屈曲が弱い。外面は胴部から口縁部にかけて煤が付着している。

585 は、破片であるため器形の復元が困難である。口縁部が緩やかに外反する。内面は、ヘラ削りを施す。

586 は、口縁端部が平坦となる。口縁部は緩やかに外反している。外面は、全体的に煤が付着しており、ナデと一部にミガキが確認できた。内面は、胴部に横方向のヘラ削りが、口縁部はナデが施されている。

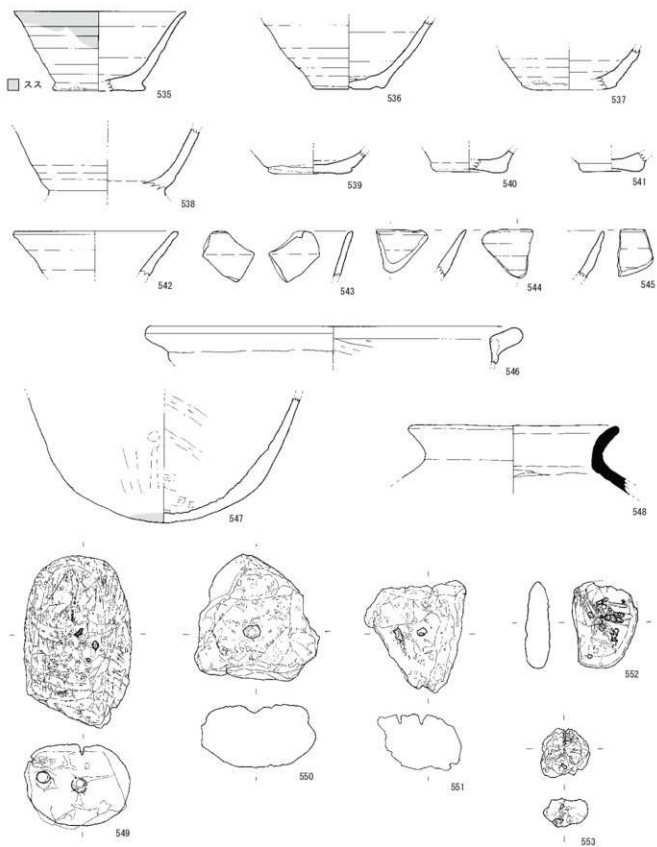
588 は、小型品である。口縁部がくの字状に外反する。口径は 10.8 cm、器高は 8.8 cm、底径は 2 cm である。底部付近に煤が付着している。内面は、口縁部の下から上に向かってのヘラ削りの痕跡が所々みられるが、全体的にナデにより消えている。

(5) 土製品 (589)

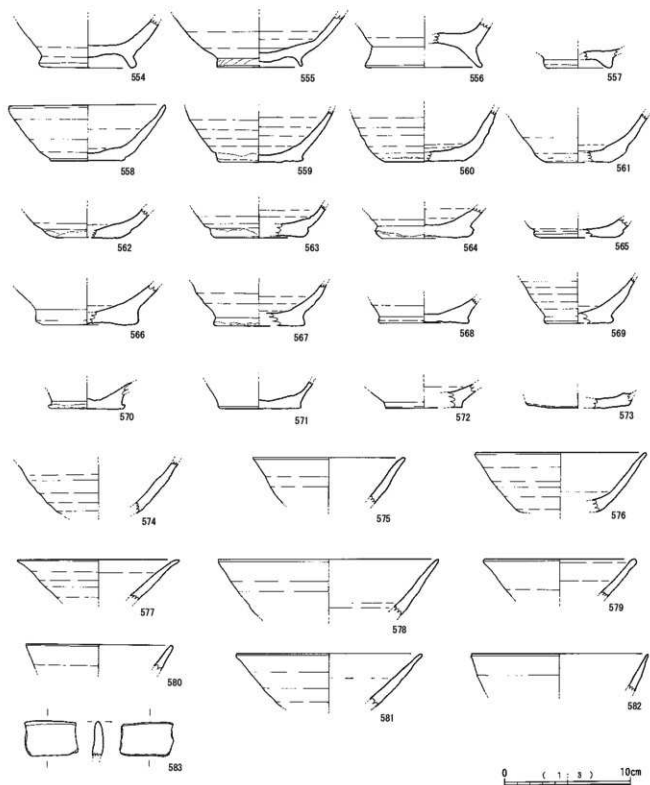
589 は、円盤状の土製品である。厚さ 1 cm、径最大 4.3 cm の円盤形である。一部欠損している。胎土は灰白色である。

(6) 須恵器 (590)

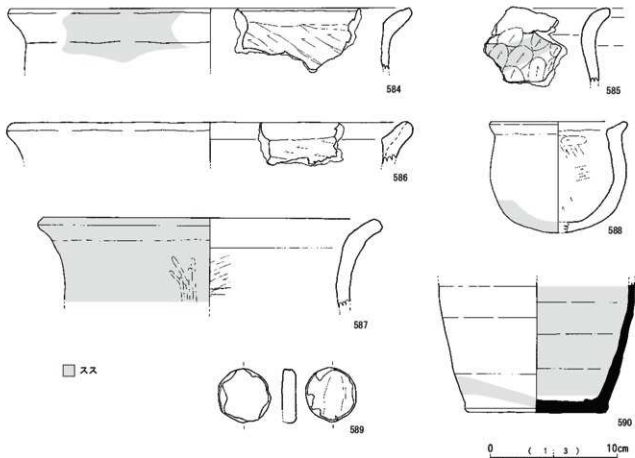
590 は、須恵器の甕である。焼成が悪く、内外面に煤が付着している。摩耗が著しい。



第 125 図 焼土 1 号出土遺物



第 126 図 包含層出土遺物 1



第 127 図 包含層出土遺物 2

第 29 表 遺構内出土遺物観察表

調査 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区	遺構名	分類	部 位	色調	調整・文様	法量 (cm)			胎土	焼成	備 考	
										口径	底径	器高				
116	533	土師器	甕	F-39	竪立 8 階	—	口縁部	外：褐色 内：暗赤褐色	内：外：ナデ	—	—	—	角閃石、長 石、白砂	良好	—	
	534	瓦葺器	甕	E-39	竪立 8 階	—	胴部	外：暗赤褐色 内：褐色	内：当て具痕（同心円） 外：同心タタキ	—	—	—	—	—	良好	—
125	535	土師器	杯	E-36	焼土 1	—	口縁～底部	内、外：黄褐色	胴部：回転ナデ 底部：ヘラ切り	(13.4)	(7.4)	6.3	精製土	良好	—	
	536	土師器	杯	E-36	焼土 1	—	体～底部	内、外：黄褐色	胴部：回転ナデ 底部：ヘラ切り	—	(6.2)	—	精製土	良好	—	
	537	土師器	杯	E-36	焼土 1	—	底部	内、外：灰白色	胴部：回転ナデ 底部：ヘラ切り	—	(7.6)	—	精製土	良好	—	
	538	土師器	埴	E-36	焼土 1	—	体～底部	内、外：灰白色	内、外：回転ナデ	—	—	—	精製土	良好	—	
	539	土師器	杯	焼土 1	—	底部	内、外：灰白色	胴部：回転ナデ 底部：ヘラ切り	—	—	6.1	—	精製土	良好	内面：底部に爪痕 底面：地面にナデムシに ひび割れ 2～3 箇所あ り。ヘラ切り取り上げ 時にできたものか。	
	540	土師器	杯	E-36	焼土 1	—	底部	内、外：褐色	胴部：回転ナデ 底部：ヘラ切り	—	(6.0)	—	精製土	良好	—	
	541	土師器	杯	E-36	焼土 1	—	底部	内、外：灰白色	胴部：回転ナデ 底部：ヘラ切り	—	—	5.15	—	精製土	良好	メンロに加工途中で腐 変したか。
	542	土師器	埴小片	E-36	焼土 1	—	口縁～体部	内、外：黄褐色	内、外：回転ナデ	(13.0)	—	—	—	精製土	良好	内側口縁部付近に爪痕 あり
	543	土師器	埴	E-36	焼土 1	—	口縁～体部	内、外：黄褐色	内、外：ナデ 全体的に 磨耗 外：ナデ	—	—	—	—	精製土	良好	—
	544	土師器	埴小片	E-36	焼土 1	—	口縁部	内、外：灰白色	内、外：回転ナデ	—	—	—	—	精製土	良好	—
545	土師器	埴小片	E-36	焼土 1	—	口縁部	内、外：灰白色	内、外：回転ナデ	—	—	—	—	精製土	良好	—	
546	土師器	甕	E-36	焼土 1	—	口縁部	内、外：褐色	胴部：内：ナデ、ヘラ切り 外：ナデ 底部：ヘラ切り	(29.8)	—	—	—	角閃石、長 石、石英、 雲母	良好	口縁部に僅存者	
547	土師器	甕	E-36	焼土 1	—	底部	内、外：褐色	内、外：タタキナデ	—	(6.0)	—	—	角閃石、長 石、石英、 雲母	良好	底部外面：僅存者	
548	瓦葺器	甕	E-36	焼土 1	—	口縁～胴部	内、外：灰白色	内：回転ナデ、ヘラ切り 外：回転ナデ	(16.7)	—	—	—	角閃石、長 石、石英	良好	—	

— は計測不能

第 30 表 包含層出土遺物観察表

探洞番号	遺物番号	種類	器	出土区	遺構名	分類	部位	色調	調査・文様	法量 (cm)			新土	構成	備考		
										口徑	径	器高					
126	554	土師器	埴	F-96 T11	Ⅱ a	—	底～底部	内、外：にじい黄褐色	胴部：同輪ナデ 胴内底：同輪ナデ	—	7.6	—	—	精製土、細かい 黒インクあり	良好 高台内側、底部に気泡 痕あり		
	555	土師器	埴	D-36	竪立 12	—	底部	内、外：黄褐色	内、外：同輪ナデ	—	8.8	—	—	精製土	良好 器内に爪痕		
	556	土師器	埴	D-36	竪立 12	—	底部	内、外：灰白色	内、外：同輪ナデ	—	11.4	—	—	—	精製土 器内に爪痕		
	557	土師器	埴	E-22	溝跡 4	—	底部	内：灰白色 外：褐色	体部：同輪ナデ 底部：同輪ナデ	—	15.0	—	—	—	精製土	良好 底部に内側	
	558	土師器	埴	E-34	Ⅱ a	—	口縁～底部	内、外：黄褐色	体部：同輪ナデ 底部：ヘラ切り	(12.3)	5.0	4.3	—	—	精製土	良好	
	559	土師器	埴	E-35	溝跡 12	—	底～底部	内、外：にじい黄褐色	体部：同輪ナデ 底部：ヘラ切り	—	6.7	—	—	—	精製土、角閃石、 角閃石	良好	
	560	土師器	埴	E-36	Ⅱ a	—	底～底部	内、外：黄褐色	体部：同輪ナデ 底部：ヘラ切り	—	16.5	—	—	—	精製土	良好	
	561	土師器	埴	E-35	表土	—	底～底部	内、外：にじい黄褐色	体部：同輪ナデ 底部：ヘラ切り	—	15.0	—	—	—	精製土	良好	
	562	土師器	埴	T11	Ⅱ	—	底～底部	内、外：黄褐色	体部：同輪ナデ 底部：ヘラ切り	—	15.0	—	—	—	精製土	良好	
	563	土師器	埴	D-36	竪穴 12	—	底～底部	内、外：黄褐色	体部：同輪ナデ 底部：ヘラ切り	—	17.0	—	—	—	精製土、角閃石、 石英、赤鉄	良好	
	564	土師器	埴	E-35	溝 1	—	底部	内、外：黄褐色	体部：同輪ナデ 底部：ヘラ切り	—	7.8	—	—	—	精製土	良好	
	565	土師器	埴	E-34	Ⅱ b	—	底部	内、外：黄褐色	体部：同輪ナデ 底部：ヘラ切り	—	16.1	—	—	—	精製土	良好	
	566	土師器	埴	T11	Ⅱ	—	底～底部	内、外：黄褐色	体部：同輪ナデ 底部：ヘラ切り	—	18.1	—	—	—	精製土	良好 内：底部に爪痕 かなり磨耗している	
	567	土師器	埴	E-36	Ⅱ b	—	底部	内、外：黄褐色	体部：同輪ナデ 底部：ヘラ切り 新陳跡 多い	—	17.2	—	—	—	精製土、小石	良好 内：底部に爪痕 底部部地にひび割れ入 りあり、ヘラ切り取り 上げ時にできたものか。	
	568	土師器	埴	E-37	溝跡 1	—	底～底部	内、外：黄褐色	体部：同輪ナデ 底部：ヘラ切り	—	7.2	—	—	—	精製土	良好	
	569	土師器	埴	E-35	Ⅱ a	—	底～底部	内、外：明赤褐色	体部：同輪ナデ 底部：ヘラ切り	—	15.0	—	—	—	精製土、小石	良好	
	570	土師器	埴	E-34	表土	—	底部	内、外：黄褐色	体部：同輪ナデ 底部：ヘラ切り	—	16.0	—	—	—	精製土	良好	
	571	土師器	埴	B-35、 B-35	竪穴 15、 Ⅱ b	—	底～底部	内、外：黄褐色	体部：同輪ナデ 底部：ヘラ切り	—	16.0	—	—	—	精製土	良好	
	572	土師器	埴	F-38	溝跡 1	—	底部	内、外：黄褐色	体部：同輪ナデ 底部：ヘラ切り	—	16.0	—	—	—	精製土	良好	
	573	土師器	小皿、 杯?	C-36	溝跡 1	—	底部	内、外：黄褐色	体部：同輪ナデ 底部：ヘラ切り	—	18.2	—	—	—	精製土	良好	
	574	土師器	埴	D-36	竪穴 12	—	底部	内、外：褐色	内、外：同輪ナデ	—	—	—	—	—	精製土、小石	良好 内側に爪痕	
	575	土師器	埴	E-34	Ⅱ b	—	口縁～体部	内、外：黄褐色	内、外：同輪ナデ	(12.0)	—	—	—	—	精製土	良好 内側に爪痕	
	576	土師器	埴	B-35、 B-35	竪立 15、 Ⅱ b	—	口縁～体部	内、外：明赤褐色	内、外：同輪ナデ	(13.6)	—	—	—	—	精製土	良好	
	577	土師器	埴	D-36	竪立 12	—	口縁部	内、外：灰白色	内、外：同輪ナデ	(12.7)	—	—	—	—	精製土	良好 内側に爪痕	
	578	土師器	埴	E-34	T11	Ⅱ	—	口縁～体部	内、外：灰白色	内、外：同輪ナデ	(17.5)	—	—	—	—	精製土	良好
	579	土師器	埴	F-38	溝跡 1	—	口縁～体部	内、外：黄褐色	内、外：同輪ナデ	(12.0)	—	—	—	—	精製土、小石	良好 胴部外側下部に爪痕あり	
	580	土師器	埴	E-37	P0034	—	口縁部	内、外：灰白色	内、外：同輪ナデ	(11.4)	—	—	—	—	精製土	良好	
	581	土師器	埴	B-35	竪立 15、 Ⅱ b	—	口縁～体部	内、外：灰白色	内、外：同輪ナデ	(14.6)	—	—	—	—	精製土	良好	
	582	土師器	埴	E-34	T11	Ⅱ	—	口縁～体部	内、外：灰白色	内、外：同輪ナデ	(14.0)	—	—	—	—	精製土	良好
	583	土師器	埴	D-36	竪立 12	—	口縁部	内、外：褐色	内、外：同輪ナデ	—	—	—	—	—	精製土、角閃石、 富土、赤色粘土	良好 裏面に丹塗りか。	
	127	584	土師器	甕	E-36	Ⅱ b	—	口縁～胴部	内、外：にじい褐色	内：横ナデ、ヘラ削り 外：ナデ	(32.0)	—	—	—	—	長石、石英、赤 色粘土	良好
		585	土師器	甕	T11	Ⅱ	—	口縁～胴部	内、外：にじい褐色	内：横ナデ、ヘラ削り 外：ナデ	—	—	—	—	—	長石、石英、富 土	良好
		586	土師器	甕	E-36	Ⅱ b、 Ⅱ b下	—	口縁部	内、外：にじい褐色	内：ナデ、ヘラ削り 外：ナデ	(32.0)	—	—	—	—	長石、石英、赤 色粘土	良好
587		土師器	甕	C-36	Ⅱ b	—	口縁部	内、外：明赤褐色	内：ナデ 外：ミダネ、ナデ	(27.1)	—	—	—	—	角閃石、赤石、 石英、富土、白 鉄	良好	
588		土師器	甕	F-34	Ⅱ b	—	口縁～底部	内、外：明赤褐色	内、外：ナデ	(16.8)	(2.0)	8.8	—	—	石英、富土、白 鉄	小型 底：外：盛り付	
589		土師器	土製品	D-38	溝 1	—	—	内、外：灰白色	研磨痕 (線状) あり	—	—	—	—	—	精製土	良好 メッシュに加工し、一部 は磨耗あり	
590		土師器	甕	E-37	Ⅱ a	—	胴～底部	内、外：黄褐色	内：同輪ナデ 外：摩耗	—	11.6	—	—	—	精製土	良好 古代 内、外：盛り付	

— は計測不能

第 31 表 石器観察表

探洞番号	番号	遺構名	出土地点	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	備考
125	549	焼土 1号	E-36	軽石製品	18.2	11.3	8.7	511.5	穿孔 5 か所 線状痕 30 本以上
	軽石製品			13.5	13.3	6.7	302.0	穿孔 1 か所	
	軽石製品			11.8	10.8	6.1	177.6	穿孔 2 か所	
	軽石製品			9.1	7.0	2.7	42.1	穿孔 17 か所以上 線状痕 20 本以上	
	粘土塊			5.3	5.3	3.1	62.7	孔 1 か所、ヘラ状工具痕	

— は計測不能

第6節 中世の調査

1 調査の概要

中世の遺構・遺物は、調査区東端のB～G-36～41区で検出された。遺物包含層はⅡa層と想定されるが、削平のためにほとんど残存していなかった。従って、検出された遺構は、本来の深さより浅くなっている。遺構検出面はⅢ層である。

検出された遺構・遺物は、堀跡1条、道跡1条、竪穴建物跡1軒、土坑墓1基、ピット列1基である。

遺構に伴う出土遺物は極めて少なく、年代を特定することが難しい状況であった。

2 遺構

(1) 堀跡1号(第128～131図)

B・C-40区、Ⅲ層上面で検出された幅3m、深さ1.6mの薬研堀である。検出された長さは、約17mである。中世の生活面(Ⅱa層)は削平されており、本来の規模は現状より大きいものと推測される。

堀跡の北側は、東側に曲がり、崖の直前で止まっている。南側は天守城跡の方向に向かって調査区外に延びている。

北端の壁面には、幅12～15cmの工具痕が確認された。壁面の掘削方向は、溝の突き当たりは上から下、

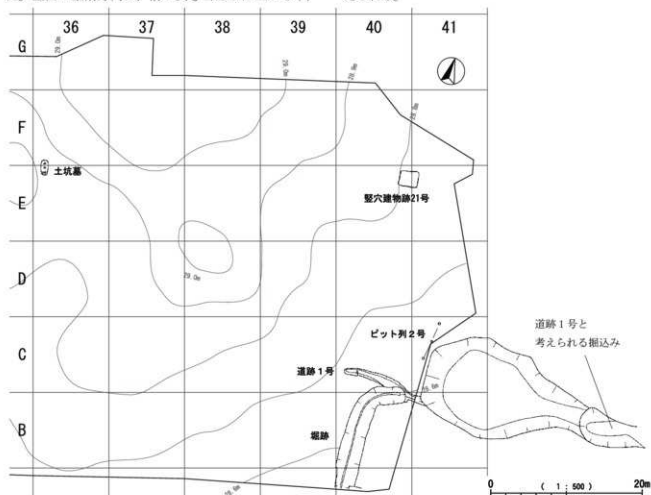
南北壁面は斜め上から斜め下、床面近くは水平方向である(第131図)。工具の種類は鉄製端と想定され、地山が固く、堀の使用期間が短かったため、工具痕が遺存したものと推察される。

土層は堆積由来によって上層、中層、下層に大別される。下層は堀が機能していた時期に堆積した黒色砂質土である(断面B④層)。中層は、アカホヤと黒色砂質土の混土で人為的な埋土と考えられる(断面A③層、断面B③層)。東側(崖側)から堆積しており、溝の掘削土を利用した構築物(土塁など)が崩れ、再堆積した可能性がある。堀跡1号、道跡1号を同時に埋めている。

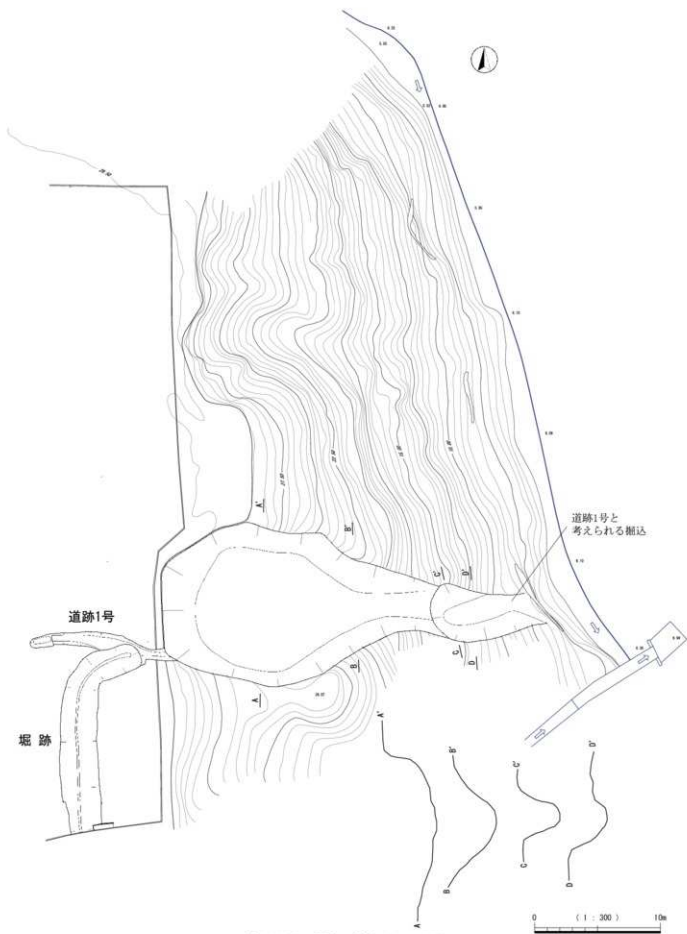
上層は堀跡を切っている道跡の堆積土である(断面A・B①・②層)。堀跡は埋没後に道跡として利用されている。

遺物は上層から縄文時代、古墳時代、古代の土器小片や12世紀代の白磁片が1点出土した。これらの遺物は、後世の流れ込みである。堀跡の使用、廃絶時に堆積した中層、下層からの出土はなかった。県内の類似から堀跡は中世後半期に構築されたと想定される。

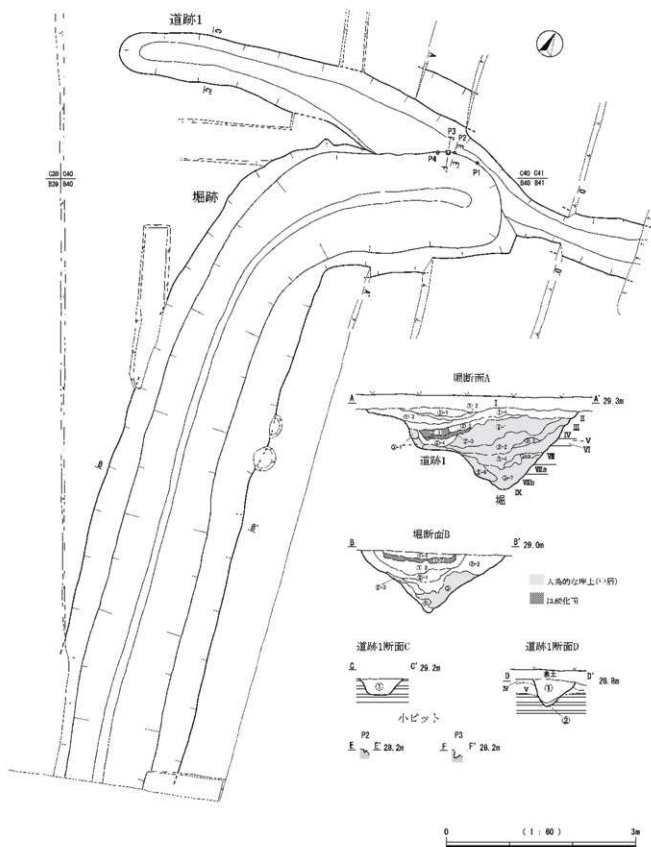
堀跡の北端には道跡1号が接している。2つの遺構は同時に埋められており、併存して機能していたと考えられる。



第128図 中世遺構配置図(1/500)



第129図 堀跡、道跡 (1/300)



第 130 図 堀跡及び道跡 1 号



第131図 掘跡、掘削痕実測図

縦断面A埋土注記

- | | |
|---|----|
| ①-1 褐灰色砂質土 (10YR4/1) 白色粒子を含む。 | 上層 |
| ①-2 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) | |
| ①-3 褐灰色砂質土 (10YR4/1) | |
| ①-4 黒褐色砂質土 (10YR3/1) | |
| ②-1 黒褐色砂質土 (10YR3/1) アカホヤブロック少量混じる。硬化面 | 中層 |
| ②-2 黒褐色砂質土 (10YR3/1) しまりなし。 | |
| ②-3 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 硬化面。アカホヤの粒子多く混入。 | |
| ②-4 黒褐色砂質土 (10YR3/1) アカホヤブロック混じる。しまりなし。 | |
| ③-1 黒褐色砂質土 (10YR4/1) 5~20cm次のアカホヤブロック混入。両側から堆積。 | 下層 |
| ③-2 黒色砂質土 (10YR2/1) | |
| ③-3 黒色砂質土 (10YR2/1) ブロック状に堆積。 | |
| ③-4 黒色砂質土 (10YR2/1) 2~5cm次のアカホヤブロック多く混在。 | |
| ③-5 黒色砂質土 (10YR2/1) しまりなし。 | |
| ③-6 黒色砂質土 (10Y1.7/1) | |
| ③-7 黒色砂質土 (10YR2/1) アカホヤと黒色土が混在。 | |

道跡1号

断面C埋土注記
① 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 土器片含む。

断面D埋土注記
① 黒色砂質土 (10YR2/1) 橋の侵入が著しい。部分的に硬化面のブロックが浮いた状態で残っている。
② 黒色砂質土 (10YR2/1) アカホヤ混じり。しまりなし。床面の一部に硬化面あり。

縦断面B埋土注記

- | | |
|--|----|
| ①-1 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 白色粒子を多く含む。しまりなし。 | 上層 |
| ①-2 褐灰色砂質土 (10YR4/1) 硬化面の可能性あり。 | |
| ①-3 黒色砂質土 (10YR2/1) 2~5mm次の小石含む。しまりなし。 | |
| ②-1 黒色砂質土 (10YR1.7/1) ①-3より意味が強い。しっかりと | 中層 |
| ②-2 黒色砂質土 (10YR2/1) 中央部の深い位置にアカホヤブロック含む。 | |
| ②-3 黒色砂質土 (10YR1.7/1) キタが細かく、しまっている。 | |
| ③ 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) 人為的埋土。黒色土に多量のアカホヤが混じる。裏側から堆積している。締まりがない。 | 下層 |
| ④ 黒色砂質土 (10YR1.7/1) アカホヤのブロック少量混じる。瓶の使用時に堆積。 | |

(2) 道跡1号(第129～131図)

B-40、C-41区、Ⅲ層上面で検出された。本来の掘り込み面はⅡ層と想定される。

堀跡の北側に近接して検出され、長さ11.7m、幅0.94m、深さ0.6mである。道跡は崖際まで検出できたが、シラス台地の崩落によりそれから先は確認できなかった。しかし、崖の斜面に堀切が残っていることから、本来は崖下まで到達していたとみられる。崖部の発掘調査は、安全面から実施できなかつたが、航空写真測量を行い実測図を作成した(第129図)。

道跡は堀跡によって分断されており、堀跡より東側は、道幅が広く平坦であるが、西側は断面V字状になり一人一人が通れるくらいに狭くなる。大人数の移動を制限するための工夫とみられる。また、堀跡近くの床面で、小ピットや工具痕、硬化面を確認した。

堀跡に分断されている地点は、板などを渡して往来したと想定され、小ピットは橋板に関連する可能性もある。工具痕の幅は、堀跡と同じである。

断面の観察では、堀と同時に埋められた後、再び道として利用され硬化面が形成されている(堀断面A②層)。年代を特定できる出土遺物はないが、堀跡に付随する道跡であり、中世後半期に構築されたと考えられる。

(3) ピット列2号(第132図)

C-41区Ⅷa層上面で3基のピット列を検出した。場所は堀跡1号の北側である。3基のピットは等間隔に並んでおり、床面のレベルも同じである。

P2は土層ベルトの断面観察から、池田火山灰層上位から掘り込まれていることを確認できたが、樹根による攪乱のため本来の掘り込み面は確認できなかった。

P2の断面観察から、これらのピットは本来60cm以上の深さがあったことが推測できる。出土遺物はないが、埋土が堀跡1号に類似していることから中世の可能性もある。

(4) 竪穴建物跡21号(第134図)

E-40・41区、Ⅲ層上面で検出された。長軸2.54m、短軸2m、深さ0.58mの竪穴建物跡である。平面形は長方形で、中央部は攪乱によって破壊されている。

埋土は黒色砂質土が主で、床面は黒色砂質土とアカホヤ火山灰のブロックが入り混じっていた。埋土の状況から人為的に埋め戻された可能性が高い。柱穴は検出されなかった。

出土遺物は、古墳時代の土器小片が少量出土したのみである。遺構の規模や埋土の特徴から、中世の竪穴建物跡と判断した。

(5) 土坑墓(第133図)

E・F-36区Ⅲ層上面で検出された。長軸2.1m、短軸0.96m、深さ0.16mで平面形は隅丸長方形である。骨片の可能性のある白色の薄片を③層で検出したが、人骨の形状をどこまで見ていなかった。また、③層直上で破砕された中世の土鍋が、4か所に分かれて出土した。土鍋は副葬品と考えられ、③層直上が死床の可能性もある。

土坑墓は、土器附着炭化物の放射性年代測定から10世紀後半から11世紀前半と考えられる。

出土遺物(第135図)

591は口径36cmの土鍋である。底部が欠失している以外は、ほぼ完形品である。よく使い込まれており、上胴部外面には煤がタール状に附着し、下胴部は二次焼成のため剥落している。砂粒、小石を含む粗い胎土で作られ、内面はケズリ調整を施す。

外面に附着した煤の放射性炭素年代測定値は、1050±20BPである。



土坑墓作業風景

3 中世の出土遺物(第136図)

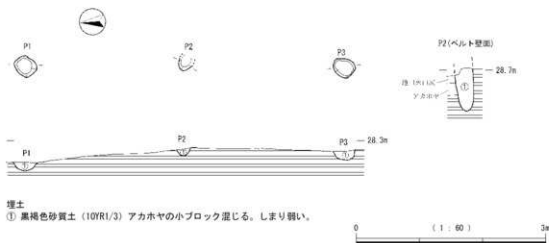
近世の遺構や攪乱から、土師器、陶磁器、瓦質土器が少量出土した。

592、593は土師器の皿である。器高が低く、底部はヘラ切りである。内外面回転轆ナゲを施す。

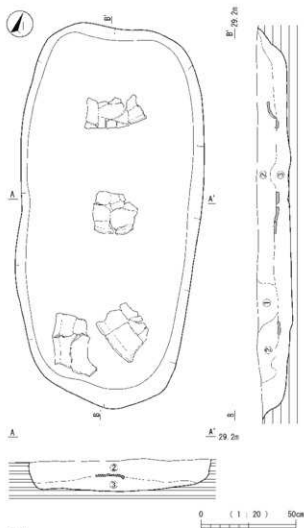
594は太宰府分類の白磁Ⅳ類である。口縁部が玉縁状を呈する。592～594は、近代以降の溝から出土した。

595は常滑焼の甕である。胴部で内外面にハケ目を施している。内外面に暗赤褐色の釉薬がかかる。

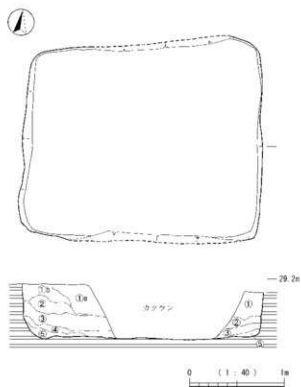
596、597は陶器の壺と考えられ、胎土、調整から同一個体の可能性が高い。胎土は泥質で須恵器に近い焼成である。596の底部は、貼付け高台である。



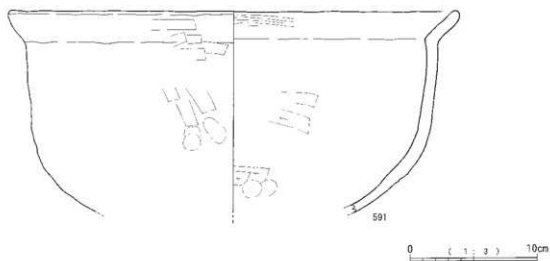
第 132 図 ビット列 2 号



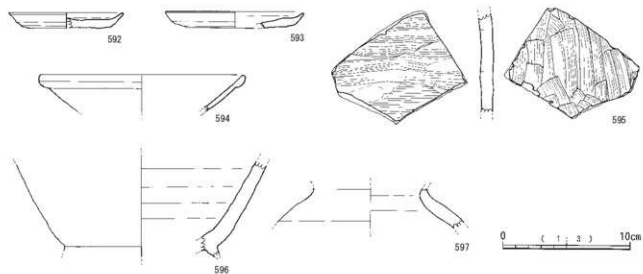
第 133 図 土坑墓



第 134 図 竪穴建物跡 21 号



第 135 図 土坑墓出土遺物



第 136 図 中世の出土遺物

第 32 表 中世の出土遺物観察表

発掘 番号	遺物 番号	種別	器種	出土IC	層位	色調	調整・文様	法量 (cm)			胎土	焼成	備考
								口径	底径	器高			
136	591	土師器	土鍋	E-36	土坑墓	外：明褐色 内：明赤褐色	外：ナズ 内：ナズ、筋り	(36.0)	—	—	白色砂 小石	良好	煤付者
	592	土師器	皿	C-32	SK22	内、外：淡黄色	内、外：別転ナズ	(9.1)	(7.0)	1.2	精良土	良好	底部へラ切り
	593	土師器	皿	C-32	SK22	内、外：淡黄色	内、外：別転ナズ	(11.6)	(8.0)	1.3	精良土	良好	底部へラ切り
	594	白磁	碗	D-33	SK23	内、外：灰白色	—	(16.4)	—	—	精緻	煎焼	太宰府分館IV類
	595	陶器	壺	C-33	雑瓦	内、外：暗赤褐色	内、外：ハケ目	—	—	—	白色砂 小石	良好	常滑焼
	596	陶器	皿	D-38	雑瓦	外：暗赤褐色 内：にぶい黄褐色	内、外：別転ナズ	—	—	—	精良土	良好	5と同一個体の可能性
	597	陶器	皿	D-31	雑瓦	外：暗赤褐色 内：にぶい黄褐色	内、外：別転ナズ	—	—	—	精良土	良好	5と同一個体の可能性

— は計測不能

第7節 近世の調査

1 調査の概要

溝跡 11 条、道路 5 条を検出した。調査は表土剥ぎ直後に埋土中に板島の P1 もしくは P2 由来とみられる白色パミスを含まないものを調査対象とし可能な限り遺構検出に努めたが、表土直下でかつ黒色土中での検出を余儀なくされたため、表土剥ぎ時に削平されたものや記録を行うことができなかったものもある。自然層位や旧地形と比較すると近世以前の土地利用を窺わせ、埋土中からは薩摩焼や磁器碗の破片が一定量出土しているが、明確な時期比定ができるものは少ない。

2 遺構

(1) 溝跡 4号

B-24区からG-22区にかけて、Ⅲ層上面で北西-南東方向に検出された。検出面で幅1m、深さ20cm程度の掘り込みがあるが硬化面等は確認されない。所々途切れているが、おおむね幅1m弱、深さ20cm～40cm程度で、直線的に構築されている。埋土は黒色土でパミス等の混入は確認できず、埋土はⅡa層相当とみられる。

(2) 溝跡 2号ほか

B-23区からG-23区にかけて南北方向に検出された。表土直下で検出され耕作により激しい攪乱を受けているが、広いところでは幅40cm程度の掘り込みが形成されている。複数の硬化面が同一方向に切り合いをもちながら形成されている。

(3) 溝跡 5号

F・G-25区、Ⅲ層上面で検出された。幅1m程度の溝状遺構で南北方向に構築されている。埋土は黒色土で白色の軽石は含まずⅡa層相当とみられる。硬化面はみられない。溝跡7号が近い位置まで構築され、L字形の配置となって埋土もよく似ていることから、関連性が窺われる。

(4) 溝跡 7号、溝跡 8号

溝跡 7号はF-25区からE-33区にかけて、Ⅲ層上面で検出された。延長は約80mにわたり、埋土は白色の軽石を含まない黒色土でⅡa層相当とみられる。硬化面は確認されなかった。溝跡 8号はF-29区付近の

ごく一部の範囲で検出された。平面プランは歪な形状を呈し溝跡7号と平行するため関係性が窺われるが性格は不明である。

(5) 溝跡 9号

F・G-31区、Ⅲ層上面で検出された。検出面で幅1m程度でF-31区中央付近まで構築され、西へ約2mの間隔で道路3号が併走している。埋土は黒色土で軽石等は含まずⅡa層相当とみられる。付近はⅡc層上面まで削平されており、上部は調査以前に削平されている可能性が高い。F-31区中央付近で掘り込みが途切れるため、意図的にF-31区中央付近までのプランとして構築されている可能性が高い。また、本遺構のSP1断面ではI b層の造成底がこの溝を境に西方向へ始まっており、造成直前の土地区画を示している可能性がある。

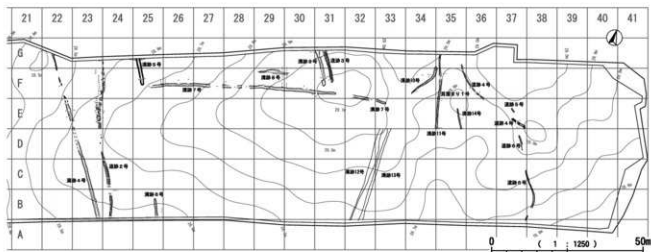
(6) 溝跡 3号

F・G-31区、Ⅲ層上面で検出された。溝跡9号の東に約2mの間隔で南北に併走している。幅1m程度の溝状のプランで、埋土中に硬化面を有する。埋土④は溝跡9号埋土①によく似ており、軽石等を含まず、Ⅱa層相当とみられる。埋土①は径3～5mm程度の白色パミスを含み、表土との混土層であるため、溝跡9号とは若干の時期差がある可能性がある。硬化面は埋土③に相当するがG-31区調査区北壁からF-31区中央付近に向かって次第に浅くなり、途切れる。溝跡9号が意図的にF-31区中央付近まで構築されている点と比較すると、特徴が異なる。両者には位置関係や走向から一定の関連性は窺われるが、遺構の性格については異なり、存続時期についても微妙な時期差があるものと考えられる。

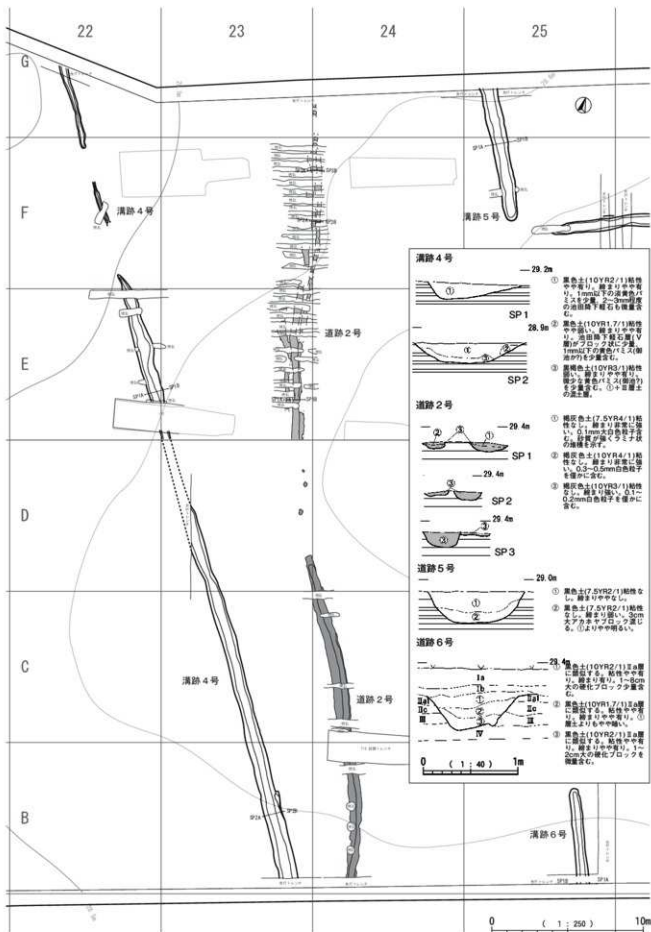
溝跡5号の軸線上には40mほどの間隔をあけて溝跡6号が位置する。これらは硬化面の有無や検出された主軸長に違いはあるが、幅や深さに類似点が多く、同一時期の所産である可能性が高い。

(7) 溝跡 10号、溝跡 11号、溝跡 14号ほか

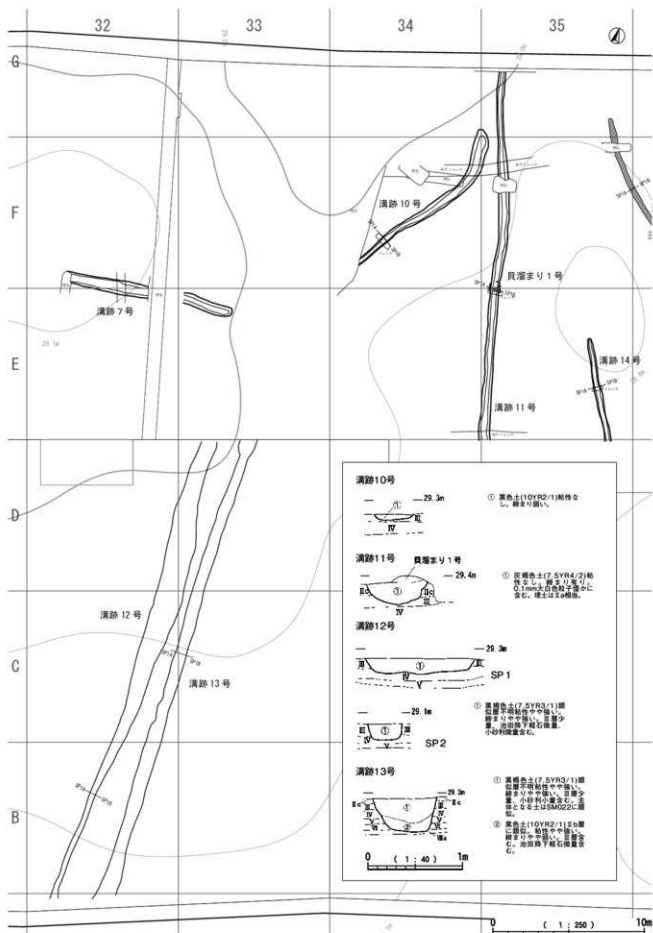
G-34区～E-35区の範囲で検出された。幅が40～60cm程度と狭く、また幅の割に深い。H27年度調査区のみで検出されたが、D区以南にも連続していた可能



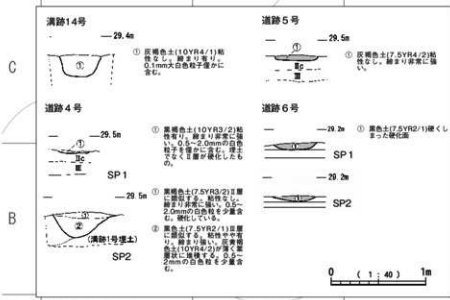
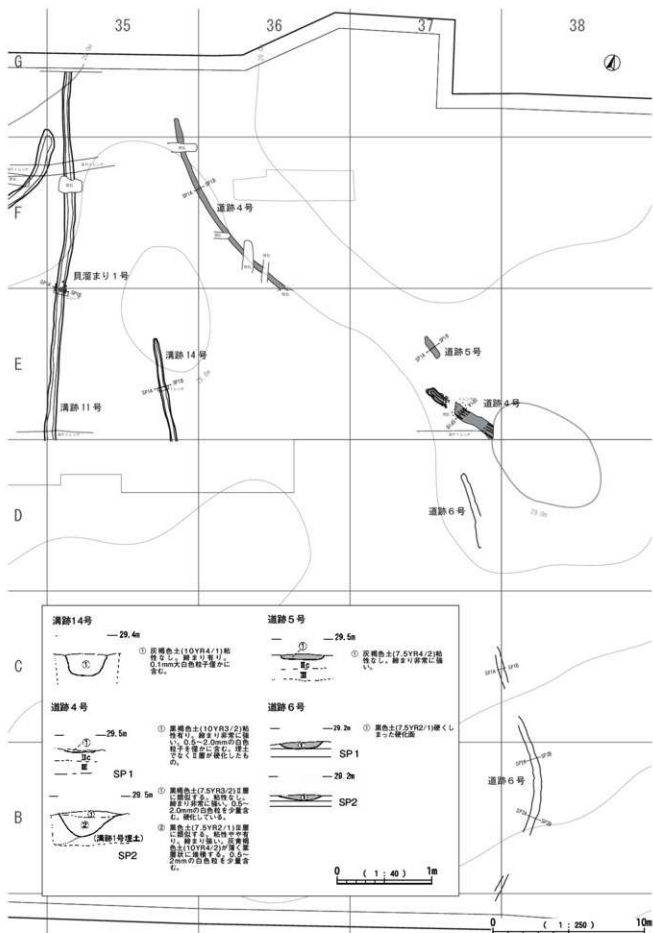
第137図 近世溝跡及び道路位置図



第138図 近世溝跡及び道跡実測図(1)



第 140 図 近世溝跡及び道跡実測図 (3)



第141図 近世溝跡及び道跡実測図(4)

第8節 包含層の出土遺物

包含層及び古代～近世の遺構内で出土した縄文時代後期から古墳時代終末期の遺物を報告する。

1 古墳時代前期の土器 (第142図)

598は甕形土器である。内外面丁寧なナデ調整を施す。599, 600は小型丸底壺である。599は器壁が厚く、口縁が球形の胴部から大きく開く。

601は脚付鉢で砂粒の多い胎土を使用している。602は平底の鉢形土器である。603は坏部が碗形を呈する高坏で、脚部はスカート状に開く。器壁が薄い精製品である。外面にハケ目状のミガキを施す。

605～618は手ずくねで製作された小型土器である。大きさが揃っており、内外面に指頭圧痕を残す。

619～618は小型丸底壺で柳描波状文と横沈線を施す。620は沈線文の下部に山形状のヘラ描沈線文が残っている。

622は二重口縁壺の口縁と考えられる。外面に柳描波状文を施す。

2 古墳時代終末期の土器 (第143図)

623は甕形土器の底部である。624は脚付鉢で、脚内面に接合痕が残る。橙色で古代の土器に近い胎土を使用している。625は浅い皿状の坏である。精製品で見込みに放射状にミガキを施す。底面に1条のヘラ描記号がみられる。626は壺形土器の底部である。

627～632は須恵器である。627は口径8.8cm、器高3.9cmの坏Gである。口縁部が直立し、底部は回転ヘラケズリ、体部は回転ナデ調整を施す。628は口径8.6cmの坏Hである。口縁部が内傾し、受部は小さく突出する。内外面回転ナデ調整を施す。629は坏の底部である。底部は回転ヘラ切り後、ナデ消しを行う。630は小型の坏で、口縁部が内側に屈折する。内外面回転ナデ調整を施す。

631は甕の底部付近と推測される。外面は格子目状のタタキを施し、自然軸の軸垂れがみられる。内面は同心円状の当て具痕が残る。632は甕の胴部である。外面は格子目タタキ、内面はナデ調整を施す。

3 石器 (第144～147図)

(1) 剥片石器、剥片 (633～640)

633, 634はチャート製の打製石鏃である。平面が五角形を呈し、基部に抉りを入れる。全面に丁寧な二次加工を施している。

635, 636は黒色のホルンフェルス製の磨製石鏃である。636は根括みを固定する浅い溝が両面にみられる。

637～640は石器の製作に関わる剥片と考えられる。637は褐色のホルンフェルスで、左側面を切断してい

る。正面右半分を研磨しており、裏面には剥離面が残る。638は打製石斧の破片の可能性はある。639は横長剥片に二次加工を施し形を整えている。正面には剥離整形後に研磨痕が施される。磨製石器の未製品の可能性がある。640は研磨痕が残る剥片である。

(2) 打製石斧 (641～644)

全てホルンフェルスを使用している。641, 642は横長剥片に二次加工を施し、緊縛用の抉りを作る。下端には刃部再生を目的とした二次加工を施す。642は正面と右側面に摩擦痕がみられる。643は平面形がラケット形を呈する。摩擦が進み判断に迷うが、正面を主要剥離面として図化した。刃部は両刃で、研磨によって成形している可能性がある。644は平面形がバチ形で、打製石斧の二次加工品と考えられる。正面には研磨痕がみられる。

(3) 敲石 (645～657)

645, 646は小型品である。646は上下両面に敲打痕を形成し、左側面には線条痕がみられる。

647, 648は正面と裏面に磨面と敲打痕が形成されている。649, 650は扁平な亜円礫を利用した敲石で、各面に敲打痕が形成されている。

651～657は棒状の砂岩礫を利用した敲石で各面に敲打痕を形成している。656, 657は端部が敲打により剥離している。658は下端に弱い磨痕が形成されている。

(4) 砥石 (659～666)

659～660は板状の砥石である。660は角礫から板状の素材を剥離し、表裏面を砥石として利用している。使用頻度が低く、研磨痕は部分的である。661は周縁に二次加工を施し、砥石の形を整えている。砥面には擦痕が形成されている。

662～665は柱状の砂岩を利用した砥石である。662は裏面に砥面と浅い敲打痕が形成される。663は上端に僅かな敲打痕が形成される。664は正面と左側面に多数の刃線痕がみられる。全体が焼けている。665は欠損後に敲石として再利用しているため、下部部に敲打痕が形成されている。砥面と敲打痕を各面に形成し、正面には鉄分の付着がみられる。

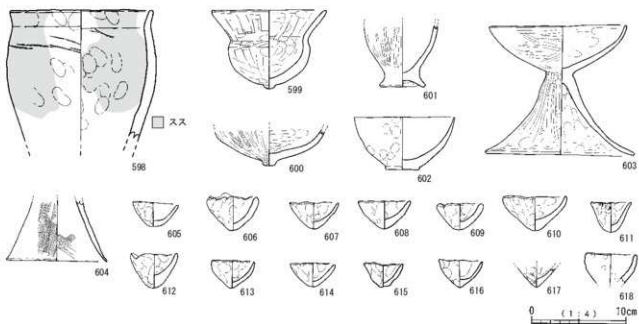
(5) 礫 (667～669)

667は被熱礫であるが、正面中央に煤の付着していない範囲が認められる。焼けていない箇所は、紐などを巻き付けていた可能性がある。

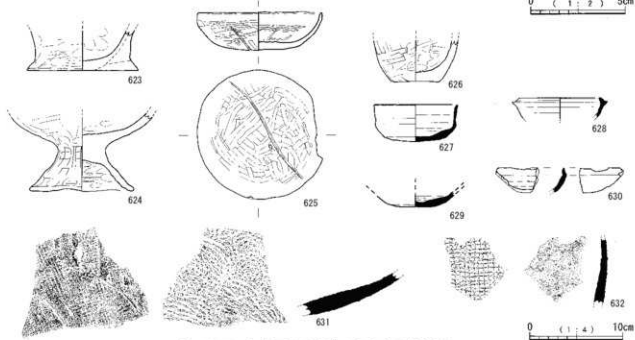
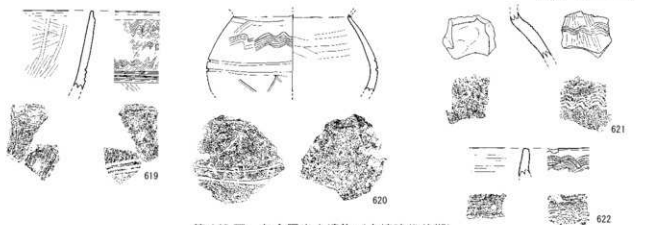
668, 669は棒状の亜角礫である。

4 鉄製品 (670～672)

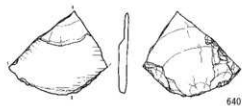
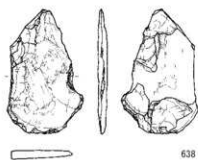
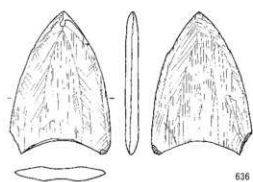
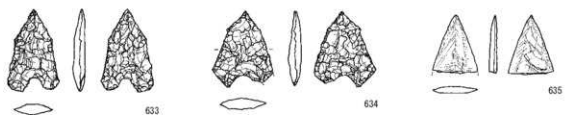
670は柳葉鐵である。671は器種不明品で、方形に成形されている。672は鉄板状の鉄製品である。下部に刃部を作り出す。



第 142 図 包含層出土遺物 (古墳時代前期)

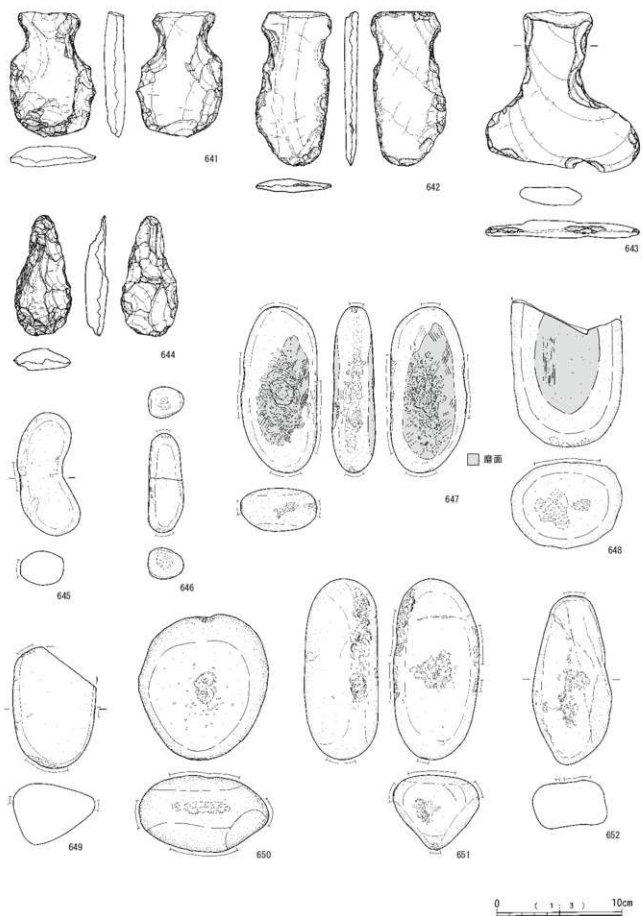


第 143 図 包含層出土遺物 (古墳時代終末期)

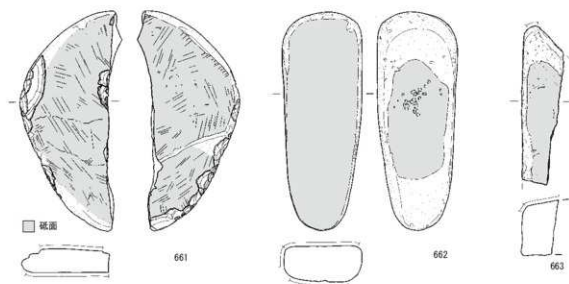
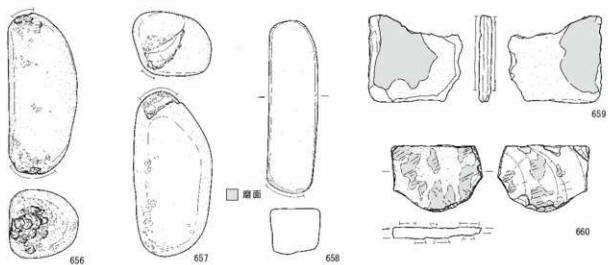
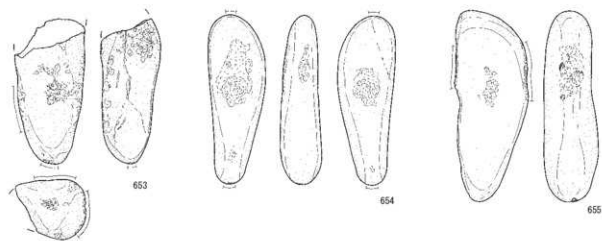


0 (1 : 1) 5cm

第 144 图 包含層出土石器 1

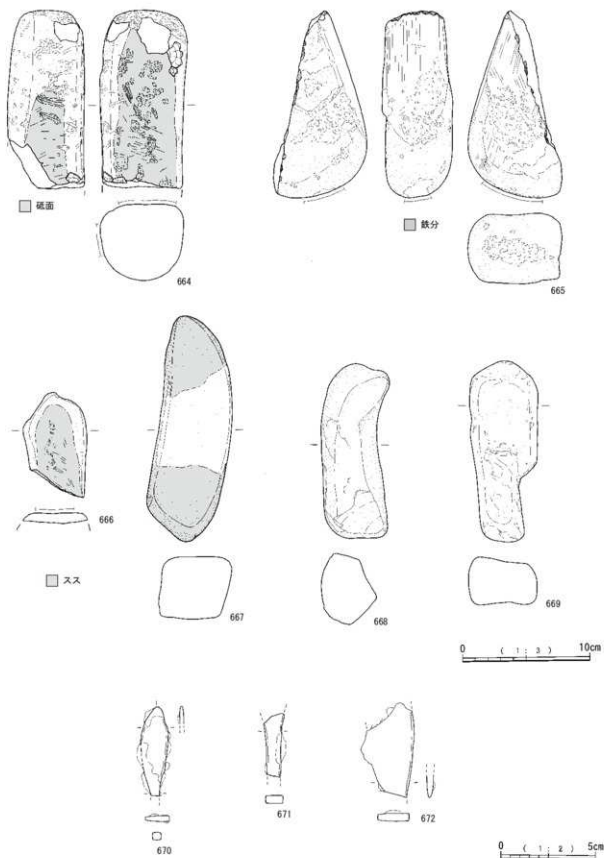


第 145 图 包含層出土石器 2



第 146 図 包含層出土石器 3

0 1 2 3 10cm



第 147 図 包含層出土石器、鉄器

第33表 包含層出土土器観察表

神岡 番号	番号	出土区	層	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整	色調	胎土	備考	
142	588	—	—	甕	(14.8)	—	—	(外) ナブ裁子具瓶 (内) ナブ、工具座	靑	長石、石英	内外面スス付着	
	599	B-20	—	小型丸底甕	10.2	0.3	8.3	(外) ナブ、ヘラミガキ (内) ナブ、ヘラミガキ	靑	角閃石、石英、赤色砂、 白色砂	底面に丸い突起物	
	600	35 (1T)	—	小型丸底甕	—	1.3	—	(外) ハケ杖ミガキ (内) ミガキナブ	靑	角閃石、石英、白色砂、 赤色小石	内面黒色、底面に小さな突起がつく	
	601	F-40	Ⅱ b 下	鉢	—	4.8	—	(外) ミガキ (内) 摩滅	明赤靑	角閃石、石英、赤色砂、 白色砂	砂粒の多い胎土使用	
	602	C-36	Ⅱ c	鉢	(10.6)	3.4	—	(外) ナブ (内) ナブ	赤靑	石英、赤色砂、白色砂		
	603	A-38	Ⅱ b	高杯	(14.8)	15.8	—	(外) ハケ杖ミガキ、ナブ (内) ナブ	靑	角閃石、長石、石英、 赤色砂、白色砂		
	604	C-35	Ⅱ b	高所	—	(10.7)	—	(外) ハケ目 (内) ハケ目後ナブ	に高い黄緑	角閃石、石英		
	605	B-36	Ⅱ c	小型土器	4.9	1.1	2.7	(外) ナブ (内) ナブ	靑	角閃石、石英、白色砂		
	606	B-38	Ⅱ c	小型土器	5.4	0.4	3.6	(外) ナブ (内) ナブ	に高い黄緑	石英、白色砂		
	607	D-20	Ⅱ b	小型土器	(5.4)	0.3	2.8	(外) ナブ (内) ナブ	明赤靑	角閃石、石英、白色小 石		
	608	D-37	Ⅱ c	小型土器	5.4	0.4	3.0	(外) ナブ (内) ナブ	に高い黄緑、 灰黄緑	角閃石、長石、赤色砂、 白色砂		
	609	D-20	Ⅱ b	小型土器	5.0	0.5	2.8	(外) ナブ (内) ナブ	靑	角閃石、石英、赤色砂、 白色砂、白色小石		
	610	B ~ D-34 ~ 37	一括	小型土器	6.6	0.2	3.6	(外) ナブ (内) ナブ	靑	角閃石、石英、白色砂	断面の内側がくっきりした黒色(あんこ の様)	
	611	C-30	Ⅱ b	小型土器	4.3	0.3	3.2	(外) ナブ (内) ナブ	明赤靑	角閃石、長石、石英、 赤色小石		
	612	B-35	Ⅱ b	小型土器	5.0	0.2	3.5	(外) ナブ (内) ナブ	黄緑	角閃石、石英、赤色小 石、白色小石	作りが広い	
	613	C-36	Ⅱ b	小型土器	(4.6)	0.2	2.9	(外) ナブ (内) ナブ	明赤靑	角閃石、石英、白色砂、 赤色小石		
	614	B-37, B-38	一括、黄土、 Ⅱ b	小型土器	(4.8)	0.4	2.5	(外) ナブ (内) ナブ	に高い褐色	角閃石、長石、石英、 赤色小石		
	615	D-30	Ⅱ c	小型土器	4.2	1.0	2.4	(外) ナブ (内) ナブ	黒、黒靑	角閃石、石英、白色砂		
	616	C-35	一括、黄土	小型土器	4.4	0.3	3.2	—	靑	石英、白色砂		
	617	E-20	Ⅱ b 下	小型土器	—	0.1	—	(外) ナブ、工具瓶 (内) ナブ	明赤靑	角閃石、長石、石英、 赤色砂、白色砂		
	618	E-40	Ⅱ b	小型土器	5.2	—	—	(外) ナブ (内) ナブ	靑、に高い靑	角閃石、石英、赤色砂、 白色砂		
	619	A-20	Ⅱ b	小型丸底甕	—	—	—	(外) ミガキ (内) ナブ、ミガキ	靑	角閃石、長石、石英、 赤色砂、白色砂	縦溝状文、沈線	
	620	B-34	Ⅱ b	小型丸底甕	—	—	—	(外) ナブ (内) ナブ	靑	精製土、赤色砂	縦溝状文、横沈線 文、山形文あり	
	621	E-30	Ⅱ b 下	小型丸底甕	—	—	—	(外) ミガキ (内) ナブ、ミガキ	明赤靑	角閃石、石英、赤色砂	縦溝状文	
	622	注記なし	—	二重口鉢甕	—	—	—	(内) ナブ	に高い黄緑	石英、白色砂	縦溝状文	
	143	623	B-28, B-29	横足、一括、 Ⅱ b 下	甕	—	11.8	—	(外) ハケ目 (内) ナブ	赤靑	角閃石、長石、石英、 白色砂	
		624	B-36	横足、一括、 Ⅱ b 下	鉢	—	11.1	—	(外) ミガキ、ヘラケズ リ後ナブ (内) 割落	靑	角閃石、石英、赤色砂、 褐色砂、 赤色小石、褐色小石	器内面に縦合模れる
		625	D-34	Ⅱ b	杯	13.7	4.0	4.0	(外) ナブ、ミガ キ、ヘラミガキ (内) ナブ、ミガキ、ヘ ラミガキ	明赤靑、 明黄緑	精良土	一糸ヘラ指状線あり、 種子痕あり
		626	B-37	Ⅱ c	甕	—	4.8	—	(外) ヘラナブ (内) ヘラナブ	明赤靑	角閃石、長石、石英、 白色砂、白色小石	粗い胎土使用
		627	D-38	Ⅱ b	杯	8.8	6.4	3.9	(外) 回転織ナブ、ヘ ラケズリ、ヘラ切り (内) 回転織ナブ	灰	精製土	縦溝文
		628	C-32	一括	杯	(8.6)	—	—	(外) 回転織ナブ (内) ナブ	靑灰	精製土	縦溝文
		629	—	—	杯	—	5.0	—	(外) 回転ナブ、 回転ヘラ切り (内) 回転ナブ	靑灰	長石	縦溝文
		630	D-31	一括、横足	杯	—	—	—	(外) 回転ナブ (内) 回転ナブ	灰黄緑	精良土	縦溝文
631		B-38	一括、横足	甕	—	—	—	(外) 撚子目タタキ (内) 撚子目杖当具瓶	靑灰、に高い黄	精製土	縦溝文	
632		E-35	Ⅱ a	甕	—	—	—	(外) 撚子目タタキ (内) 撚子目杖当具瓶	灰	精製土	縦溝文	

— は計測不能

第 34 表 包含層出土石器観察表

挿洞番号	番号	出土区	層	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	備考
144	632	D-18	Ⅱ c	石鏃	2.2	1.4	0.3	0.78	
	634	D-19	Ⅱ c	石鏃	2.1	1.6	0.4	0.80	
	635	E-35	①	磨製石鏃	1.6	1.3	0.2	0.33	SM10 埋土
	636	D-39	Ⅱ b	磨製石鏃	3.8	2.6	0.4	4.30	
	637	T08		剥片	3.6	2.3	0.5	5.21	T08
	638	F-35	Ⅱ c	剥片	7.4	4.4	0.6	15.33	
	639	F-35	Ⅱ c 下	剥片	9.4	4.0	1.0	38.52	
	640	B-38	Ⅱ b	剥片	2.2	2.6	0.3	1.32	
145	641	B-28	Ⅱ b 下	打製石斧	9.8	6.8	1.6	130.00	
	642	B-28	Ⅱ b	打製石斧	12.2	5.5	1.0	98.13	
	643	—	—	打製石斧	12.7	12.2	1.4	199.49	
	644	—	—	打製石斧	9.5	4.4	1.8	64.75	
	645	—	—	敲石	9.8	4.9	2.7	169.17	
	646	—	—	敲石	7.8	2.8	2.4	85.55	
	647	—	—	敲石	13.2	6.0	3.3	388.61	
	648	D-38	Ⅱ c	敲石	—	8.8	6.8	925.00	
	649	—	—	敲石	9.5	6.5	4.8	380.51	
	650	C-35	Ⅱ b	敲石	11.3	10.2	5.9	924.00	
	651	—	—	敲石	14.3	6.7	5.7	765.67	
	652	—	—	敲石	13.3	6.2	4.2	485.70	
	653	—	—	敲石	11.4	4.7	5.5	292.70	
	654	—	—	敲石	13.4	4.6	3.3	268.34	
146	655	—	—	敲石	15	5.8	4.3	465.20	
	656	—	—	敲石	12.7	5.4	5.4	553.23	
	657	—	—	敲石	13	6.2	5.1	597.36	
	658	—	—	敲石	13.6	4.1	3.7	355.21	
	659	B-39	Ⅱ c	砥石	6.9	7.4	1.0	80.09	
	660	—	—	砥石	5.3	7.2	1.0	58.99	
	661	—	—	砥石	17.4	8.0	1.9	297.20	
	662	—	—	砥石	17.3	6.3	2.8	471.87	
	663	—	—	砥石	12.6	3.3	4.6	270.97	
	664	—	—	砥石	14.1	6.9	6.0	889.99	
	665	—	—	砥石	14.8	7.4	5.6	707.31	
147	666	—	—	砥石	8.3	5.0	0.9	49.05	
	667	—	—	鏃	17.8	6.7	5.0	957.78	
	668	—	—	自然礫	13.8	5.4	5.7	578.50	
	669	—	—	棒状礫	14.3	5.4	3.8	419.91	

— は計測不能

第 35 表 包含層出土鉄製品観察表

挿洞番号	番号	出土区	層	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	備考
147	670	C-38	Ⅱ b	鉄鏃	4.8	1.5	0.3	5.26	
	671	T11	Ⅱ	器種不明	3.4	1.1	0.4	4.85	
	672	E-40	Ⅱ b 下	器種不明	5.1	2.8	0.4	10.27	

— は計測不能

第V章 分析

第1節 春日堀遺跡における弥生時代終末期から古墳時代前期の土器編年

(公財) 鹿児島県文化振興財団

埋蔵文化財調査センター 川口雅之

(1) 経緯と課題

本県における弥生時代終末期から古墳時代の土器編年は、発掘調査の多い薩摩半島の出土資料を中心に組み立てられ(池畑1980, 多々良1981, 中村1987, 橋本2018), その成果を大隅半島に適用してきた。

現在, 最も用いられてきた編年は, 中村編年で, 弥生時代終末期から古墳時代後期までをⅠ～Ⅳ様式に編年したものである(第148図)。この編年は, 薩摩半島と大隅半島の間に存在した弥生土器の地域性が, 弥生時代終末期に統一されることを前提としており, 両地域を一括して編年表が示されている。

本遺跡の土器は, 中村編年を参考に時期比定を行うと甕形土器が東原式, 高坏や小型丸底壺が中津野式となり, 中村編年の様式概念や年代とは矛盾が生じる。

これは, 志布志湾沿岸域における土器様式的地域性が, 編年に考慮されていないためと思われる。また, 新たな調査成果を踏まえ, 土器編年を再構築する必要性も指摘されており(橋本2019), 志布志湾沿岸域の地域性を踏まえた土器編年策定が必要となった。

これとは別に, 近年宮崎平野及び都城盆地では, 豊富な発掘資料をもとに土器編年の精緻化が進んでいる(河野2019, 近沢2016)。宮崎平野部の編年では, 緩慢な型式変化を示す甕形土器ではなく, 広域流通型の高坏を基準に様式設定がなされ, 土器編年の細分化が行われている。

整理作業を進める中で, 本遺跡の土器は, 宮崎平野及び都城盆地と技術的特徴の類似性が強く, 宮崎県の編年研究を参考にすることが有効であるとの見解に至った⁽¹⁾。本節では, 焼失住居跡の一括資料を用いて土器編年を作成し, 土器群の年代的位置づけを明らかにする。

(2) 型式分類と編年

編年の方法としては, 指標となる器種の型式分類を行い, 竅穴住居跡の一括資料をもとに, 編年作成を行う。土器様式の前後関係については, 河野編年を参考に高坏の型式変化から判断する。本遺跡の高坏は, 作りや胎土から宮崎平野及び都城盆地からの搬入品と考えられ, 高坏を介して宮崎平野及び都城盆地の編年と併行関係を確認することができる。

なお, 編年の参考とするために, 土器附着物炭化物や炭化材の放射性炭素年代測定を多数測定したが, 校正年代は全て弥生時代後期の年代となった。これは, 弥生時代後期から古墳開始期の炭素14年代が, 較正曲線「IntCal」を用いて較正できないことが原因と考えられる⁽²⁾(春成ほか2011)。

① 型式分類(第149図)

高坏

弥生時代の系譜を引く大型高坏をⅠ類, 古墳時代に出現する椀形高坏をⅡ類とした。Ⅰ類は坏部の形態によって細分できる。

ⅠA類: 深い坏部を有する高坏で, 口縁部が外反しながら直立して立ち上がる。

ⅠB類: 口縁部がⅠA類より外開きに立ち上がる。坏部下半は直線的である。

ⅠC類: 皿状の坏部下半から口縁部が大きく外反する。口縁部と坏部の境には小さな段を形成している。脚部は柱状をなし, 裾部が椀形に膨らむ。裾部には穿孔を施し, 脚柱部にしぼり痕がみられる。

ⅠD類: 浅い皿状の坏部から口縁部が大きく外反する。坏部が浅く, ⅠC類よりも扁平な作りとなる。脚部形態はⅠD類と同じである。

ⅠE類: 坏部がエンタシス状で, 裾部が屈折する。Ⅱ類: 坏部が椀形を呈し, 脚部はスカート状に開く。精製品の小型高坏である。

甕形土器

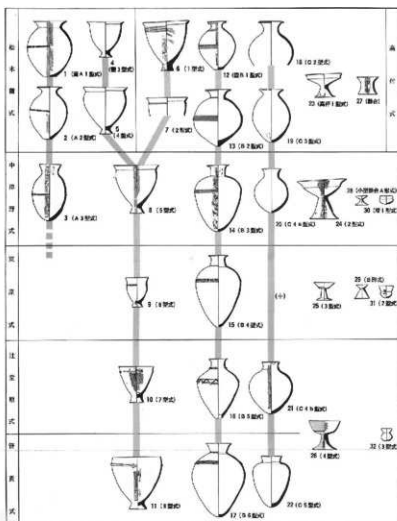
Ⅰ類: 長身のプロポーションで上胴部が張る器形である。口縁部は「く」字状を呈し, 胴部内外面にハケ目を密に施す。下胴部外面はケズリ調整である。底部が高脚の土器をⅠA類, 低脚をⅠB類, 平底をⅠC類に細分した。

Ⅱ類: 器高に対して口径が大きく, 逆三角形のプロポーションとなる。口縁部はⅠ類に比べ長く, 外反が弱い。調整はハケ目後ナデ調整を基本とする。底部が高脚の土器をⅡA類, 低脚をⅡB類, 平底をⅡC類に細分した。

Ⅲ類: 口縁部が直立気味に屈曲する。胴部形態はⅡ類同様, 逆三角形である。

Ⅳ類: 口縁部の外反がなくなり, バケツ形のプロポーションとなる。調整はハケ目後ナデ調整である。

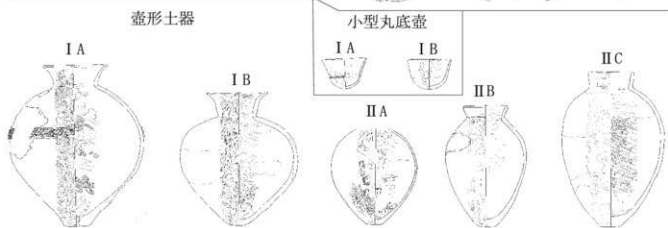
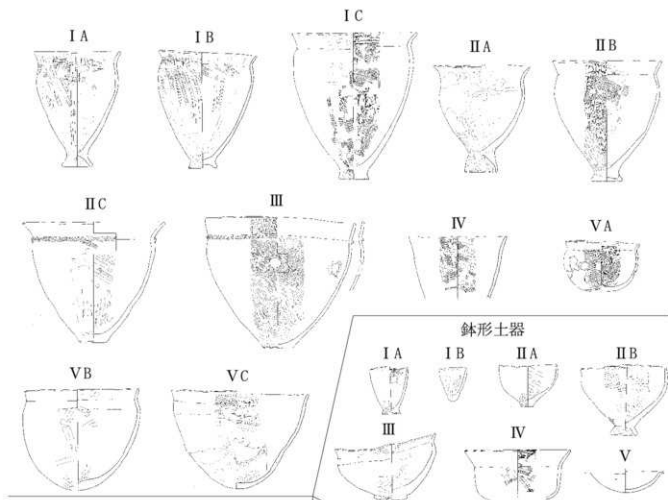
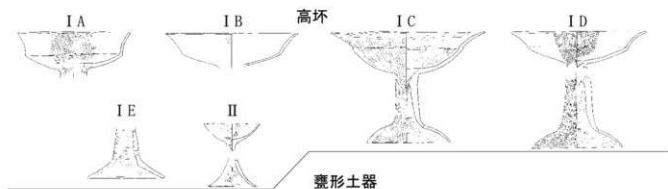
V類: 丸底の甕形土器である。口縁部が「く」字状に屈曲し, ハケ目を密に施す土器をVA類, 口縁部が直立気味に屈曲する土器をVB類, 口縁部の屈曲がない土器をVC類とした。VB・VC類は, ナデ調整を基本とする。



第 148 図 成川式編年表（中村 1987）

第 36 表 遺構内出土土器一覽表（形式別）

竖穴建 物跡	高坏					壺形土器							甕形土器					小型丸底壺		鉢形土器								
	IA	IB	IC	ID	IE	II	I	II	III	IV	VA	VB	VC	IA	IB	IIA	IIB	IIC	IA	IB	IA	IB	IIA	IIB	III	IV		
2号	1						6	1				1	VC	1		2										2		
3号		1						1	1																			
4号			2			2		8					1	1			1		3						1		2	1
5号				2		1		12					1		1		3		1					1	1			
6号				2	2	1		14	2	1				1			2	2							3			



第 149 图 土器分類图

壺形土器

I類：胴部が球状となる。底部が平底の土器をI A類、丸底の土器をI B類に細分した。

II類：胴部が楕円形状を呈する。胴部中位の膨らみが強く平底の土器をII A類、縦長で上胴部に最大径がある土器をII B類、縦長で胴部中位に最大径がある土器をII C類とした。II B・II C類は、丸底及び不安定な平底となる。

小型丸底壺

I A類：丸底の胴部から口縁部が直線的に開く。口縁部と胴部の境は低い有段となり、沈線文を施す。

I B類：口縁部の屈折が無くなり、胴部と一体化する。無文である。

鉢形土器

I類：コップ状の深い器形である。平底の土器をI A類、丸底の土器をI B類とした。

II類：胴部が碗形若しくは直線的に開く器形である。平底をII A類、脚付鉢をII B類に細分した。

III類：口縁部が短く屈曲し、部厚い平底をもつ器形である。器壁が厚く、粗雑な作りである。

IV類：鍋形に近い器形である。口縁部は長く、外傾する。器壁が薄い。

V類：丸底で皿形の器形である。口縁部は外側に屈折する。

② 編年

第36表は各型式の出土数を住居単位に集約し、高坏の型式変化に沿って時系列に並べたものである。

本遺跡の高坏I A類は河野分類5-1型式、I B類は5-3型式、I C類は6-1型式、I D類は6-2型式に該当する。高坏の新旧関係から、竪穴建物跡2号土器群→3号土器群→4号土器群→5号・6号土器群と4段階の土器様式を設定した。

宮崎県の編年を参考にすると、竪穴建物跡2号土器群が弥生時代終末期前半、3号土器群が弥生時代終末期後半、4号土器群が古墳時代初頭、5号・6号土器群が古墳時代前期前半に相当すると考えられる(第150図)。

高坏以外の器種について型式変化を概観すると、時期が新しくなるに従って、甕形土器は長身のプロポーションから筐型特有のバケツ型の器形へと変化する。この変化に伴って、口縁部屈曲とハゲ目が見られなくなる。壺形土器は丸底化が進行する。小型丸底壺は口縁部と胴部が一体化し、無文化する。各器種の型式変遷に矛盾や断絶はなく、編年の精度を支持するものと考えられる。

(3) 各時代の概要 (第150図)

① 弥生時代終末期前半

高坏I A類(8)を指標とする段階である。甕形土器は長身でハゲ目を密に施すI類(1~3)が主体である。壺形土器II A類(6, 7)の底部は平底で、胴部の張り出しが強い。鉢形土器は平底のI A類(9, 10)が主体である。

甕形土器は、「く」字状口縁と直立気味の口縁部が弥生時代終末期の段階で混在しており、これまで判断基準としてきた口縁部屈曲の強弱で時期比定を行うことは困難である。

また、甕形土器は器形や製作技法だけでなく、胎土を含めて宮崎平野部との類似性が認められる。

② 弥生時代終末期後半

高坏I B類(14)を指標とする段階である。甕形土器はI類(11)とII類(12)が各1点出土している。II類の器面調整は、ナデではなくI類と同じハゲ目調整を施している。甕形土器がI類からII類へ移行する過渡期と考えられる。その他の器種については、確認することができなかった。

③ 古墳時代初頭

高坏I C類(25, 26)を指標とする段階で、新たに高坏II類(27)が出現する。甕形土器はII類(15, 17, 19)とV類(20, 21)で構成される。II類は口径が大きくなり、逆三角形のプロポーションが完成し、ナデ調整が主流となる。

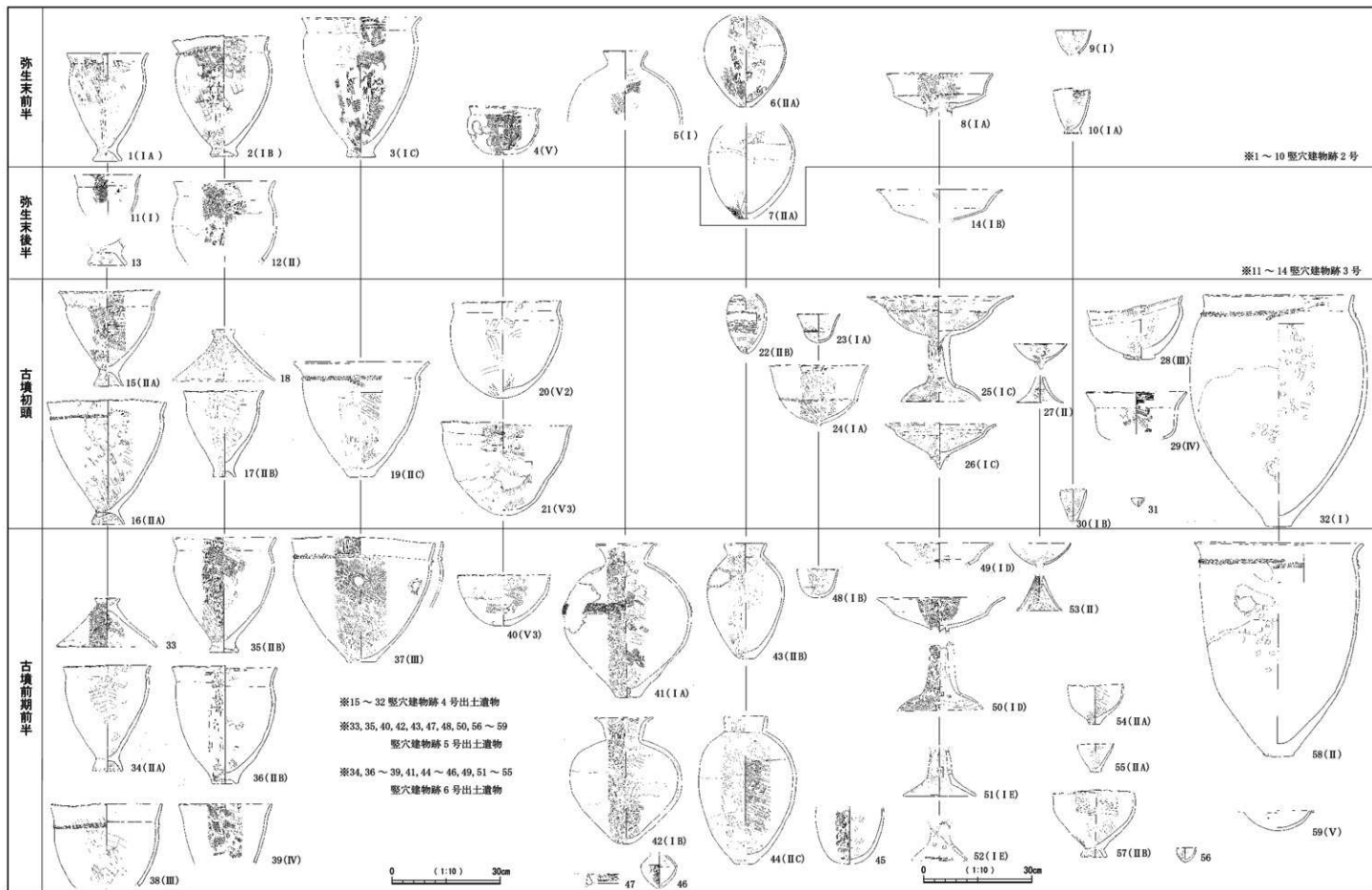
丸底の壺形土器II B類(22)や小型丸底壺I A類(23, 24)、鉢形土器III・IV類(28, 29)、大甕(32)が出現し、器種組成が豊富になる。

④ 古墳時代前期前半

高坏I D類(49)、I E類(51, 52)を指標とする段階である。甕形土器はII類(34~36)が主体であるが、口縁部屈曲の弱いIII・IV類(38, 39)が出現する。III・IV類は古墳時代前期後半に主体となる型式と考えられる。

壺形土器は球形の胴部をもち、丸底を呈するI B類(42)、楕円形の胴部をもつII C類(44)、櫛波状文を施した二重口縁壺(47)が出現する。

小型丸底壺はI A類の後継型式であるI B類(48)、鉢形土器は胴部が碗形若しくは直線的に開くII類(54, 55, 57)が出現する。竪穴建物跡9号で出土した鉢形土器V類(59)は、高坏との伴生事例を確認できないが、宮崎県の事例から古墳時代前期前半に所属すると考えられる。



第150図 春日堀遺跡 土器編年図

(4) まとめ

- ① 本遺跡の土器群は、弥生時代終末期から古墳時代前期前半に位置づけられる。
- ② 高坏には、灰白色で胎土に赤褐色粒を含む資料が存在する。宮崎平野及び都城盆地の高坏と類似しており両地域からの搬入品と考えられる。
- ③ 甕形土器は、器形や調整が宮崎平野・都城盆地に類似している。さらに、胎土が泥質で小石を含み、器面に剥離や収縮痕がみられることは宮崎平野南部の土器群に顕著な特徴と考える。本遺跡の土器群は、宮崎平野及び都城盆地の土器製作技術の特徴を強く受けている。
- ④ 本遺跡では宮崎平野及び都城盆地にみられる器台、二重口縁壺、長頸壺、小型壺は受容していない。器種のセット関係は、薩摩半島及び錦江湾沿岸域と共通しており、必要な器種を選択的に導入している。
- ⑤ 古墳時代初頭になると逆三角形のプローションをもつ甕形土器Ⅱ類が主体となる。この時期以降、甕形土器の特徴は、宮崎平野部よりも都城盆地と類似する。

注

- 1 鹿児島大学教授中村直子氏・宮崎県立埋蔵文化財センター今塩屋毅行氏御教示
- 2 中央大学教授小林謙一氏御教示

参考文献

- 池畑耕一 1980 「成川式土器の細分編年試案」『鹿児島考古』第14号
- 今塩屋毅行 2011 「Ⅲ 弥生時代」『板平遺跡』
- 宮崎県立埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 199
- 河野裕次 2019 「宮崎平野南部における弥生時代後期から古墳時代前期の土器様相－編年の細別と外来系土器の影響について」『宮崎考古』第29号
- 多々良友博 1981 「成川式土器の検討」『鹿児島考古』第15号鹿児島県考古学会
- 近沢恒典 2016 「都城盆地の古墳時代の土器」『平成27年度宮崎考古学会研究会宮崎県央地域の考古資料に関する編年の研究Ⅱ発表要旨』宮崎県考古学会
- 中村直子 1987 「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号鹿児島大学法文学部研究室
- 橋本達也 2019 「成川式土器編年案 Ver. 2」『第22回九州南方後円墳研究会宮崎大会集落と古墳の動態Ⅱ－古墳時代前期末～古墳時代中期－追加資料』九州南方後円墳研究会
- 春成秀衛・小林謙一・坂本稔・今村峯雄・尾崎大真・藤尾慎一郎・西本豊弘 2011 「古墳出現期の炭素14年代測定」『国立歴史民俗博物館研究報告』第163集

第2節 春日堀遺跡の地質

成尾英仁 (始良市文化財保護審議委員)

下司信夫 (産総研地質調査総合センター)

1 位置と地形

遺跡は志布志市有明町と大崎町の境界付近の西普賢堂に立地する。遺跡周辺の地形は菱田川右岸の河岸段丘になり、ほぼ平坦な地形が広がって標高は25m程度である。遺跡西側には比高差約20mの崖があり、これより上側にも平坦面が広がる。遺跡の東側は高度差約20mの急崖となり、菱田川沿いに形成された平野に続く。遺跡西側の平坦面は入戸火砕流堆積物がつくる、いわゆるシラス台地面に相当する。遺跡が立地する平坦面は、シラス台地面が侵食され形成された面である。

遺跡北側にある普賢堂湧水では、基盤をつくる四万十層群と大隅降下軽石層との境界付近から、豊富な地下水が湧き出している。

2 春日堀遺跡のテフラと土壌堆積物

春日堀遺跡では噴出源を異にする数枚のテフラ、その間に挟まる腐植土層・ローム層が堆積する。それらの模式地質柱状図を第1図に示す。層厚は場所によってやや異なり、平均的な層厚を示している。なお、近隣の遺跡に堆積する霧島御池起源の御池軽石は確認できなかった。

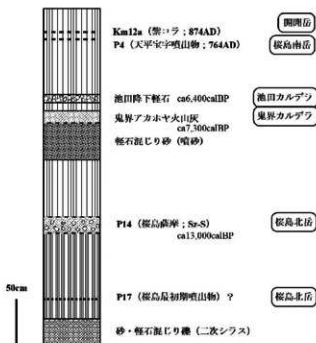
(1) 入戸火砕流堆積物(シラス)と二次堆積物(二次シラス)

入戸火砕流堆積物は始良カルデラ起源で、基質の火山ガラス質火山灰間に軽石・岩片が多量に含まれ、遺跡一帯のシラス台地を形成する。入戸火砕流堆積物表面は、部分的に風化作用を受け黄色～黄褐色を帯びる。入戸火砕流堆積物および風化した入戸火砕流堆積物の中には火山豆石が点在し、場所によっては多量に集まり塊をつくる。

入戸火砕流堆積物の表面は侵食作用で削られた起伏のある地形であり、それを埋めるように砂礫層が堆積する。砂礫層は礫・砂・軽石が多い部分が、互いに斜交するようなクロスラミナを形成する。層厚は場所により変化するが、1～3m程度である。砂礫層の上部は徐々に砂分が多くなり、明茶褐色を帯びた風化火山灰層に移行する。この火山灰層内には径5mm程度の赤褐色の軽石が点在する。この軽石の帰属は不明であるが、入戸火砕流堆積物由来の軽石、あるいは桜島最初期噴出物のP17軽石の可能性がある。

(2) 桜島薩摩テフラ (S2-S; P14)

二次シラス層の上位には明茶褐色のローム層、その上位にはやや濃色の茶褐色土が堆積し、それを覆って桜島薩摩テフラ(小林・溜池2002ほか)が堆積する。



第1図 模式地質柱状図

安定した場所では層厚約20cmであるが、大半の地点ではブロック状の堆積で、軽石や火山灰が上下に散在する。下部は軽石が多く、その上部に火山灰が堆積する。軽石の最大粒径は約3cmで、風化により淡い赤褐色を帯びる。火山灰は全体に濃い黄色を帯びるが、大半の地点で黒色腐植土混じりである。場所によっては最上部に、層厚3cm程度で極細粒の硬質火山灰がブロック状に堆積する。噴出年代については13.8±1.3kyrと13.4±2.0kyrの熱ルミネッセンス年代が得られ(Shitaoka et al. 2016) ているが、これは14C法で得られた概算13kaの値(奥野2002)とほぼ一致する。

(3) 鬼界アカホヤテフラ

桜島薩摩層の上位には層厚約50cmの黒色腐植土層が堆積する。層の上部はやや色が薄くなり、場所によってはベージュ色を帯びた塊状の集合体になる。この層を覆って鬼界カルデラ起源の鬼界アカホヤ火山灰が堆積する。後述のように鬼界アカホヤ火山灰直下に砂層があるため、メンバーの一つである幸屋降下軽石の存在は不明である。鬼界アカホヤ火山灰の層厚は砂層の影響で、8～30cmと変化する。中粒から細粒へと級化・成層する。鬼界アカホヤ火山灰は風化作用により変質し、淡い赤褐色を帯びる。上位には層厚5～10cmの明瞭な黒色腐植土層が堆積する。

(4) 池田降下軽石

鬼界アカホヤ火山灰層の上位には層厚数10cmの黒色腐植土層が堆積するが、その基底部約10cmの層厚に池田降下軽石(成尾・小林1984, 稲倉ほか2014)が

点在する。遠方から見ると連続性が良く1枚の層状であるが、近くで見ると約10 cmの範囲で上下に移動する。軽石は黄白色を帯び、最大径5 cmに達する。平均粒径は1.5 cm程度で、小さなものは少ない。軽石層には径0.5 cm～0.7 cm程度の岩片が比較的多く点在する。岩片は安山岩が主で、緑色安山岩・変質安山岩・灰色安山岩に区分され、角張ったものが多い。近隣の遺跡では池田降下軽石の上部に池田湖火山灰層が堆積するが、本遺跡では確認されなかった。

(5) 桜島天平宝字噴出物 (P4テフラ: 764～766AD)

遺跡内の溝状遺構内や古墳時代住居内には、第2図に示すような黄色を帯びた層厚約5 cmの火山灰層が堆積する。遺構内や住居跡内では火山灰の残存状態は良好であるが、平坦部においては大半の地点で確認できない。確認できる場所では層厚数cmのシート状に堆積する。全体に細粒の火山灰であるが、下部はやや粗粒である。火山灰層は後述の開聞岳の平安時代874年噴出物(紫コラ)に覆われる。

この火山灰について実体顕微鏡による形態観察と化学分析を行った。火山灰には発泡の悪いものが主体のごく細粒(2～3 mm)の軽石が含まれ、垂水市海潟で採集された桜島天平噴出物(P4: 小林・江崎1996, 小林・溜池2002, 以下P4とする)とよく類似する。第3図に示すように、火山ガラスの化学組成は海潟で採集されたP4のものほぼ一致する。

また、バリノ・サーヴェイ(株)によっても同様の分析、屈折率測定が行われた(別稿参照)。

それによると、本遺跡で採集されたものには灰白色の発泡良好～やや良好な軽石が含まれ、鉱物組成とし

て斜方輝石の斑品を含んでいた。海潟に堆積するP4の下部(L)・中部(M)・上部(U)から採集された3点の試料(第4図)には、発泡良好・やや良好・不良の軽石が含まれていた。いずれの試料にも斜方輝石が多く含まれ、遺跡採集のものと同様である。本遺跡と海潟で採集した軽石の化学組成は重複する領域が広い。とくに本遺跡の軽石と海潟採集のP4下部の軽石とは重複が明瞭である。

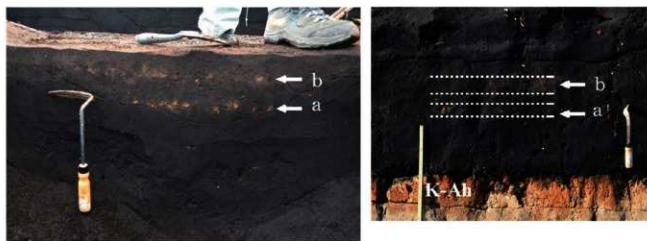
本遺跡で採集された火山ガラス試料の屈折率はいずれもほぼ同様で、モードは1.512付近にくる。海潟で採集されたP4は下部・中部・上部でやや異なる。下部は2つの異なるレンジのものが存在し、主要レンジのモードは1.512、高屈折率レンジのモードは1.523付近である。

以上のような観察・分析結果を考慮すると、本遺跡で溝状遺構や古墳時代住居跡を覆う黄色の火山灰は、桜島天平宝字噴出物(P4)に対比される。天平宝字噴出物では初期に軽石・火山灰を噴出し火砕丘である鍋山を形成しており、本遺跡に堆積する噴出物は764ADのものと判断される。

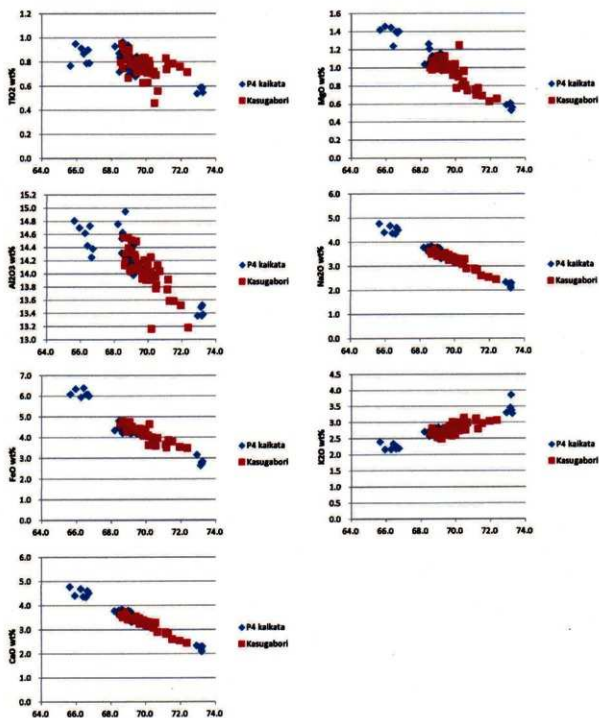
(6) 開聞岳貞観十六年噴出物(紫コラ; 874AD)

溝状遺構など窪んだ場所では、層厚5 cm程度で明紫色を帯びた硬質火山噴出物が堆積する。全体に細粒～小礫状(最大5 mm程度)の岩片・スコリア・軽石が含まれ、それらをごく細粒の紫色火山灰がコーティングする。また、肉眼では特徴的なレンガ色を帯びた変質安山岩片が少量含まれ、鉱物組成として斜方輝石・カンラン石を含む。

バリノ・サーヴェイ(株)により、この火山噴出物



第2図 P4テフラ(a)、紫コラ(b) 左: 遺構内の堆積状況 右: 平坦部での堆積状況



第3図 P4テフラの化学組成

について粒子の形態観察、屈折率測定・化学分析が行われた(別稿参照)。それによると、スコリアは色調・発泡程度がやや異なる数種類が含まれ、少量〜ごく微量の軽石も含まれていた。鉱物組成は斜方輝石が主体であるが、特徴的にカンラン石が少量含まれる。

カンラン石を特徴的に含み、古墳時代の遺物・遺構を覆う火山噴出物は、本遺跡から南西部に位置する開聞岳のもの知られている。同時期の噴出物としては、成尾(1986)による青コラ(藤野・小林1997のKm11)と紫コラ(同Km12a; 貞観十六年噴出物; 874AD)が知られている。この二つのうちどちらに対比されるかを明らかにするため、開聞岳近傍で調査担当者により紫コラと青コラが採集され、バリノ・サウヴェイ(株)が、粒子の形態観察、屈折率測定・化学分析を行った(別稿参照)。いずれも豊富なカンラン石を含み、鉱物組成のみからは区別できないが、化学組成ではそれぞれが別の領域にプロットされ明瞭に区別された。それと本遺跡の試料を比較すると、明らかに紫コラの領域にプロットされる。化学組成とこの火山噴出物がP4(天平宝字噴出物; 764AD)の上位に堆積することから、7世紀半ばに噴出したとされる青コラではなく、紫コラに対比される。

3 噴砂

(1) 鬼界アカホヤ火山灰層直下の砂層

鬼界アカホヤ火山灰層下部には軽石混じり砂層が堆積する。砂層は遺跡中央付近では明瞭であるが、東側では薄く不鮮明となる。砂層は場所により層厚が異なり、最大層厚50cm程度である。平坦な旧地形に沿うように堆積し、上端面もほぼ水平である。縄文時代早期層の平面では、細長く伸びる砂脈が確認されるが本数は少ない。

内部を充填するものは主に砂で、それに径0.5cm大の軽石や岩片が多く混じる。砂は下部でやや粗粒、上部になるにつれ細粒化する級化成層をなすが、場所によっては下位〜中位に軽石が濃集する。また、最上部に径2〜3cmの白色軽石がわずかに点在することもある。軽石は円磨が著しく、入戸火砕流堆積物二次堆積物中のもものと類似する。

砂層には、クロスラミナなど強い流れを示す構造は認められない。場所によっては、下部に粗粒の砂が濃集したブロックが点在する。この砂濃集部は、外見上は幸屋火砕流堆積物のランドレイヤーの結晶質砂に似る。ほとんどの場所で、砂層の下部約10cmは淡い黒色である。

本遺跡では近隣の大崎町荒園遺跡や平良上C遺跡で見られたような、砂層の下位に堆積する幸屋降下軽石

層や鬼界アカホヤ火山灰基底層は認められず、縄文時代早期の黒色腐植土層を直接覆い、鬼界アカホヤ火山灰層により覆われる。

(2) 砂だまり

春日堀遺跡では砂が溝状に堆積する砂だまりと、円形〜楕円形に堆積する砂だまりの2タイプが存在する。

1) 溝状の砂だまり

2015年度の調査では、縄文時代早期の黒色腐植土層表面に、北東から北西方向へほぼ直線状に伸びる溝状の砂だまりが認められた(第5図)。両端が遺跡の範囲外になるため長さは不明であるが、少なくとも30m以上は連続する。幅は広い場所で1m、狭い場所で30cm程度である。平面での観察では、砂だまりと周囲の黒色腐植土層との境界は不規則に入り組む。断面では深さ30〜50cmの半楕円形を呈し、周囲との境界は比較的明瞭である。

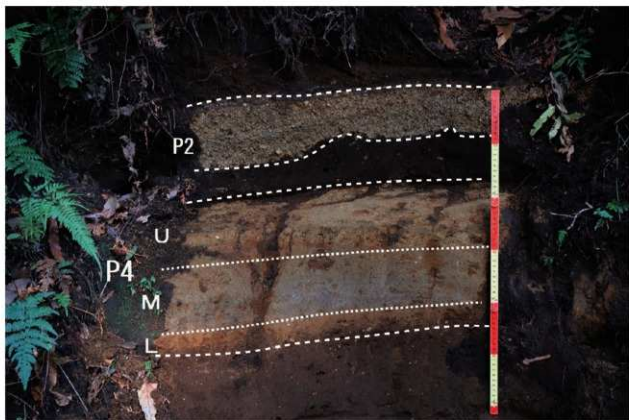
南側壁面では砂だまりの断面を見ると、下部は黒色腐植土が入り混じり、やや黒色を帯びた砂となっている。中央部付近では内部を充填する砂は粗粒〜中粒で、細〜小礫サイズの岩片、および同サイズの軽石片混じりである。内部には葉理などの激しい流れを示す堆積構造は見られず、塊状の堆積物で級化成層もはっきりしない。

この砂だまりの底には幅約1cmで細長い砂脈があり、下限は不明であるが少なくとも30cmほど下へ伸びる。砂脈は平面でも認められ、幅約1cmで少なくとも約3m続く。内部を充填する砂は粗粒砂〜細礫である。大隅半島の他遺跡の例から判断して、この砂脈は液状化で噴き出した砂の通った跡である。大量に砂が噴き出すにもかかわらず砂脈が細いことから、おおもとの噴出口は別の場所にあると推定される。

溝状の砂だまりの形成については不明な点が多いが、液状化で砂が地表に噴出したことで、その部分の地下にある地層(土壌層)の体積が減少し、圧密を受けて落ち込んで形成された溝の可能性、地震による地割れで形成された溝の可能性が考えられる。また、直線状であること、溝幅が広く浅いことなどから人為の可能性も検討する必要がある。

2) 円形の砂だまり

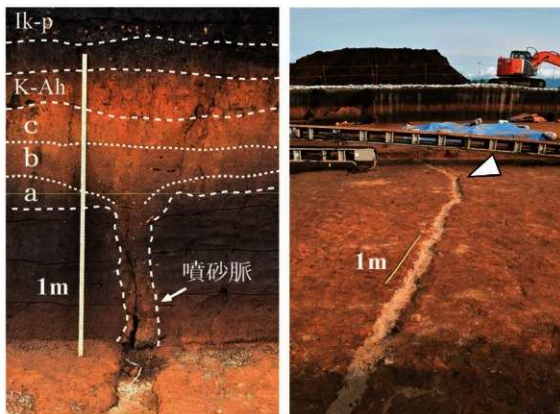
全調査区で円形〜楕円形、および不整形の円状をした砂だまりが認められる。周囲の黒色腐植土層との境界は、不規則に入り込む。大きさは最大径2〜3m程度である。内部を充填するものは粗粒砂〜中粒砂が主で、それに軽石片や細礫・小礫が混じる。軽石片は風化により濃いオレンジ色を呈するもの、やや風化程度が弱く黄白色のものがある。礫は全体に小さなものが



第4図 海潟のP4テフラ
 P2：桜島安永軽石 P4は下部（L）、中部（M）、上部（U）に三分区される

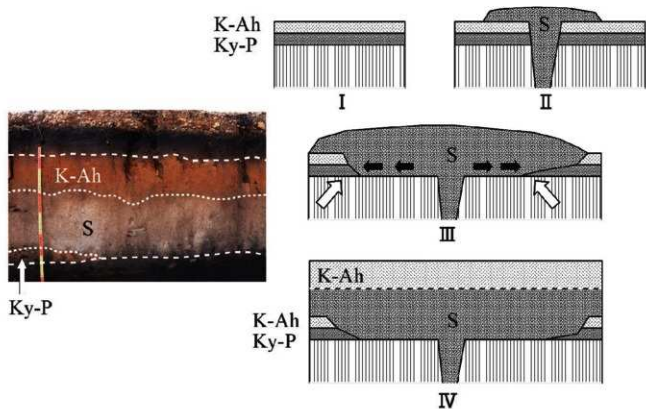


第5図 溝状の砂脈 右上写真・右下写真は左写真の断面 Aでは幅に比べ深く、Bでは皿状である



第6図 噴砂脈平面と断面

Ik-P: 池田降下軽石 K-Ah: 鬼界アカホヤ火山灰 左写真 a: 砂と黒色腐植土の混在部
 b: 噴砂 c: 砂と鬼界アカホヤ火山灰の混在部 右写真 三角矢印部分では屈曲する



第7図 噴砂による浸食

Ky-P: 幸屋降下軽石 S: 噴砂 K-Ah: 鬼界アカホヤ火山灰 I: 噴砂前 II: 地震による噴砂開始
 III: 噴砂の拡大でKy-PとK-Ah下部が溶食される(矢印部分) IV: 噴砂終了後、K-Ah上部が降下堆積する

多く、安山岩質・流紋岩質、堆積岩起源の泥岩・砂岩である。平面では塊状の堆積構造を示し、葉理や成層構造などの堆積構造は見られない。断面での形態が不明であるが、溝状に延びる砂だまりと同様に噴砂口に相当し、下部には上昇する噴砂脈が存在すると推定される。

(3) 噴砂脈

黒色腐植土層の平面では細長く延びる砂脈が見られるが、これは地震動により生じた割れ目を、液状化で噴き出した砂が充填した結果と考えられる。平面での砂脈は数本が存在するのみで、近隣の遺跡で確認されたような交差する多数の砂脈は存在しない。2016年度の本遺跡西側での調査では、壁面上昇する噴砂脈が確認された(第6図)。内部は黒色腐植土混じりで径2~3cmの軽石と砂が散在するような状況で、鬼界アカホヤ火山灰層に達する。黒色腐植土は噴砂脈の壁面が崩れたものである。

(4) 噴砂の噴出口と噴砂の形成時期

鬼界アカホヤ噴火では、途中で2回の大地震が発生したことが明らかにされている(成尾・小林2002)。2回とも大規模な液状化現象が発生し、それに伴い熊毛諸島では噴砂が、大隅半島中部・薩摩半島西部では噴砂が生じた。大隅半島中部で見られる噴砂は、2回目の地震によるものである。

本遺跡も含め近隣の大神町宮脇遺跡、平良上C遺跡でも大規模な噴砂現象が認められ、鬼界アカホヤ火山灰層中に砂が堆積するが、上昇する噴砂脈は全く確認されていない。一方、大規模な噴砂現象が認められた大神町荒園遺跡、旧高山町鐘付遺跡などでは上昇する噴砂脈が明瞭であった。このような違いが生じる原因は不明な点が多い。本遺跡の西側調査区では平面での幅5~10cmの噴砂脈があり、ここでは上昇する噴砂脈も確認されることから、液状化現象の発生場所は西側に偏在したと考えられる。東側調査区では噴砂脈が不明瞭なことから、主要な液状化発生場所は遺跡外にあったと推定される。

本遺跡では噴砂は縄文時代早期の黒色腐植土層を直接覆う。前述の宮脇遺跡や平良上C遺跡・鐘付遺跡などでは、噴砂は明確に鬼界アカホヤ火山灰層中に噴き出している。ただ、これらの遺跡でも黒色腐植土層を直接覆う噴砂もある。その噴砂を側方へ追跡すると、噴砂が鬼界アカホヤ火山灰層に噴き出している。すなわち、噴砂の勢いが強い噴出口付近では、水を含んだ噴砂が幸屋降下軽石層と鬼界アカホヤ火山灰底部層を溶食し、それらと一体化していると考えられる(第7図)。本遺跡でも同様の現象が起き、見かけ上、黒色腐植土層を直接覆っているように見えると判断され

る。

4 地層横転

遺跡内では地層の横転が見られる。横転した地層は鬼界アカホヤ火山灰層、その下位にある砂層、黒色腐植土層、桜島薩摩テフラ層、ローム層である。横転の大きさは3~4mであり、不整形を呈する。横転の方向はおおよそ南東から北西である。地層横転の成因については不明であるが、池田降下軽石層に覆われた鬼界アカホヤ火山灰層が横転することから、鬼界アカホヤ火山灰堆積後の不安定な環境下で、風の影響を受け発生した可能性がある。

5 桜島天平噴出物(P4)と開聞岳紫コラ(Km12a)

前述のように本遺跡では桜島火山起源の天平間噴出物(P4)が堆積する。桜島南東山腹で発生した天平噴火(764~766AD)では火砕丘である鍋山が形成され、長崎鼻溶岩が流出している(小林1982)。天平噴火初期(764AD)にはマグマ水蒸気噴火で軽石・火山灰を噴出したが、これがP4に相当し南東方向に降下堆積した(小林・沼池2002)。それによると、垂水市周辺では約10cmの層厚である。今回、比較の試料を採集した垂水市海浜では、P4は下部(L)・中部(M)・上部(U)の3層に区分され(第4図)、層厚は30cm弱である。また、海浜より約5km東方に位置する高峠では約15cmの層厚である。本遺跡はP4の分布主軸上に位置し、垂水市内での層厚から判断して分布が本遺跡まで及んだと推定されるが、今回の調査でこのことが確認された。ただ、分布範囲内での他遺跡の調査



第8図 P4の分布範囲

では未確認で、正確な分布図を描くことは困難である(第8図)。

天平年間噴火は続日本紀に噴火が記録され、噴火があったことは確実である。その噴出物であるP4が確認され、その上位約10 cmの層準に開聞岳起源の紫コラ(Km12a)が堆積することは、紫コラの年代観に制約を与えるものである。

紫コラの分布は開聞岳から北東方向で、大隅半島各地の露頭・遺跡で確認されており、志布志市北部まで分布することが明らかになっている。紫コラの噴火では指宿地方を中心に直接的な災害を受けた痕跡が多数認められる(成尾ほか2019)が、本遺跡では災害を受けた痕跡は確認されなかった。

紫コラと類似する青コラは大隅半島中南部に堆積する。下部にスコリアを伴い、特徴的な青灰色を帯びた火山灰層からなる。青コラは7世紀後半に噴出したとされ、本遺跡で堆積したとするとP4よりも下位になるが、そのような火山噴出物は確認されず、青コラは本遺跡には堆積したとしても削平されたと判断される。

6 まとめ

春日堀遺跡の発掘により、地質学的には次のことが明らかになった。

- 1 噴出源・時代の異なる火山噴出物が堆積する。
- 2 桜島天平噴出物(P4)と開聞岳貞観噴出物(紫コラ; Km12a)の堆積が確認された。
- 3 鬼界アホカや噴火に伴う噴砂が確認された。

文献

- 藤野直樹・小林哲夫(1992)開聞岳起源のコラ層の噴火・堆積様式。鹿児島大学理学部紀要, no. 25, 69-83
- 藤野直樹・小林哲夫(1997)開聞岳火山の噴火史。火山, 42, 195-211
- 稲倉寛仁・成尾英仁・奥野 充・小林哲夫(2014)南九州, 池田火山の噴火史。火山, 255 ~ 268
- 小林哲夫(1982)桜島火山の地質: これまでの研究成果と今後の課題。火山, 2集, 27, 277-292
- 小林哲夫・江崎真美子(1996)桜島火山の噴火史。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, no. 7, 70-81
- 小林哲夫・福池俊彦(2002)桜島火山の噴火史と火山災害の歴史。第四紀研究, 41, 269-278
- 成尾英仁(1986)開聞岳と遺跡。集人文化研究, No. 18, 1-14
- 成尾英仁・小林哲夫(1984)池田カルデラ形成時の降下堆積物。火山, 第2集, 29, 148
- 成尾英仁・小林哲夫(2002)鬼界カルデラ, 6.5kaBP噴火に誘発された2度の巨大地震。第四紀研究, 41, 287-299

- 成尾英仁・中摩浩太郎・渡部徹也・鎌田洋昭・西牟田瑛子・松崎大嗣(2019)開聞岳の貞観十六年噴火(AD874)噴火災害と当時の人の対応。第四紀研究, 58, 211-228
- Shitaka, Y., Moriwaki, H., Akai, F., Nakamura, N., Miyoshi, M., Yamamoto, J. (2016) Eruption Age of Sakurajima-Satsuna Tephra Using Thermoluminescence Dating. 地球環境研究, 18, 29-35
- 奥野 充(2002)南九州に分布する最近3万年間のテフラの年代学的研究。第四紀研究, 41, 225-236

第3節 自然科学分析

1 春日堀遺跡出土試料の自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

春日堀遺跡(志布志市有明町蓬原)で、古墳時代の焼失住居から出土した炭化物に関して、放射性炭素年代測定、樹種同定、種実同定を行い、遺構の時代観や用材、植物利用に関する情報を得る。また、土壌の植物珪酸体分析や微粒炭分析を行い、屋根材に関する情報を得る。

(1) 放射性炭素年代測定

① 試料

試料は、古墳時代の焼失住居及び中世の土坑墓から出土した炭化物15点である。内訳は、土器附着炭化物が4点、炭化材が3点、種実遺体が8点である。炭化材と土器附着炭化物は樹種同定や種実同定と重複する。試料の詳細は結果と共に表に示す。

② 分析方法

土器附着炭化物は、炭化物4点を分析用試料とする。炭化材は、試料を観察し、できるだけ外側で、かつ保存状態の良い場所を選んで3～4年輪分の試料を採取する。種実試料は、同定済み試料の中から、遺構や種類、大きさを考慮して試料を選択し、分析に用いる。試料は、塩酸(HCl)により炭酸塩や酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸やアルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩や酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA: Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lである。脆弱な試料は、アルカリの濃度を薄めて処理する(Aaと記載)。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、14Cの計数、13C濃度(13C/12C)、14C濃度(14C/12C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。δ13Cは試料炭素の13C濃度(13C/12C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用

する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一枚目まで表した値も記す。暦年較正に用いる較正曲線はIntcal13(Reimer et al., 2013)である。

③ 結果

結果を表1, 2に示す。一部の炭化物は試料が脆弱なため炭素の損耗を防ぐために、アルカリの濃度を薄くしている。同位体補正を行った測定値は、No.1(竪穴建物跡9号(SA25)30炭化材 クスギ節)が1885 ± 20BP, No.2(竪穴建物跡9号(SA25)出土土器附着炭化物)が1910 ± 20BP, No.3(竪穴建物跡8号(SA34)57炭化材 アワフキ属)が1840 ± 20BP, No.4(竪穴建物跡1号(SA20)出土土器附着炭化物)が2190 ± 20BP, No.5(竪穴建物跡5号(SA36)12炭化材 アカガシ垂属)が1835 ± 20BP, No.6(竪穴建物跡5号(SA36)出土土器附着炭化物)が1905 ± 20BP, No.7(竪穴建物跡5号(SA36)No.1 マメ科)が1915 ± 20BP, No.8(竪穴建物跡5号(SA36)No.1 コナラ属)が1905 ± 20BP, No.9(竪穴建物跡15号(SA35)No.2 コナラ属)が1905 ± 20BP, No.10(竪穴建物跡5号(SA36)No.1 クリ?)が1945 ± 20BP, No.11(竪穴建物跡16号(SA32)No.4 オニグルミ)が1355 ± 20BP, No.12(竪穴建物跡16号(SA32)No.5 イネ?)が1310 ± 20BP, No.13(竪穴建物跡15号(SA35)No.3 クリ)が1955 ± 20BP, No.14(竪穴建物跡8号(SA34)No.6 クリ?)が1880 ± 20BP, No.15(土坑墓1号(SD2)出土銅土器附着炭化物)が1050 ± 20BPである。

暦年較正は、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、その後訂正された半減期(°Cの半減期5730 ± 40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正曲線を用いて暦年較正を行う方法は、交点法や確率法があるが、現在では確率法を用いるのが一般的である。確率法は数学的な統計処理を用い、詳細に確率分布を求める手法であるため、専用のソフトウェアを使うのが普通である。現在主流となっているものに、Oxcal4.3(Bronk, 2009)とCalib7.1がある。Oxcalはベイズ推定を用いたモンテカルロシミュレーションで値を求めている。ウイグルマッチングなど各種シミュレーションを行うことができるのが特徴だが、その分パラメーターが多く、使用にあたっては慣れが必要である。Calib7.1は数理統計学的手法を用いて値を求めており、Oxcalに比べて簡便である。いずれも極値(無限に計算し続けられれば)は同じ値

表1 放射性炭素年代測定結果(1)

No.	注記など	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	δ 13C (‰)	暦年較正年代						Code No.				
					年代値						確率%				
					σ	cal AD	83	- cal AD	120	1868				- 1820	cal BP
1	壁穴建物跡9号 SA25 30 炭化材 ヲナギ節	AAA (1M)	1885 ± 20 (1885 ± 20)	-31.32 ± 0.21	σ	cal AD	83	- cal AD	120	1868	- 1820	cal BP	68.2	YU-10185	pai-12273
					2σ	cal AD	67	- cal AD	176	1883	- 1775	cal BP	90.8		
					2σ	cal AD	191	- cal AD	211	1759	- 1739	cal BP	4.6		
2	壁穴建物跡9号 SA25 出土土器付着炭化物 (掲載番号276)	AAA (1M)	1910 ± 20 (1912 ± 20)	-29.86 ± 0.22	σ	cal AD	69	- cal AD	90	1881	- 1860	cal BP	33.5	YU-10186	pai-12274
					2σ	cal AD	100	- cal AD	123	1851	- 1827	cal BP	34.7		
					2σ	cal AD	53	- cal AD	131	1898	- 1820	cal BP	95.4		
3	壁穴建物跡8号 SA34 57 炭化材 アフギキ属	AAA (1M)	1840 ± 20 (1839 ± 20)	-32.23 ± 0.25	σ	cal AD	134	- cal AD	179	1816	- 1771	cal BP	42.8	YU-10187	pai-12275
					2σ	cal AD	167	- cal AD	213	1764	- 1737	cal BP	25.4		
					2σ	cal AD	126	- cal AD	238	1825	- 1713	cal BP	95.4		
4	壁穴建物跡1号 SA20 出土土器付着炭化物 (掲載番号26)	AaA (0.1M)	2190 ± 20 (2190 ± 20)	-27.11 ± 0.23	σ	cal BC	353	- cal BC	293	2302	- 2242	cal BP	49.6	YU-10188	pai-12276
					2σ	cal BC	230	- cal BC	202	2179	- 2151	cal BP	18.6		
					2σ	cal BC	262	- cal BC	193	2211	- 2142	cal BP	34.7		
5	壁穴建物跡5号 SA36 12 炭化材 アカガシ属	AAA (1M)	1835 ± 20 (1837 ± 20)	-30.44 ± 0.24	σ	cal AD	135	- cal AD	179	1816	- 1771	cal BP	42.6	YU-10189	pai-12277
					2σ	cal AD	187	- cal AD	213	1764	- 1737	cal BP	25.6		
					2σ	cal AD	127	- cal AD	237	1823	- 1714	cal BP	95.4		
6	壁穴建物跡5号 SA36 出土土器付着炭化物	AaA (0.0001M)	1905 ± 20 (1905 ± 21)	-25.14 ± 0.26	σ	cal AD	75	- cal AD	125	1875	- 1825	cal BP	68.2	YU-10190	pai-12278
					2σ	cal AD	32	- cal AD	37	1918	- 1914	cal BP	0.5		
					2σ	cal AD	52	- cal AD	135	1899	- 1816	cal BP	94.9		
7	壁穴建物跡5号 SA36 No.1 マメ科	AaA (0.0001M)	1915 ± 20 (1913 ± 20)	-27.37 ± 0.21	σ	cal AD	68	- cal AD	90	1882	- 1860	cal BP	34.6	YU-10191	pai-12279
					2σ	cal AD	100	- cal AD	123	1851	- 1827	cal BP	33.6		
					2σ	cal AD	52	- cal AD	130	1898	- 1820	cal BP	95.4		
8	壁穴建物跡5号 SA36 No. コナラ属	AaA (0.009M)	1905 ± 20 (1907 ± 20)	-24.79 ± 0.28	σ	cal AD	74	- cal AD	92	1877	- 1859	cal BP	28.2	YU-10192	pai-12280
					2σ	cal AD	98	- cal AD	124	1852	- 1826	cal BP	40.0		
					2σ	cal AD	55	- cal AD	133	1896	- 1818	cal BP	95.4		
9	壁穴建物跡15号 SA35 No.2 コナラ属	AAA (1M)	1905 ± 20 (1906 ± 20)	-22.06 ± 0.25	σ	cal AD	75	- cal AD	92	1876	- 1859	cal BP	27.4	YU-10193	pai-12281
					2σ	cal AD	99	- cal AD	124	1852	- 1826	cal BP	40.8		
					2σ	cal AD	55	- cal AD	133	1896	- 1817	cal BP	95.4		
10	壁穴建物跡5号 SA36 No.1 クリ?	AaA (0.0001M)	1945 ± 20 (1945 ± 21)	-25.34 ± 0.30	σ	cal AD	28	- cal AD	79	1925	- 1872	cal BP	68.2	YU-10194	pai-12282
					2σ	cal AD	5	- cal AD	89	1946	- 1861	cal BP	88.4		
					2σ	cal AD	101	- cal AD	123	1849	- 1828	cal BP	7.0		
11	壁穴建物跡16号 SA32 No.4 オニグルミ	AaA (0.0001M)	1355 ± 20 (1357 ± 20)	-21.41 ± 0.21	σ	cal AD	652	- cal AD	669	1299	- 1281	cal BP	68.2	YU-10195	pai-12283
					2σ	cal AD	645	- cal AD	682	1305	- 1269	cal BP	95.4		
					σ	cal AD	665	- cal AD	690	1286	- 1260	cal BP	53.3		
12	壁穴建物跡16号 SA32 No.5 イネ?	AAA (1M)	1310 ± 20 (1311 ± 20)	-28.12 ± 0.34	σ	cal AD	750	- cal AD	761	1200	- 1190	cal BP	14.9	YU-10196	pai-12284
					2σ	cal AD	660	- cal AD	715	1290	- 1235	cal BP	72.0		
					2σ	cal AD	743	- cal AD	766	1207	- 1185	cal BP	23.4		
13	壁穴建物跡15号 SA35 No.3 クリ	AAA (1M)	1955 ± 20 (1954 ± 20)	-26.26 ± 0.23	σ	cal AD	25	- cal AD	71	1925	- 1880	cal BP	68.2	YU-10197	pai-12285
					2σ	cal AD	1	- cal AD	86	1950	- 1864	cal BP	93.7		
					2σ	cal AD	107	- cal AD	118	1844	- 1822	cal BP	1.7		
14	壁穴建物跡8号 SA34 No.6 クリ?	AaA (0.0001M)	1880 ± 20 (1881 ± 20)	-26.40 ± 0.24	σ	cal AD	82	- cal AD	133	1869	- 1818	cal BP	68.2	YU-10198	pai-12286
					2σ	cal AD	71	- cal AD	214	1880	- 1737	cal BP	95.4		
					σ	cal AD	988	- cal AD	1016	962	- 935	cal BP	68.2		
15	土坑墓1号 SD2 出土土器 土器付着炭化物 (掲載番号391)	AaA (0.05M)	1050 ± 20 (1051 ± 20)	-22.55 ± 0.31	σ	cal AD	908	- cal AD	913	1043	- 1027	cal BP	1.2	YU-10199	pai-12287
					2σ	cal AD	968	- cal AD	1024	982	- 926	cal BP	94.2		
					σ	cal AD	968	- cal AD	1024	982	- 926	cal BP	94.2		

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基準として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。

4) AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaAは試料が脆弱なため、アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。

5) 暦年の計算には、Oxcal v4.3.2を使用。

6) 暦年の計算には、1桁目まで示した年代値を使用。

7) 校正データベースは、Intcal13を使用。

8) 校正曲線や校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

9) 統計的に真の値が入る確率は、σが68.2%、2σが95.4%である。

表 1 放射性炭素年代測定結果 (2)

No.	注記など	方法	補正年代 (暦年校正用) BP	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年校正年代				Code No.	
					年代値					確率%
					σ	cal AD	cal AD	cal AD		
1	壱穴遺物群9号 SA25 30 炭化材 クヌギ葉	AAA (IM)	1885 ± 20 (1885 ± 20)	-31.32 ± 0.21	σ	cal AD 84 - cal AD 129	1821 - 1886	calBP	100.0	YU-10185 pa1-12273
					2σ	cal AD 68 - cal AD 175	1739 - 1759	calBP	95.4	
						cal AD 191 - cal AD 211	1775 - 1882	calBP	4.6	
2	壱穴遺物群9号 SA25 出土土器片炭化物 (掲載番号276)	AAA (IM)	1910 ± 20 (1912 ± 20)	-29.96 ± 0.22	σ	cal AD 69 - cal AD 90	1827 - 1850	calBP	48.0	YU-10186 pa1-12274
					2σ	cal AD 100 - cal AD 123	1800 - 1881	calBP	52.0	
						cal AD 53 - cal AD 130	1820 - 1897	calBP	100.0	
3	壱穴遺物群9号 SA34 57 炭化材 アワブキ葉	AAA (IM)	1840 ± 20 (1839 ± 20)	-32.23 ± 0.25	σ	cal AD 133 - cal AD 178	1737 - 1762	calBP	63.5	YU-10187 pa1-12275
					2σ	cal AD 168 - cal AD 213	1772 - 1817	calBP	36.5	
						cal AD 126 - cal AD 237	1713 - 1824	calBP	100.0	
4	壱穴遺物群1号 SA20 出土土器片炭化物 (掲載番号26)	AaA (0.1M)	2190 ± 20 (2190 ± 20)	-27.11 ± 0.23	σ	cal BC 353 - cal BC 294	2151 - 2162	calBP	73.8	YU-10188 pa1-12276
					2σ	cal BC 229 - cal BC 219	2168 - 2178	calBP	12.6	
						cal BC 213 - cal BC 202	2243 - 2302	calBP	13.6	
5	壱穴遺物群5号 SA36 12 炭化材 アカガシ葉	AAA (IM)	1835 ± 20 (1837 ± 20)	-30.44 ± 0.24	σ	cal AD 124 - cal AD 178	1737 - 1762	calBP	62.6	YU-10189 pa1-12277
					2σ	cal AD 168 - cal AD 213	1772 - 1816	calBP	37.4	
						cal AD 128 - cal AD 236	1714 - 1822	calBP	100.0	
6	壱穴遺物群5号 SA36 出土土器片炭化物	AaA (0.0001M)	1905 ± 20 (1905 ± 21)	-25.14 ± 0.26	σ	cal AD 75 - cal AD 92	1826 - 1852	calBP	38.9	YU-10190 pa1-12278
					2σ	cal AD 98 - cal AD 124	1858 - 1875	calBP	61.1	
						cal AD 33 - cal AD 36	1816 - 1896	calBP	0.2	
7	壱穴遺物群5号 SA36 No.1 マメ科	AaA (0.0001M)	1915 ± 20 (1913 ± 20)	-27.37 ± 0.21	σ	cal AD 68 - cal AD 90	1827 - 1850	calBP	50.5	YU-10191 pa1-12279
					2σ	cal AD 100 - cal AD 123	1800 - 1882	calBP	48.5	
						cal AD 53 - cal AD 130	1820 - 1897	calBP	100.0	
8	壱穴遺物群5号 SA36 No.1 コナラ葉	AaA (0.005M)	1905 ± 20 (1907 ± 20)	-24.79 ± 0.28	σ	cal AD 74 - cal AD 91	1826 - 1852	calBP	42.4	YU-10192 pa1-12280
					2σ	cal AD 98 - cal AD 124	1859 - 1876	calBP	57.6	
						cal AD 55 - cal AD 131	1819 - 1895	calBP	100.0	
9	壱穴遺物群15号 SA35 No.2 コナラ葉	AAA (IM)	1905 ± 20 (1906 ± 20)	-22.08 ± 0.25	σ	cal AD 75 - cal AD 91	1826 - 1852	calBP	40.0	YU-10193 pa1-12281
					2σ	cal AD 98 - cal AD 124	1859 - 1875	calBP	60.0	
						cal AD 55 - cal AD 132	1818 - 1895	calBP	100.0	
10	壱穴遺物群5号 SA36 No.1 クリ?	AaA (0.0001M)	1945 ± 20 (1945 ± 21)	-25.34 ± 0.30	σ	cal AD 27 - cal AD 41	1873 - 1902	calBP	27.1	YU-10194 pa1-12282
					2σ	cal AD 48 - cal AD 77	1909 - 1923	calBP	72.9	
						cal AD 5 - cal AD 88	1828 - 1849	calBP	93.0	
11	壱穴遺物群16号 SA32 No.4 オニグルミ	AaA (0.0001M)	1355 ± 20 (1357 ± 20)	-21.41 ± 0.21	σ	cal AD 653 - cal AD 667	1283 - 1297	calBP	100.0	YU-10195 pa1-12283
					2σ	cal AD 646 - cal AD 690	1270 - 1304	calBP	100.0	
						cal AD 664 - cal AD 691	1189 - 1201	calBP	76.9	
12	壱穴遺物群16号 SA32 No.5 イネ?	AAA (IM)	1310 ± 20 (1311 ± 20)	-28.12 ± 0.34	σ	cal AD 749 - cal AD 761	1259 - 1286	calBP	23.1	YU-10196 pa1-12284
					2σ	cal AD 659 - cal AD 717	1184 - 1207	calBP	75.9	
						cal AD 743 - cal AD 766	1233 - 1291	calBP	24.1	
13	壱穴遺物群15号 SA35 No.3 クリ	AAA (IM)	1965 ± 20 (1964 ± 20)	-26.36 ± 0.23	σ	cal AD 25 - cal AD 70	1880 - 1925	calBP	100.0	YU-10187 pa1-12285
					2σ	cal AD 17 - cal AD 15	1831 - 1844	calBP	0.1	
						cal AD 0 - cal AD 86	1864 - 1950	calBP	96.0	
14	壱穴遺物群8号 SA34 No.6 クリ?	AaA (0.0001M)	1880 ± 20 (1881 ± 20)	-26.40 ± 0.24	σ	cal AD 82 - cal AD 132	1818 - 1866	calBP	100.0	YU-10196 pa1-12286
					2σ	cal AD 71 - cal AD 178	1738 - 1762	calBP	92.7	
						cal AD 188 - cal AD 212	1772 - 1879	calBP	7.3	
15	土坑墓1号 S02 出土土器片炭化物 (掲載番号591)	AaA (0.05M)	1050 ± 20 (1051 ± 20)	-22.55 ± 0.31	σ	cal AD 988 - cal AD 1015	935 - 962	calBP	100.0	YU-10199 pa1-12287
					2σ	cal AD 908 - cal AD 913	927 - 982	calBP	1.1	
						cal AD 968 - cal AD 1023	1037 - 1042	calBP	98.9	

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。

4) AAAは、炭・アルカリ・酸処理を示す。AaAは試料が脆弱なため、アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。

5) 暦年の計算には、Calib v7.1を使用。

6) 暦年の計算には、1桁目まで示した年代値を使用。

7) 校正データセットは、Intcal13を使用。

8) 校正曲線や校正プログラムが改正された場合の再計算と比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

9) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、 2σ が95.4%である。

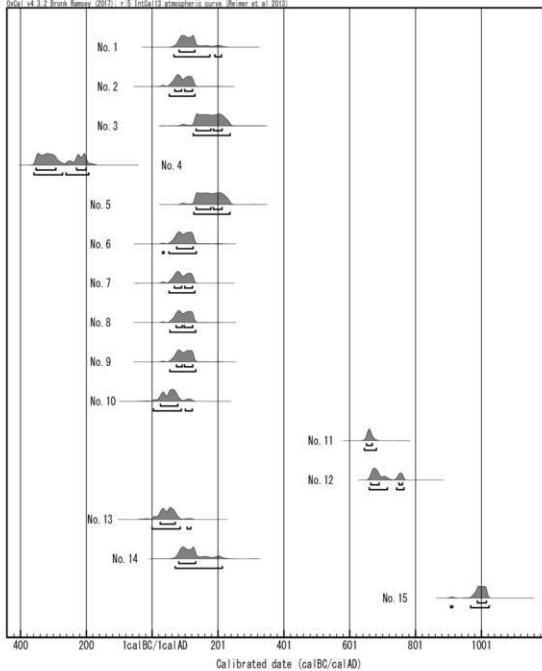


图 1 曆年校正結果

になるが、基本的には必要な精度が得られるまで（有限回の）計算を行う。このため、計算誤差や収束する早さの違い等により、2～3年の違いが生じる。ただし、これらは測定誤差の中に吸収されてしまうため、いずれのソフトウェアで計算を行っても、優劣はない。ただし、較正曲線に関しては最新の較正曲線を用いるのが望ましい（現在はIntcal13）。試しに表1にOxcalの結果を、表2にCalib7.1の値を示すが、2～3年程度のずれしかない。なお、作表や作図の自由度はOxcalの方が高いので、今回の作図はOxcalで行っている（Calibでは11点以上の結果をまとめて作図できない）。Oxcalで行った2σの較正年代は、No.1（堅穴建物跡9号（SA25）30）炭化材 クヌギ節がcalAD67～211, No.2（堅穴建物跡9号（SA25））出土土器付着炭化物 calAD53～131, No.3（堅穴建物跡8号（SA34）57）炭化材 アワビキ属 calAD126～238, No.4（堅穴建物跡1号（SA20））出土土器付着炭化物 calBC360～193, No.5（堅穴建物跡5号（SA36）12炭化材 アカガシ亜属 calAD127～237, No.6（堅穴建物跡5号（SA36））出土土器付着炭化物 calAD32～135, No.7（堅穴建物跡5号（SA36））No.1 マメ科 calAD52～130, No.8（堅穴建物跡5号（SA36））No.1 コナラ属 calAD55～133, No.9（堅穴建物跡15号（SA35））No.2 コナラ属 calAD55～133, No.10（堅穴建物跡5号（SA36））No.1 クリ calAD5～123, No.11（堅穴建物跡16号（SA32））No.4 オニグルミ calAD645～682, No.12（堅穴建物跡16号（SA32））No.5 イネ calAD660～766, No.13（堅穴建物跡15号（SA35））No.3 クリ calAD1～118, No.14（堅穴建物跡8号（SA34））No.6 クリ calAD71～214, No.15（土坑墓1号（SD2）出土土器付着炭化物 calAD908～1024）である。

(2) 炭化材同定

① 試料

試料は、古墳時代の埴住居から出土した炭化物32点である。試料の詳細は結果表とともに表に示す。

② 分析方法

剃刀を用いて木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の各切片を作成し、双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡で観察する。木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にし、また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にし、

③ 結果

結果を表3に示す。炭化材は、針葉樹1種類（ヒノキ科）、広葉樹7種類（コナラ亜属コナラ節、コナラ亜属クスギ節、アカガシ亜属、スダジイ、タブノキ属、カツラ、アワビキ属）、ヤシ類？が検出される。以下に検出された試料の解剖学的所見を述べる。

・ヒノキ科（*Cupressaceae*）

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。分野穿孔はヒノキ型だが、あて材等で変形している部分も多い。放射組織は単列、1～6細胞高。
・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus subgen.*

Quercus sect. Prinus）ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔孔。壁孔は交互状に配列。放射組織は同性、単列、1～20細胞高程度のもので複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属クスギ節（*Quercus subgen.*

Quercus sect. Cerris）ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものとして複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*）

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものとして、複合放射組織とがある。

・スジダイ（*Castanopsis cuspidata var. sieboldii*

（*Makino*）*Nakai*）ブナ科シイ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1～2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。

・タブノキ属（*Persea*）クスノキ科

散孔材で管壁は厚く、横断面では楕円形、単独および2-3個が放射方向に複合する。道管は単穿孔孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周囲状、翼状、散在状。
・カツラ（*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.）カツラ科カツラ属

散孔材で、管孔はほぼ単独で散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔孔を有する。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～30細胞高。

表3 樹種同定結果

試料番号	遺構名	試料名	備考	種類
1	竪穴建物跡9号	SA25 ㉓	炭化材 (棒状)	コナラ亜属クスギ節
2	竪穴建物跡9号	SA25 ㉔	炭化材 (丸太材)	コナラ亜属クスギ節
3	竪穴建物跡9号	SA25 ㉕	炭化材 (角材)	コナラ亜属クスギ節
4	竪穴建物跡9号	SA25 ㉖	炭化材 (丸太材)	コナラ亜属クスギ節
5	竪穴建物跡6号	SA11 ㉑	炭化材 (板材)	タブノキ属
6	竪穴建物跡6号	SA11 ㉒	炭化材 (板材)	タブノキ属
7	竪穴建物跡6号	SA11 ㉓	炭化材 (角材)	アワブキ属
8	竪穴建物跡6号	SA11 ㉔	炭化材 (板材)	タブノキ属
9	竪穴建物跡6号	SA11 ㉕	炭化材 (板材)	タブノキ属
10	竪穴建物跡6号	SA11 ㉖	炭化材 (角材)	タブノキ属
11	竪穴建物跡6号	SA11 ㉗	炭化材 (角材)	タブノキ属
12	竪穴建物跡8号	SA34 ㉑	炭化材	ヒノキ科
13	竪穴建物跡8号	SA34 ㉒	炭化材	アワブキ属
14	竪穴建物跡8号	SA34 ㉓	炭化材 (板材)	スダジイ
15	竪穴建物跡8号	SA34 ㉔	炭化材 (棒状)	スダジイ
16	竪穴建物跡8号	SA34 ㉕	炭化材 (棒状)	スダジイ
17	竪穴建物跡8号	SA34 ㉖	炭化材 (棒状)	タブノキ属
18	竪穴建物跡8号	SA34-57	炭化材 (角材)	アワブキ属
19	竪穴建物跡8号	SA34-58	炭化材 (枝状)	ヤシ類?
20	竪穴建物跡8号	SA34-66	炭化材 (枝状)	アワブキ属
21	竪穴建物跡8号	SA34-93	炭化材 (板材)	コナラ亜属コナラ節
22	竪穴建物跡5号	SA36 ㉑	炭化材 (棒状)	アカガシ亜属
23	竪穴建物跡5号	SA36 ㉒	炭化材 (板材)	アカガシ亜属
24	竪穴建物跡5号	SA36 ㉓	炭化材 (棒状)	アワブキ属
25	竪穴建物跡5号	SA36 ㉔	炭化材 (板材)	アワブキ属
26	竪穴建物跡5号	SA36-55	炭化材 (丸太材)	タブノキ属
27	竪穴建物跡5号	SA36-57	炭化材 (板材)	カツラ
28	竪穴建物跡5号	SA36-71	炭化材	タブノキ属
29	竪穴建物跡5号	SA36-75	炭化材 (板材)	タブノキ属
30	竪穴建物跡5号	SA36-76	炭化材 (板材)	アワブキ属
31	竪穴建物跡5号	SA36-83	炭化材 (丸太材)	タブノキ属
32	竪穴建物跡5号	SA36-79	炭化材 (丸太材)	アワブキ属

・アワブキ属 (*Meliosma*) アワブキ科

散孔材で、管孔は単独または2~4個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は大型の異性、1~3細胞幅、細胞高は2mm近くに達するものもある。
・ヤシ類?

道管と師部組織の周囲を繊維細胞が囲んで維管束鞘を作る。維管束鞘が基本組織中に散在する不斉中心柱である。木部の道管配列や繊維細胞の形状からみてタケ亜科ではない。このような組織は、ヤシ科のほか、ソテツやタコノキ科など複数の科にまたがるため、ヤシ類とした。

④ 考察

検出される種類をみると、常緑広葉樹ならびにそれを含む分類群(アカガシ亜属、スダジイ、タブノキ属、アワブキ属)の個体数が多い。これらは暖地において安定した森林を構成する要素(いわゆる照葉樹林)で、現在の周辺においても自然度の高い場所に多く生育している種類である。また、落葉広葉樹であるコナラ亜属コナラ節、コナラ亜属クスギ節、カツラは、沢沿いや人里近くに明るい林地を作る種類である。いずれも遺跡周辺で入手しやすい種類であったと思われる。伊東隆夫・山田昌久編(2012)の出土木製品用材データベースをみると、県内の古墳時代における炭化材の出土例は少ないが、縄文時代~古代に範囲を広げてみると、常緑広葉樹主体で、ナラ類などの落葉樹を伴う傾向にあり、今回の結果は調和的である。検出された樹種は、カツラとアワブキ属を除けば、重堅~中庸で、大木になることから住居の構造材としての利用が可能である。カツラは空隙(道管)が多く、軽軟なため、構造材として使われることは少ないが、加工が容易なため器具材として使われることがある。アワブキ属は小径木が多く、狂いやすいことから構造材としては不適であることから、粗朶など構造に関係ない部分や、燃料材としての利用が考えられる。

(3) 種実同定

① 試料

試料は、堅穴建物跡10号(SA3)(試料番号11~13)、堅穴建物跡4号(SA4)(試料番号14~16)、堅穴建物跡17号(SA5)(試料番号17~19)、堅穴建物跡18号(SA6)(試料番号8~10)、堅穴建物跡19号(SA7)(試料番号26~28)、堅穴建物跡13号(SA8)(試料番号23~25)、堅穴建物跡3号(SA9)(試料番号20~22)、堅穴建物跡16号(SA32)(試料番号4・5)、堅穴建物跡8号(SA34)(試料番号6・7)、堅穴建物跡15号(SA35)(試料番号2・3)、堅穴建物跡5号(SA36)

(試料番号1)の、計11遺構の覆土水洗篩別回収物28点63袋である。試料は全て乾燥した状態で、7点(試料番号1~7)は粒径別(2mm, 1mm, 0.5mm)、21点(試料番号8~28)は浮沈別(LF, HF)に袋に入っている。なお、水洗篩別は公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター(以下、埋文調査センター)がウォーターフローテーション法で実施している。

各試料の詳細は、結果と共に表4, 5に示す。炭化種実同定は、全試料を対象に実施するほか、骨片の確認抽出も併せて実施する。

② 分析方法

各試料の重量を測定後、双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定可能な炭化種実を抽出する。その他、骨片の確認抽出も併せて実施する。ただし、試料番号1~7の7点21袋は、試料表面に多くの砂泥が付着するため、埋文調査センターと協議後、粒径別試料をまとめて再水洗し、乾燥後に抽出を実施する。炭化種実の同定は、現生標本および岡本(1979)、石川(1994)、中山ほか(2010)、鈴木ほか(2012)等を参考に実施する。次に、保存状態が良好な炭化種実を対象として、デジタルノギスを用いて大きさを計測する。

同定結果は、個数と重量、最大径を一覧表で示し、写真を添付して同定根拠とする。炭化種実以外の分析残渣は、定性的な量比をプラス「+」で表示する。

分析後は、堅穴建物跡16号(SA32)のオニグルミ(試料番号4)、イネ(試料番号5)、堅穴建物跡8号(SA34)のクリ?(試料番号6)、堅穴建物跡15号(SA35)のコナラ属(試料番号2)、クリ(試料番号3)、堅穴建物跡5号(SA36)のマメ科(試料番号1)、コナラ属(試料番号1)を年代測定に供する。その他の炭化種実は分類群別に容器に入れ、分析残渣は袋に戻して返却する。

③ 結果

結果を表4、炭化種実出土状況を表5に示す。分析に供された23遺構45試料を通じて、木本5分類群(広葉樹のオニグルミ、アカガシ亜属、コナラ属、クリ、ブナ科)314個1.52g、草本3分類群(イネ、イネ科、マメ科)46個0.10g、合計360個1.62gの炭化種実が同定された。307個0.89gは微細片のため同定ができなかったが、堅穴建物跡5号(SA36)の1個はイチジク属の果実に似ており、260個0.83gは堅果類と考えられる。炭化種実以外に、炭化材、菌類の菌核、砂礫類、炭化していない種実や植物片の他、土器片が堅穴建物跡15号(SA35)より2個確認された。なお、骨片は確認されなかった。

炭化種実の遺構別出土個数(不明を除く)は、堅穴

建物跡 16号 (SA32) が46個, 堅穴建物跡 8号 (SA34) が19個, 堅穴建物跡 15号 (SA35) が262個, 堅穴建物跡 5号 (SA36) が33個である。堅穴建物跡 15号 (SA35) が最も多いが, 分析試料量も最も多いことが反映されている。一方, 堅穴建物跡 10号 (SA3), 堅穴建物跡 4号 (SA4), 堅穴建物跡 17号 (SA5), 堅穴建物跡 18号 (SA6), 堅穴建物跡 19号 (SA7), 堅穴建物跡 13号 (SA8), 堅穴建物跡 3号 (SA9) は, 炭化種実が確認されなかった。栽培種は, イネの玄米 (胚乳) が堅穴建物跡 16号 (SA32) から35個, 堅穴建物跡 15号 (SA35) から1個, 堅穴建物跡 5号 (SA36) から1個の, 計37個が確認された。栽培種を除いた分類群は, 木本は全て堅果類から成り, 落葉高木のオニグルミの核が1個, 堅穴建物跡 16号 (SA32), 常緑高木のアカガシ亜属の果実が1個, 堅穴建物跡 15号 (SA35), 常緑または落葉高木のコナラ属 (クヌギ節以外) の果実が3個, 堅穴建物跡 15号 (SA35), 子葉が5個, 堅穴建物跡 15号 (SA35), 堅穴建物跡 5号 (SA36), コナラ属の果実が2個, 堅穴建物跡 15号 (SA35), ブナ科 (コナラ属?) の子葉が91個, 堅穴建物跡 8号 (SA34), 堅穴建物跡 15号 (SA35), 落葉高木のクリの果実が2個, 堅穴建物跡 8号 (SA34), 子葉が7個, 堅穴建物跡 15号 (SA35), クリ? の果実が12個, 堅穴建物跡 8号 (SA34), 堅穴建物跡 15号 (SA35), 堅穴建物跡 5号 (SA36), 子葉が11個, 堅穴建物跡 15号 (SA35), 常緑または落葉高木のブナ科の果実が177個 (堅穴建物跡 16号 (SA32), 堅穴建物跡 8号 (SA34), 堅穴建物跡 15号 (SA35), 堅穴建物跡 5号 (SA36) の, 計314個) が確認された。草本は, 中生植物のイネ科の穎果が1個, 堅穴建物跡 8号 (SA34), マメ科の種子が8個, 堅穴建物跡 16号 (SA32) の, 計9個が確認された。炭化種実には全て黒色を呈し, 保存状態は概ね不良である。以下, 各分類群の形態的特徴等を記す。

・オニグルミ *calAD645 (Juglans mandshurica Maxim. var. sachalinensis (Miyabe et Kudo) Kitamura)* クルミ科クルミ属

核は, 完形ならば径3~4cmの広卵形で頂部が尖り, 1本の明瞭な縦の縫合線がある。核は硬く緻密で, 維管束の痕跡である縦網状の彫紋があり, ごつごつしている。内部には子葉が入る2つの大きな窪みと隔壁がある。出土核は破片で残存径は4.5mm。

・アカガシ亜属 (*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*) ブナ科コナラ属

果実は, 完形ならば長さ1.0~1.3cm, 径0.7~0.8cmの楕円体。出土果実は頂部の花柱基部で, 残存径2.0mm程度。殻斗の圧痕である輪状紋がみられる。花柱頂端の柱頭を欠損するため, アカガシ亜属までの同定にとどめているが, 細身であることからイチイガシ (*Q.*

gilva Blume) に似る。

・コナラ属 (*Quercus*) ブナ科

果実基部は切形で, 果皮とは別組織の着点がある。着点は径4.8~5.45mmの円形を呈し, 表面は粗面で維管束の穴が輪状に並ぶ。果皮は厚さ0.2mm程度で, 表面には浅く微細な溝が縦列し, 断面は櫛状を呈す (図版番号5, 6)。コナラ亜属クヌギ節 (*Q. subgen. Quercus sect. Cerris*) とは区別され, 上記アカガシ亜属やコナラ節コナラ (*Q. serrata* Thunb. ex Murray) であると考えられる。

子葉は合わせ目に沿って割れた半分未満の破片で, 残存長1.1cm, 残存幅0.8cm, 半厚0.5cm程度。表面には維管束の圧痕の浅い縦溝がみられ, 半割面は平滑で, 正中線はやや窪み, 頂部には長径1.5mm程度の孔 (主根) がある。果実同様, イチイガシを含むアカガシ亜属やコナラに由来すると考えられるが, 著しい異形性や離れにくさ等のイチイガシの特異性 (岡本, 1979) を顕著に示す子葉が確認されなかったため, コナラ属までの同定にとどめている。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

果実, 子葉は三角状広卵形で頂部は尖り, 基部は切形, 一側面は偏平で反対面は丸みがある。果皮は厚さ0.5mm程度で, 表面はやや平滑でコナラ属よりも浅い微細な縦溝がある。果皮内面は粗面で粗い縦紋 (種皮) がある。基部全面を占める着点は別組織で, 粗く不規則な粒状紋様があり, 果皮との接線は波打つ。出土果実は基部の破片で, 残存径3.4mm。なお, クヌギとの厳密な区別が困難な破片には, 疑問符を付している。果実内に1個入る子葉は, コナラ属よりも硬く緻密で, 表面には種皮 (渋皮) の圧痕の縦溝が粗く波打つ。2枚からなる子葉の合わせ目の線に沿って割れた面は平滑で, 正中線はやや窪み, 頂部には小さな孔 (主根) がある。出土子葉は残存長8.7mm。

・ブナ科 (*Fagaceae*)

上述のアカガシ亜属やコナラ属, クリの同定に至らない果実や子葉の微細片をブナ科としている。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

玄米 (炭化米) はやや偏平な長楕円体で, 基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で, 2~3本の縦隆条がある。堅穴建物跡 16号 (SA32) 出土炭化米の計測値と粒大 (長さ×幅)・粒形 (長さ/幅) (佐藤, 1988) は, 長さは4.07mm, 幅2.01mm, 厚さ1.31mmで極小型 (8.18), 長粒 (2.02) と, 長さ4.23mm, 幅2.00mm, 厚さ1.47mmで極小型 (8.46)・短粒 (1.69) である。

・イネ科 (*Gramineae*)

穎果は長さ1.17, 幅0.53mm, 厚さ0.2mm程度の半

楕円体。背面は丸みがあり腹面は平ら。背面基部正中線上に長さ0.3mmの馬蹄形の胚の窪みがある。維管束のヒエヤアワ、キビとは区別され、野生種と考えられる。

・マメ科 (Leguminosae)

種子は長さ1.82mm、幅1.33mmの扁平な広楕円体、腹面の中心からやや基部より長径0.2mmの広楕円形の臍がある。種皮表面は平滑で、焼き膨れている個体が多い。栽培の可能性のあるダイズ属やアズキ亜属とは区別され、野生種と考えられる。低木または多年草のハギ属 (Lespedeza) に似る。

④ 考察

古墳時代の焼失住居の覆土水洗篩別試料を対象とした炭化種実同定の結果、堅穴建物跡16号 (SA32)、堅穴建物跡8号 (SA34)、堅穴建物跡15号 (SA35)、堅穴建物跡5号 (SA36) から、広葉樹6分類群 (オニグルミ、アカガシ亜属、コナラ属、クリ、ブナ科)、草本3分類群 (イネ、イネ科、マメ科) の炭化種実が同定された。

栽培種は、イネ (炭化米) が堅穴建物跡16号 (SA32)、堅穴建物跡15号 (SA35)、堅穴建物跡5号 (SA36) から確認され、堅穴建物跡15号 (SA35) 出土炭化米は、短粒・極小型と長粒・極小型に分類された。イネは当時利用された植物質食料と示唆される。

栽培種を除いた分類群は、木本・堅果類主体の組成を示す。木本は全て広葉樹で、オニグルミは河畔林要素の落葉高木、ブナ科のコナラ属アカガシ亜属は暖地の山中に生育する常緑高木、クリは丘陵や山地などに生育する二次林要素の落葉高木である。草本のイネ科、マメ科は、明るく開けた場所に生育する人里植物である。これらは、遺跡周辺の森林や調査区周辺の草地に生育していたと考えられる。

多く確認されたブナ科コナラ属をはじめ、アカガシ亜属、クリ、オニグルミなどの堅果類は、子葉が食用可能で遺跡出土例も多い (渡辺, 1975; 岡本, 1979; 小畑 2006:2011)。遺跡周辺の森林より住居内に持ち込まれた植物質食料やその残滓と考えられる。

(4) 微粒炭分析

① 試料

試料は、樹種同定試料の試料番号14 (堅穴建物跡8号の (SA34㊟)), 試料番号30 (堅穴建物跡5号の (SA36-76)) に付着していた土壌2点と、比較試料として供されたII層の、計3点である。

② 分析方法

試料10ccを正確に秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛、比重2.2) による有

機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス (無水酢酸9、濃硫酸1の混合液) 処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉 (1973)、中村 (1980) 等を参考にする。

また、花粉プレパラート中に含まれる微粒炭 (微細な炭化植物片) の含量が、自然植生に対する人間干渉の指標として有効であるとされていることから (安田, 1987 など)、試料中に含まれる微粒炭の含量も求める。微粒炭は花粉プレパラート内に残存するものを対象とし、同定基準は山野井 (1996)、井上ほか (2002) 等を参考にし、計数は、山野井 (1996) などを参考にし、長径が約20 μ m以上の微粒炭を対象とし、それ以下のものは除外する。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。微粒炭量は、山野井 (1996) などを参考にし、分析土壌量 (cc)、分析残渣量 (ml)、プレパラート作成量 (μ l) を測定し、堆積物1ccあたりに含まれる個数を一覧表・図に併せて示す。

③ 結果

結果を表6に示す。いずれの試料からも花粉化石やシダ類胞子はほとんど検出されず、堆積物1ccあたりの花粉・胞子数はすべて100個未満であった。わずかに認められた種類は、木本花粉のスギ属、コナラ属コナラ亜属、草本花粉のキク亜科などである。

微粒炭量は、試料番号14で約7,400個/cc、試料番号30で約23,000個/cc、II層で約29,200個/ccである。

④ 考察

炭化材に付着していた土壌2点 (試料番号14, 30)、および比較試料のII層のいずれからも、花粉化石はほとんど検出されなかった。このことから、堆積時に花粉やシダ類胞子が取り込まれにくかったことや、堆積後の経年変化により分解・消滅した可能性などが想定される。一方、微粒炭についてみると、堅穴建物跡8号 (A34㊟) (試料番号14) が約7,400個/cc、堅穴建物跡5号 (SA36-76) (試料番号30) で約23,000個/cc、比較試料のII層で約29,200個/ccであった。土壌中に含まれる微粒炭は、人間活動と密接に関係していることが知られており、その変化は人為活動の変化を反映している場合が多く認められる (例えば安田, 1987; 山野井, 1996; 井上ほか, 2002)。微粒炭含量は、堅穴建物跡5号の (SA36-76) とII層はほぼ同等の値を示すが、堅穴建物跡8号の (SA34㊟) はそれらと比較すると少ない。ただし、今回の場合は、微粒炭の給源となり得る炭化材が検出されていること

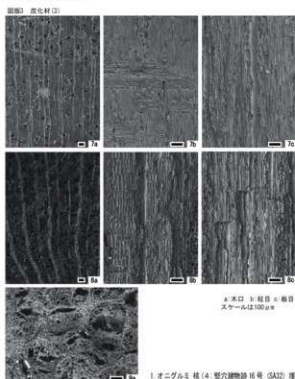
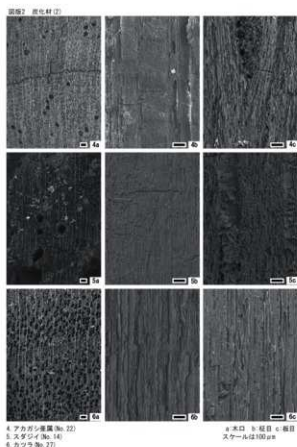
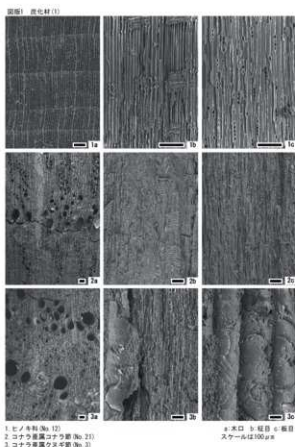


表6 微粒炭分析結果

種 類	樹種同定試料		
	縦穴建物跡 8号 SA34 ②	縦穴建物跡 5号 SA36-76	比較試料 Ⅱ層
木本花粉			
スギ属	1	-	-
コナラ属コナラ亜属	1	-	-
草本花粉			
キク亜科	-	-	1
シダ類胞子			
イノモトソウ属	-	-	1
他のシダ類胞子	-	1	-
合 計			
木本花粉	2	0	0
草本花粉	0	0	1
シダ類胞子	0	1	1
合計	2	1	2
微粒炭数 (個/cc)	7400	23000	29200
花粉・胞子数 (個/cc)	<100	<100	<100

1) 微粒炭数、花粉・胞子数については、10の位を四捨五入して100単位に丸めている。

2) <100: 100 個未満。

表7 植物珪酸体分析結果

地点・試料	検出密度 (単位: ×100 個/g)		
	No.14 縦穴建物跡 8号 SA34 ②	No.30 縦穴建物跡 5号 SA36-76	Ⅱ層 比較試料
分類群			
イネ科			
イネ	3	5	-
シバ属型	-	5	-
キビ族型	-	-	5
ススキ属型	82	38	60
ウシクサ族A	87	75	65
タケ亜科			
メダケ節型	27	21	45
ネザサ節型	300	300	259
チマキザサ節型	16	16	25
未分類等	120	129	110
その他のイネ科			
表皮毛起源	5	11	15
棒状珪酸体	131	129	120
未分類等	207	188	175
樹木起源			
クスノキ科	-	5	-
イスノキ属	-	-	5
その他	-	11	15
植物珪酸体総数	978	933	898

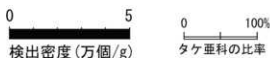
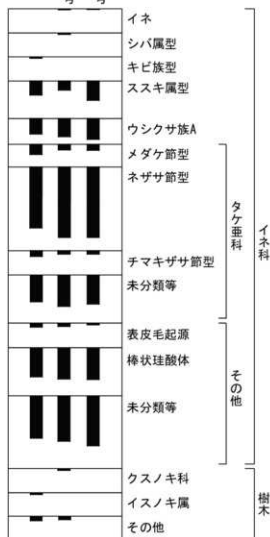
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg / m² · cm)

イネ	0.08	0.16	-
ススキ属型	1.01	0.47	0.74
メダケ節型	0.32	0.25	0.52
ネザサ節型	1.44	1.44	1.24
チマキザサ節型	0.12	0.12	0.19

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	17	14	27
ネザサ節型	77	80	64
チマキザサ節型	7	7	10
メダケ率	93	93	90

Ⅱ層
No. 30
No. 14
S A 36
S A 34
縦穴建物跡 76号
縦穴建物跡 5号
比較試料
Ⅱ層



や、分析点数が少ないことから、人間活動との関係を単純に導き出すことは難しい。

(5) 植物珪酸体分析

① 試料

試料は、樹種同定試料の試料番号14(堅穴建物跡8号の(SA34②)), 試料番号30(堅穴建物跡5号の(SA36-76))に付着していた土壌2点と、比較試料として供されたII層の、計3点である。

② 分析方法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行った。

- ・試料を105°Cで24時間乾燥(絶乾)
- ・試料約1gに対し直径約40 μ mのガラスビーズを約0.02g添加(0.1mgの精度で秤量)
- ・電気炉灰化法(550°C・6時間)による脱有機物処理
- ・超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散
- ・沈底法による20 μ m以下の微粒子除去
- ・封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と、各植物の換算係数(機細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

③ 結果

堅穴建物跡8号(SA34-27)試料番号14と、堅穴建物跡5号(SA36-76)(試料番号30)では、ネザサ節型が30,000個/gと多量に検出され、ススキ属型、ウシクサ族Aも比較的多く検出された。また、イネ、メダケ節型、チマキザサ節型なども検出され、試料番号30ではシバ属型、および樹木(照葉樹)のクスノキ科も認められた。イネの密度は300個/gおよび500個/gと低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/g(杉山, 2000)を下回っ

ている。II層(比較試料)でも、おおむね同様の結果であるが、キビ族型、マンサク科(イソノキ属)が認められ、イネは検出されなかった。おもな分類群の推定生産量によると、各試料ともネザサ節型が優勢であり、ススキ属型も比較的多くなっている。

④ 考察

古墳時代の遺跡周辺は、メダケ属(おもにネザサ節)などのタケ亜科をはじめ、ススキ属やウシクサ族(チガヤ属など)、シバ属なども生育する草原的な環境であったと考えられ、部分的にクスノキ科、イソノキ属などの樹木(照葉樹)も見られたと推定される。ススキ属やウシクサ族などのイネ科植物は、日当りの悪い林床では生育が困難であり、これらの草原が維持されるためには定期的な刈り取りや火入れ(焼き払い)が必要とされている(堀田, 1991; 近藤, 1995)。このことから、当時は何らかの目的で火入れなど人間による植生干渉が行われていた可能性が考えられる。また、このような草原的な植生環境下で土壌中に多量の有機物が供給され、炭素含量の高い黒色土壌(黒ボク土)が形成されたと考えられる(杉山ほか, 2002)。なお、堅穴建物跡8号で出土した試料番号14(SA34-27)と、堅穴建物跡5号で出土した試料番号30(SA36-76)では、少量ながらイネが検出されることから、これらの遺構では何らかの形で稲藁が利用されていた可能性が考えられる。稲藁の利用としては、建物の屋根材や壁材、敷き藁、藁製品(俵、縄、ムシロ、草履など)、燃料など多様な用途が想定される。また、ススキ属、ウシクサ族、ネザサ節についても、何らかの形で利用されていた可能性が考えられるが、II層(比較試料)との間に、明瞭な差異が認められないことから確定的なこととは言えない。

引用文献

- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51, 337-360.
- 藤原宏志, 1976, フラント・オパール分析法の基礎的研究(1) 一般イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法 - 考古学と自然科学, 9, 15-29.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 堀田 満, 1991, 日本列島の植物. カラー自然ガイドII, 保育社, 68-69.
- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 井上 淳・吉川周作・千々和一豊, 2002, 琵琶湖周辺域に分布する黒ボク土中の黒色木片について. 日本第四紀学会講演要旨集, 32, 74-75.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載I: 木材研究・

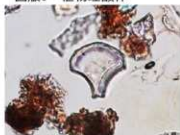
- 資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース, 海青社, 449p.
- 近藤鏡三, 1995, 日本における植物珪酸体研究とその応用, 近畿拓弘教授退官記念論文集刊行会, 31-56.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2010, 日本植物種子図鑑(2010年改訂版), 東北大学出版会, 678p.
- 中村 純, 1980, 日本産花粉の標識 I II (図版), 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12, 13巻, 91p.
- 小畑弘己, 2006, 九州縄文時代の聚果類とその利用—東北アジアの古民族植物学的視点より—, 九州縄文時代の低湿地遺跡と植物性自然遺物, 第16回九州縄文研究会大分大会発表主旨・資料集, 31-40.
- 小畑弘己, 2008, マメ科種子同定法, 『植東先史古代の雑穀3』, 日本学術振興会平成16～19年度科学研究費補助金(基盤B-2)(課題番号16320110), 『雑穀資料からみた植東地域における農耕受容と拡散過程の実証的研究』研究成果報告書, 小畑弘己編, 熊本大学埋蔵文化財調査室, 225-252.
- 小畑弘己, 2011, 東北アジア古民族植物学と縄文農耕, 同成社, 309p.
- 岡本善治, 1979, 遺跡から出土するイチイガシ, 大阪市立自然史博物館業績, 第230号, 31-39.
- Reimer P.J., Bard E., Bayliss A., Beck J.W., Blackwell P.G., Bronk R.C., Buck CE., Cheng H., Edwards R.L., Friedrich M., Grootes P.M., Guilderson T.P., Hafflidson H., Hajdas I., Hatté C., Heaton T.J., Hoffmann D.L., Hogg A.G., Hughen K.A., Kaiser K.F., Kromer B., Manning S.W., Niu M., Reimer R.W., Richards D.A., Scott E.M., Southon J.R., Staff R.A., Turney C.S.M., van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon, 55, 1869-1887.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 佐藤敏也, 1988, 弥生のイネ, 弥生文化の研究2生業, 金岡 烈・佐原 真福, 雄山閣, 97-111.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.
- 島倉巳三郎, 1973, 日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.
- Stuiver M., & Polach A.H., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data, Radiocarbon, 19, 355-363.
- 杉山真二・藤原宏志, 1986, 機動細胞珪酸体の形態によるタク亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—, 考古学と自然科学, 19, 69-84.
- 杉山真二, 1999, 植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史, 第四紀研究, 38, 109-123.
- 杉山真二, 2000, 植物珪酸体(プラント・オパール), 考古学と植物学, 同成社, 189-213.
- 杉山真二・渡邊眞紀子・山元希里, 2002, 最終氷期以降の九州南部における黒ボク土発達史, 第四紀研究, 41, 361-373.
- 杉山真二, 2009, 植物珪酸体と古生態, 人と植物の関わりあい④大地と森の中で—縄文時代の古生態系—, 縄文の考古学Ⅲ, 小杉康ほか編, 同成社, 105-114.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文, 2012, ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実—形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種—, 誠文堂新光社, 272p.
- 渡辺 誠, 1975, 縄文時代の植物食, 雄山閣出版, 187p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
- 山野井 徹, 1996, 黒土の成因に関する地質学的検討, 地質学雑誌, 102, 526-544.
- 安田喜憲, 1987, 文明は緑を食べる, 読売新聞社, 227p.

図版5 炭化種実(2)



19. イネ 五実 (5: 惣穴練物跡 16号 (SA32) 伊勢廻り方サンプル)
 20. イネ 五実 (5: 惣穴練物跡 16号 (SA32) 伊勢廻り方サンプル)
 21. イネ 五実 (5: 惣穴練物跡 16号 (SA32) 伊勢廻り方サンプル)
 22. イネ 五実 (4: 惣穴練物跡 16号 (SA32) 埋土サンプル (伊
 23. イネ 五実 (5: 惣穴練物跡 16号 (SA32) 伊勢廻り方サンプル)
 24. イネ 五実 (2: 惣穴練物跡 15号 (SA35) 埋土サンプル (仮2))
 25. イネ 五実 (1: 惣穴練物跡 6号 (SA36) 焼土)
 26. イネ科 雑草 (6: 惣穴練物跡 8号 (SA34) 内焼土 (仮2))
 27. マメ科 種子 (1: 惣穴練物跡 6号 (SA36) 焼土)
 28. マメ科 種子 (1: 惣穴練物跡 6号 (SA36) 焼土)

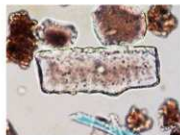
図版6 植物珪酸体



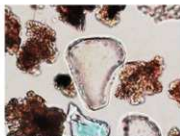
イネ (No. 14)



イネ (No. 30)



キビ族型 (II層)



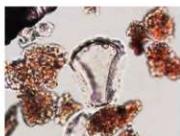
ススキ属型 (No. 30)



ススキ属型 (No. 14)



ウシクサ族A (II層)



メダケ節型 (No. 30)



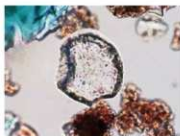
メダケ節型 (II層)



ネザサ節型 (No. 30)



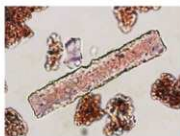
ネザサ節型 (II層)



チマキザサ節型 (No. 30)



表皮毛起源 (No. 30)



棒状珪酸体 (II層)



クスノキ科 (No. 30)



イスノキ属 (II層)

50 μm

2 春日堀遺跡出土炭化材の年代測定と樹種同定

パリオ・サーヴェイ株式会社

(1) はじめに

志布志市有明町に所在する春日堀遺跡は、豊田川右岸に広がるシラス台地上に位置する。調査区の位置する台地上面の標高は約30mである。

本報告では、遺跡から採取された炭化材の年代に関する資料と木材利用を検討する資料を得るため、年代測定と樹種同定を実施した。その結果について報告する。

(2) 試料

試料は、炭化材8点で、竪穴建物跡6号のSA011-C008, SA011-C012, SA011-C015, 竪穴建物跡8号のSA034-013, SA034-020, SA034-063, 竪穴建物跡5号のSA036-026, SA036-059の番号が付されていた。

(3) 分析方法

① 放射性炭素年代測定

分析試料はAMS法で実施する。試料表面の汚れをメス、ピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。塩酸や水酸化ナトリウムを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する(酸-アルカリ酸処理:AAA)。なお、通常は水酸化ナトリウム水溶液の濃度を上げていき、最終的に1M濃度で処理を実施するが、試料が脆弱で必要な炭素を得られなくなる可能性がある場合、水酸化ナトリウム溶液の濃度が薄い段階で処理を停止する。濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と記載する。その後、試料を燃焼させてCO₂を発生させる。

真空ラインで不純物(水など)を取り除き、CO₂を精製する。これを鉄を触媒として水素で還元し、グラファイトを生成させる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした¹³C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、¹³Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料、バックグラウンド試料の測定も行う。

δ¹³Cは試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での報告に従う(Stuiver and Polach, 1977)。また、暦年較正用の一桁目まで表した値も記す。測定年代の表示方法は、国際学会での報告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用の一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、Oxcal4.3 (Bronk, 2009)、較正曲

線はIntcal13 (Reimer et al., 2013)である。

② 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・柾目(接線断面)の3断面の割断面を製作し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995, 1998, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

(4) 結果

① 放射性炭素年代測定

結果を表1, 図1に示す。試料の測定年代(補正年代)は竪穴建物跡6号のSA011-C008が2095 ± 20 yr BP, SA011-C012が1820 ± 20 yrBP, SA011-C015が1830 ± 20 yrBP, 竪穴建物跡8号のSA034-013が1845 ± 20 yrBP, 竪穴建物跡8号SA034-020が1825 ± 20 yrBP, SA034-063が1810 ± 20 yrBP, 竪穴建物跡5号のSA036-026が1825 ± 20 yrBP, SA036-059が1800 ± 20 yrBPの値を示す。

暦年較正は、大気中の¹³C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹³C濃度の変動、及び半減期の違い(¹³Cの半減期5,730 ± 40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。測定誤差2σの暦年代は竪穴建物跡6号のSA011-C008がcalBC 176 ~ 51, SA011-C012がcalAD131 ~ 244, SA011-C015がcalAD130 ~ 238, 竪穴建物跡8号のSA034-013がcalAD88 ~ 235, SA034-020がcalAD131 ~ 239, calSA034-063がcalAD131 ~ 311, 竪穴建物跡5号のSA036-026がcalAD131 ~ 239, SA036-059がcalAD133 ~ 321である。

② 樹種同定

結果を表2に示す。検出された樹種はアカガシ亜属1点、ニッケイ属7点でともに常緑広葉樹である。以下に検出された種類の特徴について述べる。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*)

放射孔材で、管壁厚は中庸~厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列で1~15細胞高のもの、複合放射組織とある。

・ニッケイ属 (*Cinnamomum*)

散孔材で、道管径は比較的大径、管壁は薄く、横断面では楕円形、単独または2~3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ型、1~3細胞幅、1~20細胞高。

(5) 考察

放射性炭素年代測定を実施した炭化材の測定結果をみると、竪穴建物跡6号のSA011-C008が補正年代で2095±20BP、暦年代で紀元前2世紀頃を示した。これは弥生時代中期に相当する。一方他の7試料についてはほぼ同じ値を示し、補正年代が1800～1845BP、暦年代は2世紀～3世紀であることから、弥生時代後期に相当する。

樹種同定試料は、検出された樹種はアカガシ亜属1点、ニッケイ属7点でともに常緑広葉樹である。鹿児島県では自然度の高い植生において普通にみられる種類であり、周囲で容易に入手できた樹種を利用していたと考えられる。伊東・山田編(2012)の木材データベースから検索すると、弥生時代では上野原遺跡で検出された炭化材のなかにクスノキ科が多く同定されている。一方、アカガシ亜属も炭化材ではないが、弥生時代の木製品での利用が確認されている。

引用文献

- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51, 337-360.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.

伊東隆夫・山田昌久(編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 449p.

Reimer P.J., Bard E., Bayliss A., Beck J.W., Blackwell P.G., Bronk R.C., Buck C.E., Cheng H., Edwards R.L., Friedrich M., Grootes P.M., Guilderson T.P., Halldason H., Halden L., Hatté C., Heaton T.J., Hoffmann D.L., Hogg A.G., Hughen K.A., Kaiser K.F., Kromer B., Manning S.W., Niu M., Reimer R.W., Richards D.A., Scott E.M., Southon J.R., Staff R.A., Turney C.S.M., van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. *Radiocarbon*, 55, 1869-1887.

Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.

(編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

高地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.

Stuiver, M., and Polach, H. A., 1977, Discussion Reporting of 14C Data. *Radiocarbon*, 19, 355-363.

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

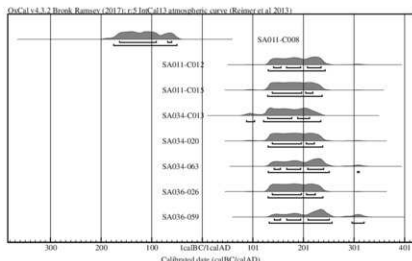


図1 暦年較正結果

表1 放射性炭素年代測定結果

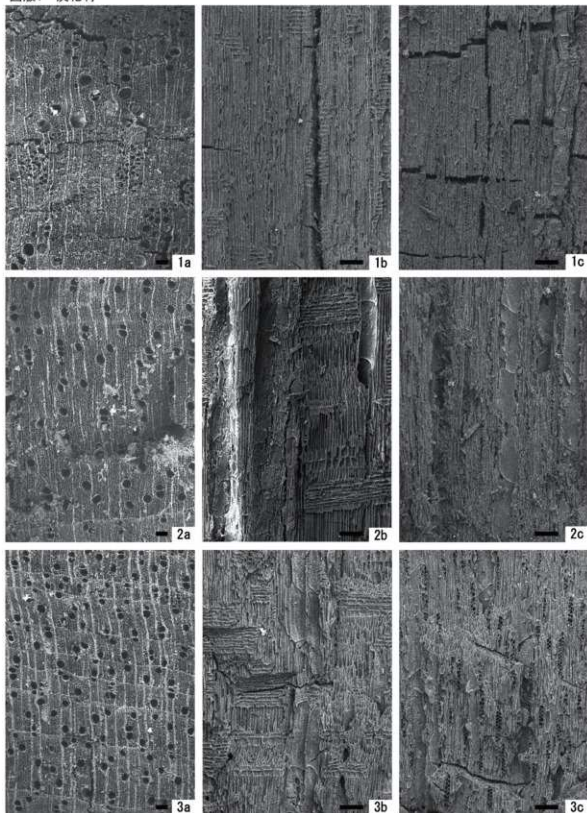
試料	方法	校正年代 (周年校正用) BP	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年校正年代																Code No.																																																																															
				年代値														確率 %																																																																																	
				σ	cal	BC	164	-	cal	BC	92	2113	-	2041	cal	BP	62.5	2σ	cal			BC	69	-	cal	BC	61	2018	-	2010	cal	BP	5.7	cal	BC	176	-	cal	BC	51	2125	-	2000	cal	BP	95.4																																																					
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基準として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した数字は、測定誤差 σ (測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 4) AAAは、炭・アルカリ・無処理を示す。AAAは試料が無炭のため、アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。
- 5) 暦年の計算には、Ocal v4.3.2を使用。
- 6) 暦年の計算には、1桁目まで示した年代値を使用。
- 7) 校正データベースは、Intcal13を使用。
- 8) 校正曲線や校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 9) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、 2σ が95.4%である。

表2 樹種同定結果

試料番号	試料名	形状	年輪	種類
1	掘立柱建物跡6号 SA011-C008	ミカン割り	12+年輪	ニッケイ属
2	掘立柱建物跡6号 SA011-C012	ミカン割り	28+年輪	ニッケイ属
3	掘立柱建物跡6号 SA011-C015	ミカン割り	10+年輪	ニッケイ属
4	掘立柱建物跡8号 SA034-013	ミカン割り	5+年輪	ニッケイ属
5	掘立柱建物跡8号 SA034-020	半割	20+年輪	スダジイ
6	掘立柱建物跡8号 SA034-063	ミカン割り	6+年輪	ニッケイ属
7	掘立柱建物跡5号 SA036-026	ミカン割り	5+年輪	ニッケイ属
8	掘立柱建物跡5号 SA036-059	ミカン割り	48+年輪	ニッケイ属

図版1 炭化材



- 1 スダジイ (No. 5)
- 2 ニッケイ属 (No. 7)
- 3 ニッケイ属 (No. 8)

a 木口 b 柱目 c 板目
スケールは100 μ m

3 春日堀遺跡出土炭化材の樹種同定

小林克也 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

鹿児島県志布志市の春日堀遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている(放射性炭素年代測定の項参照)。

(2) 試料と方法

試料は、堅穴建物跡跡 3～9号(SA004, SA009, SA011, SA012, SA025, SA034, SA036), SA039, SD50から出土した炭化材、計11点である。時期については放射性炭素年代測定の結果、弥生時代後期～古墳時代前期前半におさまるの層年代を、試料No.5は縄文時代早期前葉に相当する層年代を示した。

樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柎目)について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製 VE-9800)にて検鏡および写真撮影を行った。

(3) 結果

同定の結果、広葉樹のクスノキ科とアワブキ属、コナラ属アカガシ亜属(以下、アカガシ亜属)、コナラ属クスギ節(以下、クスギ節)、サカキの5分類群がみられた。アワブキ属が4点で最も多く、クスギ節が3点、クスノキ科が2点、アカガシ亜属とサカキが各1点であった。同定結果を表1に、一覧を表2に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

① クスノキ科 Lauraceae 図版 1 1a-1c (No.2)

小型の道管が単独ないし2～3個複合し、やや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、幅1～2列となる。木部繊維内には、油細胞が認められる。

クスノキ科にはニッケイ属やタブノキ属、クロモジ属などがあり、暖帯を中心に分布する。主に常緑性の高木または低木である。

② アワブキ属 Meliosma アワブキ科 図版 1 2a-2c (No.1), 3a (No.11)

小型の道管が単独ないし2～3個放射方向に複合し、やや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は10～20段程度の階段穿孔を有する。放射組織は直立、方形、平伏細胞が混在する異性で、幅1～4列となる。

アワブキ属にはアワブキやミヤマハハソなどがあり、代表的なアワブキは本州、四国、九州の山地に生育する落葉高木の広葉樹である。重さや硬さは中庸である。

③ コナラ属アカガシ亜属 Quercus subgen.

Cyclobalanopsis ブナ科 図版 1 4a-4c (No.9)

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強靱で、耐水性があり、切削加工は困難である。

④ コナラ属クスギ節 Quercus sect. Aegilops ブナ科 図版 1 5a-5c (No.3)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では急に径を減じた厚壁で丸い道管が、放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クスギ節にはクスギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

⑤ サカキ Cleyera japonica Thunb. モッコク科 図版 1 6a-6c (No.7)

小型の道管がほぼ単独で、やや密に散在する散孔材である。道管は20～40段程度の階段穿孔となる。放射組織は上下端1～4列が直立する異性で、単列となる。

サカキは日本海側で新潟県、太平洋側で関東以西の本州、四国、九州などの温帯から亜熱帯に分布する常緑高木である。材は強靱、堅硬で、切削加工は困難である。

(4) 考察

堅穴住居跡から出土した炭化材は、クスノキ科とアワブキ属、アカガシ亜属、クスギ節、サカキであった。試料は、焼けた建築材や燃料材の残渣の可能性が考えられる。アカガシ亜属とクスギ節、サカキは堅硬な樹種であり、クスノキ科とアワブキ属の硬さは中庸である。また、いずれの樹種も薪炭材として利用される樹種である(平井, 1996; 伊東ほか, 2011)。鹿児島県域で確認されている弥生時代後期～古墳時代前期の建築材および炭化材では、クスノキ科とアカガシ亜属が

みられる（伊東・山田編，2012）。また，今回確認された樹種は鹿児島県域で生育可能な樹種であり（平井，1996；伊東ほか，2011），遺跡周辺に生育していた樹木が伐採利用された可能性が考えられる。

引用文献

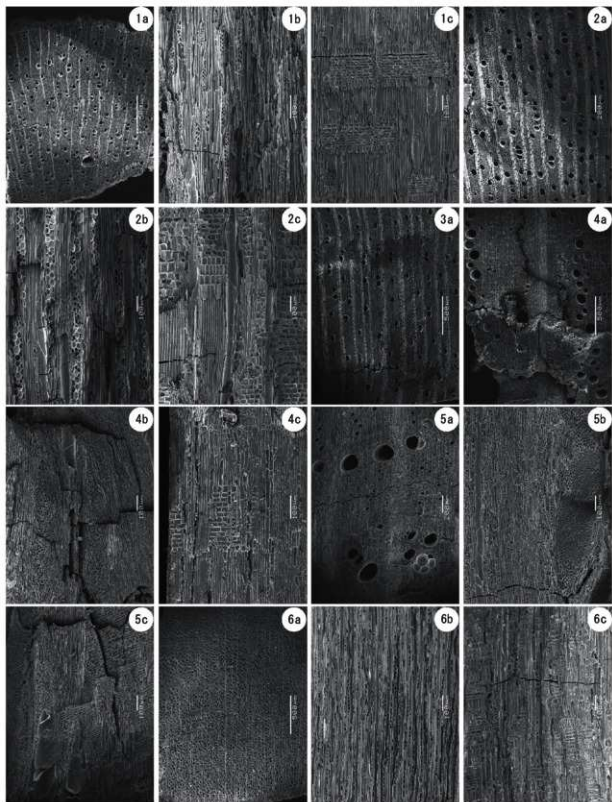
- 平井信二（1996）木の百科一解説編一，642p，朝倉書房。
 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，海青社。
 伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学—出土木製品用材データベース—，449p，海青社。

表 1 春日堀遺跡出土炭化材の樹種同定結果

樹種 / 遺構	堅穴建物跡 4号 SA004	堅穴建物跡 3号 SA009	堅穴建物跡 6号 SA011	堅穴建物跡 7号 SA012	堅穴建物跡 9号 SA025	堅穴建物跡 8号 SA034	堅穴建物跡 5号 SA036	SA039	SD50	合計
クスノキ科		1		1						2
アワブキ属				1		1	1		1	4
コナラ属アカガシ亜属			1							1
コナラ属クスギ節					2			1		3
サカキ	1									1
合計	1	1	1	2	2	1	1	1	1	11

表 2 春日堀遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試料No.	出土遺構	遺物番号	種類	樹種	年代測定番号
1	堅穴建物跡7号 (SA012) II c 層	C001	炭化材	アワブキ属	PLD-37804
2	堅穴建物跡7号 (SA012) ㊷ D-41	C002	炭化材	クスノキ科	PLD-37805
3	堅穴建物跡9号 (SA025) ㊸ 上層	001	炭化材	コナラ属クスギ節	PLD-37806
4	堅穴建物跡9号 (SA025) 床上	011	炭化材	コナラ属クスギ節	PLD-37807
5	SD50 F-9	2	炭化材	アワブキ属	PLD-37808
6	SA039 ㊹ F-26	58757	炭化材	コナラ属クスギ節	PLD-37809
7	堅穴建物跡4号 (SA004) ㊺ E-35	165	炭化材	サカキ	PLD-37810
8	堅穴建物跡3号 (SA009) ㊻ F-26	C003	炭化材	クスノキ科	PLD-37811
9	堅穴建物跡6号 (SA011) 層なし 炭5	C005	炭化材	コナラ属アカガシ亜属	PLD-37812
10	堅穴建物跡8号 (SA034) B・C-34	037	炭化材	アワブキ属	PLD-37813
11	堅穴建物跡5号 (SA036) 床直	018	炭化材	アワブキ属	PLD-37814



図版1 春日堀遺跡出土炭化材の走査型顕微鏡写真

1a-1c. クスノキ科 (No. 2), 2a-2c. アワブキ属 (No. 1), 3a. アワブキ属 (No. 11), 4a-4c. コナラ属アカガシ亜属 (No. 9),
5a-5c. コナラ属クスギ節 (No. 3), 6a-6c. サカキ (No. 7)

a: 横断面, b: 接線断面, c: 放射断面

4 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・
Zaur Lomtatidze・辻康男

(1) はじめに

鹿児島県志布志市の春日堀遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 1 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS; NEC 製、1.SSDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

(3) 結果

表 2 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って、暦年代に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、図 1 ~ 3 に暦年代較正結果をそれぞれ示す。暦年代較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年代較正曲線が更新された際に、この年代値を用いて暦年代較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、暦年代較正の詳細は以下のとおりである。

暦年代較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年代較正には OxCal4.3 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年代較正曲線を示す。

(4) 考察

^{14}C 年代 (^{14}C yr) は、1750 ~ 1900 年前頃、7000 年前頃、8300 ~ 8900 年前頃、9100 ~ 9200 年前頃の 4 つのグループに区分される。このうち、1750 ~ 1900 年前頃の暦年代を示した試料の 2σ 暦年代範囲は、森岡ほか (2016) を参照すると、試料 No. 4 (PLD-37807)、試料 No. 6 (PLD-37809)、試料 No. 7 (PLD-37810)、試料 No. 8 (PLD-37811)、試料 No. 9 (PLD-37812) が弥生時代後期前半 ~ 弥生時代後期終末期ないし古墳時代前期初頃、試料 No. 3 (PLD-37806)、試料 No. 10 (PLD-37813)、試料 No. 11 (PLD-37814) が弥生時代後期後半 ~ 弥生時代後期終末期ないし古墳時代前期初頃、試料 No. 1 (PLD-37804) と試料 No. 2 (PLD-37805) が弥生時代後期後半 ~ 古墳時代前期前半に相当する。

上記以外の試料の 2σ 暦年代範囲は、工藤 (2012)、小林 (2017) を参照すると、試料 No. 5 (PLD-37808) と試料 No. 14 (PLD-37817) が縄文時代早期前葉、試料 No. 13 (PLD-37816)、試料 No. 15 (PLD-37818)、試料 No. 16 (PLD-37819)、試料 No. 17 (PLD-37820)、試料 No. 19 (PLD-37822)、試料 No. 21 (PLD-37824) が縄文時代早期前葉 ~ 中葉、試料 No. 12 (PLD-37815) と No. 18 (PLD-37821) が縄文時代早期中葉、試料 No. 20 (PLD-37823) が縄文時代早期後葉に相当する。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる (古木効果)。したがって、今回の試料のうち、最終形成年輪が確認できない部位不明の炭化材材の測定結果は、古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果よりも新しい年代であったと考えられる。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337-360.
- 小林謙一 (2017) 縄文時代の実年代—土器型式編年と炭素 14 年代表—。263p、同成社。
- 工藤雄一郎 (2012) 後氷期の考古編年と ^{14}C 年代。工藤雄一郎「旧石器・縄文時代の環境文化史」: 212-229、新泉社。
- 森岡秀人・三好 玄・田中元浩 (2016) 穂括。古代学研究会編「集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化」: 335-398、六一書房。
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20、日本第四紀学会。
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards,

R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haffliadson, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W.,

Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50, 000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4), 1869-1887.

表 1-1 測定試料および処理 (1)

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
FLD-37804	遺構：惣次建物跡 7号 (SA012) 遺物 No. C001 試料 No. 1	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
FLD-37805	調査区：B-41 区 遺構：惣次建物跡 7号 (SA012) 部位：2層 遺物 No. C002 試料 No. 2	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
FLD-37806	遺構：惣次建物跡 9号 (SA025) 部位：2上層 遺物 No. 001 試料 No. 3	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
FLD-37807	遺構：惣次建物跡 9号 (SA025) 部位：床上層 遺物 No. 011 試料 No. 4	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
FLD-37808	遺構：S069 調査区：F-9 区 部位：2層 遺物 No. 2 試料 No. 5	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
FLD-37809	遺構：惣次建物跡 3号 (SA009) 調査区：F-26 区 部位：1層 遺物 No. C005 試料 No. 6	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
FLD-37810	遺構：惣次建物跡 4号 (SA004) 調査区：E-35 区 部位：3層 遺物 No. 165 試料 No. 7	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
FLD-37811	遺構：惣次建物跡 3号 (SA009) 調査区：F-26 区 部位：1層 遺物 No. 003 試料 No. 8	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
FLD-37812	遺構：惣次建物跡 6号 (SA011) 遺物 No. C005 試料 No. 9	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
FLD-37813	遺構：惣次建物跡 8号 (SA034) 遺物 No. 037 試料 No. 10	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
FLD-37814	遺構：惣次建物跡 5号 (SA006) 部位：床下層 遺物 No. 018 試料 No. 11	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
FLD-37815	遺構：S0016 調査区：G-21 区 遺物 No. C188 試料 No. 12	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
FLD-37816	遺構：S0018 調査区：G-27 区 遺物 No. C297 試料 No. 13	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
FLD-37817	遺構：S0022 調査区：E-30 区 部位：埋土層 遺物 No. C110 試料 No. 14	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
FLD-37818	遺構：S0099 調査区：E-27 区 遺物 No. C255 試料 No. 15	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
FLD-37819	遺構：S0026 調査区：E-29 区 部位：埋土層 遺物 No. C280 試料 No. 16	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
FLD-37820	遺構：S0099 調査区：E-27 区 部位：3層 遺物 No. C219 試料 No. 17	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)

表1-2 測定試料および処理(2)

測定番号	遊路データ	試料データ	前処理
FLD-37821	遊路: S8031 調査区: G-32区 遺物 No. C300 試料 No. 18	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸化剤 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
FLD-37822	遊路: S8014 調査区: F-28区 遺物 No. C243 試料 No. 19	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸化剤 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
FLD-37823	遊路: S8016 調査区: G-29区 遺物 No. C261 試料 No. 20	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸化剤 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
FLD-37824	遊路: S8006 調査区: F-26区 遺物 No. C238 試料 No. 21	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸化剤 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

表2 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代を暦年年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年範囲	2 σ 暦年範囲
FLD-37804 試料 No. 1 遺物 No. C001	-28.66 \pm 0.28	1809 \pm 20	1810 \pm 20	143-155 cal AD (3.5%), 168-195 cal AD (23.3%), 209-242 cal AD (35.4%)	132-232 cal AD (94.2%), 306-311 cal AD (1.2%)
FLD-37805 試料 No. 2 遺物 No. C002	-35.01 \pm 0.28	1776 \pm 20	1775 \pm 20	233-258 cal AD (30.8%), 284-322 cal AD (37.4%)	144-150 cal AD (0.5%), 179-191 cal AD (3.2%), 211-335 cal AD (191.7%)
FLD-37806 試料 No. 3 遺物 No. 801	-30.47 \pm 0.36	1834 \pm 20	1835 \pm 20	136-214 cal AD (66.2%)	129-235 cal AD (95.4%)
FLD-37807 試料 No. 4 遺物 No. 011	-31.97 \pm 0.24	1869 \pm 19	1870 \pm 20	84-142 cal AD (53.2%), 156-167 cal AD (6.4%), 195-209 cal AD (8.6%)	80-216 cal AD (95.4%)
FLD-37808 試料 No. 5 遺物 No. 2	-27.11 \pm 0.22	9192 \pm 20	9190 \pm 30	8443-8364 cal BC (66.7%), 8355-8320 cal BC (21.5%)	8532-8517 cal BC (2.9%), 8479-8300 cal BC (92.5%)
FLD-37809 試料 No. 6 遺物 No. C005	-31.56 \pm 0.32	1855 \pm 22	1855 \pm 20	127-214 cal AD (68.2%)	86-229 cal AD (95.4%)
FLD-37810 試料 No. 7 遺物 No. 165	-31.80 \pm 0.25	1876 \pm 20	1875 \pm 20	79-138 cal AD (67.0%), 200-202 cal AD (1.2%)	75-214 cal AD (95.4%)
FLD-37811 試料 No. 8 遺物 No. C003	-27.55 \pm 0.24	1844 \pm 20	1845 \pm 20	132-179 cal AD (43.6%), 187-213 cal AD (34.6%)	91-99 cal AD (1.0%), 124-236 cal AD (93.8%)
FLD-37812 試料 No. 9 遺物 No. C005	-31.80 \pm 0.24	1842 \pm 20	1840 \pm 20	133-179 cal AD (43.3%), 187-213 cal AD (34.9%)	93-97 cal AD (0.7%), 125-237 cal AD (94.7%)
FLD-37813 試料 No. 10 遺物 No. 1057	-29.78 \pm 0.22	1823 \pm 19	1825 \pm 20	149-156 cal AD (15.8%), 167-196 cal AD (29.4%), 208-230 cal AD (23.1%)	132-239 cal AD (95.4%)
FLD-37814 試料 No. 11 遺物 No. 016	-30.25 \pm 0.26	1814 \pm 19	1815 \pm 20	142-156 cal AD (11.4%), 168-195 cal AD (25.4%), 209-238 cal AD (31.4%)	132-246 cal AD (95.4%)
FLD-37815 試料 No. 12 遺物 No. C188	-28.41 \pm 0.23	8457 \pm 27	8455 \pm 25	7567-7561 cal BC (7.3%), 7555-7519 cal BC (60.9%)	7577-7497 cal BC (95.4%)
FLD-37816 試料 No. 13 遺物 No. C297	-24.07 \pm 0.24	8849 \pm 28	8850 \pm 30	8188-8112 cal BC (31.9%), 8090-8075 cal BC (3.9%), 8064-8041 cal BC (6.9%), 8003-7938 cal BC (23.4%), 7889-7879 cal BC (2.1%)	8205-8035 cal BC (50.9%), 8015-7928 cal BC (144.5%)
FLD-37817 試料 No. 14 遺物 No. C310	-27.21 \pm 0.24	9125 \pm 28	9125 \pm 30	8325-8284 cal BC (68.2%)	8430-8368 cal BC (11.4%), 8351-8276 cal BC (83.8%)
FLD-37818 試料 No. 15 遺物 No. C255	-24.93 \pm 0.23	8636 \pm 28	8635 \pm 30	8120-8118 cal BC (19.7%), 7981-7968 cal BC (6.4%), 7903-7832 cal BC (21.9%), 7937-7926 cal BC (3.9%), 7918-7908 cal BC (7.2%), 7868-7856 cal BC (2.9%), 7846-7737 cal BC (53.3%)	8201-8199 cal BC (25.9%), 8093-8038 cal BC (6.1%), 8009-7791 cal BC (161.7%)
FLD-37819 試料 No. 16 遺物 No. C280	-25.59 \pm 0.22	8764 \pm 30	8765 \pm 30	7957-7926 cal BC (3.9%), 7918-7908 cal BC (7.2%), 7868-7856 cal BC (2.9%), 7846-7737 cal BC (53.3%)	7955-7794 cal BC (93.3%), 7899-7661 cal BC (2.1%)
FLD-37820 試料 No. 17 遺物 No. C219	-27.24 \pm 0.25	8839 \pm 28	8840 \pm 30	8171-8115 cal BC (22.0%), 8055-8047 cal BC (1.9%), 7980-7911 cal BC (23.7%), 7901-7835 cal BC (18.6%)	8202-8107 cal BC (28.4%), 8094-8038 cal BC (6.9%), 8011-7795 cal BC (157.6%)
FLD-37821 試料 No. 18 遺物 No. C330	-25.97 \pm 0.23	8328 \pm 27	8330 \pm 25	7466-7356 cal BC (68.2%)	7490-7327 cal BC (95.4%)
FLD-37822 試料 No. 19 遺物 No. C243	-25.85 \pm 0.22	8674 \pm 27	8675 \pm 25	7765-7608 cal BC (4.7%), 7681-7605 cal BC (63.3%)	7734-7599 cal BC (95.4%)
FLD-37823 試料 No. 20 遺物 No. C261	-27.91 \pm 0.27	6963 \pm 28	6965 \pm 30	5889-5803 cal BC (68.2%)	5968-5955 cal BC (2.3%), 5908-5752 cal BC (92.9%)
FLD-37824 試料 No. 21 遺物 No. C238	-27.00 \pm 0.28	8888 \pm 28	8890 \pm 30	8204-8167 cal BC (15.3%), 8125-8035 cal BC (27.1%), 8017-7927 cal BC (15.7%)	8216-7961 cal BC (95.4%)

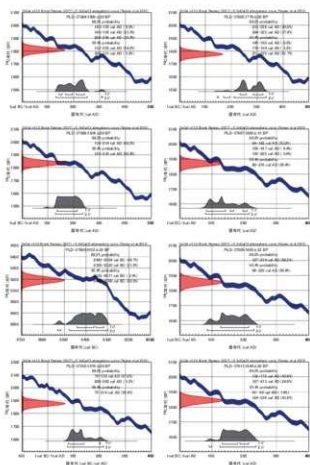


図1 暦年較正結果 (その1)

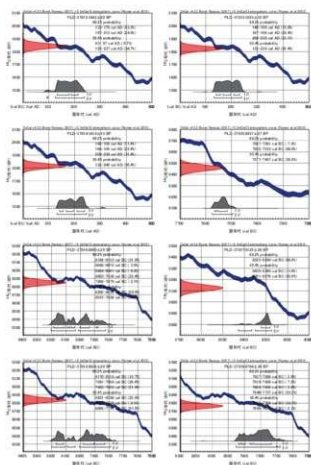


図2 暦年較正結果 (その2)

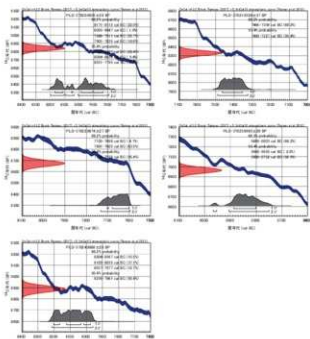


図3 暦年較正結果 (その3)

5 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・
Zaur Lomtadize・辻康男

(1) はじめに

鹿児島県志布志市の春日堀遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 1 のとおりである。

堅穴建物跡 6号 掲載番号 204, 遺物溜り 5号 掲載番号 433, 堅穴建物跡 14号 掲載番号 339 の土器付着炭化物は、炭素含有量が極めて少なく、加速器質量分析計での測定が不可能であった (図 1 に堅穴建物跡 6号 掲載番号 204, 遺物溜り 5号 掲載番号 433, 堅穴建物跡 14号 掲載番号 339 の試料写真を示す)。このため、代替え試料として採取していた、堅穴建物跡 6号 掲載番号 193, 堅穴建物 5号 掲載番号 134, 堅穴建物跡 5号 掲載番号 154 の土器付着炭化物の測定を行った。

年代値が得られた土器付着炭化物の採取状況と炭化材の年代試料を図 2 ~ 6 に示す。土器付着炭化物については、整理作業所にて試料採取を行った。

試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ, コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

(3) 結果

表 2 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$), 同位体分別効果の補正を行って暦年代に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、図 7 ~ 9 に暦年代結果をそれぞれ示す。暦年代に用いた年代値は下 1桁を丸めていない値であり、今後暦年代較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年代較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその 14C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、暦年代の詳細は以下のとおりである。

暦年代とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 \pm 40 年)

を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年代較正には OxCal4.3 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年代較正曲線を示す。

(4) 考察

今回の測定試料は、土器付着炭化物と炭化材片である。これらの試料の暦年代範囲は、600 ~ 760 cal AD 前後, 30 cal BC ~ 250 cal AD 前後, 330 cal BC ~ 80 cal AD 前後, 750 ~ 410 cal BC 前後, 7100 ~ 7600 cal BC 前後の 5 つのグループに区分される。

このうち、600 ~ 760 cal AD 前後のグループは、遺物溜り 10号 掲載番号 446 (PLD-37921)、溝跡 1号 掲載番号 455 (PLD-37928) である。

30 cal BC ~ 250 cal AD 前後のグループは、堅穴建物跡 2号 掲載番号 65 (PLD-37912)、堅穴建物跡 5号 掲載番号 158 (PLD-37913)、堅穴建物跡 6号 掲載番号 189 (PLD-37914)、堅穴建物跡 4号 掲載番号 97 (PLD-37916)、堅穴建物跡 5号 掲載番号 157 (PLD-37917)、堅穴建物跡 5号 掲載番号 153 (PLD-37922)、堅穴建物跡 4号 掲載番号 127 (PLD-37923)、堅穴建物跡 7号 掲載番号 235 (PLD-37924)、堅穴建物跡 9号 掲載番号 274 (PLD-37926)、堅穴建物跡 9号 掲載番号 276 (PLD-37927)、堅穴建物跡 6号 掲載番号 193 (PLD-38299)、堅穴建物跡 5号 掲載番号 134 (PLD-38300-1)、堅穴建物跡 5号 掲載番号 154 (PLD-38301-1) である。

200 cal BC ~ 60 cal AD 前後のグループは、堅穴建物跡 17号 掲載番号 382 (PLD-37925) である。

750 ~ 410 cal BC 前後のグループは、堅穴建物跡 4号 掲載番号 96 (PLD-37915) である。

7100 ~ 7600 cal BC 前後のグループは、試料番号 18 (PLD-37929)、試料番号 19 (PLD-37930)、試料番号 20 (PLD-37931)、試料番号 21 (PLD-37932) である。

なお、8100 ~ 8200 年前と 8500 年前の年代グループの試料は、炭化材である。残りの年代グループの試料は、土器付着炭化物である。

このうち、600 ~ 760 cal AD 前後のグループの 2σ 暦年代範囲は、遺物溜り 10号 掲載番号 446 が 7 世紀半ば ~ 8 世紀半ば、溝跡 1号 掲載番号 455 が 7 世紀前半 ~ 7 世紀半ばを示す。

30 cal BC ~ 250 cal AD 前後のグループの 2σ 暦年代範囲 (図 10) は、今村・設楽 (2011)、森岡ほか (2016)、若林 (2018) を参照すると、堅穴建物跡 2号 掲載番号

号 65 が弥生時代中期後半～後期前半、竪穴建物跡 5 号 掲載番号 158 が弥生時代中期後半～後期後半、竪穴建物跡 6 号 掲載番号 189 が弥生時代後期前半～弥生時代後期終末期ないし古墳時代前期初頭、竪穴建物跡 4 号 掲載番号 97 が弥生時代中期後半～後期後半、竪穴建物跡 5 号 掲載番号 157 が弥生時代後期前半～弥生時代後期終末期ないし古墳時代前期初頭、竪穴建物跡 5 号 掲載番号 153 が弥生時代中期後半～後期後半、竪穴建物跡 4 号 掲載番号 127 が弥生時代後期前半～弥生時代後期終末期ないし古墳時代前期初頭、竪穴建物跡 7 号 掲載番号 235 が弥生時代後期後半～弥生時代後期終末期ないし古墳時代前期初頭、竪穴建物跡 9 号 掲載番号 274 が弥生時代中期後半～後期後半、竪穴建物跡 9 号 掲載番号 276 が弥生時代中期後半～後期前半、竪穴建物跡 6 号 掲載番号 193 が弥生時代後期前半～弥生時代後期終末期ないし古墳時代前期初頭、竪穴建物跡 5 号 掲載番号 134 が弥生時代中期後半～後期前半、竪穴建物跡 5 号 掲載番号 154 が弥生時代中期後半～後期後半に相当する。

330 cal BC ～ 80 cal AD 前後のグループの 2σ 暦年代範囲は、今村・設楽 (2011)、若林 (2018) を参照すると、弥生時代中期前半～後半に相当する。

750 ～ 410 cal BC 前後のグループはの 2σ 暦年代範囲は、小林 (2017)、若林 (2018) を参照すると、縄文時代晩期後葉～弥生時代前期に相当する。

7100 ～ 7600 cal BC 前後のグループはの 2σ 暦年代範囲は、工藤 (2012)、小林 (2017) を参照すると、試料番号 19 と試料番号 21 が縄文時代早期中葉～後葉、試料番号 18 と試料番号 20 が縄文時代早期前葉～中葉に相当する。

ところで、土器付着炭化物の年代については、土器の煮炊き内容物に海産物が含まれる可能性があるため、海洋リザーバー効果の影響も合わせて検討する必要がある (小林, 2014)。炭素・窒素安定同位体比分析の報告で示した同位体比質量分析計による測定値をみると、土器付着炭化物の $\delta^{13}\text{C}$ 値は、吉田 (2012) が示した、植物のほとんどすべてに該当するとみなして良い C_3 植物由来する $-33 \sim -23\text{‰}$ の範囲に収まる。これらの測定値から、今回年代試料とした土器付着炭化物については、海洋リザーバー効果の影響を考慮する必要がないと判断できる。

また、試料の炭素含有量をみると、50% を超えるものは、竪穴建物跡 2 号 掲載番号 65、竪穴建物跡 5 号 掲載番号 157、竪穴建物跡 9 号 掲載番号 274、竪穴建物跡 9 号 掲載番号 276、竪穴建物跡 6 号 掲載番号 193 である。土器付着炭化物の通常の炭素含有率は、50 ～ 60% とされる (小林, 2017)。50% を超える上記の試料は、化学処理、測定上の問題がないと判断される。40% 台の試料は、竪穴建物跡 6 号 掲載番号 189、竪穴建物

跡 4 号 掲載番号 96、竪穴建物跡 4 号 掲載番号 97、溝跡 1 号 掲載番号 455、試料番号 18 である。上記以外の試料は竪穴建物跡 5 号 掲載番号 158 が 33%、そして竪穴建物跡 17 号 掲載番号 382 が 23%、竪穴建物跡 5 号 掲載番号 134 が 9%、竪穴建物跡 5 号 掲載番号 154 が 14% といずれも低い。炭素含有量がかなり低い試料には、土器胎土や埋没土壌に含まれる鉱物由来する起源の古い微量の炭素の影響を受け、数百年程度、相対的に古い年代値を示す場合がある (小林, 2017)。このため、特に炭素含有量が 40% より低い試料の年代値の評価には、注意を要する。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337-360.
- 小林謙一 (2014) 弥生移行期における土器使用状況からみた生業。国立歴史民俗博物館研究報, 185, 283-347.
- 小林謙一 (2017) 縄文時代の実年代—土器型式編年と炭素 14 年代—, 263p, 同成社。
- 工藤雄一郎 (2012) 後水期の考古編年と 14C 年代。工藤雄一郎「旧石器・縄文時代の環境文化史」: 212-229, 新泉社。
- 今村肇雄・設楽博己 (2011) 炭素 14 年の記録から見た自然環境—弥生中期—。設楽博己・藤尾慎一郎・松木武志編「弥生時代の考古学 3 多様化する弥生分析」: 48-69, 同成社。
- 森岡秀人・三好 玄・田中元浩 (2016) 総括。古学研究会編「集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化」: 335-398, 六一書房。
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会。
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Halldason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50, 000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55 (4), 1869-1887.
- 若林邦彦 (2018) 近畿地方弥生時代諸土器様式の暦年代—石川県八日市地方道跡の研究成果との対比—. 同志社大学考古学研究室編「同志社大学考古学シリーズ X II 実証の考古学 松藤和人先生退職記念論文集」: 119-129, 同志社大学考古学研究室。

表2 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	δ^{13C} (‰)	暦年校正用年代 ($\pm 1\sigma$)	14C年代 ($\pm 1\sigma$)	14C年代を暦年年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年年代範囲	2 σ 暦年年代範囲
掲載番号 65 惣穴埴物跡 2号 (SA13) 試料 No. 試料番号 1	-29.01 \pm 0.20	1964 \pm 21	1965 \pm 20	20-66 cal AD (68.2%)	36-30 cal BC (1.2%), 23-10 cal BC (3.2%), 3 cal BC-89 cal AD (90.9%)
掲載番号 158 惣穴埴物跡 5号 (SA36) 試料 No. 試料番号 2	-25.70 \pm 0.23	1916 \pm 23	1915 \pm 25	65-90 cal AD (37.8%), 100-123 cal AD (30.7%)	28-39 cal AD (3.4%), 50-131 cal AD (92.6%)
掲載番号 189 惣穴埴物跡 6号 (SA11) 試料 No. 試料番号 3	-25.49 \pm 0.21	1871 \pm 21	1870 \pm 20	82-141 cal AD (54.6%), 156-167 cal AD (5.9%), 190-209 cal AD (7.7%)	78-216 cal AD (95.4%)
掲載番号 96 惣穴埴物跡 4号 (SA04) 試料 No. 試料番号 4	-25.16 \pm 0.30	2434 \pm 23	2435 \pm 25	727-720 cal BC (3.2%), 704-695 cal BC (4.2%), 541-428 cal BC (59.3%), 422-418 cal BC (1.3%)	748-685 cal BC (20.2%), 666-642 cal BC (6.1%), 587-581 cal BC (0.4%), 556-497 cal BC (68.6%)
掲載番号 97 惣穴埴物跡 4号 (SA04) 試料 No. 試料番号 5	-25.19 \pm 0.21	1931 \pm 21	1930 \pm 20	32-37 cal AD (3.8%), 82-87 cal AD (53.4%), 167-120 cal AD (11.0%)	25-126 cal AD (95.4%)
掲載番号 157 惣穴埴物跡 5号 (SA36) 試料 No. 試料番号 6	-26.33 \pm 0.20	1900 \pm 21	1900 \pm 20	80-125 cal AD (68.2%)	52-130 cal AD (94.3%), 160-161 cal AD (0.4%), 197-206 cal AD (0.6%)
掲載番号 446 遺物 9-10号 (SC13) 試料 No. 試料番号 10	-26.90 \pm 0.22	1348 \pm 21	1350 \pm 20	654-672 cal AD (68.2%)	645-690 cal AD (95.0%), 754-757 cal AD (0.4%)
掲載番号 153 惣穴埴物跡 5号 (SA36) 試料 No. 試料番号 11	-26.56 \pm 0.23	1921 \pm 21	1920 \pm 20	59-88 cal AD (45.0%), 103-122 cal AD (23.2%)	28-39 cal AD (4.3%), 80-129 cal AD (91.1%)
掲載番号 127 惣穴埴物跡 4号 (SA04) 試料 No. 試料番号 12	-23.89 \pm 0.21	1859 \pm 20	1860 \pm 20	94-97 cal AD (2.1%), 125-178 cal AD (46.2%), 189-213 cal AD (19.9%)	85-223 cal AD (95.4%)
掲載番号 235 惣穴埴物跡 7号 (SA23) 試料 No. 試料番号 13	-25.93 \pm 0.20	1817 \pm 20	1815 \pm 20	142-156 cal AD (12.7%), 167-196 cal AD (28.9%), 209-236 cal AD (28.4%)	131-245 cal AD (95.4%)
掲載番号 274 惣穴埴物跡 9号 (SA23) 試料 No. 試料番号 15	-25.96 \pm 0.23	1931 \pm 22	1930 \pm 20	31-37 cal AD (4.4%), 82-87 cal AD (53.4%), 106-120 cal AD (11.8%)	24-126 cal AD (95.4%)
掲載番号 276 惣穴埴物跡 9号 (SA23) 試料 No. 試料番号 16	-25.05 \pm 0.30	1966 \pm 22	1965 \pm 20	17-66 cal AD (68.2%)	37-9 cal BC (7.1%), 4 cal BC-79 cal AD (88.2%)
掲載番号 455 遺跡 1号 (SM02) 試料 No. 試料番号 17	-25.37 \pm 0.22	1418 \pm 20	1420 \pm 20	619-650 cal AD (68.2%)	603-656 cal AD (95.4%)
掲載番号 193 惣穴埴物跡 6号 (SA11)	-25.28 \pm 0.16	1891 \pm 20	1890 \pm 20	84-127 cal AD (68.2%)	61-170 cal AD (93.1%), 194-209 cal AD (2.3%)
掲載番号 134 惣穴埴物跡 5号 (SA36) 試料 No. 試料番号 60	-26.29 \pm 0.25	1959 \pm 20	1960 \pm 20	23-67 cal AD (68.2%)	22-11 cal BC (1.9%), 2 cal BC-84 cal AD (93.1%)
掲載番号 154 惣穴埴物跡 5号 (SA36) 試料 No. 試料番号 61	-28.12 \pm 0.17	1916 \pm 20	1915 \pm 20	65-90 cal AD (37.8%), 100-123 cal AD (30.4%)	30-38 cal AD (1.9%), 51-130 cal AD (93.5%)
FLD-37929 試料 No. 試料番号 18	-24.81 \pm 0.25	8502 \pm 30	8500 \pm 30	7579-7544 cal BC (68.2%)	7587-7527 cal BC (95.4%)
FLD-37930 試料 No. 試料番号 19	-26.29 \pm 0.25	8221 \pm 30	8220 \pm 30	7303-7181 cal BC (68.2%)	7343-7134 cal BC (92.7%), 7104-7084 cal BC (2.9%)
FLD-37931 試料 No. 試料番号 20	-26.15 \pm 0.26	8595 \pm 30	8595 \pm 30	7605-7582 cal BC (68.2%)	7673-7571 cal BC (95.4%)
FLD-37932 試料 No. 試料番号 21	-26.03 \pm 0.20	8191 \pm 30	8190 \pm 30	7292-7268 cal BC (19.3%), 7260-7225 cal BC (15.4%), 7199-7133 cal BC (33.1%), 7104-7084 cal BC (9.2%)	7307-7081 cal BC (95.4%)



図1 年代測定試料（測定できなかった試料）



図2 年代測定試料（その1）



図3 年代測定試料（その2）



図4 年代測定試料（その3）



図5 年代測定試料（その4）



図6 年代測定試料（その5）

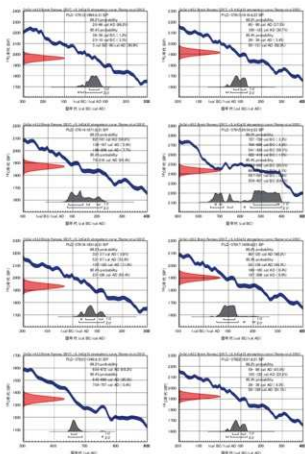


図7 暦年較正結果

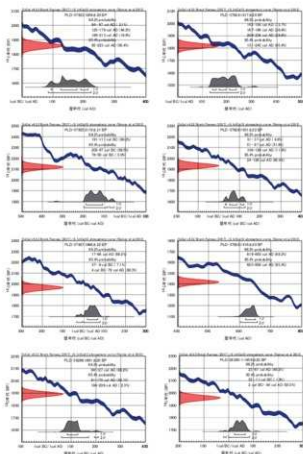


図8 暦年較正結果

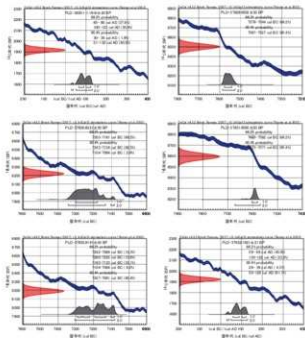


図9 暦年較正結果

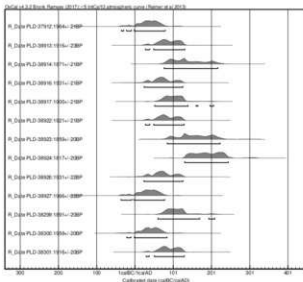


図10 30 cal BC ~ 250 cal AD後の年代グループの年代マルチプロット図(2a)

6 春日堀遺跡出土試料のテフラ分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

(1) はじめに

志布志市有明町に所在する春日堀遺跡は、菱田川右岸に広がるシラス台地上に位置する。調査区の位置する台地上面の標高は約30mである。平成27年度の発掘調査では、古墳時代とされる竪穴住居跡や溝跡などの遺構が多数検出され、それら遺構の埋積土層中には、テフラの降下堆積物と考えられる堆積層が認められている。

平成27年度発掘調査では、テフラと考えられる堆積層から火山砕屑物を抽出し、その鉱物組成や砕屑物の特徴などを捉えることにより、堆積物がテフラであることを確認した。テフラは、上位のスコリア質テフラと下位の軽石質テフラの2種類が認められ、砕屑物の特徴および遺構の年代所見などから、ともに9世紀後半に開聞岳から噴出したテフラに対比されるとした。それらのうち、上位のスコリア質テフラについては紫コラに対比し、下位の軽石質テフラについては、Kml2a3(藤野・小林, 1997)に対比した。

しかし、その後、検出された2種類のテフラは、ともに8世紀後半に桜島から噴出したP4テフラ(小林, 1986)に対比されるのではないかという指摘を受けることとなった。そして平成29年度の春日堀遺跡発掘調査でも前回と同時期と考えられる遺構の埋積土層中に同様の堆積層が確認されたことから、テフラの対比について再検討が求められた。

本報告では、平成27年度以降に行われた春日堀遺跡の発掘調査により検出された遺構埋積土層から採取されたテフラ層について再分析を行うと同時に、給源地周辺の露頭から採取されたP4テフラを構成する堆積層および開聞岳起源のテフラ層についても同様の分析を行い、分析結果を比較検討することにより、テフラの再同定を行う。

(2) 試料

試料は、春日堀遺跡の遺構埋積土から採取された堆積層と露頭から採取されたP4テフラおよび露頭から採取された開聞岳のテフラの3種類合計11点である。以下に詳細を述べる。

① 春日堀遺跡採取試料

平成27年度以降に行われた発掘調査において古墳時代とされる溝状遺構と竪穴住居跡2軒における埋土より採取されたテフラとされる堆積物6点である。各遺構からは2点ずつの試料が採取され、各試料には試料番号1～6までが付されている。

試料番号1と2は溝跡3号(SM018)から採取され、試料名はそれぞれ上位の溝跡3号SM018①と下位の溝跡3号SM018②とされている。試料の表記には、それぞれ「火山灰ブロックサンプル1」、「火山灰ブロックサンプル2」とある。試料番号3と4は竪穴建物跡20号(SA022)から採取され、試料名はそれぞれ上位のSA022①と下位のSA022②とされている。試料の表記には、それぞれ「火山灰サンプル1(埋土3層)H27.12.16」、「火山灰サンプル2(埋土5層)H27.12.16」とある。試料番号5と6は竪穴住居跡の竪穴建物跡12号(SA010)から採取され、試料名はそれぞれ上位のSA010①と下位のSA010②とされている。試料の表記には、それぞれ「火山灰サンプル1 H29.1.19」、「火山灰サンプル2 H29.1.19」とある。

② P4サンプル

桜島の南東方にある垂水市海潟付近の露頭から採取されたテフラ試料。露頭名は「垂水市海潟付近1(No.094)とされている。テフラ層は、桜島の天平字噴火とよばれるAD764年の活動により噴出した軽石質テフラであり、小林(1986)による桜島テフラの名称ではP4とされているテフラである。

採取された試料は、P4を構成する堆積層のうち、上層とされたP4サンプル1、中層-上とされたP4サンプル2、最下層とされたP4サンプル4の計3点である。

③ 開聞岳テフラ

開聞岳東麓端付近の開聞町川尻にある露頭から採取されたテフラ層であり、「青コラサンプル(下層)」と「紫コラサンプル」の2点がある。

(3) 分析方法

前述したように、本報告の主目的はテフラ同定の再検討にあることから、前回までの報告で行っているテフラ組成分析と屈折率の測定に加え、EDXを用いた化学組成分析も行う。以下に各分析について述べる。

① テフラ組成分析

試料は、水を加え、超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し、250メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が1/16mmより小さい粒子を除去する。

水洗後に乾燥させた後、篩別して、得られた粒径1/4mm/1/8mmの砂分を、ポリタングステン酸ナトリウム(比重約2.96に調整)により重液分離し、得られた重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

一方、重液分離により得られた軽鉱物分については、

火山ガラスとスコリアおよびそれ以外の粒子を、偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで計数し、火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型、中間型、軽石型の3つの型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

なお、上記工程で篩別された中粒砂以上の粗粒砕屑物についても実体顕微鏡による観察を行い、テフラの特性となるスコリアおよび軽石の産状とそれらの色調や発泡度などを確認した。

② 屈折率測定

屈折率の測定は、処理後に得られた中粒砂以上の砂分から抽出した軽石とテフラ組成分析により得られた重鉱物分から抽出した斜方輝石とを対象とする。屈折率の測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いる。

③ 化学組成分析

対象は、処理後に得られた中粒砂以上の砂分から抽出したスコリアと軽石および重鉱物分から抽出した斜方輝石である。これらを粉砕および洗浄した試料をエポキシ樹脂によりスライドガラス上に包埋し、#3000カーボラダムで研磨、1 μ mのダイヤモンドペーストにて鏡面研磨した薄片を作製した。

この薄片を測定試料として、以下の分析装置および条件により、エネルギー分散型X線マイクロアナライザー(EDX)を用い、火山ガラスの主成分を分析した。使用機材:SEM-HITACHI SU1510 EDX:HORIBA EMA Evolution EX-270

検出器 液体窒素レス検出器 X-Max (80mm²)

加速電圧:15kV

試料電流:0.3nA

ビーム径:4 μ m四方の範囲を約90nmのビーム径にて走査させて測定。

ライブタイム:50sec.

主成分組成計算方法:ファイローゼット(ρ (Z)補正)

スタンダードには高純度人工酸化物結晶(純度99.99%以上のSiO₂, Al₂O₃, TiO₂, MnO, MgO)、純度99.99%以上の単結晶NaCl, KCl, CaF₂を用いた。また、測定終了時毎に、ヨーロッパで2次標準物質となっているMPI-DINGのATHO-G (Jochum et al., 2000:2006)およびガラスの主成分がほぼ均質なATテフラの火山ガラスを用いて測定値をチェックした。

(4) 結果

① テフラ組成分析

分析結果を表2、図1に示す。また、実体顕微鏡観察によるスコリアおよび軽石の産状と特徴を表3に示す。以下に試料の種類ごとに述べる。

1) 春日堀遺跡採取試料

表3に示されるように6点の試料は、スコリア主体の試料と軽石主体の試料とに明確に分かれる。スコリア主体の試料は、いずれの遺構においても①とされた上位の試料である試料番号1, 3, 5の3点であり、軽石主体の試料は②とされた下位の試料である試料番号2, 4, 6の3点である。各試料の重鉱物組成は、6点の試料ともに斜方輝石が最も多く、次いで不透明鉱物、単斜輝石の順に多い。ただし、スコリア主体の3点の試料には少量または微量のカンラン石が含まれ、軽石主体の試料にはカンラン石はほとんど含まれない。

火山ガラス比は、スコリア主体の3点の試料では少量のスコリアが含まれ、火山ガラスは極めて微量しか含まれないが、軽石主体の3点の試料では少量～中量の軽石型火山ガラスが含まれる。

なお、スコリア主体の3点の試料におけるスコリアの実体顕微鏡下での特徴は同様であり、黒色で発泡不良、暗灰色で発泡不良、暗褐色で発泡不良、暗褐色で発泡不良といった特徴のスコリアが混在する。スコリアの最大径は、試料番号1と3では約2.0mm、試料番号5では約4.5mmであった。また、実体顕微鏡下では、これら3点の試料中にも、少量～極めて微量の軽石の混在も確認された。軽石のほとんどは、最大径1.5mm前後であり、灰褐色で発泡やや不良のものが多く。

一方、軽石主体の3点の試料における軽石の特徴は、3点の試料間では同様であり、灰白色で発泡良好またはやや良好、斜方輝石の斑晶を包有するものも含まれる。軽石の最大径は、試料番号2で約2.0mm、試料番号4で約2.5mm、試料番号6では約3.0mmである。

2) P4サンプル

重鉱物組成は、3点ともに斜方輝石が最も多く、単斜輝石と不透明鉱物を伴うという組成である。3点のうち、試料番号7と8は、斜方輝石に次いで不透明鉱物が多いが、試料番号9は、単斜輝石と不透明鉱物は同量程度であり、かつ量比は他の2点よりも低い。

火山ガラス比では、いずれの試料も少量の軽石型火山ガラスを含み、微量の中間型火山ガラスを伴う。スコリアは全く認められない。

実体顕微鏡下における砂分の観察では、試料番号7には多量の軽石が確認されたが、試料番号8と9では、斑晶鉱物である斜長石の鉱物片なども多量に含まれ、軽石自体は、砂分全体の中では少量である。軽石の特

微は、試料番号7では灰白色で発泡やや良好の軽石が圧倒的に多く、極めて微量の灰褐色で発泡やや不良の軽石も認められる。試料番号8では、灰白色で発泡やや良好の軽石が多いが、灰褐色で発泡やや不良の軽石も少量含まれる。試料番号9では、白色で発泡良好、白色で発泡やや良好、灰褐色で発泡やや不良の3種類の軽石が混在する。なお、軽石の最大径は、3.5～4.0mmである。

3) 開閉岳テフラ

重鉱物組成と火山ガラス比は、2点の試料ともにほぼ同様である。重鉱物組成は、カンラン石が最も多く、45%程度を占め、他に少量の斜方輝石と単斜輝石および不透明鉱物を伴う。詳細にみれば、紫コラサンプルに比べて青コラサンプルの方が不透明鉱物の量比がやや高い。

火山ガラス比では、2点の試料ともに、少量のスコリアを含み、火山ガラスは全く認められない。

実体顕微鏡下における両試料のスコリアの特徴は、比較的明瞭に異なる。青コラサンプルのスコリアは、最大径約1.8mmであり、スコリアは全て黒色で発泡不良である。紫コラサンプルのスコリアは、最大径約3.0mmであり、黒色で発泡不良、暗灰色で発泡不良、暗灰褐色で発泡不良、暗褐色で発泡不良といった特徴のスコリアが混在する。

② 屈折率測定

1) 火山ガラス

測定結果を図2に示す。なお、軽石が極めて微量しか検出されなかった試料番号1と軽石の全く検出されなかった試料番号10および11は測定の対象からは除外した。したがって、測定点数の合計は8点である。以下に試料の種類ごとに述べる。

a) 春日堀遺跡採取試料

5点の試料ともにほぼ同様の測定結果を示す。レンジの下限はn1.508からn1.510の間にあり、レンジの上限はn1.514または1.515である。また、モードはn1.512付近にある。

b) P4サンプル

上層とされたP4サンプル1は、n1.512～1.514のレンジを示し、n1.513に高い集中度を示す。

中層とされたP4サンプル2は、n1.503～1.507の低屈折率のレンジとn1.511～1.515の高屈折率のレンジに分かれる。低屈折率のレンジのモードはn1.505付近であり、高屈折率のレンジのモードはn1.512付近である。

最下層のP4サンプル4は、n1.511～1.514の主要なレンジとn1.522～1.524の高屈折率のレンジに分かれる。主要レンジのモードはn1.512付近であり、高屈

折率のレンジのモードはn1.523付近である。

2) 斜方輝石

春日堀遺跡採取試料の測定結果を図3に示し、P4サンプルおよび開閉岳テフラの測定結果を図4に示す。以下に試料の種類ごとに述べる。

a) 春日堀遺跡採取試料

スコリア主体の3点と軽石主体の3点との間で傾向の違いが認められる。

スコリア主体の3点の試料は、レンジの下限が γ 1.700～1.703、上限が γ 1.712または1.714という主要なレンジと γ 1.727～1.734という高屈折率のレンジとに分かれる。主要なレンジのモードは、 γ 1.710前後である。また、試料番号1と5には、 γ 1.720前後を示す斜方輝石も微量含まれる。

軽石主体の3点の試料は、レンジの下限は γ 1.704～1.706であり、レンジの上限は γ 1.715～1.717である。モードは γ 1.708～1.710付近にある。

③ 化学組成分析

測定結果を表4～9に示す。また、試料間の組成を比較するために、SiO₂の量比を横軸として、縦軸にTiO₂、Al₂O₃、FeO、MnO、MgO、CaO、Na₂O、K₂Oの各元素の量比を用いる散布図を作成した。

図5～8にはスコリアの化学組成散布図を示す。全体的な傾向として、春日堀遺跡採取試料のスコリアは、値のばらつきが比較的大きく、3試料間の組成の違いはほとんど識別できない。一方、開閉岳テフラのスコリアは比較的ばらつきが小さく、かつ青コラと紫コラ間の組成の違いも明瞭である。

図9～12には軽石の化学組成散布図を示す。春日堀遺跡採取試料およびP4サンプルともに値のばらつきは、スコリアの化学組成に比べると、小さい傾向が窺える。また、春日堀遺跡採取試料間における組成の違いもほとんど見出せない。P4サンプルの3点間においては、不明瞭ながらも各元素においてある程度のまとまりのあることが認識される。

春日堀遺跡採取試料とP4サンプルとの間では、散布図上で重複する領域が広く認められ、特に春日堀遺跡採取試料とP4サンプル4との間での組成の重複が比較的明瞭に認められる。

(5) 考察

① 軽石質テフラについて

春日堀遺跡の古墳時代とされる遺構埋土中に認められた軽石質テフラは、桜島から噴出したP4テフラに対比される可能性があるとの指摘から、本報告では桜島近傍の露頭より採取されたP4テフラとの比較を試みた。

実体顕微鏡観察による軽石の特徴と重鉱物組成は、両者よく類似しており、化学組成においても散布図上での重複する傾向は概ね認められるといつてよい。さらに、軽石の屈折率については、P4 サンプル自体に層位による違いが認められたが、その主要なレンジについてみれば、春日堀遺跡試料の軽石とよく重なる。また、春日堀遺跡試料の軽石の屈折率の値は、町田・新井 (2003) に記載された P4 の値ともよく一致する。これらのことから、春日堀遺跡古墳時代遺構埋積土層中に認められた軽石質テフラは桜島の P4 テフラに対比される可能性が高いと考えられる。P4 テフラの噴出年代は、奈良時代の天平宝字年間の AD764 年とされている (小林, 1982)。

なお、前回の分析報告において、軽石の由来を開聞岳テフラとした主要な理由の一つとして、n1.520 を超える高屈折率の軽石が含まれていたことがあげられる。前回の報告でも述べたように、この値を有する桜島起源の軽石質テフラは、町田・新井 (2003) の記載にはなかった。今回の分析により P4 サンプルの最下層試料で高屈折率の軽石が確認されたことから、春日堀遺跡の古墳時代遺構埋積土層中の軽石質テフラが P4 に対比される可能性は非常に高まったと言える。

② スコリア質テフラについて

これまでの鹿児島県大隅半島域におけるテフラの調査事例 (例えば町田・新井, 2003 など) に従えば、古墳時代以降に降下堆積したスコリア質テフラの給源火山は、ほぼ開聞岳に限定されると考えられた。そのため、前回のテフラ分析報告においても、検出されたスコリア質テフラについては、開聞岳を給源とするテフラの中で対比を考えた。古墳時代以降に噴出した開聞岳のテフラは、藤野・小林 (1992;1997) により Km11 と Km12 が記載されており、給源からやや離れた地域では、各テフラ中の火山灰層が降下堆積して、それぞれ青コラ、紫コラとよばれる固結した火山灰層を形成している。前回の分析では、検出されたスコリア質テフラについて、これらいずれかに対比されると考え、その判断基準に洗浄した砂分中のスコリアの色調と発泡度の特徴を用いて、紫コラに対比されるという結果を述べた。

今回の分析でも、春日堀遺跡採取試料については、洗浄した砂分中のスコリアの特徴を確認しており、それらは前回の分析で紫コラに対比した試料と同様であった。また、今回の比較対照試料とされた紫コラとも類似する特徴が捉えられた。しかし今回の分析では、重鉱物組成におけるカンラン石の量比において紫コラとの違いが確認され、スコリアの化学組成分析による紫コラとの違いも認識された。なお、斜方輝石の屈

折率では、春日堀遺跡採取試料に認められる少量の γ 1.720 以上の高屈折率の斜方輝石は周辺のシラス由来の斜方輝石の混入によるものと考えられるから、それらを除くと、春日堀遺跡採取試料と開聞岳テフラとの違いは明瞭ではない。いずれにしても今回の分析結果 (特に化学組成) からは、スコリア質テフラを開聞岳のテフラとする対比については訂正する必要があると考えられた。

大隅半島域に分布する古墳時代以降のテフラの給源となった火山は、開聞岳のほかには桜島がある。しかし、桜島から噴出したテフラは、多くは降下軽石と火砕流堆積物により構成されており (小林, 1982;1986; 小林・江崎, 1997 など)、降下スコリアが含まれるという明瞭な記載は認められない。その中で、桜島の有史時代最初の噴火とされる天平宝字噴火は、P4 テフラとされる降下軽石の噴出の後に火砕サージの一種であるベースサージが発生し、鍋山を形成したという記載が、小林・沼池 (2002) に認められた。ベースサージ堆積物は、遠方には達していないとされ、またその詳細な記載もないが、前述した軽石質テフラの再検討結果も含めて考えれば、これがスコリア質テフラに相当する可能性はあると考えられる。今後、周辺域各地における P4 テフラの産状を確認し、検討する必要があると考えられる。

引用文献

- 藤野直樹・小林哲夫, 1992, 開聞岳起源のコラ層の噴火・堆積様式. 鹿児島大学紀要 (地学・生物学), 25, 69-83.
- 藤野直樹・小林哲夫, 1997, 開聞岳火山の噴火史. 火山, 42, 195-211.
- 古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101, 123-133.
- Jochum, K. P., Dingwell, D. B., Rocholl, A., Stoll, B., Hofmann, A. W., Becker, S., ...Zimmer, M., 2000, The preparation and preliminary characterization of eight geological MPI-DING reference glasses for in-situ microanalysis. *Geostand. Newslett.*, 24, 87-133.
- Jochum, K. P., Stoll, B., Herwig, K., Willbold, M., A. W., Amini, M., ... Woodhead, J. D., 2006, MPI-DING reference glasses for in situ microanalysis: New reference values for element concentrations and isotope ratios. *Geochim. Geophys. Geosyst.*, 7, Q02008, doi: 10.1029/2005GC001060.
- 小林哲夫, 1982, 桜島火山の地質: これまでの研究の成果と今後

の課題。火山第2集，27，277-292。

小林哲夫，1986，桜島火山の形成史と火砕流，文部省科学研究費
自然災害特別研究，計画研究「火山噴火に伴う乾燥粉体流（火
砕流等）の特質と災害」（代表者荒牧重雄）報告書，137-163。

小林哲夫・江崎真美子，1997，桜島火山，噴火史の再検討。月刊
地球19，227-231。

小林哲夫・溜池俊彦，2002，桜島火山の噴火史と火山災害の歴
史，第四紀研究41，269-278。

町田 洋・新井朋夫，2003，新編 火山灰アトラス，東京大学出
版会，336p。

表1 分析試料一覧

試料番号	試料名	備考
1	溝跡3号 SM018 ①	火山灰ブロックサンプル1
2	溝跡3号 SM018 ②	火山灰ブロックサンプル1
3	竪穴建物跡20号 SA022 ①	火山灰サンプル1（埋土3層） H27.12.16
4	竪穴建物跡20号 SA022 ②	火山灰サンプル2（埋土5層） H27.12.16
5	竪穴建物跡12号 SA010 ①	火山灰サンプル1 H29.1.19
6	竪穴建物跡12号 SA010 ②	火山灰サンプル2 H29.1.19
7	P4 サンプル1	垂水市海潟付近1（No.094） P4 サンプル1（上層）
8	P4 サンプル2	垂水市海潟付近1（No.094） P4 サンプル2（中層-上）
9	P4 サンプル4	垂水市海潟付近1（No.094） P4 サンプル1（最下層）
10	青コラサンプル	開聞町川尻 青コラサンプル（下層）
11	紫コラサンプル	開聞町川尻 紫コラサンプル

表2 テフラ組成分析結果

試料番号	試料名	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	スコリア	その他	合計
1	溝跡3号 SM018 ①	23	100	37	56	34	250	0	0	0	35	215	250
2	溝跡3号 SM018 ②	3	134	37	76	0	250	0	0	52	0	198	250
3	竪穴建物跡20号 SA022 ①	8	117	31	69	25	250	0	1	5	28	216	250
4	竪穴建物跡20号 SA022 ②	0	136	34	80	0	250	0	0	143	0	107	250
5	竪穴建物跡12号 SA010 ①	10	132	50	54	4	250	3	1	8	17	221	250
6	竪穴建物跡12号 SA010 ②	1	126	39	70	14	250	0	1	23	0	226	250
7	P4 サンプル1	0	137	46	67	0	250	0	1	23	0	226	250
8	P4 サンプル2	0	141	35	73	1	250	0	9	18	0	223	250
9	P4 サンプル4	0	180	38	31	1	250	0	3	20	0	227	250
10	青コラサンプル	111	41	13	45	40	250	0	0	0	37	213	250
11	紫コラサンプル	111	34	12	13	80	250	0	0	0	34	216	250

表3 スコリア・軽石の産出状況

試料番号	試料名	スコリア			軽石		
		量	色調・発泡度	最大粒径	量	色調・発泡度	最大粒径
1	溝跡3号 SM018 ①	++++	B-b, DG-b, DGBr-b, DBrG-b	2.0	(+)	GBr-sg	1.3
2	溝跡3号 SM018 ②	-			++++	GW-g, GW-sg (opx)	2.5
3	竪穴建物跡20号 SA022 ①	++++	B-b, DG-b, DGBr-b, DBrG-b	4.5	+	GBr-sg	1.5
4	竪穴建物跡20号 SA022 ②	-			++++	GW-g, GW-sg (opx)	3.0
5	竪穴建物跡12号 SA010 ①	++++	B-b, DG-b, DGBr-b, DBrG-b	2.0	++	GBr-sg, GBr-sb	1.8
6	竪穴建物跡12号 SA010 ②	(+)	B-b, DG-b, DGBr-b	1.5	++++	GW-g, GW-sg (opx)	2.0
7	P4 サンプル1	-			++++	GW-g, GW-sg (opx)	3.5
8	P4 サンプル2	-			++	GW-sg>GBr-sb	4.0
9	P4 サンプル4	-			++	W-g, W-sg, GBr-sb	4.0
10	青コラサンプル	++++	B-b	1.8	-		
11	紫コラサンプル	++++	B-b, DG-b, DGBr-b, DBrG-b	3.0	-		

凡例 - : 含まれない, (+): きわめて微量, +: 微量, ++: 少量, +++: 中量, ++++: 多量,
 B: 黒色, DG: 暗灰色, DGBr: 暗灰褐色, DBrG: 暗褐色, GBr: 灰褐色, W: 白色, GW: 灰白色,
 g: 良好, sg: やや良好, sb: やや不良, b: 不良, 最大粒径はmm.

表6 スコリアの化学組成分析結果(3)

11: 珪コラ

試料名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	平均値	標準偏差	
T002	62.14	62.10	61.63	61.43	61.32	60.93	61.29	62.10	62.10	60.99	60.65	60.45	61.21	61.15	61.15	60.96	60.19	61.11	60.96	62.29	60.83	60.63	60.96	60.99	61.17	61.34	61.20	61.27	61.10	60.85	59.92	61.42	1.09
T003	1.91	1.59	1.59	1.59	1.62	1.95	1.96	1.63	1.58	1.52	1.83	1.61	1.47	1.59	1.71	1.89	1.79	1.57	1.66	1.86	1.71	1.62	1.66	1.66	1.44	1.43	1.46	1.41	1.63	1.52	61.49	0.49	
A100	12.90	15.10	15.70	15.12	15.14	17.02	16.21	15.12	15.30	15.79	11.92	12.10	12.63	12.30	12.98	12.98	12.98	12.98	12.98	12.98	12.98	12.98	12.98	12.98	12.98	12.98	12.98	12.98	12.98	12.98	12.98	12.98	
F010	7.17	5.39	6.87	9.56	7.17	10.99	8.41	8.94	8.13	9.52	9.74	8.56	8.03	8.85	8.92	8.99	8.76	8.90	8.99	9.19	9.02	8.65	8.65	8.65	8.65	8.65	8.65	8.65	8.65	8.65	8.65	8.65	
M01	5.04	5.17	6.23	6.29	6.87	6.13	6.36	6.39	6.27	6.30	6.31	6.32	6.24	6.26	6.30	6.22	6.22	6.29	6.23	6.29	6.23	6.17	6.25	6.12	6.25	6.12	6.22	6.46	6.28	6.27	6.60	0.30	
Ap1	1.42	1.35	1.31	1.06	1.21	1.06	1.22	1.09	1.36	1.43	1.74	1.40	1.41	1.59	1.39	1.26	1.44	1.36	1.44	1.52	1.37	1.27	1.30	1.40	1.38	1.41	1.31	1.40	1.21	1.40	0.16		
G01	1.01	1.40	1.16	1.59	1.72	1.54	1.82	1.92	1.72	1.79	1.99	1.91	1.94	1.94	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	
N010	1.94	3.11	1.80	3.11	3.17	3.99	1.63	2.91	3.77	3.14	3.19	3.28	3.11	3.26	3.20	3.49	3.95	3.36	3.18	3.47	2.81	3.06	3.16	3.28	3.16	3.19	3.19	3.19	3.19	3.19	3.19	3.19	
K01	1.43	1.37	1.71	1.34	1.39	1.37	1.49	1.47	1.43	1.69	1.79	2.10	1.83	1.79	1.23	1.68	1.27	1.73	1.73	1.27	1.34	1.30	1.46	1.29	1.54	1.29	1.54	1.32	1.70	1.52	0.14		
T001	61.07	61.07	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	60.89	

試料名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	平均値	標準偏差
T002	61.33	61.61	60.29	63.17	63.63	61.49	60.49	60.81	60.49	62.11	62.11	60.49	60.49	60.49	62.52	63.62	62.52	61.94	60.49	62.52	63.62	62.52	61.49	60.49	60.49	60.49	60.49	60.49	60.49	60.49	60.49	60.49
T003	1.69	1.42	1.50	1.44	1.42	0.98	1.02	1.10	1.49	1.76	1.73	1.41	1.03	1.47	1.76	1.76	1.50	1.46	1.90	1.81	1.72	1.70	1.72	1.72	1.70	1.72	1.70	1.72	1.70	1.72	1.70	
A100	12.15	13.38	13.27	13.07	13.09	17.04	15.12	12.10	13.38	13.12	12.90	12.10	12.13	12.93	12.77	12.79	15.73	12.97	12.79	12.90	12.90	12.90	12.90	12.90	12.90	12.90	12.90	12.90	12.90	12.90	12.90	12.90
F010	6.09	9.15	6.27	6.23	6.29	6.49	6.29	6.29	6.29	6.29	6.29	6.29	6.29	6.29	6.29	6.29	6.29	6.29	6.29	6.29	6.29	6.29	6.29	6.29	6.29	6.29	6.29	6.29	6.29	6.29	6.29	6.29
M01	6.25	6.29	6.18	6.24	6.31	6.27	6.30	6.28	6.31	6.25	6.30	6.28	6.31	6.25	6.30	6.28	6.31	6.25	6.30	6.28	6.31	6.25	6.30	6.28	6.31	6.25	6.30	6.28	6.31	6.25	6.30	6.28
Ap1	1.06	1.39	1.37	1.41	1.36	1.29	1.37	1.44	1.49	1.82	1.66	1.47	1.65	1.61	1.39	1.73	1.40	1.39	1.39	1.32	1.30	1.63	1.45	1.30	1.37	1.40	1.39	1.40	1.39	1.40	1.39	1.40
G01	1.96	4.72	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82	1.82
N010	3.90	3.20	3.03	3.14	3.28	4.12	3.08	3.97	4.07	3.74	3.33	3.69	3.14	3.19	4.11	3.87	3.18	4.06	3.41	3.11	3.42	3.78	3.30	3.52	3.73	3.52	3.73	3.52	3.73	3.52	3.73	3.52
K01	1.47	1.41	1.43	1.39	1.39	1.31	1.36	1.43	1.44	1.70	1.87	2.09	2.04	2.01	1.29	1.27	1.23	1.46	1.78	1.80	2.03	1.44	1.60	1.50	1.51	1.50	1.50	1.50	1.50	1.50	1.50	1.50
T001	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99	60.99

表7 軽石の化学組成分析結果(1)

2: 溝跡3号(SM018)②

試料名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	平均値	標準偏差
T002	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14	66.14
T003	0.82	0.72	0.71	0.89	0.79	0.85	0.71	0.80	0.88	0.80	0.74	0.72	0.74	0.79	0.77	0.80	0.67	0.71	0.80	0.72	0.77	0.79	0.70	0.80	0.76	0.82	0.80	0.71	0.81	0.70	0.76	0.76
A100	13.94	13.92	13.92	13.87	13.90	14.11	13.45	13.75	13.75	13.90	14.00	14.00	14.00	14.00	14.00	14.00	14.00	14.00	14.00	14.00	14.00	14.00	14.00	14.00	14.00	14.00	14.00	14.00	14.00	14.00	14.00	14.00
F010	5.00	3.81	3.81	3.81	3.29	3.29	3.29	3.29	3.29	3.29	3.29	3.29	3.29	3.29	3.29	3.29	3.29	3.29	3.29	3.29	3.29	3.29	3.29	3.29	3.29	3.29	3.29	3.29	3.29	3.29	3.29	3.29
M01	6.20	6.27	6.12	6.09	6.19	6.13	6.22	6.11	6.20	6.13	6.09	6.20	6.11	6.12	6.13	6.01	6.12	6.20	6.05	6.19	6.13	6.14	6.10	6.12	6.10	6.16	6.06	6.17	6.04	6.03	6.07	6.03
Ap1	1.02	1.00	0.93	0.99	0.82	0.72	0.77	0.87	1.00	0.83	0.81	0.99	0.99	0.83	1.01	0.81	0.93	1.04	1.02	0.92	1.02	1.02	1.02	1.02	1.02	1.02	1.02	1.02	1.02	1.02	1.02	1.02
G01	1.53	1.99	1.53	1.75	1.75	1.75	1.96	1.96	1.96	1.96	1.96	1.96	1.96	1.96	1.96	1.96	1.96	1.96	1.96	1.96	1.96	1.96	1.96	1.96	1.96	1.96	1.96	1.96	1.96	1.96	1.96	1.96
N010	1.64	1.67	1.73	1.67	1.69	1.60	1.60	1.73	1.61	1.69	1.63	1.63	1.61	1.63	1.64	1.64	1.64	1.64	1.64	1.64	1.64	1.64	1.64	1.64	1.64	1.64	1.64	1.64	1.64	1.64	1.64	1.64
K01	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09	1.09
T001	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17	61.17

試料名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	平均値	標準偏差
T002	61.74	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39	36.39
T003	0.84	0.71	0.72	0.81	0.81	0.87	0.73	0.82	0.87	0.81	0.76	0.74	0.76	0.82	0.80	0.81	0.76	0.81	0.76	0.81	0.76	0.81	0.76	0.81	0.76	0.81	0.76	0.81	0.76	0.81	0.76	0.81
A100	14.08	14.34	14.29	14.33	14.48	14.09	13.90	14.14	14.27	14.14	14.39	14.14	14.39	14.14	14.39	14.14	14.39	14.14	14.39	14.14	14.39	14.14	14.39	14.14	14.39	14.14	14.39	14.14	14.39	14.14	14.39	14.14
F010	4.09	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91	2.91
M01	6.20	6.27	6.12	6.09	6.19	6.13	6.22	6.11	6.20	6.13	6.09	6.20	6.11	6.12	6.13	6.01	6.12	6.20	6.05	6.19	6.13	6.14	6.10	6.12	6.10	6.16	6.06	6.17	6.04	6.03	6.07	6.03
Ap1	1.04	1.03	0.98	1.02	0.84	0.74	0.79	0.89																								